

清里・庚申塚遺跡

昭和54年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1981年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

清里・庚申塚遺跡正誤表

ページ	行または番号	誤	正
例言	1	泉宮畑地総合	泉宮畑地帯総合
凡例	7	断面図の右側に置いた。	断面図の左側に置いた。
3	下から6行目	月曜日	月曜日
4	下から6行目	考古学研究会学	学 削除
6	3行目	住居址の方が古い	6号溝の方が古い。
9	5行目 3.	(群馬県同道所在)	(群馬町同道所在)
90	Fig.81 断面図B-B'	165.1cm	165.1m
100	19行目	4.2cm	4.2cm
107	Fig.101 土層説明	4.暗褐色土破質	4.暗褐色土砂質
186	12行目	鹿麩さきか行	鹿麩さか行

資料 (財)群馬県埋蔵文化財
調査事業団保管
NO. 58-220 昭和58年8月6日

01-753
144
(5)

清里・庚申塚遺跡

昭和54年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1981年

序

県管知地帯総合清里地区土地改良事業は、二年目をむかえて、池端町地内を中心に面工事が行なわれることになりました。地域内の準幹1号路線にかかって、埋蔵文化財包蔵地の存在が確認されていたことから、事前に発掘調査を行なうことになり、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、群馬県農政部の委託を受け調査、整理を行ない、清里・庚申塚遺跡として公開の運びとなりました。

調査の結果、環濠をもつ弥生時代中期後半の集落跡の存在が一部確認されました。この環濠集落の検出は関東以北では、ほとんどその調査例がなく、研究者の間では注目されておりました。そして、今ここに、その調査成果が公開される運びとなり、広く内外にその実態を紹介できますことは、まことに喜ばしいことと思います。

本報告書にみるとおり、環濠に囲まれた径百米ほどの路線内で、20軒ほどの竪穴住居跡が発見され、その配置、重複関係、住居の施設と土器や石器などの出土遺物とのかかわり合いなど、多くの新発見がありました。従来、群馬県内では、弥生時代の集落の発掘例が少なく、特に中期に属するものの集落の調査例がほとんどなかっただけに、貴重な資料を提供することになりました。

集落構成の面からは、本遺跡が北関東における調査としては最初の環濠集落であること、集落の拡大による、濠のつけ換えが行なわれてその機能、性格を考える上での資料が得られました。また、その文化の様相は長野県の弥生文化との交流を主流としながらも、他の要素も持つこと、時期的には、中期終末に属するものであることなどが立証されました。

この成果が、群馬県の弥生文化究明に果たす役割は、はかり知れないものがあります。研究者や一般県民が、本報告書を活用されることをねがい、本調査に献寒の中、直接たずさわられた関係者の皆さん、本調査及び整理事業に関係された各機関の労を多として序といたします。

昭和57年3月25日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. この報告書は、群馬県前橋市上青梨子町 316 番地を中心とする県営畑地総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査に伴う報告書である。
2. 発掘調査は、昭和54年11月5日より開始し、昭和55年3月31日で現地作業を終了した。
3. 昭和54年度分については、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者で協議の結果、道水路および水田化部分を中心に、当事業団でその調査を受託することが決定した。
4. 事業主体者 群馬県農政部
5. 調査主体者 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査組織 事務担当
小林起久治、沢井良之助、飯塚喜代子、近藤平志、細野雅男、国定 均、笠原秀樹、吉田有光、山本朋子、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のお江、並木綾子、今井もと子、秋山二三夫、後藤栄子、松土淳子
調査担当
井上唯雄 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究第2課長
中東耕志 群馬県立歴史博物館学芸員（昭和56年4月転出）
中沢 悟 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員
相京建史
7. 調査協力者 (敬称省略) 石塚久則、柿沼恵介、清里地区土地改良区、坂本和俊、平野進一、前橋土地改良事務所松本松寿、茂木哲由
8. 調査参加者 (敬称省略) 新井清江、石関嘉四郎、伊藤春江、大塚四郎、岡田庫治、笠井アキ、笠井絹江、笠井京子、笠井トシ子、笠井初子、笠井よし子、神奈川大学考古学研究会、狩野アキコ、木村イヨ、小金沢貴美子、後藤志津子、小林ショウ、小林真由美、桜井さい子、笹沢重之、佐島由美子、志賀和代、品川光子、神保ゲン、関口キヨ子、関口チエ子、関口ナミ子、関口洋子、関根けさ子、関根シノブ、関根千枝子、高瀬由美子、竹田初枝、筑井たち子、筑井美恵子、富岡かつ子、富岡千代子、中山春恵、蜂巣綾子、馬場寿美子、馬場ナツ、前原太吉、松枝 誠、森永 保、湯浅キヨノ、湯浅ヨシエ、湯浅米子、湯浅米二
9. 発掘調査の図面・遺物整理は、昭和56年4月より昭和57年3月まで行った。
10. 本書を作成するにあたり、遺物、整理、図面整理、図版作成に対し、下記の方々から御協力を得た。記して感謝の意を表するものである。(敬称省略)
石井弘子、霧田恵子、須田まさ江、萩原弘子
11. 出土遺物の写真撮影は佐藤元彦氏による。
12. 本遺跡出土遺物の注記はコウ、〇〇遺構を用いた。
13. 出土遺物は現在、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
14. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図(前橋、榛名山)を使用した。
15. 赤色顔料の分析は、群馬県工業試験場の花岡絨一氏と、早稲田大学考古学研究室 市毛勲氏を通して、早稲田大学教育学部地学教室 中村忠晴氏にお願いした。

16. 石材の鑑定は下記の方々にお願ひした。(敬称省略)

田中宏之(群馬県立歴史博物館) 飯島静男

17. 庚申塚1号墳は第3集の長久保遺跡古墳群の中に入れることとする。

18. 本書の作成にあたり、下記の諸氏から御協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。(敬称省略)

藍田久実子、飯田陽一、飯塚恵子、飯塚卓二、井川達雄、石井克己、伊能敬司、大江正行、菊池 実、久保泰博、小島敦子、坂井 隆、坂口 一、笹沢 浩、関 晴彦、田口一郎、田村俊之、市 隆之、原 雅信、藤巻幸男、本田光子、真下高幸、矢口忠良、綿貫邦男

19. 本文の執筆は次の通りである。

第1章・第1節 調査に至る経過……………井上 唯雄
第2章・第1節 遺跡の立地と環境……………中沢 悟
第3章・第3節 グリット出土遺物・縄文土器……………中東 耕志
瓦……………大江 正行
第1章・第2節、第2章・第2節、第3節
第3章・第1節、第2節、第3節……………相京 建史

20. 本書の編集は相京が行った。

凡 例

- 本文中における遺物出土位置のNoは土器観察表のNoと一致する。
- 遺構実測図に記した断面基準線は標高で表わした。
- 本書に記載した遺構の実測図は60分の1を原則とした。
- 本書に記載した遺物の実測図は3分の1を原則とし、石器は1分の1および6分の1の図を一部作成した。原則外の実測図には近接する場所にスケールを入れた。
- 土器の実測は、原則として4分割法をとり、左2分の1に外面、右2分の1に内面・断面を記載した。
- 土器実測図中央線については、実線は遺物正置のままの実測図であり、一点鎖線は180°回転させて実測したことを表わす。
- 土器破片の拓本は、断面図の右側に外面を置き、内面に文様のあるものは、断面図の右側に置いた。
- 須恵器は断面を黒く塗りつぶした。
- 底部穿孔土器、穴を穿ってある土器に関しては、▲印をつけて表わした。
- 本書における遺物記述のうち、遺構出土の土器観察については表組とし説明した。
遺物観察表に記載した項目は、図版番号、写真番号、器種、出土位置、遺存状況、法量、胎土、焼成、色調、器形、整形の特徴、各部位の文様等を入れた。表内の法量の項で口は口縁部の直径、頸は頸部の直径、胴は胴部最大幅部の直径、底は底部の直径、高は高さを表わしている。色調は「標準土色板」農林省農林水産技術会議事務所監修、財団法人日本色彩研究所色調監修 1976年9月発行を使用した。文様説明の項で口縁は口縁端部、口は口縁部、頸は頸部、肩は肩部、胴は胴部を表わしている。
- 床面出土遺物は、遺物出土状況実測図を土器観察表の図版番号が一致するように番号を打った。
- 石器の説明は本文中に、記載した。

目 次

序
例 言
凡 例

第 1 章 経 過

第 1 節 発掘調査に至る経過	1
第 2 節 調査の経過	2

第 2 章 遺跡の立地と調査方法

第 1 節 遺跡の立地と環境	7
第 2 節 調査の方法	13
第 3 節 基本土層	14

第 3 章 各 節

第 1 節 遺構と出土石器	15
1 号住居址	15
2 号住居址	17
3 号住居址	17
4 号住居址	18
5 号住居址	23
6 号住居址	25
7 号住居址	26
8 号住居址	29
9 号住居址	35
10号住居址	36
11号住居址	44
12号住居址	46
13号住居址	55
14号住居址	59
15号住居址	60
16号住居址	63
17号住居址	64
18号住居址	72
19号住居址	77
20号住居址	78

21号住居址	82
22号住居址	82
1号溝	85
2号溝	86
3号溝	88
4号溝	89
5号溝	89
6、6'号溝	92
7号溝	95
8号溝	95
9号溝	95
10号溝	103
11号溝	103
12号溝	104
1号土壇	110
2号土壇	110
3号土壇	110
1号井戸	111
2号井戸	111
1号獨立建物址	112
第2節 遺構出土の土器観察表	113
第3節 グリット出土遺物	181
縄文土器	181
弥生土器	183
瓦	186
北側水道工事のため確認した土層	187
ま と め	189
付 編 1	191
群馬県東下井出及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について	
付 編 2	200
原子吸光分析還元気化法による赤色顔料の分析	

図 版 目 次

PL. 1-1 全景(南から)	4 同
2 全景(東側)(南西から)	5 同
PL. 2-1 全景(西側)調査中(東から)	6 同
2 全景(西側)調査後(東から)	7 同
PL. 3-1 1号住居址遺物出土状況(西から)	PL. 10-1 3号住居址出土遺物
2 1号住居址全景(南から)	2 同
PL. 4-1 1号住居址床面出土遺物	3 同
2 同	4 同
3 同	PL. 11-1 4号住居址全景(西から)
4 同	2 5号住居址全景(東から)
5 同	PL. 12-1 5号住居址炉
6 同	2 5号住居址出土遺物
7 同	3 同
8 同	4 同
9 1号住居址床面、覆土出土遺物	5 同
10 1号住居址覆土出土遺物	6 同
PL. 5-1 2号住居址遺物出土状況(西から)	PL. 13-1 6号住居址全景(西から)、8号溝
2 2号住居址全景(南から)	2 6号住居址出土遺物
PL. 6-1 2号住居址出土遺物	PL. 14-1 6号住居址出土遺物
2 同	2 同
3 同	3 同
4 同	4 同
5 同	5 7号住居址炉
6 同	PL. 15-1 7号住居址全景(北東から)
7 同	2 7号住居址出土遺物
PL. 7-1 2号住居址出土遺物	3 同
2 同	PL. 16-1 8号住居址遺物出土状況
3 同	2 8号住居址全景(南西から)
4 同	PL. 17-1 8号住居址出土遺物
5 3号住居址出土遺物	2 同
PL. 8-1 3号住居址遺物出土状況(西から)	3 同
2 3号住居址全景(北から)	4 同
PL. 9-1 3号住居址出土遺物	5 同
2 同	6 同
3 同	7 同

PL. 18-1	8号住居址出土遺物	PL. 25-6	同
2	同	7	同
3	同	PL. 26-1	10号住居址出土遺物
4	同	2	同
5	同	3	同
6	同	4	同
7	同	5	同
PL. 19-1	8号住居址出土遺物	6	同
2	同	7	同
3	同	PL. 27-1	10号住居址出土遺物
4	同	2	同
5	同	3	同
6	同	4	同
7	同	5	同
PL. 20-1	8号住居址出土遺物	6	同
2	同	7	同
3	同	PL. 28-1	10号住居址出土遺物
4	同	2	同
5	同	3	同
6	同	4	11号住居址出土遺物
7	9号住居址出土遺物	5	11号住居址遺物出土状況
PL. 21-1	9号住居址全景(北から)	PL. 29-1	11号住居址全景(西から)
2	9号住居址出土遺物	2	11号住居址出土遺物
3	同	3	同
PL. 22-1	10号住居址貯蔵穴内遺物出土状況	4	同
2	10号住居址炉	5	同
PL. 23-1	10号住居址遺物出土状況(南から)	PL. 30	11号住居址出土遺物
2	10号住居址全景(南から)	PL. 31-1	11号住居址出土遺物
PL. 24-1	10号住居址出土遺物	2	同
2	同	3	同
3	同	4	同
4	同	5	同
5	同	6	同
PL. 25-1	10号住居址出土遺物	7	同
2	同	8	同
3	同	PL. 32-1	11号住居址出土遺物
4	同	2	同
5	同	3	同

- | | | | |
|----------|----------------|----------|----------------|
| PL. 32-4 | 同 | PL. 39-2 | 同 |
| 5 | 同 | 3 | 同 |
| 6 | 同 | 4 | 同 |
| PL. 33-1 | 11号住居址出土遺物 | 5 | 同 |
| 2 | 同 | 6 | 同 |
| 3 | 同 | 7 | 同 |
| 4 | 同 | 8 | 同 |
| 5 | 同 | 9 | 同 |
| 6 | 同 | PL. 40-1 | 12号住居址出土遺物 |
| 7 | 同 | 2 | 同 |
| 8 | 同 | 3 | 同 |
| PL. 34-1 | 11号住居址出土遺物 | 4 | 同 |
| 2 | 同 | 5 | 同 |
| 3 | 同 | PL. 41-1 | 12号住居址出土遺物 |
| 4 | 同 | 2 | 同 |
| 5 | 同 | 3 | 13号住居址出土遺物 |
| PL. 35-1 | 11号住居址出土遺物 | 4 | 同 |
| 2 | 同 | 5 | 同 |
| 3 | 同 | 6 | 同 |
| 4 | 同 | 7 | 同 |
| 5 | 同 | 8 | 同 |
| 6 | 同 | 9 | 同 |
| 7 | 同 | PL. 42-1 | 13号住居址遺物出土状況 |
| 8 | 同 | 2 | 13号住居址全景（南東から） |
| PL. 36-1 | 11号住居址出土遺物 | PL. 43-1 | 13号住居址出土遺物 |
| 2 | 同 | 2 | 同 |
| 3 | 同 | PL. 44-1 | 13号住居址出土遺物 |
| 4 | 同 | 2 | 同 |
| 5 | 12号住居址遺物出土状況 | 3 | 同 |
| PL. 37-1 | 12号住居址炉 | 4 | 同 |
| 2 | 12号住居址全景（南東から） | 5 | 同 |
| PL. 38-1 | 12号住居址出土遺物 | 6 | 同 |
| 2 | 同 | 7 | 同 |
| 3 | 同 | 8 | 同 |
| 4 | 同 | 9 | 同 |
| 5 | 同 | PL. 45-1 | 13号住居址出土遺物 |
| 6 | 同 | 2 | 同 |
| PL. 39-1 | 12号住居址出土遺物 | 3 | 14号住居址全景 |

PL. 45-4	14号住居址出土遺物	PL. 57-2	同
	5 同		3 同
PL. 46-1	15号住居址が(東から)		4 同
	2 15号住居址全景(南東から)		5 同
PL. 47-1	15号住居址出土遺物		6 同
	2 同	PL. 58-1	17号住居址出土遺物
	3 同		2 同
	4 同		3 同
	5 同		4 同
PL. 48-1	15号住居址出土遺物	PL. 59-1	17号住居址出土遺物
	2 同		2 同
	3 同		3 同
	4 同		4 同
	5 同		5 同
	6 同		6 同
	7 同	PL. 60-1	17号住居址出土遺物
PL. 49-1	16号住居址が(南から)		2 同
	2 16号住居址全景(南から)		3 同
PL. 50-1	16号住居址出土遺物		4 同
	2 同	PL. 61-1	17号住居址出土遺物
	3 同		2 同
	4 同		3 同
	5 同		4 同
	6 同		5 同
	7 同		6 同
PL. 51	16号住居址出土遺物		7 同
PL. 52-1	17号住居址遺物出土状況		8 同
	2 同	PL. 62-1	17号住居址出土遺物
PL. 53-1	17号住居址遺物出土状況		2 同
	2 同		3 同
PL. 54-1	17号住居址遺物出土状況		4 同
	2 同		5 同
PL. 55-1	17号住居址遺物出土状況		6 同
	2 17号住居址木炭・遺物出土状況 (南から)		7 同
PL. 56-1	17号住居址遺物出土状況(南から)	PL. 63-1	17号住居址出土遺物
	2 17号住居址全景(南東から)		2 同
PL. 57-1	17号住居址出土遺物		3 同
			4 同

PL. 63-5	同	PL. 73-2	21号住居址全景(北から)
	6 同	PL. 74-1	21号住居址出土遺物
PL. 64-1	18号住居址遺物出土状況(南から)		2 同
	2 同		3 同
PL. 65-1	18号住居址全景(西から)		4 同
	2 18号住居址出土遺物		5 同
PL. 66-1	18号住居址出土遺物		6 同
	2 同		7 同
	3 同	PL. 75-1	22号住居址土層
	4 同		2 22号住居址遺物出土状況
	5 同	PL. 76-1	22号住居址遺物出土状況(南から)
	6 同		2 22号住居址全景(南から)
	7 同	PL. 77-1	22号住居址出土遺物
	8 同		2 同
	9 同		3 同
PL. 67-1	18号住居址出土遺物		4 同
	2 同		5 同
	3 同		6 同
	4 19号住居址竈内出土遺物		7 同
	5 19号住居址竈(南東から)	PL. 78-1	1号溝全景(南から)
PL. 68-1	19号住居址竈(南から)		2 2号溝5J-N-18・19区(南から)
	2 19号住居址全景(北から)	PL. 79-1	1号溝出土遺物
PL. 69-1	20号住居址柱穴内遺物出土状況		2 同
	2 20号住居址炉		3 同
PL. 70-1	20号住居址全景		4 同
	2 20号住居址出土遺物		5 同
	3 同	PL. 80-1	2号溝6T-18・19区遺物出土状況(西から)
PL. 71-1	20号住居址出土遺物		2 2号溝6U-18区注口土器出土状況(西から)
	2 同	PL. 81-1	2号溝6T・U・V-18・19区付近(南東から)
	3 同		2 2号溝西側部分、5号溝全景(南東から)
	4 同	PL. 82-1	2号溝出土遺物
	5 同		2 同
	6 同		3 同
	7 同		
	8 同		
PL. 72-1	21号住居址遺物出土状況		
	2 21号住居址炉		
PL. 73-1	21号住居址遺物出土状況(北から)		

PL. 82-4	同	PL. 91-2	同
	5 同	3	4号溝出土遺物
PL. 83-1	2号溝出土遺物	4	同
	2 同	5	5号溝出土遺物
	3 同	6	同
	4 同	7	同
	5 同	8	同
	6 同	9	同
	7 同	PL. 92-1	6・6'号溝土層(東から)
	8 同	2	6・6'号溝遺物出土状況(西から)
PL. 84	2号溝出土遺物(6I、J-23、6 Q-21、6S-20・21、6T-20 区)	PL. 93-1	6号溝6G-10、6H-10・11、 6I-11区(南西から)
		2	6・6'号溝6F-2~7区(西から)
PL. 85-1	2号溝出土遺物	PL. 94-1	6号溝出土遺物
	2 同	2	同
	3 同	3	同
	4 同	4	同
	5 同	5	同
	6 同	6	6'号溝出土遺物
	7 同	PL. 95-1	7号溝遺物出土状況(北西から)
PL. 86-1	2号溝出土遺物	2	7号溝全景(北西から) (南側の大溝は2号溝)
	2 同	PL. 96-1	7号溝出土遺物
	3 同	2	同
	4 同	3	同
	5 同	4	同
	6 同	5	同
	7 同	PL. 97-1	7号溝出土遺物
PL. 87-1	2号溝出土遺物(6U-18区)	2	同
	2 2号溝出土遺物(覆土)	3	同
	3 同	4	同
	4 同	5	同
PL. 88-1	3号溝	PL. 98-1	9号溝土層(東南から)
	2 4号溝全景(南から)	2	9号溝全景(東南から)
PL. 89-1	5号溝土層(南から)		
	2 5号溝遺物出土状況(南から)		
PL. 90-1	5号溝と2号溝接近部・2号井戸		
	2 5号溝全景(南から)		
PL. 91-1	3号溝出土遺物		

- PL. 99-1 9号溝出土遺物
 2 同
 3 同
 4 同
 5 同
 6 同
- PL. 100-1 9号溝出土遺物
 2 同
 3 同
 4 同
 5 南側遺構確認トレンチ(10・11・12号溝全景)(北から)
- PL. 101-1 10号溝土層(東から)
 2 10号溝全景(東から)
- PL. 102-1 11号溝土層(東から)
 2 11号溝全景
- PL. 103-1 11号溝出土遺物
 2 同
 3 同
 4 同
 5 同
 6 同
- PL. 104-1 12号溝遺物出土状況(東から)
 2 12号溝全景(東から)
- PL. 105-1 11号溝出土遺物
 2 12号溝出土遺物
 3 同
 4 同
 5 同
- PL. 106-1 1号土壇全景
 2 2号土壇全景
- PL. 107-1 3号土壇全景
 2 1号井戸全景
- PL. 108-1 1号掘立建物址と1号井戸(南西から)
 2 グリット出土縄文土器
- PL. 109 グリット出土遺物
 1 5L-19区出土遺物
- PL. 109-2 5M-24区出土遺物
 3 5M-24区出土遺物
 4 6H・I-5・6区出土遺物
 5 6H・I-5・6区出土遺物
 6 5M-25区出土遺物
- PL. 110 グリット出土遺物
 1 5N-18区出土遺物
 2 6G-11区出土遺物
 3 6N-18区出土遺物
 4 5N-17区出土遺物
 5 6H-5・6区出土遺物

挿 図 目 次

Fig. 1 前橋市の模式的地質断面……………7	Fig. 36 11号住居址出土遺物……………45
Fig. 2 遺跡の立地と環境……………8	Fig. 37 11号住居址出土遺物……………46
Fig. 3 清里・庚申塚遺跡遺構全体図……………11	Fig. 38 11号住居址出土遺物……………47
Fig. 4 遺跡内トレンチ土層図……………14	Fig. 39 11号住居址出土遺物……………48
Fig. 5 1号住居址実測図……………15	Fig. 40 11号住居址出土遺物……………49
Fig. 6 1号住居址出土遺物……………16	Fig. 41 11号住居址出土遺物……………50
Fig. 7 2号住居址実測図……………18	Fig. 42 12号住居址実測図……………51
Fig. 8 2号住居址出土遺物……………18	Fig. 43 12号住居址出土遺物……………52
Fig. 9 2号住居址出土遺物……………19	Fig. 44 12号住居址出土遺物……………53
Fig. 10 3号住居址実測図……………20	Fig. 45 12号住居址出土遺物……………54
Fig. 11 3号住居址出土遺物……………21	Fig. 46 13号住居址実測図……………56
Fig. 12 3号住居址出土遺物……………22	Fig. 47 13号住居址出土遺物……………57
Fig. 13 4号住居址実測図……………23	Fig. 48 13号住居址出土遺物……………58
Fig. 14 5号住居址実測図……………24	Fig. 49 13号住居址出土遺物……………59
Fig. 15 5号住居址出土遺物……………25	Fig. 50 14号住居址実測図……………60
Fig. 16 6号住居址実測図……………26	Fig. 51 14号住居址出土遺物……………60
Fig. 17 6号住居址出土遺物……………27	Fig. 52 15号住居址実測図……………61
Fig. 18 7号住居址実測図……………28	Fig. 53 15号住居址出土遺物……………62
Fig. 19 7号住居址出土遺物……………29	Fig. 54 16号住居址実測図……………63
Fig. 20 8号住居址実測図……………30	Fig. 55 16号住居址出土遺物……………65
Fig. 21 8号住居址遺物出土状況……………31	Fig. 56 17号住居址実測図……………66
Fig. 22 8号住居址出土遺物……………32	Fig. 57 17号住居址遺物出土状況……………67
Fig. 23 8号住居址出土遺物……………33	Fig. 58 17号住居址出土遺物……………68
Fig. 24 8号住居址出土遺物……………34	Fig. 59 17号住居址出土遺物……………69
Fig. 25 9号住居址実測図……………35	Fig. 60 17号住居址出土遺物……………70
Fig. 26 9号住居址出土遺物……………36	Fig. 61 17号住居址出土遺物……………71
Fig. 27 10号住居址実測図……………37	Fig. 62 17号住居址出土遺物……………72
Fig. 28 10号住居址遺物出土状況……………38	Fig. 63 17号住居址出土遺物……………73
Fig. 29 10号住居址貯蔵穴内遺物出土状況……………38	Fig. 64 18号住居址実測図……………74
Fig. 30 10号住居址出土遺物……………39	Fig. 65 18号住居址出土遺物……………75
Fig. 31 10号住居址出土遺物……………40	Fig. 66 18号住居址出土遺物……………76
Fig. 32 10号住居址出土遺物……………41	Fig. 67 19号住居址実測図……………77
Fig. 33 10号住居址出土遺物……………42	Fig. 68 19号住居址実測図……………78
Fig. 34 11号住居址実測図……………43	Fig. 69 19号住居址出土遺物……………78
Fig. 35 11号住居址遺物出土状況……………44	Fig. 70 20号住居址実測図……………79

Fig. 71	20号住居址出土遺物	80	Fig. 107	2号土壇実測図	110
Fig. 72	21号住居址実測図	81	Fig. 108	3号土壇実測図	111
Fig. 73	21号住居址炉実測図	82	Fig. 109	1号井戸実測図	111
Fig. 74	21号住居址出土遺物	83	Fig. 110	2号井戸実測図	112
Fig. 75	22号住居址実測図	84	Fig. 111	掘立建物址実測図	112
Fig. 76	22号住居址出土遺物	85	Fig. 112	グリット出土縄文土器	182
Fig. 77	1号溝実測図	86	Fig. 113	5 L-17、5 M-24・25、5 N-18、6 G-11、6 N-18、6 H-1-5・6)	184
Fig. 78	1号溝出土遺物	87	Fig. 114	6 H-5・6	186
Fig. 79	2号、3号、8号溝実測図	88	Fig. 115	北側水道工事のために確認した土層	188
Fig. 80	2号、4号、5号溝実測図	89			
Fig. 81	2号、7号溝実測図	90			
Fig. 82	2号溝出土遺物(5 N-18・19区)	91			
Fig. 83	2号溝出土遺物	92			
Fig. 84	2号溝出土遺物	93			
Fig. 85	2号溝出土遺物(6 I-23、6 J-23、6 Q-21、6 S-20・21、6 T-20)	94			
Fig. 86	2号溝出土遺物(6 I-23、6 J-23)	95			
Fig. 87	2号溝出土遺物(6 Q-21、6 T-19、6 U-18)	96			
Fig. 88	2号溝出土遺物(覆土)	97			
Fig. 89	3号溝出土遺物	97			
Fig. 90	4号溝出土遺物	98			
Fig. 91	5号溝出土遺物	98			
Fig. 92	6号、6'号溝実測図	99			
Fig. 93	6号溝実測図	100			
Fig. 94	6'号溝出土遺物	100			
Fig. 95	6号溝出土遺物	101			
Fig. 96	7号溝出土遺物	102			
Fig. 97	7号溝出土遺物	103			
Fig. 98	9号溝実測図	104			
Fig. 99	9号溝出土遺物	105			
Fig. 100	9号溝出土遺物	106			
Fig. 101	10、11、12号溝実測図	107			
Fig. 102	10号溝出土遺物	109			
Fig. 103	11号溝出土遺物	108			
Fig. 104	11号溝出土遺物	109			
Fig. 105	12号溝出土遺物	109			
Fig. 106	1号土壇実測図	110			

第1章 経 過

第1節 発掘調査に至る経過

県営畑地帯総合土地改良事業清里地区の事業は、昭和52年度から60年までの9カ年にわたる事業として、昭和52年度に着手されたが、52年度については埋蔵文化財包蔵地とかかわりのない地域で施行され、昭和53年度は北群馬郡吉岡村陣場及び前橋市池端町地区の埋蔵文化財包蔵地を含む地域が対象とされた。その結果、特に陣場地区を中心に、平安時代を中心とする集落跡を検出し、その成果は既に『清里・陣場遺跡』1982年3月31日として公開された。

そのあとを受けて、昭和54年度は、前橋市池端町、上青梨子町地区26.6haを対象として面工事に着手することになり、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が前年に引きついで実施することが県教育委員会の調整で決定した。その結果を受けて、事業団では事業の所管である前橋土地改良事務所と発掘調査の打ち合わせを開始した。

まず、昭和53年8月10日、第1回の交渉が、事業団事務所で行なわれ、調査地区の決定、事業員についての検討に入った。その結果、文化財包蔵地が広大なことから今年度1年では調査終了が見込めないこと、調査実施は、秋のとり入れ時期以降とすることで了解が成立した。

9月19日に、この話し合いの結果をもとに契約書の交換が行なわれ、11,771千円の受託契約が締結された。更に10月17日に、調査開始についての具体的打ち合わせが土地改良事務所で行なわれ11月12日から調査に着手すること、調査はまず、遺物散布地について試掘を行ない、遺構範囲の確定を行なうこと、その結果にもとずいて、調査体制を整備すること、細部の打ち合わせは、清里土地改良区で行なうことなど、具体的な事項の確定をみた。

11月12日から、試掘が開始され、4日間にわたる調査で、今年度の事業対象区域内には、カット部分がないこと、準幹線道路1号の青梨子町の部落の西南部を中心に古墳1基、弥生遺構1,500㎡ほどが調査対象となることが確定し、調査は3月25日終了を目標とすることになった。

このことから、12月21日に、清里土地改良区事務所において、土地改良区地元役員を招集し、前橋土地改良事務所立合いのもとに、事業団から出向いて、文化財調査について説明し、地元の協力を取りつけた。その内容は、

- 1) 現状で把握できた遺跡範囲の提示
- 2) 古墳については、できるだけ現状保存の線で協力してほしいこと
- 3) 調査期間は現状の見通しであり、作業員の確保について、地元の協力を得たいこと。
- 4) 調査対象からははずした地区についても、工事中、遺構を検出した場合は調査をすること等である。

なお、当該古墳についてはその後、この古墳の上を道路が通過する計画変更がなされ、必然的に調査対象に繰り入れられることになった。他に、更にもう一基の古墳調査を対象にとり入れ、調査後、平裏したい旨の申し入れがあったが、現状見通しでは、調査期間内にそれをとり込むことが困難な状態であることから、後日、調査の進展とらみ合わせ、再検討することで、当面の調査は、事前打ち合わせ通りに限定して調査を行なうことになった。

なお、後日、この古墳については、今回の調査期間内では処理しえないという状況判断のもとで、調査対象からははずされた。こうした経過を終て、調査が実施されることになり、遺跡地の通称をとり本遺跡を清里・庚申塚遺跡として命名し、調査されることになった。

第2節 調査の経過

- 11月12日 月曜日 晴 ブレハブ内清掃。作業員に諸注意。午後から試掘開始。住居址らしき落ち込みを確認。
- 11月13日 火曜日 晴 試掘の継続。発掘器材の搬入。
- 11月14日 水曜日 晴 試掘の継続。住居址3軒確認、溝1本確認。発掘器材の搬入。
- 11月15日 木曜日 晴 試掘の継続、準幹3号内の試掘溝は全部で21本入れた。その結果、弥生時代の遺物を出土することが確認された。トレンチの土層図作成。バックフォー稼動(半日)、東側より表土はぎを行う。庚申塚1号墳調査の件で地主と交渉、19日に神主のおはらい以降着手で合意。
- 11月16日 金曜日 曇 トレンチの土層図作成。トレンチ設定平面図作成終了。トレンチ断面写真3ヶ所撮影、準幹3号線区域拡張・精査。
- 11月19日 月曜日 曇 トレンチの土層図作成終了。準幹3号線区域拡張部分の精査。庚申塚1号墳神主によりお献い。(上青梨子598番地所在)発掘着手、古墳近景写真撮影、十字トレンチ設定。
- 11月20日 火曜日 晴 準幹3号線区域精査(住居址確認)。庚申塚1号墳十字トレンチ調査。
- 11月21日 水曜日 曇 準幹3号線区域精査(住居址確認)、本日にて確認終了。庚申塚1号墳断面写真終了。トレンチ設定平面図作成。
- 11月22日 木曜日 雨 室内にて出土遺物の水洗い。
- 11月26日 月曜日 曇 庚申塚1号墳土層図作成、ベルト除去。墳丘コンター実測。
- 11月27日 火曜日 晴 庚申塚1号墳墳丘覆土除去。石室内覆土除去、多量の礫が混入、石室内盗掘された様子である。庚申塚遺跡北西方向より遠景写真撮影。
- 11月28日 水曜日 曇/雨 庚申塚1号墳石室内覆土除去。10時以降雨のため室内作業。
- 11月29日 木曜日 曇/晴 庚申塚1号墳石室床面精査、人骨・歯・鉄錐出土。
- 11月30日 金曜日 晴 庚申塚1号墳石室床面精査終了。全景・部分写真撮影。遺物・人骨の出土状況実測図作成、羨道部分・閉塞部分の写真撮影。石室表込め被覆石精査、最下部の一部のみ残存。
- 12月1日 土曜日 晴 庚申塚1号墳Dトレンチ東側へ拡張、閉塞部分の実測。
- 12月3日 月曜日 晴 庚申塚1号墳奥壁・左壁の写真撮影。石室断面実測。準幹3号線区域住居址検出部分に杭打ち開始。
- 12月4日 火曜日 曇 庚申塚1号墳石室断面実測。準幹3号線区域グリットポイント設定。溝状遺構より調査開始。
- 12月5日 水曜日 晴 庚申塚1号墳石室内遺物とり上げ後、床面下精査。準幹3号線区域の溝状遺構および住居址の発掘調査。
- 12月6日 木曜日 晴 庚申塚1号墳鋪石面確認写真撮影。羨道部下面実測。人骨をバインダーにて凝固。1号住居址1号溝覆土除去。
- 12月7日 金曜日 晴 庚申塚1号墳床面および床面下(鋪石面)の断面実測。1号住居址断面実測、覆土中の遺物取り上げ。2号溝(5K-18・19区)掘り下げ。
- 12月10日 月曜日 晴 庚申塚1号墳床面下遺物出土状況写真撮影。羨道部閉塞写真撮影。石室内主軸方向断面図作成。1号住居址土層写真撮影終了、2号住居址南側部分を拡張。2号溝覆土除去。
- 12月11日 火曜日 晴 庚申塚1号墳羨道部閉塞部平面実測。1号住居址セクションベルト除去。遺物出

土状況写真撮影。2号溝覆土発掘。

12月12日 水曜日 晴 庚申塚1号墳灰道部閉塞部まづめ石写真撮影の後除去。断面実測。1号住居址遺物出土状態平面実測。2号溝平面・断面実測。

12月13日 木曜日 晴 庚申塚1号墳断面図作成。1号住居址出土遺物とり上げ、写真撮影終了。2号溝平面・断面実測終了。5M-12区調査開始。

12月17日 月曜日 晴 庚申塚1号墳石室実測用の割り付け。1号住居址全景写真撮影、平面・断面図作成、2号住居址プラン確認。5L-9・10、5M-9・10区に位置する。2号溝と切り合った3号住居址プランを5L-N-17・18区で確認。

12月18日 火曜日 晴 庚申塚1号墳石室床面実測終了。1号住居址、1号溝調査終了。3号住居址覆土内の遺物を取り上げ。3号溝南半調査終了。

12月19日 水曜日 晴/曇 2号住居址土層図作成。4号住居址調査開始、平面実測。

12月20日 木曜日 晴 2号住居址断面写真撮影・実測。3号住居址調査続行。4号住居址土層写真撮影・全景写真撮影終了。

12月21日 金曜日 晴

12月22日 土曜日 晴 庚申塚1号墳石室奥壁・側壁実測。

12月24日 月曜日 曇 庚申塚1号墳石室奥壁・側壁実測終了。3号住居址遺物出土状況写真撮影と実測終了。単幹3号線内遺構配置図作成。

12月25日 火曜日 晴 庚申塚1号墳床面下磔平面実測。3号住居址遺物とり上げ。作業員賃金払い。現場整備。

12月26日 水曜日 晴 清里地区発掘調査対象区域遺物表面採集、遺物散布地確認。本日にて昭和54年の現場作業終了。

1月7日 月曜日 晴/雪 昭和55年は本日より作業開始。庚申塚1号墳床面下磔実測。3号住居址調査。

1月8日 火曜日 晴 庚申塚1号墳床面下磔の平面実測終了。3号住居址平面・断面図終了。5号住居址平面実測終了。

1月9日 水曜日 晴/曇 庚申塚1号墳裏込め磔断面実測図、裏込め被覆根石確認作業。3号住居址全景写真撮影・床面断ち割り。5号住居址平面実測・断面実測終了。

1月10日 木曜日 晴 庚申塚1号墳裏込め磔断面図作成・裏込め被覆根石確認作業・石室内断割り、地山面確認。作業員募集について土地改良区に連絡。

1月11日 金曜日 晴/曇 庚申塚1号墳構築面下の断面実測。3号住居址構築面断面図作成、周辺の精査。5号住居址構築面確認終了。

1月12日 土曜日 晴 5号住居址炉確認・構築断面図作成。6I-18区を中心にプラン確認へ。6H-7・8区調査続行。

1月14日 月曜日 曇/晴 昨日の降雪のため午前中雪かき作業。5号住居址炉部分・構築面全景写真撮影。5M-19区周辺精査。

1月16日 水曜日 晴 庚申塚1号墳石室内地山断面実測・裏込め被覆磔平面実測。7号住居址の範囲6H・I-17・18・19区を確認・覆土除去へ。2号溝・3号住居址周辺の遺構確認。

1月17日 木曜日 晴 庚申塚1号墳裏込め被覆磔平面実測・周壁確認作業。7号住居址調査続行。6I-22・23区遺構確認作業へ。2号溝(5N-19区)覆土中より多数の土器出土。6H-14・15・16区で遺構確認

第1章 経 過

作業。

1月18日 金曜日 曇/雪 庚申塚1号墳石室構築時の掘り方を検出。7号住居址調査続行。8号住居址は6G・H-7・8、6G-9区にてプラン確認、調査開始。2号溝及び3号住居址周辺遺構確認、2号溝中出土遺物の実測。

1月19日 土曜日 晴 庚申塚1号墳土層写真撮影終了。7号住居址土層写真撮影終了。8号住居址全景写真撮影。2号溝内出土遺物とり上げ。

1月21日 月曜日 曇 庚申塚1号墳周堀確認調査。7号住居址調査終了。11号住居址覆土中の遺物とりあげ。

1月22日 火曜日 晴 庚申塚1号墳周堀確認調査、11号住居址調査。

1月23日 水曜日 晴 庚申塚1号墳周堀確認調査、3号住居址周辺調査、11号住居址調査。

1月24日 木曜日 晴 庚申塚1号墳周堀確認調査、2号住居址全景写真撮影、遺物出土状況実測開始。

1月25日 金曜日 晴 庚申塚1号墳根石写真撮影、石室掘り方平面実測、11号住居址写真撮影。

1月28日 月曜日 曇 庚申塚1号墳周堀の平面実測、周堀外の石組写真撮影・平面実測終了。2号住居址平面・断面見取り図実測完了。8号住居址平面実測完了。11号住居址北側拡張部で住居址の隅を確認。

1月29日 火曜日 曇/雨 庚申塚1号墳北西部の石組断面図取り。11号住居址床面確認。3時以降雨のため室内作業。

1月30日 水曜日 雨 図面・遺物整理。

1月31日 木曜日 晴 庚申塚1号墳根石の断面および海拔を図面上に記録をとる。11号住居址精査はじめる。

2月1日 金曜日 曇 庚申塚1号墳図面修正。11号住居址土層図作成・全景写真撮影。2号溝プラン検出。

2月4日 月曜日 曇 8号住居址平面実測開始。11号住居址全景写真・遺物出土状況撮影、平面実測・遺物とり上げ、1号井戸址土層実測、2号溝(6I-23区)調査・多数の遺物散布。作業員賃金支払い。

2月5日 火曜日 晴 8号住居址平面実測および遺物出土状況を実測。9号住居址(6H・I-21・22区)において確認。10号住居址調査開始。1号井戸址土層図作成終了。2号溝(6I-23区)平面・断面図終了。6I-20~30付近の南側に単幹3号線からはずれる位置であるが、C軽石層下まで工事の進んでいる場所があり、土地改良区との話し合いで調査をすることが決定、同時に調査をすることになる。神奈川大学生見学にくる。

2月6日 水曜日 6I-20~30区内の精査・溝がのびる。10号住居址調査。

2月8日 金曜日 晴 9号住居址全掘・平面・土層・断面写真撮影終了。11号住居址遺物出土状況実測終了・遺物とり上げ。6K-19区溝状遺構はり上げ、写真撮影、遺構実測終了。

2月9日 土曜日 曇 6I-20~30区清掃・全景写真撮影終了。

2月12日 火曜日 曇 6I-20~30区コンター実測開始。11号住居址全景写真終了。神奈川大学考古学研究会学生本日より7名参加。

2月13日 水曜日 晴/曇 8号住居址土層実測・写真撮影終了。11号住居址平面・断面実測を終了し、遺物のとり上げ。12号住居址床面精査。

2月14日 木曜日 曇 8号住居址調査続行。10号住居址調査再開。12号住居址図面作成準備。1号井戸址全景写真終了・平面・断面図実測終了。6号溝状遺構調査。2号溝6I-20~30区内溝状遺構2・4・5号

のコンター実測を行う。

2月15日 金曜日 晴 8号住居址全景写真撮影終了。10号住居址精査。12号住居址土層図作成。13号住居址調査開始。2・4・5号溝状遺構平面実測、遺物出土状況実測。2号井戸址調査開始。

2月16日 土曜日 晴 8号住居址土層図作成。12号住居址遺物出土状況写真撮影終了・平面図作成終了。13号住居址調査続行。6号溝全景写真撮影終了。2・4・5号溝状遺構内遺物出土状況写真撮影。2号井戸址調査終了。

2月18日 月曜日 晴 8号住居址の周辺精査。10号住居址のプラン確認調査続行。12号住居址遺物とり上げ・平面・断面実測終了。13号住居址調査続行。2・4・5号溝コンター図作成。

2月19日 火曜日 雪 発掘作業中止。写真整理、土器洗い・土器に注記作業を行う。

2月20日 水曜日 晴 8号住居址南東部分の遺物出土状況の精査。10号住居址土層観察。12号住居址本日にて作業終了。13号住居址遺物出土状況写真撮影。2号溝(6R-22、6S-20・21、6T-19区)コンター記入・6T-19区断面写真撮影および断面実測終了。

2月21日 木曜日 晴 10号住居址断面写真撮影、実測終了。13号住居址断面精査。14号住居址写真撮影。

2月22日 金曜日 晴 8号住居址東側(6H-4区)遺構確認調査。12号住居址断面実測。13・14号住居址遺物出土状況実測図作成その後遺物とり上げ・断面実測終了。

2月23日 土曜日 晴 13・14号住居址遺物とり上げ・平面図作成。15・16号住居址調査開始。

2月25日 月曜日 晴 8・12・13・15・16号住居址北側を拡張。

2月26日 火曜日 曇 8・12・13・15・16号住居址拡張部分の覆土をはずしはじめ。

2月27日 水曜日 晴 8号住居址全景写真撮影・平面実測開始。13号住居址土層写真撮影・実測後、全景写真撮影。15号住居址全景写真撮影・平面実測補足。16号住居址発掘調査継続。

2月28日 木曜日 晴 8号住居址遺物出土状況写真撮影・遺物とり上げ・平面実測終了。12号住居址全景・個別遺物出土状況写真撮影・平面実測開始。13号住居址遺物とり上げ・断面実測終了。15号住居址調査継続。16号住居址床面精査。

2月29日 金曜日 晴 8号住居址周辺遺物とり上げ。12号住居址遺物とり上げ、平面実測終了・炉室部分精査。13号住居址断面図作成。15号住居址北側精査。16号住居址土層断面写真撮影および実測図作成。6号溝および6号溝から別れる溝を6'号溝とし、確認。

3月1日 土曜日 曇/雨 13号住居址断面図作成。

3月3日 月曜日 晴 12号住居址炉精査・断面図作成。15号住居址断面図作成。16号住居址全景写真撮影・炉写真撮影・平面実測開始。17・18号住居址調査開始。2月分作業員賃金支払い。

3月4日 火曜日 晴 15号住居址断面写真撮影・実測終了。16号住居址断面写真撮影および実測図作成・炉断ち割り。17・18号住居址調査続行。6号溝・6'号溝断面実測の結果6号溝の方が古いことが判明。

3月5日 水曜日 曇 15号住居址遺物出土状況の写真撮影・平面図作成。16号住居址全景写真撮影・断面図作成終了。17号住居址プラン確認作業継続。18号住居址覆土除去作業の継続。6・6'号溝の断面図作成・写真撮影終了後・平面実測図作成。

3月6日 木曜日 曇 15号住居址全景・炉写真撮影と平面・断面実測。17号住居址プラン確認と遺物出土状況実測図作成。6・5号溝のコンター実測。

3月7日 金曜日 曇/雨 17号住居址遺物出土状況実測図作成。6・6'号溝実測。

3月8日 土曜日 晴 17号住居址遺物出土状況・断面写真撮影・遺物とり上げおよび住居址断面図作成。

第1章 経 過

- 8号住居址南東部分の遺物出土状況の精査。10号住居址土層観察。6・6'号溝遺物とり上げ。
- 3月10日 月曜日 晴 17号住居址柱穴確認・炉址と住居址の断面図作成。19号住居址調査開始。
- 3月11日 火曜日 晴 17号住居址と6号溝の関係は、住居址の方が古いことを確認、19号住居址調査、2号溝調査継続。
- 3月12日 水曜日 晴 18号住居址土層写真撮影。19号住居址全景写真撮影終了・カマドと平面実測終了。6・6'号溝全景写真撮影終了。全体図作成。
- 3月13日 木曜日 晴 18号住居址遺物出土状況写真撮影・平面実測図作成、19号住居址全景写真撮影終了。20・21・22号住居址調査開始。2号溝南半部分写真撮影と平面実測図作成。
- 3月14日 金曜日 曇/雨 18号住居址部分写真・遺物とり上げ。20号住居址断面実測・全景写真撮影終了。21・22号住居址調査継続。出土遺物水洗い。
- 3月15日 土曜日 晴 18号住居址遺物とり上げ終了。20号住居址平面実測図作成。21・22号住居址調査継続。2号溝平面実測継続。
- 3月17日 月曜日 曇 18号住居址断面図作成。20号住居址遺物出土状況写真撮影、平面実測図作成終了、断面図作成。22号住居址調査継続。2号溝部分写真撮影、遺物平面実測図作成、遺物とり上げ。
- 3月18日 火曜日 晴 18号住居址全景写真撮影終了。20号住居址作業終了。7号溝址プラン確認。
- 3月19日 水曜日 晴 7号溝遺物平面実測図作成。22号住居址プラン確認。5号溝北側拡張部調査。2号溝南側拡張部実測図作成および写真撮影終了。
- 3月21日 金曜日 晴 3号住居址と2号溝の関連を追求。10号住居址周辺精査。7号溝遺物とり上げ・断面図作成・炉址の調査。22号住居址遺物とり上げ・断面図作成。2号溝と5号溝の近接部分実測図作成。5号溝北側拡張部写真撮影とコンター実測終了。
- 3月22日 土曜日 雪 土器洗い、図面整理。
- 3月24日 月曜日 晴 10号住居址遺物出土状況の写真撮影。22号住居址平面確認。
- 3月25日 火曜日 曇 10号住居址平面実測図作成。22号住居址床面断面写真撮影および実測図作成。7号溝全景写真撮影および平面実測図作成。
- 3月26日 水曜日 曇 10号住居址遺物とり上げ、炉の写真撮影および断面実測図作成。22号住居址遺物とり上げ・全景写真撮影および平面実測図作成。7号溝遺物出土状況実測図作成およびとり上げ。
- 3月28日 金曜日 晴 10号住居址貯蔵穴・炉址の精査。9号溝写真撮影および実測開始。
- 3月29日 土曜日 晴 北拡張部遺構確認作業。10号住居址貯蔵穴内出土遺物実測および写真撮影。
- 3月30日 日曜日 晴 6号住居址全景写真撮影。南・北試掘部分の精査。
- 3月31日 月曜日 曇 遺跡全体のダメ押しと器材整理。本日に作業終了。

第2章 遺跡の立地と調査方法

第1節 遺跡の立地と環境

清里・庚申塚遺跡は、前橋市北西部、中心街よりおよそ4kmの地点に位置している。

榛名山麓がなだらかに傾斜をみせ、その間を中小河川が東南方向に向って流れ、台地を細長く画している。北から午王頭川、八幡川、染谷川により分断され、その台地の幅は、600m～800m内外である。

午王頭川は、北群馬郡榛東村(旧桃井村)から東南に流れ、吉岡村(旧明治村)から清里地区に入り、吉岡村大久保地区を経て総社町に至り、利根川に合流する。

八幡川(山沢川)は、水源を北群馬郡榛東村で榛名水系の小流を合せて東南方向に流れ、清里地区青梨子付近を東へ向けて総社町に入り、同町大屋敷の東南で天狗岩用水に合流する。全長約12kmで、分流に東西堰がある。

清里・庚申塚遺跡は、八幡川の左岸で、午王頭川との間にはさまれた前橋台地上に立地し、台地は北西から南東方向に傾斜する。この台地の北側は僅かに低地となり、湧水地になっている。遺跡の海拔は、現地表面で、約165.4m～161.9mの位置にあり、遺構面までは、表土面から約1.5m～0.3mの深さの堆積層で覆われていた。

発掘調査地域の土地利用は桑畑と畑地が主である。

近接する地域で調査された遺跡は、同土地改良に伴う昭和53年度分調査済みの陣場遺跡が、北西約1kmに位置しており、平安時代の集落址を検出した。また、南側700mの地点では、清里南部遺跡群が昭和54年に調査され、平安時代の集落址や、中世の井戸址などが検出されている。

清里・庚申塚遺跡周辺の弥生時代の遺跡は調査例が少なく、中期後半に比定できるものは、高崎市浜尻遺跡、新保遺跡などである。後期に至り、低地部に遺跡が多く検出されている。主に井野川や染谷川流域に、その分布を見ることが出来る。それらの遺跡をみると、圧倒的に後期に属する遺跡の多いことを示している。それらの遺跡について、Fig. 2に位置を示した。そこに表示した番号によって遺跡の内容を以下簡単にまとめた。なお浅間C降下軽石層下で確認された水田遺跡も本書の弥生時代遺跡分布図に入れたため、かならずしも弥生時代という同一時期に入れて取り扱えたかどうかについての疑問は残る。

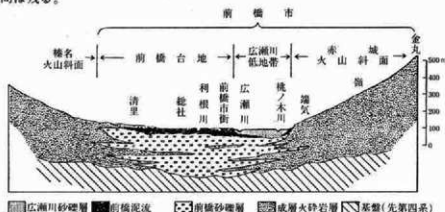


Fig. 1 前橋市の模式的な地質断面



Fig. 2 遺跡の立地と環境

弥生時代の周辺遺跡

1. 庚申塚遺跡
2. 桜ヶ丘遺跡^{注1} (前橋市総社町所在) 団地造成のため破壊され、その一部が調査され、住居址が検出された。後期・樽式土器出土。
3. 同道遺跡^{注2} (群馬県同道所在) 県立高崎北高校建設のため調査された。浅間C降下軽石層下9,000㎡の広さに180面の水田検出。後期・樽式土器出土。
4. どんざわ畑地遺跡^{注3} (群馬町井出所在) 群馬県教育委員会で試掘。集落の可能性がある。後期樽式土器出土。圃場整備事業のため調査された。
5. 御布呂遺跡^{注4} (高崎市浜川町所在) 芦田貝戸遺跡と一連の遺跡と考えられる。県内最大の面積をもつ水田遺跡。後期、樽式土器出土。
6. 熊野堂遺跡^{注5・6} (高崎市大八木町所在) 上越新幹線建設のため調査された。住居址・水田・水路を検出。後期・樽式土器出土。
7. 芦田貝戸遺跡^{注7} (高崎市浜川町所在) 御布呂遺跡の南。広大な水田遺跡。後期・樽式土器出土。圃場整備事業のため調査された。
8. 小八木遺跡^{注8・9} (高崎市小八木町所在) 主要水路3本により区画された4群の水田址と住居址1軒、畦畔には杭の打ち込まれたものあり。住居址・水路中より後期・樽式土器出土。
9. 浜尻遺跡^{注10・11} (高崎市浜尻町所在) 浜尻南地区区画整理事業に伴う調査。竜見町期の住居址3軒住居址の可能性のある4基の遺構。溝状遺構2条。土坑5基が検出された。溝は環濠の可能性を示唆している。
10. 新幹線22遺跡^{注12} (高崎市大八木町所在) 低地性集落が井野川の洪水により被害にあったと推定されている。後期・樽式土器出土。
(大八木下小島遺跡)
11. 井野天神遺跡^{注13} (高崎市井野町所在) 浅間C降下軽石層下の黒色土層中に加工痕のある木材と後期・樽式土器出土。水田址の可能性ある。圃場整備のため調査された。
12. 正観寺遺跡^{注14} (高崎市正観寺町所在) 焼失住居の炭化物出土状態から当時の上屋構造の推定を行なっている。後期・樽式土器出土。
13. 上日高山貝戸遺跡^{注15} (高崎市上日高町所在) 後期・樽式土器の散布地。
14. 日高遺跡^{注16・17・18} (高崎市日高町所在) 関越自動車道建設・農地改良事業等により調査が行なわれた。住居址・水田・水路・墓地を検出。後期・樽式土器出土。
15. 新保遺跡^{注19・20・21} (高崎市新保町所在) 関越自動車道建設により調査。住居址検出・中期・竜見町式土器、後期・樽式土器出土。

第2章 遺跡の立地と調査方法

注

1. 尾崎喜左雄 「豪族の支配と古墳の構造」『前橋市史 第1巻』 1971年
2. 能登 健・石坂 茂 「同遺跡」『発掘された古代の水田』群馬県立歴史博物館 1980年
3. 群馬県教育委員会 『群馬県遺跡古帳』 1974年
4. 関口 修・田村 孝・金井潤子・古屋真美 「矢島遺跡・御布呂遺跡」高崎市文化財調査報告書第7集 1979年
5. 清水和夫 「熊野堂遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報II』群馬県教育委員会 1975年
6. 細野雅男 「高崎市熊野堂遺跡の水田址」『月刊文化財』 1978年
7. 関口 修・田村 孝・金井潤子・古屋真美 「芦田貝戸遺跡」高崎市文化財調査報告書第9集 高崎市教育委員会 1979年
8. 平野進一 「日高遺跡」『関越自動車道(新両線)地域埋蔵文化財発掘調査概報IV』群馬県教育委員会 1978年
9. 平野進一・大江正行・中沢 悟 「群馬県高崎市日高遺跡の調査」『考古学ジャーナル152号』 1978年
10. 井上唯雄・柿沼忠介 「入門講座 弥生土器 関東・北関東2」『考古学ジャーナル141号』 1977年
11. 中村昌人・桜井 孝 「浜尻遺跡」高崎市文化財調査報告書第26集 高崎市教育委員会 1981年
12. 石川正之助・長谷部達雄・能登 健 「22地区」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報I』群馬県教育委員会 1975年
13. 尾崎喜左雄 「上代及び中世の村」『中川村誌』1957年
14. 飯塚恵子・久保泰博・高野 学・田口一郎 「正観寺遺跡群(1)」高崎市文化財調査報告書第11集 高崎市教育委員会 1979年
15. 注3と同じ
16. 注8と同じ
17. 注9と同じ
18. 中村昌人・桜井 孝 「浜尻遺跡」高崎市文化財調査報告書第26集 高崎市教育委員会 1981年
19. 中 隆之 「新保遺跡」『関越自動車道(新両線)地域埋蔵文化財発掘調査概報V』群馬県教育委員会 1979年
20. 佐藤明人・真下高幸・平野進一・大江正行 「群馬県高崎市新保遺跡の調査」『考古学ジャーナル152号』 1978年
21. 平野進一 群馬考古学会での発表資料 1980年12月

参考文献

前橋市史

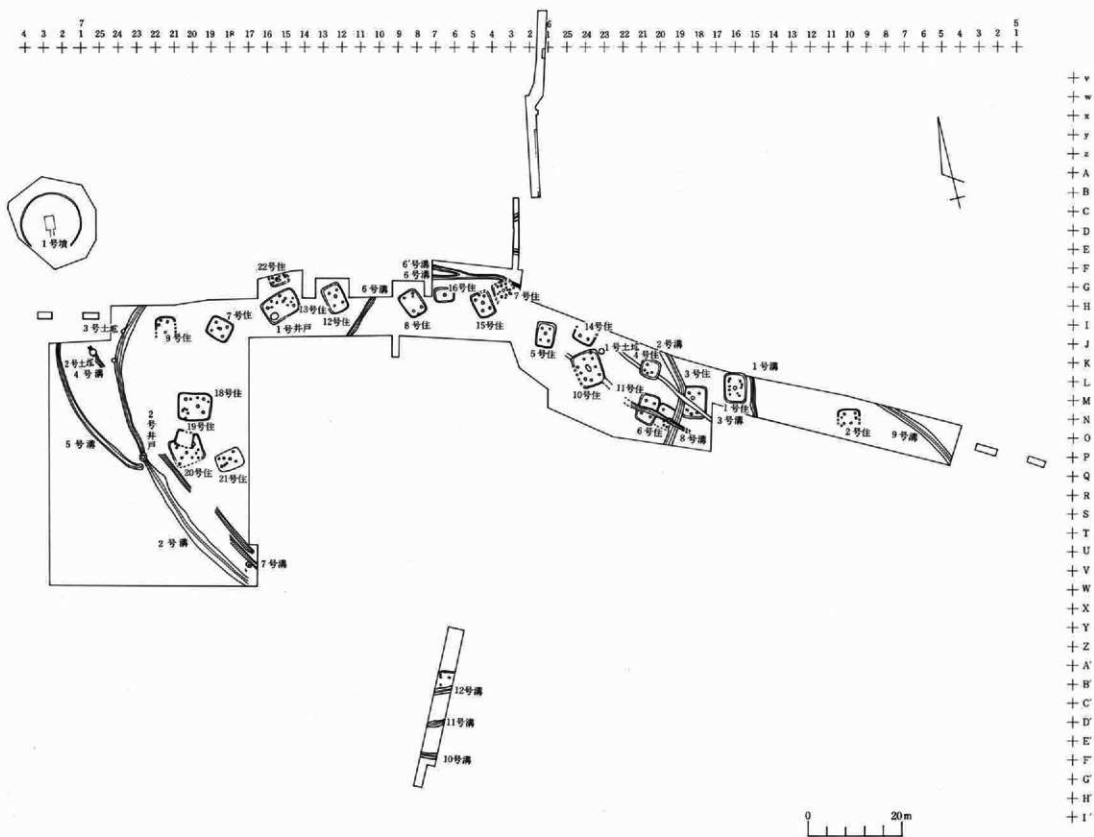


Fig. 3 清里·樊申塚遺跡遺構全体図

第2節 調査の方法

調査区の設定

調査方法は準幹3号線発掘調査区内が全て方眼の目の中に組み込まれるようにグリッド設定を行った。グリッドは道路に沿うように設定したため南北ラインをN-12°-Eに設定した。調査区を100mごとに大きく区画し、その中を4mグリッドで調査した。グリッドポイントは北東隅に置いた。グリッドは北から南にアルファベット、東西は算用数字を用い、東から西に向けて順次呼ぶようにした。アルファベットの頭に付けた算用数字は大区画を意味する。

遺構発掘の方法

1. 準幹3号線発掘調査区に、21ヶ所のトレンチを入れ、基本土層と遺構面の確認を行なった。この結果に基づいて、上層の土砂を重機により除去した。
2. 遺構の堆積土中の遺物と遺構との関係（出土遺物が廃絶時のものか、廃絶後に流入したのか）を知るために、ブランク確認後、土層断面ベルトを残して発掘調査を行なった。
3. 住居址については、炉、はり床等は精査した後に、部分的に断ち割りを行なった。

遺物

1. 出土遺物は、とり上げの時点での年月日、遺構名、地区名、出土層位等を記録した。
2. 遺構に伴う遺物は、実測図に出土位置、海拔を記入した。

実測図の作製

1. 遺構図の作製は、平面図を主に平板測量で行なった。
2. 実測図は、20分の1縮尺を原則とし平面図、土層図、立面図を作図した。
3. 細部の実測は、10分の1縮尺の実測図を作製した。
4. 溝状の遺構は、上端、下端の実測に付け加え、原則として10cm又は、20cm間隔の等高線(海拔)を入れた。

その他の記録

1. 遺構全景、各部分、遺物出土状況の写真撮影をした。
2. 記録カードに気のついたことを記録した。
3. 調査日誌を作製した。

第3節 基本土層 (Fig. 4)

清里・庚申塚遺跡は、北西から南東にかけて傾斜する前橋台地上に位置している。試掘トレンチによって基本土層を把握した結果、準幹3号線路線内約220m内での土層堆積状況は (Fig. 4) に記載した通りである。

遺跡内西側に浅間B降下軽石層の堆積が有り、東側には埋積がみられなかった。榛名二ツ岳火山灰層 (FA) の堆積は、全体に見ることができないが、厚さ10~20cmの堆積をとらえられた場所がある。浅間C降下軽石層は、ほぼ遺跡全体に分布しており、10~30cmの厚さをもつ。C軽石下には、黑色粘質土層が遺跡西半分に多く堆積している。黑色粘質土層内には、C軽石を含むものもある。黑色粘質土層下には、小円礫混入疑似ローム層の堆積している地点が、遺跡西側の一部と中央部に分布している。遺跡全体の土層で中央部付近は周辺に比して遺構面までが浅く、火山灰、軽石層などの土層堆積を確認できない場所があった。

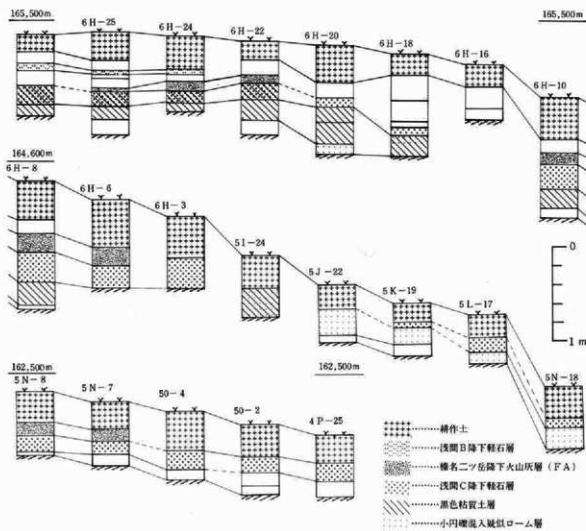


Fig. 4 遺跡内トレンチ土層図

第3章 各 節

第1節 遺構と出土石器

1号住居址 (Fig.5、PL.3-1・2)

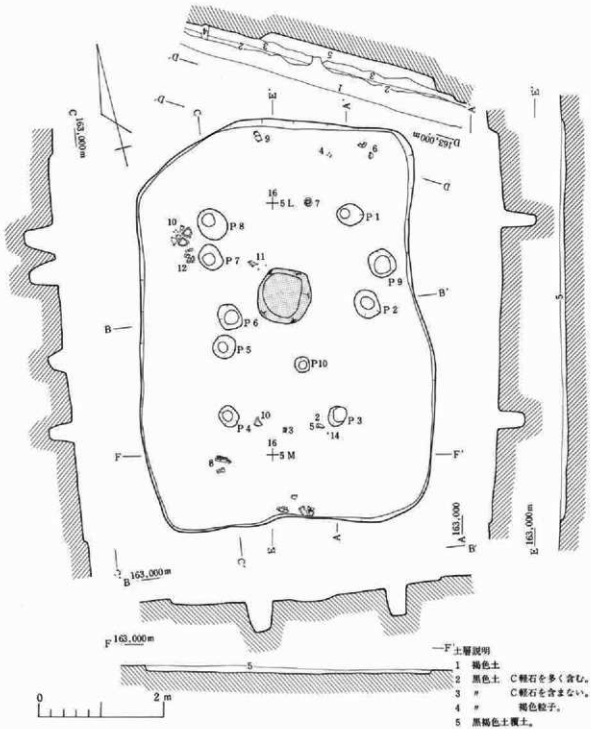


Fig.5 1号住居址実測図

第3章 各節

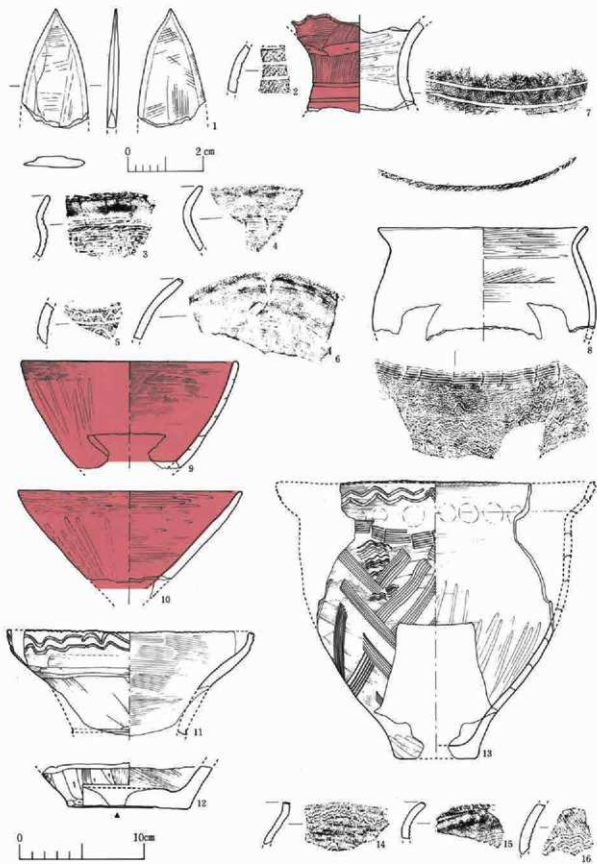


Fig. 6 1号住居址出土遺物

1号住居址は、5K・L・M-15・16区にわたり位置する。

規模は、長軸6.27m、短軸4.70mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は、0.15～0.05mである。

主軸の方位は、N-12°-Eである。床面は、住居址中央に向い僅かに傾斜する。炉址は中央部やや北寄り位置する。炉の規模は、0.9mのほぼ円形を呈し、深さ0.05mである。焼土は僅かに残存。柱穴は10本あり、主柱穴と思われるものは、6本ある。P1は、上端長軸0.44m、短軸0.34mの楕円形であり、下端は、0.15m、深さ0.55mである。P2は、上端長軸0.45m、短軸0.39mの楕円形であり、下端長軸0.23m、短軸0.17m、深さ0.44mである。P3は、上端長軸0.35m、短軸0.3m、下端長軸0.25m、短軸0.2mである。P4は、上端長軸0.33m、短軸0.29m、下端直径0.17m、深さ0.38mである。P5は、上端0.37m、下端0.15mの円形を呈し、深さ0.25mである。P6は上端長軸0.43m、短軸0.35m、下端は0.22mの円形を呈す。深さ0.45mである。P7は、上端長軸0.41m、短軸0.33mの楕円形を呈し、下端は0.2mの円形を呈す。深さ0.45mである。P8は、上端長軸0.53m、短軸0.45m、下端は0.2mであり、深さ0.45mである。P9は上端0.45mの円形を呈し、下端長軸は0.4m、短軸0.35mである。P10は、上端0.24m、下端0.12mの円形を呈す。

出土石器 (Fig.6-1、PL.4-1)

磨製石鏃である。基部は欠損、現状での長さは3.2cm、幅1.8cmである。刃部は両面とも鋭利に磨がれている。刃部には細かい擦痕がみられる。石材は珪質頁岩である。重さ0.015kg。

2号住居址 (Fig.7、PL.5-1・2)

2号住居址は、5M・N-9・10区にわたり位置する。

規模は、長軸は測定できず、短軸は4.3mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は0.1mである。主軸方位は、N-33°-Eである。床面は、平坦であるが、南半分は不明である。柱穴は7本ある。P1は、上端長軸0.6m、短軸0.38m、下端長軸0.44m、短軸0.24mの楕円形を呈し、深さ0.12mである。P2は、上端長軸0.47m、短軸0.33mであり、下端長軸0.32m、短軸0.2m、深さ0.08mである。P3は、上端長軸0.52m、短軸0.42mであり、下端長軸0.33m、短軸0.28m、深さ0.15mである。P4は、上端長軸0.55m、短軸0.32m、下端長軸0.24m、短軸0.16mの楕円形を呈し、深さ0.17mである。P5は、上端長軸0.34m、短軸0.3m、下端は0.19mの楕円形を呈し、深さ0.1mである。P6は、上端長軸0.32m、短軸0.26m、下端長軸0.2m、短軸0.15m、深さ0.12mである。P7は、上端長軸0.37m、短軸0.34m、下端長軸0.20m、短軸0.17m、深さ0.32mである。

出土石器 (Fig.8、PL.7-4)

2号住居址出土石器は1点であり、長さ7.5cm、幅3.9cm、断面三角形の削片石器である。片側に刃部をもつ。石質は頁岩である。重さ0.06kg。

3号住居址 (Fig.10、PL.8-1・2)

3号住居址は、5L・M・N-17・18区にわたり位置する。

規模は、長軸6.8m、短軸5.2mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は、0.28m～0.1mである。主軸方位は、N-6°-Eである。床面は、ほぼ平坦である。中央北よりに炉をもつ。炉の規模は、長軸1.25m、短軸0.98m、深さ0.05mである。はり床は炉の東側に広がりをもつ。柱穴は5本が確認された。P1は、上端長軸0.5m、短軸0.4mの楕円形を呈し、下端は0.08mの円形を呈す。深さ0.3mである。

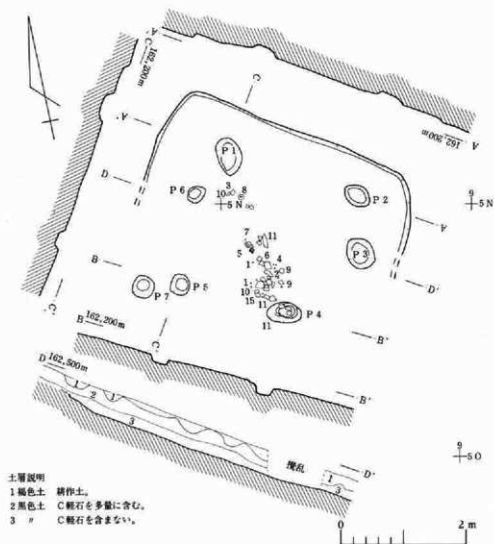


Fig. 7 2号住居址実測図

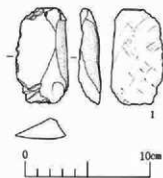


Fig. 8 2号住居址出土遺物

P 2は、上端長軸 0.5 m、短軸0.38mの楕円形を呈し、下端は0.13mの円形である。深さ0.23mである。P 3は、上端長軸0.42m、短軸0.35 m、下端は0.15mの円形を呈し、深さ0.37mである。P 4は、上端は0.47mの円形、下端長軸は、0.27m、短軸0.13m深さ0.35mである。P 5は、上端0.35mの円形を呈し、下端0.22mのはは円形を呈す。深さ0.12mである。

4号住居址 (Fig. 13, PL. 11-1)

4号住居址は、5 K-20・21、5 L-20区にわたり位置する。規模は、長軸 4.5 m、短軸3.58mを測り、隅丸方形を呈す。床面は、ほぼ平坦である。はり床、炉址はない。柱穴は4本が確認された。

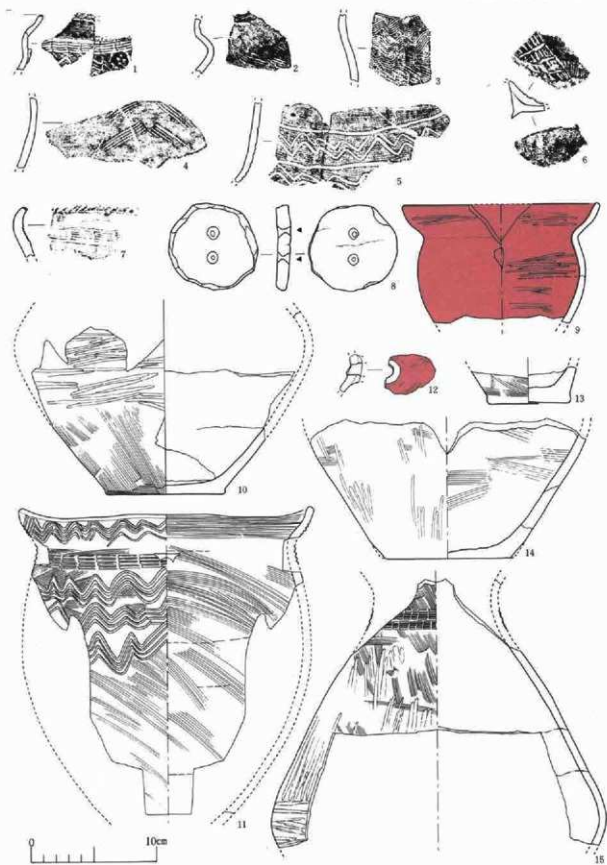


Fig.9 2号住居址出土遺物

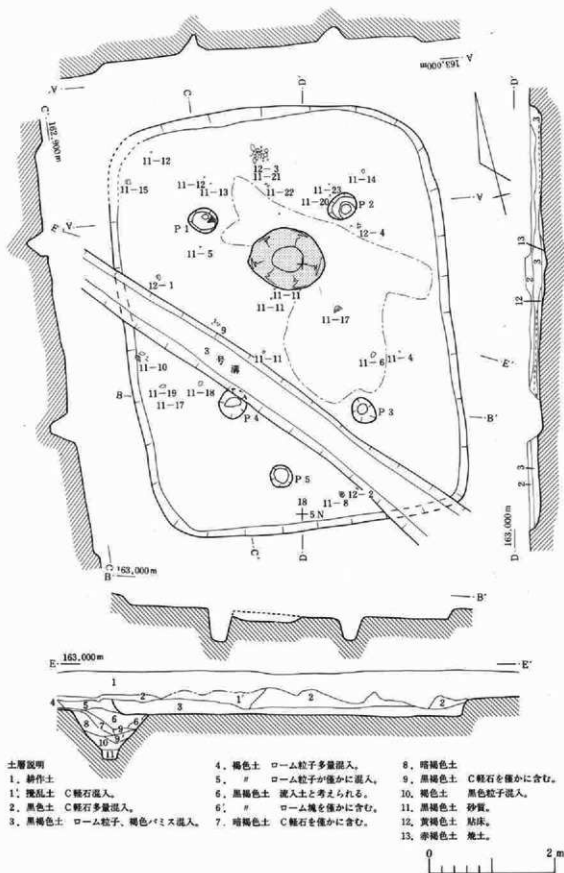


Fig.10 3号住居址実測図

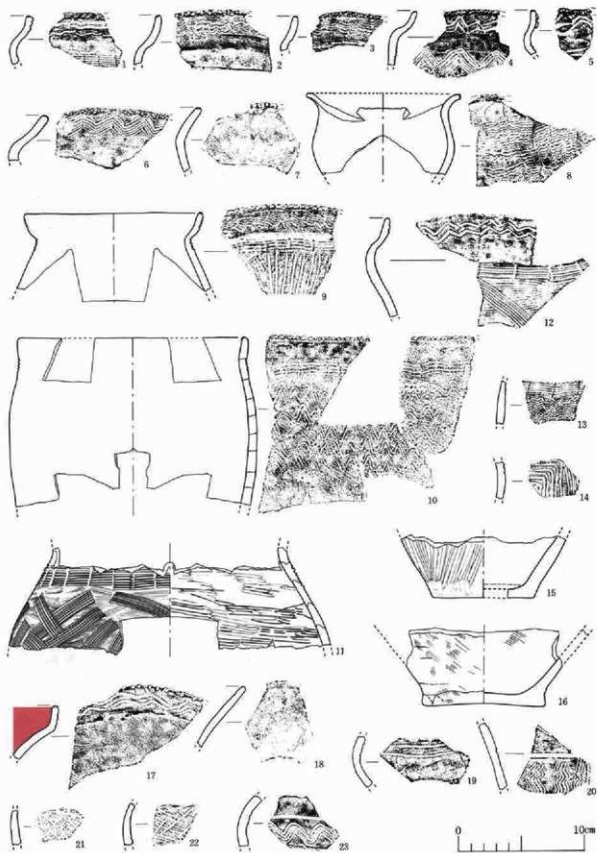


Fig.11 3号住居址出土遺物

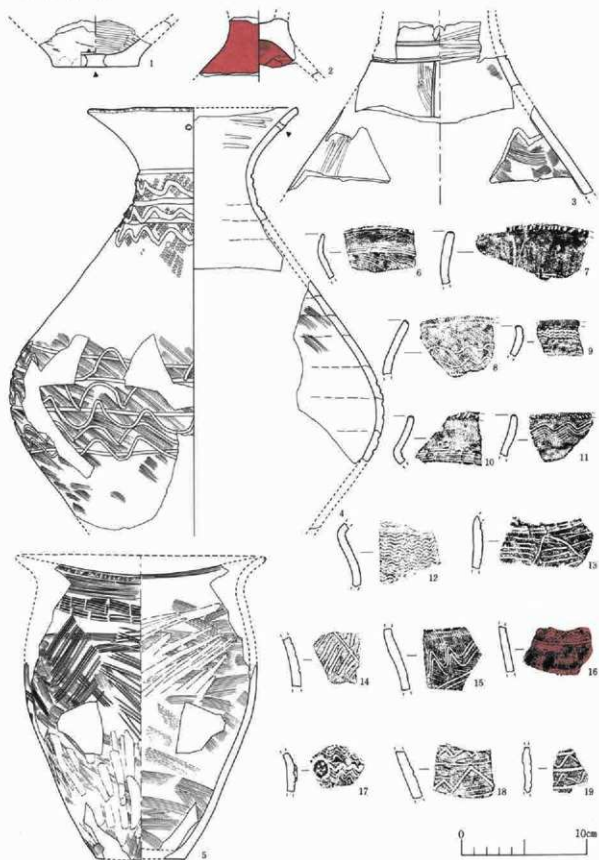


Fig.12 3号住居址出土遺物

P1は、上端長軸0.45m、短軸0.4m、下端は0.28mの円形を呈す。深さ0.32mである。P2は、上端0.4mの円形、下端0.28mの円形を呈し、深さ0.23mである。P3は、上端長軸0.4m、短軸0.33mの楕円形を呈し、下端は長軸0.26m、短軸0.23mである。深さ0.18mである。P4は、長軸0.58m、短軸0.46m、下端長軸0.13m、短軸0.1mを測り、深さ0.25mである。出土遺物は1点も検出しなかった。当住居址は、3号溝によって切られている。

5号住居址 (Fig.14, PL.11-2, 12-1)

5号住居址は、5I・J-25、6I・J-1区にわたり位置する。

規模は、長軸5.5m、短軸4.2mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は、0.2m～0.05mである。主軸方位は、N-25°-Eである。床面の状況は、ほぼ平坦であり、中央部に炉址が検出された。炉の規模は、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.05mを測り、鍋底状を呈す。炉の床面は、焼土が僅かに残り、かたい。炉の掘り方部分に、僅かに焼けた自然石を1個検出した。炉の構築につかわれたものと考えら

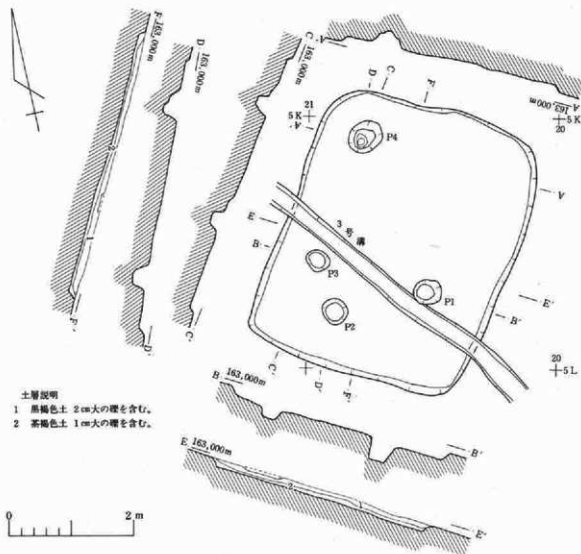


Fig.13 4号住居址実測図

第3章 各 節

れる。柱穴は、4本検出された。P1は、上端0.42mの円形を呈し、下端長軸0.28m、短軸0.15m、深さ0.4mである。P2は、上端0.4m、下端0.25mの円形を呈し、深さ0.25mである。P3は、上端長軸0.53m、短軸0.38m、下端長軸0.2m、短軸0.13mの楕円形を呈し、深さ0.2mである。P4は、上端0.41m、下端0.3mの円形を呈し、深さ0.25mである。

出土石器 (Fig.15-7, PL.12-6)

打製石斧は刃部を欠損、現状での長さ9.5cm、幅4.5cmを測る。石材は頁岩である。重さ0.12kg。

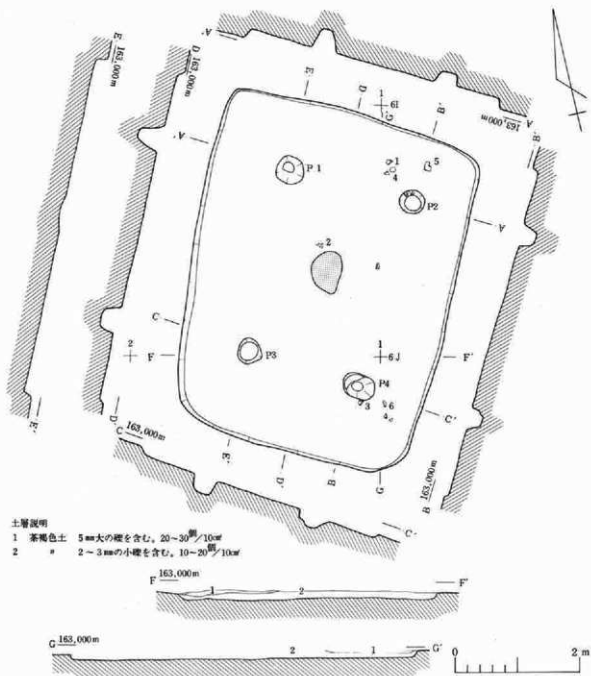


Fig.14 5号住居址実測図

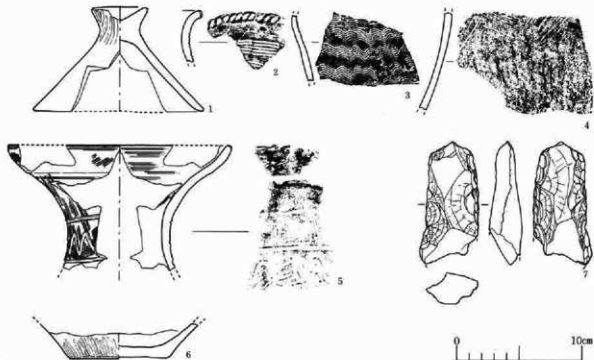


Fig.15 5号住居址出土遺物

6号住居址 (Fig.16, PL.13-1)

6号住居址は、5M-19・20、5N-19・20にわたり位置している。当住居址は、11号住居址によって西側を切られており、東側は2号溝と重複しており、新旧関係は不明である。また中央部分を、8号溝によって切られている。

規模は、はっきりと、とら得られないが、南北の長さ、推定7.15mである。壁高は、約0.15mである。主軸方位は、 $N-40^{\circ}-W$ である。床面の状況は、一部分しか確認し得なかった。柱穴は6本が確認された。P1は、上端長軸0.42m、短軸0.4m、下端長軸0.24m、短軸0.19mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mである。P2は、上端長軸0.42m、短軸0.38m、下端長軸0.22mのほぼ円形を呈し、深さ0.34mである。P3は、上端長軸0.45m、短軸0.4m、下端長軸0.15m、短軸0.09m、深さ0.2mである。P4は、上端長軸0.63m、短軸0.57m、下端長軸0.32m、短軸0.25m、深さ0.22mである。P5は、上端長軸0.43m、短軸0.35m、下端長軸0.22m、短軸0.2m、深さ0.13mである。P6は、上端長軸0.39m、短軸0.32m、下端長軸0.15m、短軸0.13m、深さ0.18mである。P1、P2、P3、P4は、主柱穴の可能性があると考えられるが、他の住居址の主柱穴の深さと比較すると、当住居址の柱穴は、若干浅い。P5、P6は、柱穴列から位置的にずれが生じており、深さも浅い。これらの状況から主柱穴とは考えられない。

壁の確認は、北側でとらえられたが、東・西側は、それぞれ切られており、明確でない。南側の壁は、僅かに土の色の違いで推定できる程度であり、しっかりとした状況でとら得られなかった。床面の状況も、はり床等は未検出であり、不安定な床面である。

南側壁は、遺物の出土状況からみて、出土遺物番号No2・4・7・10が、最南端で出土しており、住居址内出土北側の床面のもと、海拔は、ほぼ同様であるため推定できる。

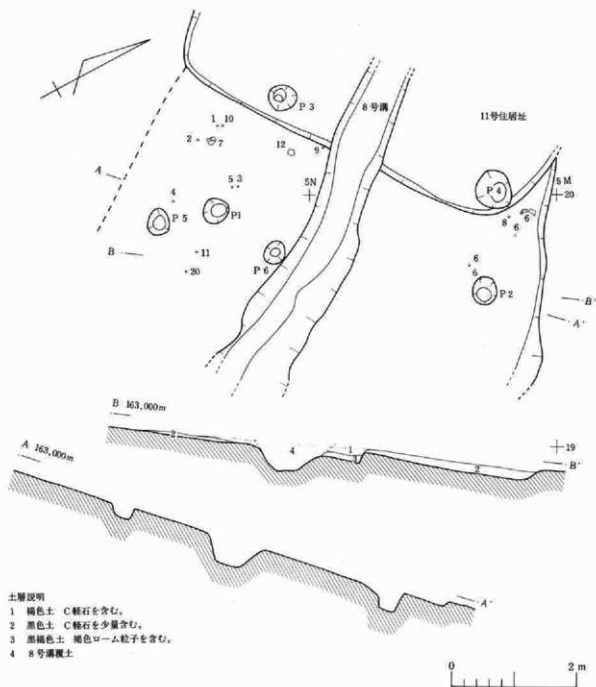


Fig.16 6号住居址実測図

7号住居址 (Fig.18, PL.14-5、15-1)

7号住居址は、6H-18・19、6I-17・18・19、6J-18区にわたり位置している。西側は一段高い地形を呈し、9号住居址が位置し、東側には、わずかにさがって13号住居址が位置している。

規模は、長軸5.3m、短軸4.55mを測り、隅丸方形を呈している。壁高は、約0.1mである。主軸方位は、N-35°-Wである。床面は、地山と考えられる土層が砂利層であり、きわめて不安定な状況で

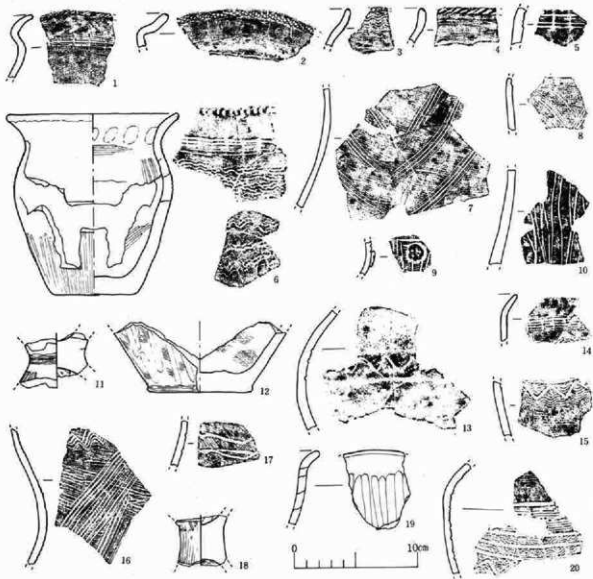


Fig.17 6号住居址出土遺物

ある。炉は2つ検出され、ほぼ中央に位置する。西側の炉が最初に造られ、後に東側に移築された様相がとらえられた。西側の炉は、長軸0.7m、短軸0.45m、深さ0.1mである。東側の炉の規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.05mである。焼土は東側の炉のみ検出された。柱穴は、6本確認することができた。P1は、上端長軸0.4m、短軸0.35m、下端は0.2mの円形を呈す。深さ0.28mである。P2は、上端長軸0.35m、短軸0.3m、下端は0.17mの円形を呈す。深さ0.38mである。P3は、上端長軸0.4m、短軸0.35m、下端は0.15mの円形を呈す。深さ0.25mである。P4は、P3に切られており、上端は0.3m、下端は0.2mであり、深さ0.1mのみ確認できた。P5は、上端長軸0.25m、短軸0.23m、下端長軸0.16m、短軸0.15m、深さ0.28mである。P6は、上端0.3m、下端0.23mの円形を呈す。西側の炉は、焼土が認められず、地山の円礫が多くみられ、焼土はみあたらなかった。東側の炉は、僅かに、ローム層が残っており、焼けている様相が検出された。

第3章 各 節

P4は、P3の掘り方の可能性もある。出土遺物は、まばらに検出された。

出土石器 (Fig.19-9、PL.15-3)

出土石器は、南東のコーナーより西へ約1mの床面壁隅から、壁にもたれる状況で出土した。大きさは、長さ27.0cm、幅10.3cm、厚さ8.2cmの扁平な大きな石である。この石の周辺からは、土器片が数点出土しているが、床面に密着しているものは、数が少ない。床面より僅かに浮いた状況で出土した。

石材は安山岩である。重さ4.9kg。

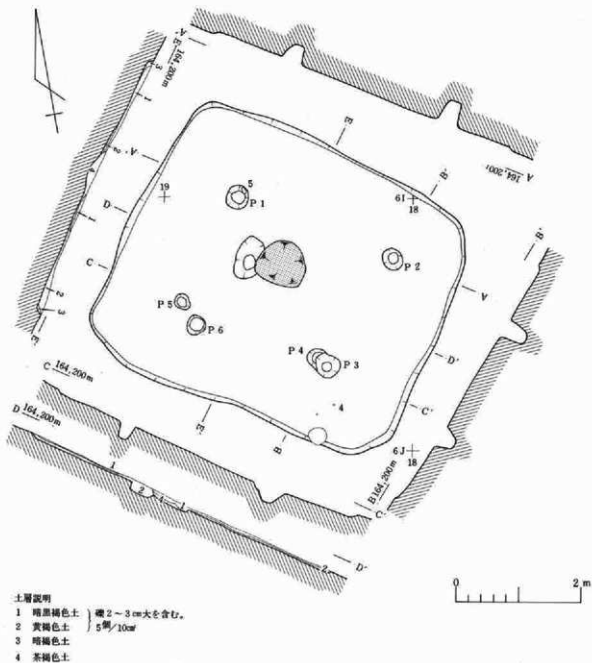


Fig.18 7号住居址実測図

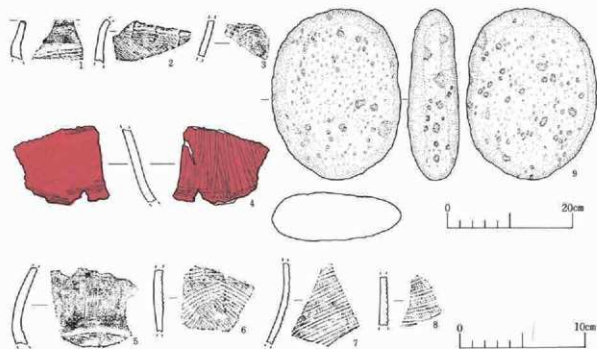


Fig.19 7号住居址出土遺物

8号住居址 (Fig.20・21, PL.1・2)

8号住居址は、6G-7・8、6H-7・8区にわたり位置している。西側から東に向い僅かに傾斜している。西には、6号溝、東には、16号住居址がある。

規模は、長軸5.53m、短軸4.08mを測り、隅丸方形を呈している。壁高は、約0.1mである。床面の状況は、僅かではあるが凸凹がある。壁溝は、東・北・西側に見られ、幅は0.05m-0.2mを測り、床面から、約0.08mの深さである。柱穴は、6本検出された。P1は、上端長軸0.42m、短軸0.34m、下端0.2mの円形を呈し、深さ0.53mである。P2は、上端長軸0.55m、短軸0.34m、下端長軸0.15m、短軸0.12m、深さ0.43mである。P3は、上端0.3m、下端0.15mの円形を呈しており、深さ0.4mである。P4は、上端長軸0.62m、短軸0.55m、下端長軸0.2m、短軸0.1m、深さ0.43mである。P5は、上端長軸0.38m、短軸0.3m、下端長軸0.11m、短軸0.09mである。P5は、上端0.3m、下端長軸0.22m、深さ0.13mであり、南壁やや西寄りに位置している。P6は、住居址外に認められる柱穴であり、上端長軸0.43m、短軸0.34m、下端長軸0.12m、短軸0.1mの楕円形を呈し、深さ0.1mである。P7は、住居址外南西部コーナー、約0.6mに位置する。上端長軸0.4m、短軸0.36m、下端長軸0.18m、短軸0.12mの楕円形を呈し、深さ0.5mを測る。

当住居址は、住居址外で多くの炭化材を検出した。炭化材の特徴は、住居址内では、細かな炭化材が僅かにみられ、ほとんどが住居址外で検出された。炭化材の方向は、住居址中央に向い焼け落ちた状況を呈している。炭化材は丸みをもつことから、自然木を使用していたものと考えられる。

住居址外、遺構確認面で炭化材の他に、土器が多数出土している。壁に近接する部分からの出土遺物から、およそ1mほど離れた場所から、木炭と伴に出土した遺物もみられた。炭化材は、東と北に

第3章 各 節

より多く検出され、南・西部では僅かに検出された。炭化材の検出が確認された範囲は、北側で住居址の壁から、およそ1.5m、東は、約0.8m、南は、約2.6m、西は、約1.2mであった。住居址内での出土遺物は、北側壁の中央部寄りから多くの遺物を検出した。

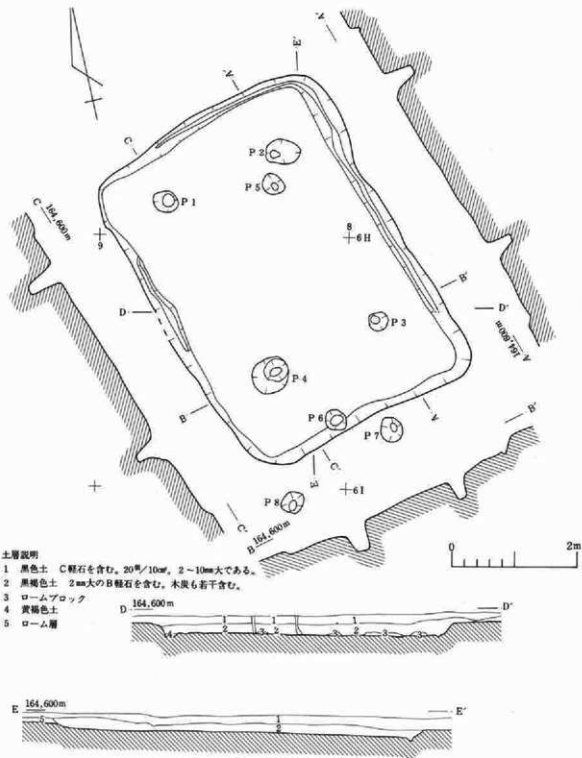


Fig.20 8号住居址実測図

出土石器 (Fig.23-16~25、24-1~3、PL.19-1~7、20-1~6)

16. (Fig.23-16、PL.19-1)

石斧、長さ12.2cm、幅3.5cm、厚さ1.7cmを測る。片面に自然礫面を残し、3面に刃部加工を行なっている。後部は摩耗が激しく、刃部も僅かに摩耗している。石材は頁岩である。重さ0.07kg。

17. (Fig.23-17、PL.19-2)

石匕、一部を欠損。長さ8.0cm、現存する幅は4.1cm、厚さ1.3cmを測る。表面は自然面を残す。刃部は一方から剥離している。石材は頁岩である。重さ0.043kg。

18. (Fig.23-18、PL.19-3)

砥石、端部を欠損、現存する長さ4.6cm、幅2.3cm、厚さ1.1cmを測る。両面が長軸方向にすられている。石材は砂岩である。重さ0.013kg。

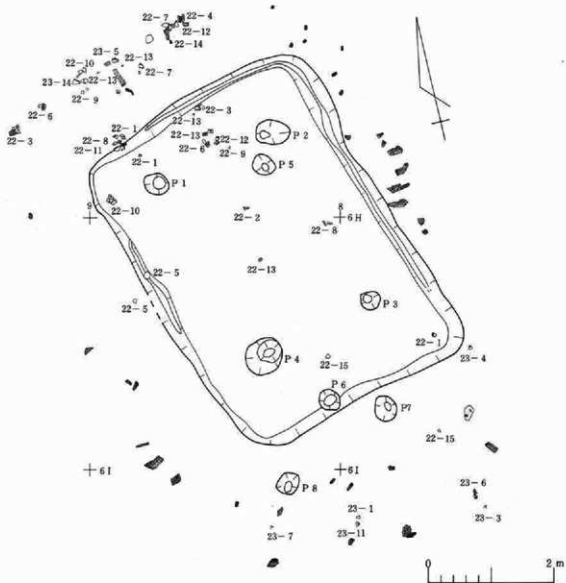


Fig.21 8号住居址遺物出土状況

第3章 各 節

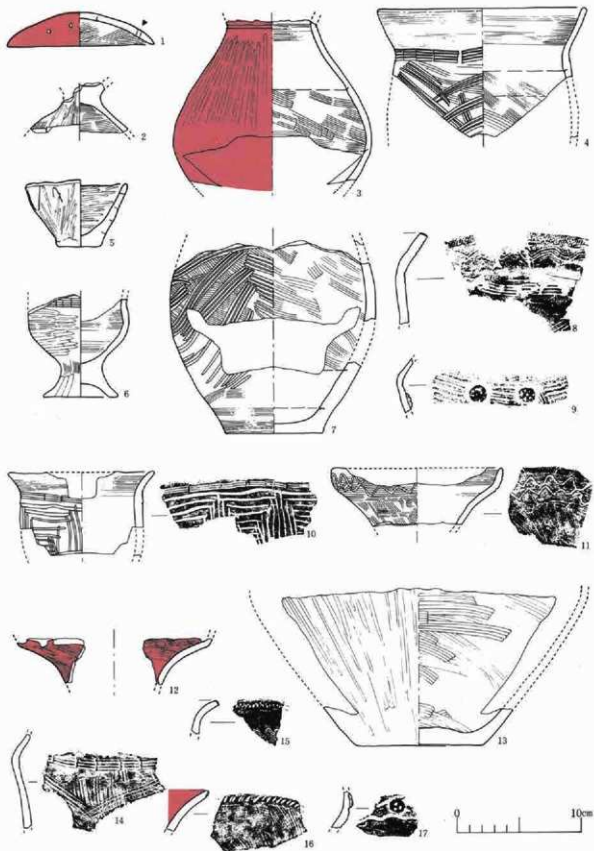


Fig.22 8号住居址出土遺物

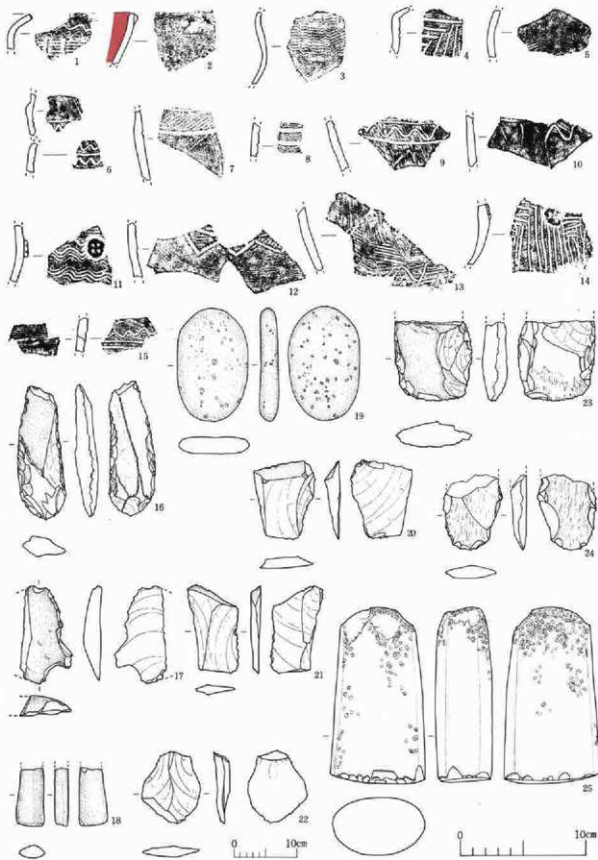


Fig.23 8号住居址出土遺物

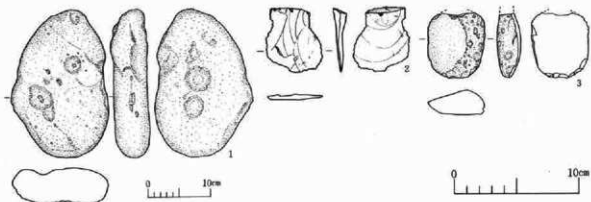


Fig.24 8号住居址出土遺物

19. (Fig.23-19, PL.19-4)

自然石、長さ9.0cm、幅5.9cm、厚さ1.3cmの扁平な自然石である。表面中央に僅かに凹部分があるが、使用痕であるかは不明である。石材は安山岩である。重さ0.13kg。

20. (Fig.23-20, PL.19-5)

削器、長さ6.0cm、幅4.8cm、厚さ1.1cmを測る。側面の一面で自然石を残す。下端部は摩滅している。石材は頁岩である。重さ0.032kg。

21. (Fig.23-21, PL.19-6)

削器、長さ7.1cm、幅3.8cm、厚さ0.8cmを測る。一側面で自然面を残す。一辺に刃部がみられる。石材は頁岩である。重さ0.02kg。

22. (Fig.23-22, PL.19-7)

剥片石器、長さ5.9cm、幅4.6cm、厚さ1.1cmを測る。石材は安山岩である。重さ0.025kg。

23. (Fig.23-23, PL.20-1)

石斧、基部を欠損、現存する長さ6.2cm、幅6.2cm、厚さ1.9cmを測る。表面は自然面を残し、裏面は摩耗がはげしい。刃部は両面から剥離している。石材は安山岩である。重さ0.12kg。

24. (Fig.23-24, PL.20-2)

石斧、基部を欠損。現存する長さ6.0cm、幅4.7cm、厚さ1.2cmを測る。表裏面とも摩耗がはげしい。刃部は両面から剥離されている。石材は珪質頁岩である。重さ0.037kg。

25. (Fig.23-25, PL.20-3)

石槌、長さ14.2cm、幅7.7cm、厚さ4.7cmを測る。基部は打撃痕がある。側面は僅かにすりへらしている。下端は丸みをもち滑らかである。石材は輝緑岩である。重さ0.92kg。

1. (Fig.24-1, PL.20-4)

凹石、長さ23.5cm、幅15.3cm、厚さ5.5cmを測る。表裏面とも2個の凹部分をもつ。凹部の径は、3~4cm、深さ1cmである。石材は輝緑岩である。重さ2.19kg。

2. (Fig.24-2, PL.20-5)

剥片石器、長さ5.0cm、幅4.5cm、厚さ1cmを測る。石材は輝緑岩である。重さ0.07kg。

3. (Fig.24-3, PL.20-6)

石斧、基部欠損、現存長さ5.0cm、幅4.6cm、厚さ2.0cm、刃部は片面剥離。頁岩。重さ0.062kg。

9号住居址 (Fig. 25, PL. 21-1)

9号住居址は、6H・I・J-20・21、6I・J-22区にわたり位置している。西側には、2号溝(環濠)が位置している。

規模は、南北に長い形態をとるが、南壁を確認することはできなかった。短軸は、4.72mの隅丸方形になるものと考えられる。壁高は0.1mである。主軸方位は、 $N-12^{\circ}-E$ である。柱穴は、4本検出できたが、主柱穴になるかは不明である。P1は、上端0.46m、下端長軸0.32m、短軸0.29mでほぼ円形を呈し、深さ0.22mである。P2は、上端長軸0.42m、短軸0.38m、下端長軸0.2m、短軸0.15mのはほぼ円形を呈し、深さ0.17mである。P3は、上端長軸0.52m、短軸0.3m、下端長軸0.34m、短軸0.17mの楕円形を呈し、深さ0.25mである。P4は、上端長軸0.53m、短軸0.4m、下端長軸0.3m、短軸0.2m、深さ0.19mである。南側については、精査はしたものの、住居址の壁、および柱穴の確認はできなかった。

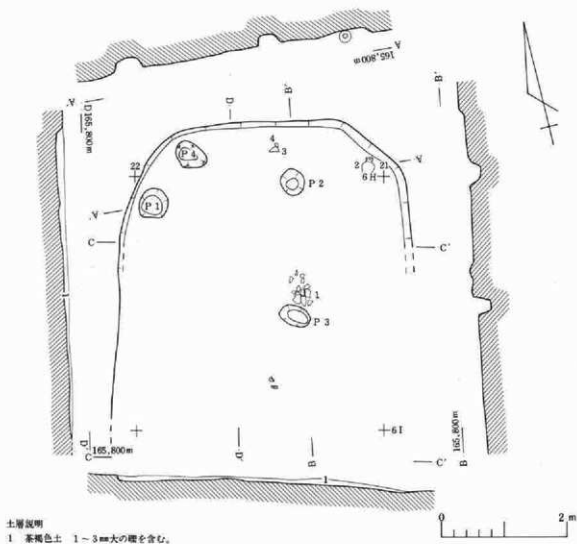


Fig.25 9号住居址実測図

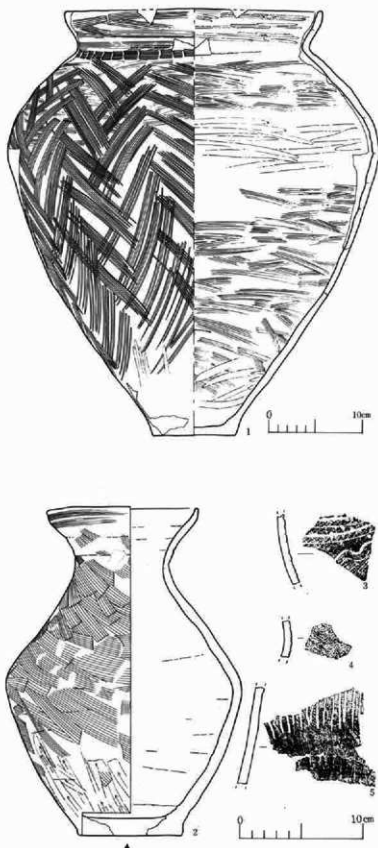


Fig.26 9号住居址出土遺物

10号住居址 (Fig. 27・28・29, PL. 22-1・2, 23-1・2)

10号住居址は、5 J-23・24、5 K-22・23・24、5 L-22・23・24区にわたり位置している。当住居址は、北に14号住居址が接近している。

規模は、長軸7.28m、短軸5.78mを測り、隅丸方形を呈している。壁高は、0.3-0.5mである。主軸方位は、N-12°-Wである。床面の状況は、中央北側に炉か位置する。床面は、ほぼ平坦である。炉は、長軸1.53m、短軸0.83m、深さ0.15mであり、残土が僅かに残る。柱穴は、8本検出された。P 1は貯蔵穴の可能性があり壁に接近する。

P 1は、上端長軸0.55m、短軸0.3m、下端は0.32mの円形を呈し、深さ0.3mである。P 2は上端長軸0.53m、短軸0.3m、下端は0.15mの円形を呈し、深さ0.5mである。P 3は、上端長軸0.32m、短軸0.26m、下端長軸0.2m、短軸0.17mの円形を呈し、深さ0.33mである。P 4は、上端長軸0.46m、短軸0.35m、下端長軸0.2m、短軸0.14mのほぼ円形を呈し、深さ0.5mである。P 5は、上端長軸0.7m、短軸0.56m、下端は0.35mの円形を呈し、深さ0.37mである。P 6は上端長軸0.45m、短軸0.4m、下端は0.17mの円形を呈し、深さ0.4mである。P 7は、上端長軸0.5m、短軸0.4m、下端0.13mのほぼ円形を呈し、深さ0.43mである。P 8は、上端長軸0.37m、短軸0.31m、下端長軸0.2

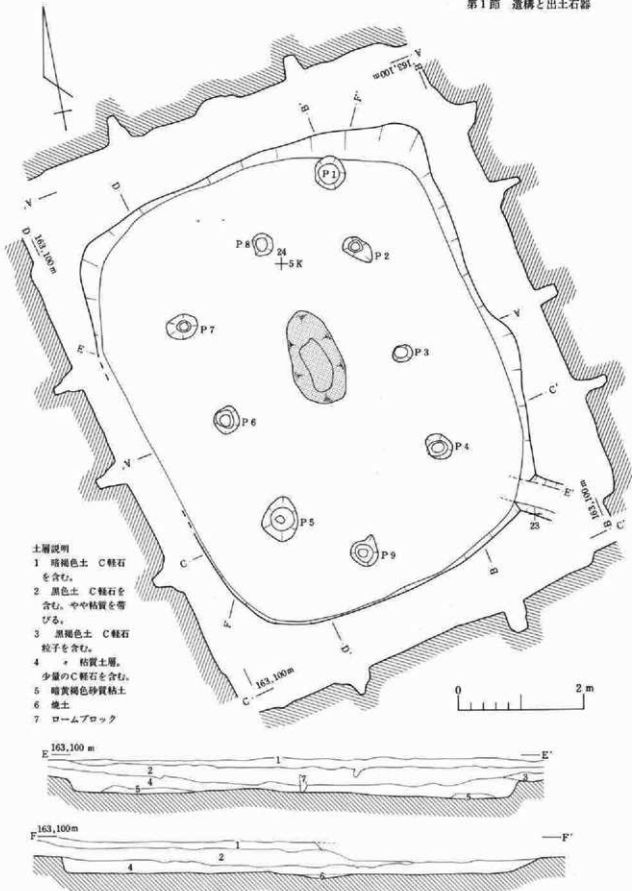


Fig.27 10号住居址実測図

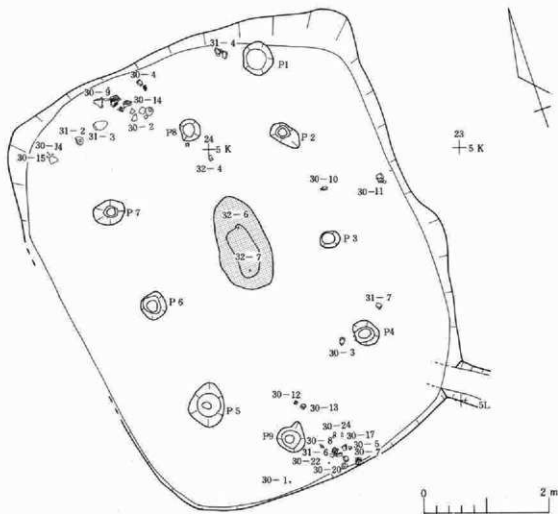


Fig.28 10号住居址遺物出土状況

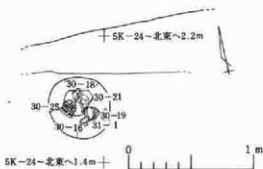


Fig.29 10号住居址貯蔵穴(P1)内遺物出土状況

m、短軸0.18mのほぼ円形を呈し、深さ0.17mである。P9は、上端0.35m、下端0.13mのほぼ円形を呈し、深さ0.27mである。P2、P3、P4、P5、P6、P7は主柱穴と思われる、東西がほぼ対になる。P8、P9はほぼ南北で対になり、主柱穴と思われるP2～P7よりは、僅かに浅い。P1の貯蔵穴は、床面が斜めになっており、内部から土器がつまって出土した。

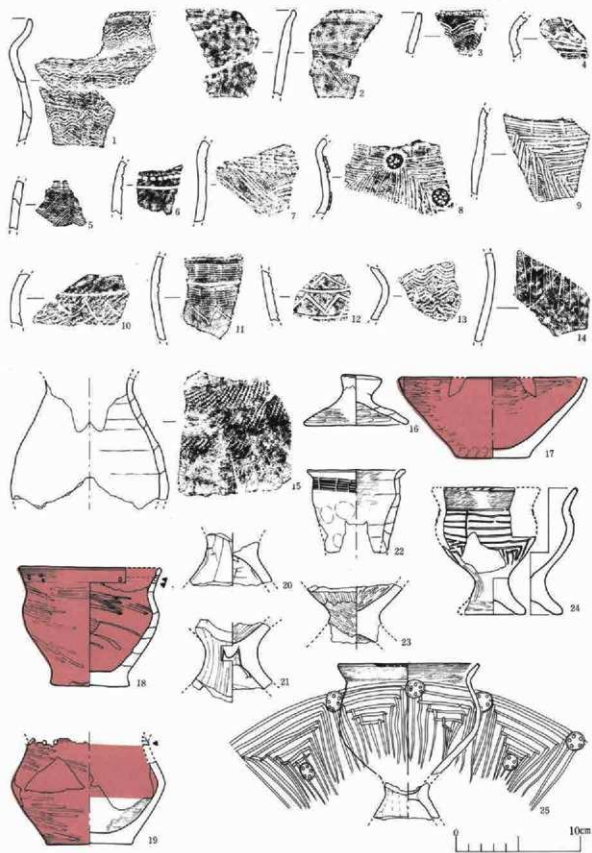


Fig.30 10号住居址出土遺物

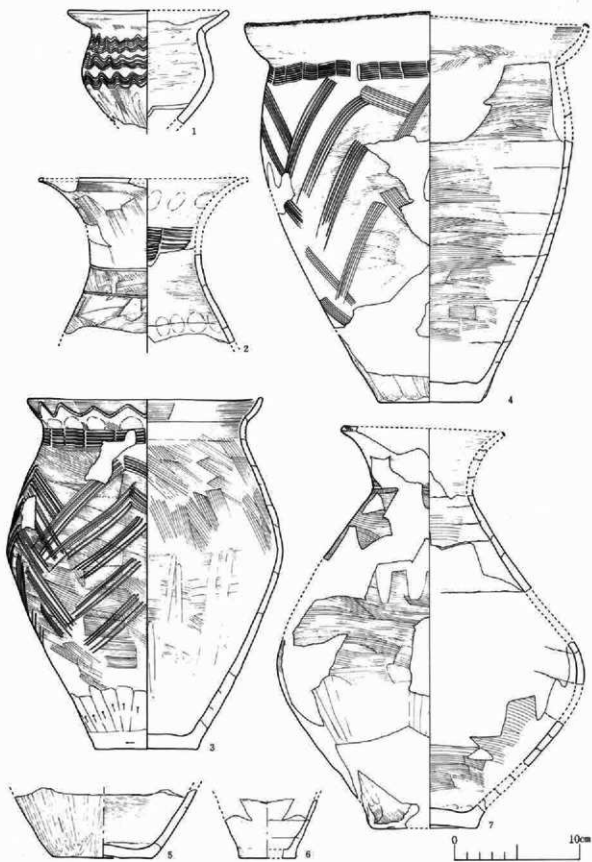


Fig. 31 10号住居址出土遺物

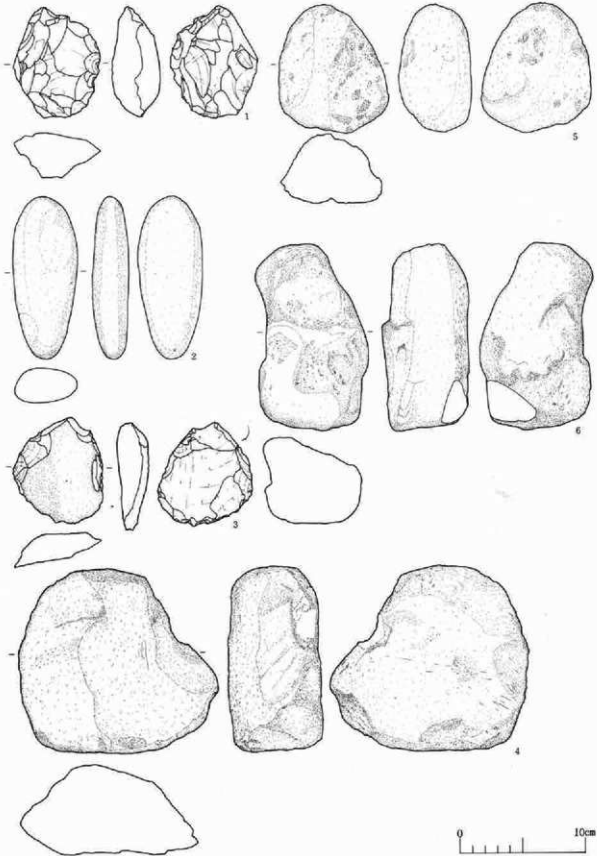


Fig.32 10号住居址出土遺物

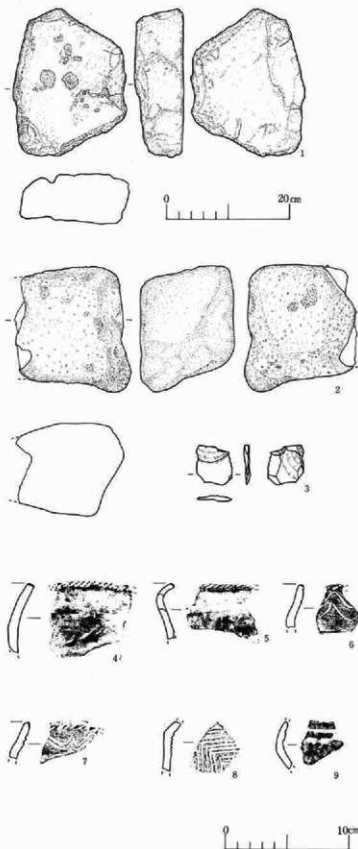


Fig.33 10号住居址出土遺物

出土石器(Fig. 32-1・2・3
・4・5・6、PL. 27-1・2・
3・4・5・6、Fig.33-1・2
・3、PL. 27-7、28-1・2)

礫器(Fig.32-1、PL.27-1)
床面出土、長さ8.9cm、幅6.9cm、
厚さ3.8cmである。両面とも剥離
が行なわれている。石材は頁岩で
ある。重さ0.215kg。

自然石(Fig.32-2、PL.27-2)
床面出土、長さ12.9cm、幅5.3cm、
厚さ3cmである。使用痕は不明。
安山岩。重さ0.3kg。

削器(Fig.32-3、PL.27-3)
床面出土、長さ8.3cm、幅7.3cm、
厚さ2.8cm。片面は自然面を残し、
刃部は3面に認められる。石材は
頁岩。重さ0.16kg。

擦石(Fig.32-4、PL.27-4)
床面出土

長さ14.6cm、幅15.7cmであり一
部分を欠損する。表裏両面に僅か
に擦痕がみられる。石材は安山岩
である。重さ15.5kg。

自然石(Fig.32-5、PL.27-5)
床面出土

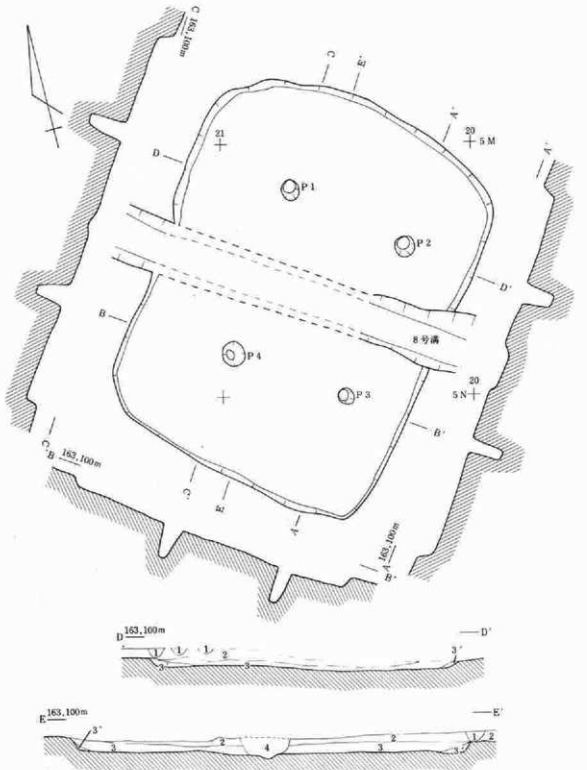
長さ9.9cm、幅8.5cm、厚さ5.8
cmである。所謂軽石、石英安山岩
質である。重さ0.16kg。

自然石(Fig.32-6、PL.27-6)
床面出土

長さ14.9cm、幅8.7cm、厚さ6.7
cmである。石材は鉄質珪質岩石で
ある。重さ1.3kg。

凹石(Fig.33-1、PL.27-7)
床面出土

長さ23.5cm、幅18.1cm、厚さ8cm
の凹石である。片面に幅約3cmの



土層説明

- 1 褐色土 礫作土。C 軽石を含む。
- 2 黒色土 C 軽石少量。2-3mmの褐色パミスを含む。
- 3 黒褐色土 C 軽石を含みます。
褐色ローム粒子を少量含む。
- 3' " 3層より褐色ローム粒子を多く含む。
- 4 8号溝覆土



Fig.34 11号住居址実測図

第3章 各 節

円形の穴2個を穿っており、近接部分に小穴が3ヶ所に見られる。石材は安山岩である。重さ4.38kg。

すり石 (Fig.33-2、PL.28-1) 床面出土

長さ10cm、幅は現存で9.2cm、厚さ7.7cm、大きく欠損している。僅かであるが面をつくっているような様相もあるが、すり石かどうか不明確である。石材は安山岩である。重さ1.06kg。

剥片石器 (Fig.33-3、PL.28-2)

長さ約3cm、幅2.7cm、厚さ0.2cmである。僅かに刃部をつけている。石材は珪質安山岩である。重さ0.013kg。

11号住居址 (Fig.34、35、PL.28-5、29-1)

11号住居址は、5 L-20・21、5 M-19・20・21、5 N-20・21区にわたり位置している。北に4号住居址が近接し、南東へと地形は下がる。当住居址は、6号住居址を切って構築されている。また中央を8号溝によって東西に切られている。

規模は、長軸6.32m、短軸4.65mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は、0.2mである。主軸方位はN-37°-Eである。床面の状況は、ほぼ平坦であり、中央部分を8号溝で切られているため、炉址等

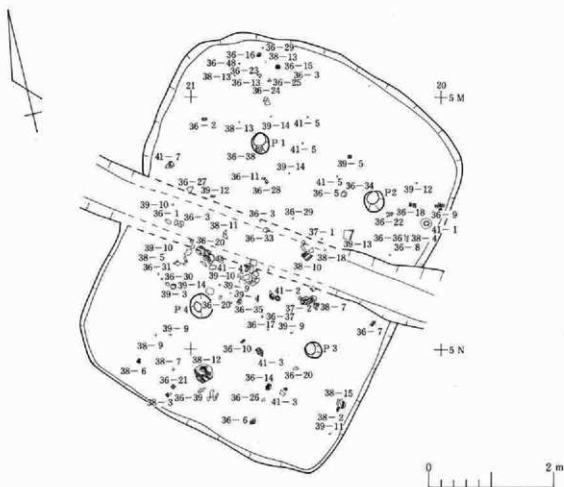


Fig.35 11号住居址遺物出土状況

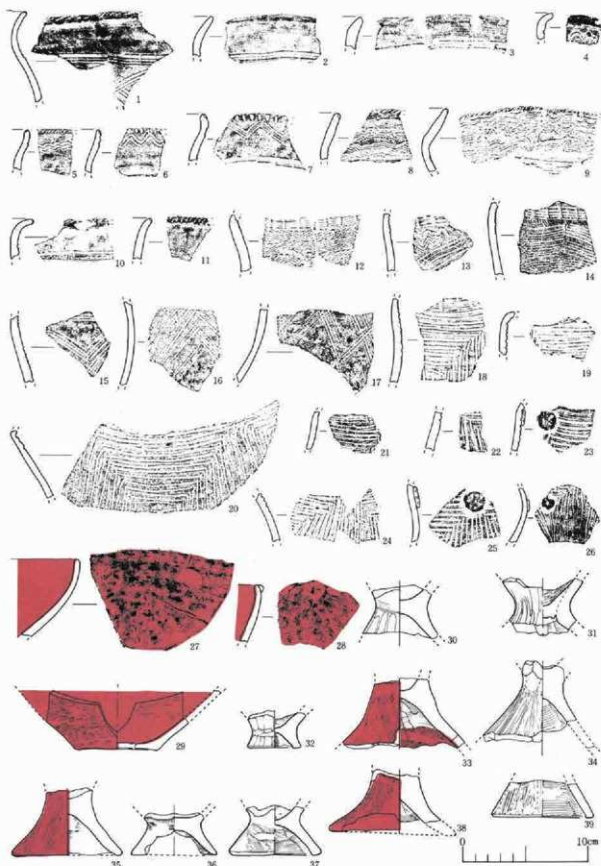


Fig.36 11号住居址出土遺物

第3章 各 節

の検出はできず、有無は不明である。柱穴は4本検出された。P1は、上端長軸0.34m、短軸0.29m、下端0.2mの円形を呈し、深さ0.56mである。P2は、上端0.32m、下端長軸0.2mの円形を呈し、深さ0.48mである。P3は、上端0.27m、下端長軸0.19m、短軸0.15m、深さ0.53mである。P4は、上端長軸0.4m、短軸0.34m、下端長軸0.17m、短軸0.12m、深さ0.52mである。柱穴は、ほぼ対になっており、規模はかなり類似している。

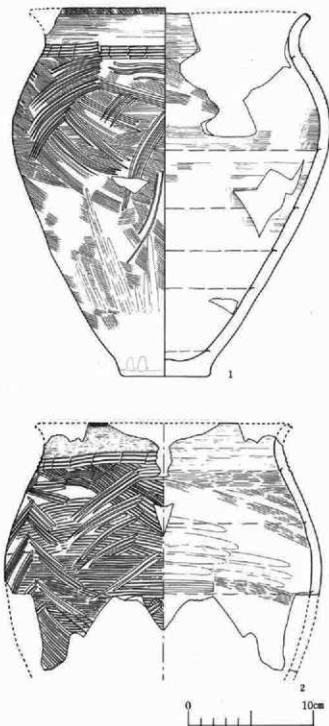


Fig.37 11号住居址出土遺物

遺物出土状況は、床面全体にわたり出土している。とくに中央と南部分に多くを出土する。8号溝に切られた場所は、切られた時点で8号溝内に遺物が落ち込んだ状況を呈していた。

出土石器 (Fig.39-1、PL.33-3) 床面出土

自然石であり、長さ19.2cm、幅14.2cm、厚さ8cmの安山岩である。擦痕は認められない。重さ3.1kg。

12号住居址 (Fig. 42、PL. 36-5、37-1・2)

12号住居址は、6F-12、6G-11・12・13、6H-11・12区にわたり位置している。地形は、北西から南東に向い僅かに下る。西側に5mはなれて13号住居址が位置し、東に3mはなれて6号溝が位置している。

規模は、長軸6.16m、短軸4.7mを測り、隅丸方形を呈している。壁高は、0.22mである。主軸方位は、N-11°-Wである。床面は、ほぼ平坦であり、中央やや北寄りに炉が検出された。中央西よりに焼土が見られ、炉と焼土およびP4の中間に3ヶ所白色粘土のかたまりが検出できた。炉の規模は、長軸0.73m、幅0.43m、深さ0.05mであり、わずかに落ちている。焼土は僅かに見られる。柱穴は4本検出された。P1は、上端長軸0.62m、短軸0.45m、下端0.13

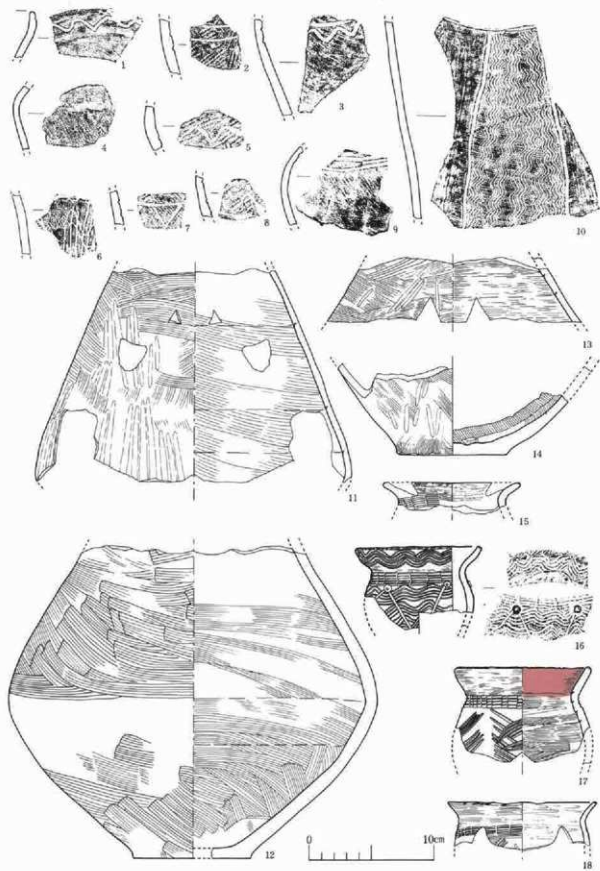


Fig.38 11号住居址出土遺物

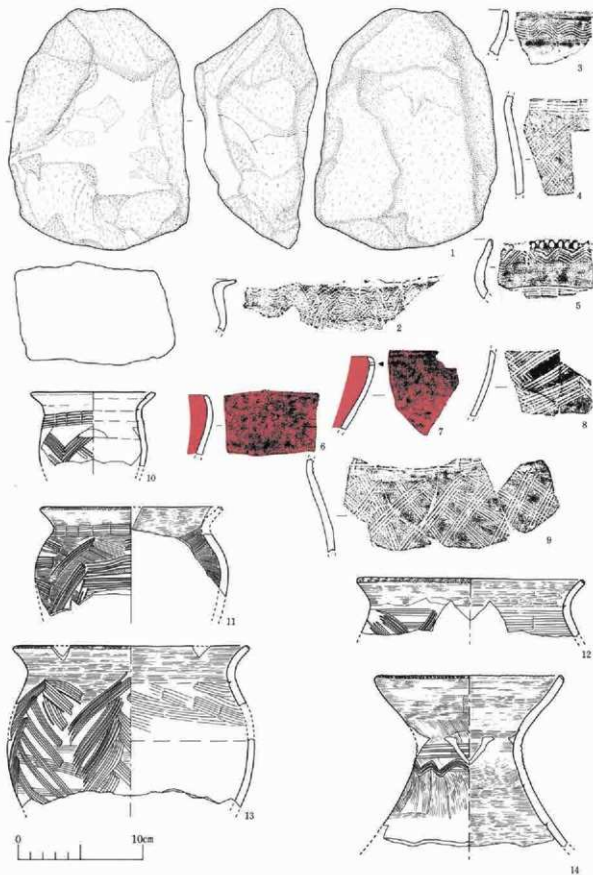


Fig.39 11号住居址出土遺物

第1節 遺構と出土石器

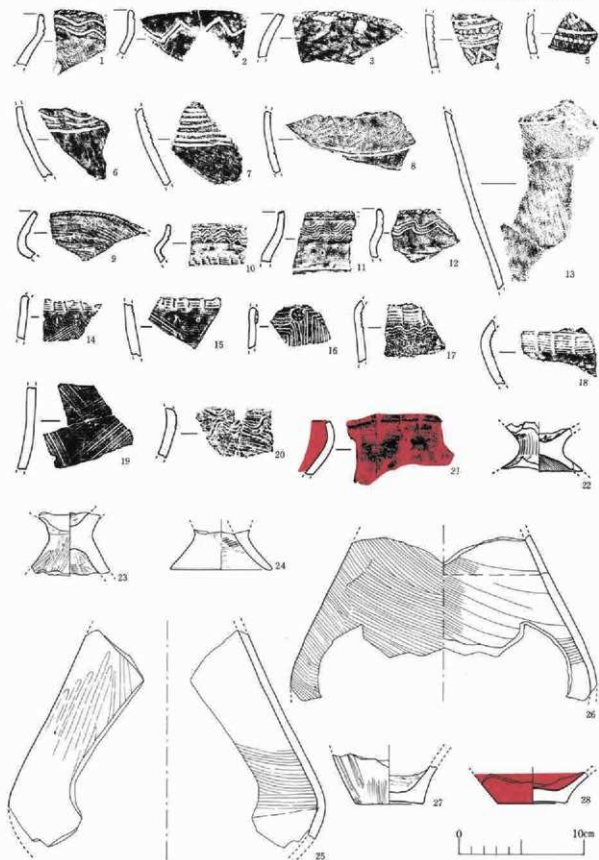


Fig.40 11号住居址出土遺物

第3章 各 節

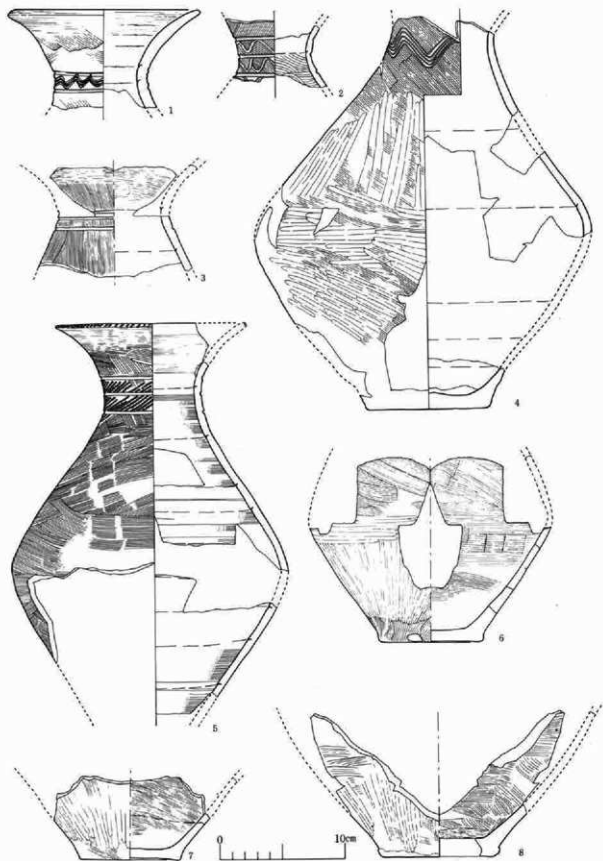


Fig.41 11号住居址出土遺物

m、深さ0.53mである。P2は、上端長軸0.49m、短軸0.45m、下端長軸0.2m、短軸0.13m、深さ0.29mである。P3は、上端長軸0.6m、短軸0.4m、下端長軸0.2m、短軸0.15m、深さ0.52mである。P4は、上端長軸0.42m、短軸0.37m、下端0.19mの円形を呈し、深さ0.49mである。

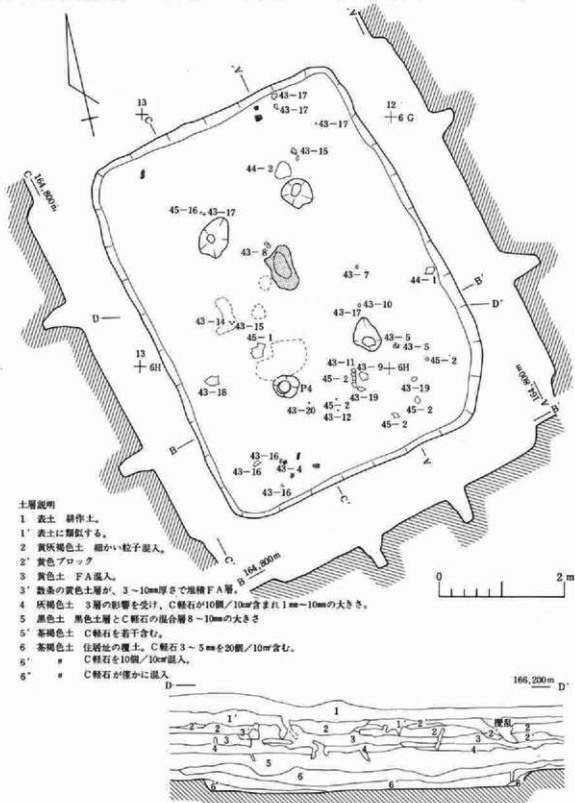


Fig. 42 12号住居址実測図

第3章 各 節

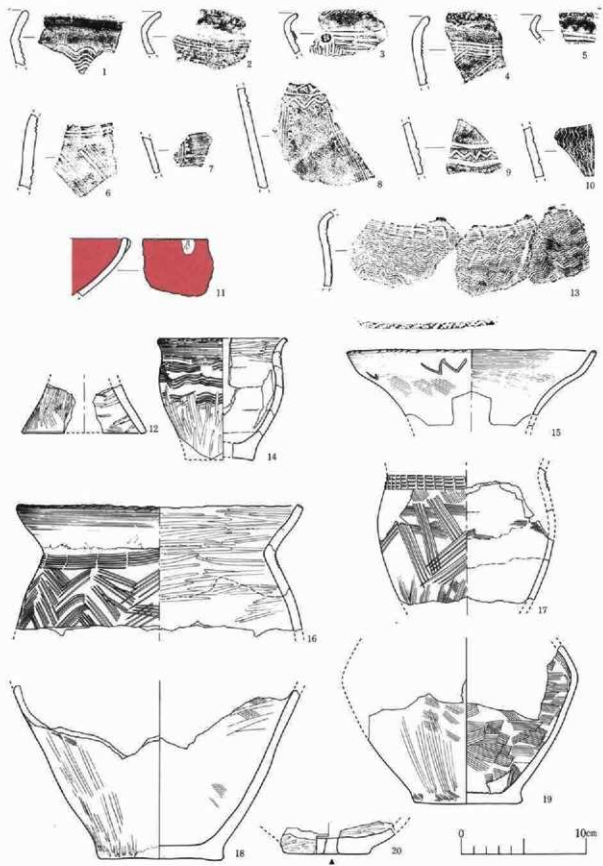


Fig.43 12号住居址出土遺物

第1節 遺構と出土石器

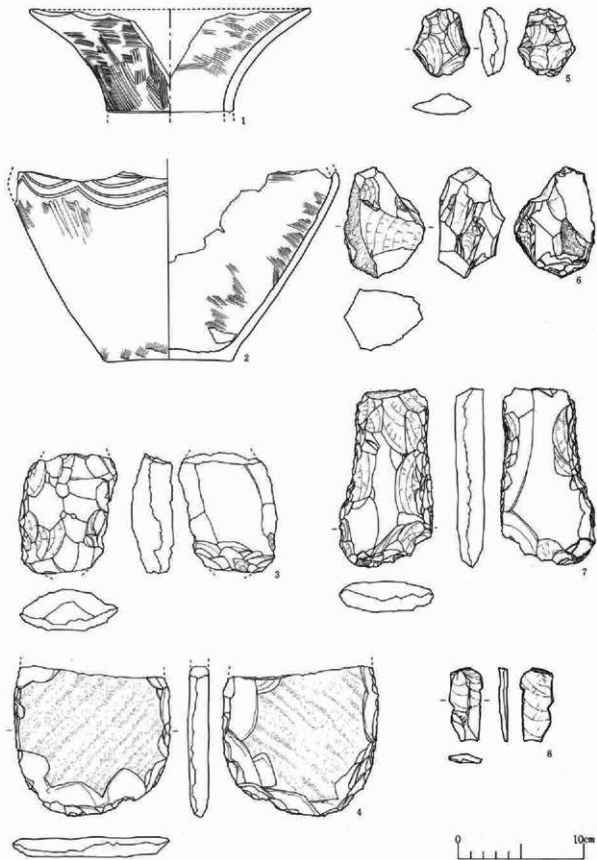


Fig.44 12号住居址出土遺物

第3章 各 面

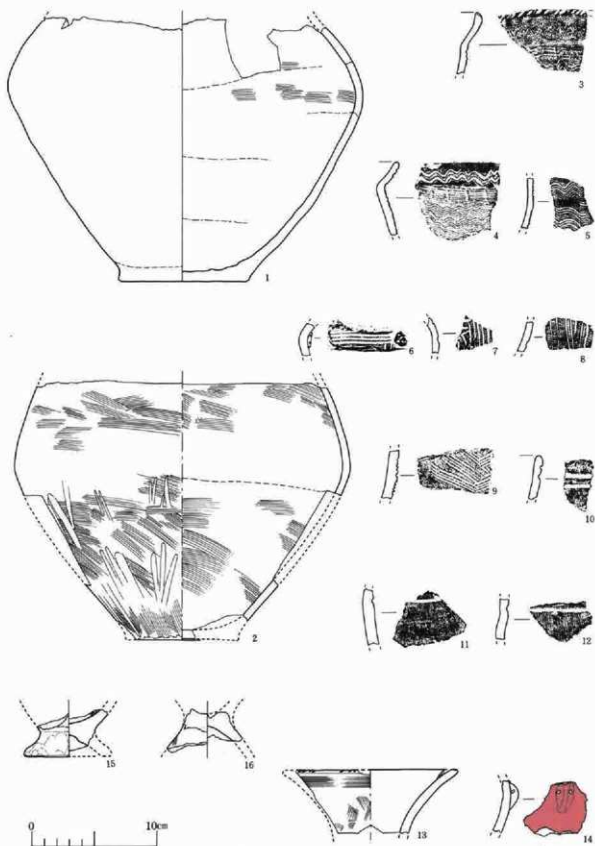


Fig.45 12号住居址出土遺物

出土石器 (Fig.44-3・4・5・6・7・8, PL.39-6・7・8・9, 40-1・2)

石斧 (Fig.44-3, PL.39-6) 床面出土

両端が欠損している。現状での長さ9.3cm、幅7.2cm、厚さ3.4cmである。刃部は敲打痕が両面にある。石材は安山岩である。重さ0.32kg。

石斧 (Fig.44-4, PL.39-7) 床面出土

片端が欠損している。扁平な石を使用している。現状での長さ12cm、幅12.9cm、厚さ0.9cmである。刃部は、両面から敲打により大きくつくられ、後に細かく刃をつけている。石材は安山岩である。重さ0.42kg。

石核 (Fig.43-5, PL.39-8)

長さ5.2cm、幅4.7cm、厚さ2.2cmである。石材は頁岩である。重さ0.04kg。

石核 (Fig.43-6, PL.39-9)

長さ8.9cm、幅6.3cm、厚さ5.2cmである。一部に自然面を残す。石材は安山岩。重さ0.28kg。

打製石斧 (Fig.43-7, PL.40-1)

長さ14cm、幅7.5cm、厚さ2.3cmである。刃部は表裏両面より細かい剝離が行なわれている。石材は頁岩である。重さ0.34kg。

刮器 (Fig.44-8, PL.40-2)

長さ5.9cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。石材は頁岩である。重さ0.011kg。

13号住居址 (Fig.46, PL.42-1・2)

13号住居址は、6G・H-14・15・16、6I-15区にわたり位置している。北に隣接して22号住居址が位置している。南西部は、1号井戸址によって切られている。

規模は、長軸7.67m、短軸5.14mを測り、隅丸方形を呈する。壁高は、0.15mである。主軸方位は、N-72°-Eである。床面は、ほぼ平坦である。床面には炭化材が全面に見られ、住居址中央に向い検出された。床面には17本の穴が検出されたが、主柱穴と考えられるものは、P2とP6である。P1は、上端長軸0.53m、短軸0.31m、下端長軸0.26m、短軸0.14m、深さ0.28mの楕円形を呈す。P2は、上端長軸0.52m、短軸0.45m、下端は0.2mの円形を呈し、深さ0.55mである。P3は、上端長軸0.33m、短軸0.32m、下端0.15mの円形を呈し、深さ0.18mである。P4は、上端長軸0.55m、短軸0.5m、下端長軸0.16m、短軸0.12m、深さ0.2mである。P5は、上端長軸0.3m、短軸0.27m、下端長軸0.18m、短軸0.09m、深さ0.25mである。P6は、上端長軸0.38m、短軸0.3m、下端長軸0.18m、短軸0.15m、深さ0.38mである。P7は、上端長軸0.35m、短軸0.25m、下端は0.08mの円形を呈し、深さ0.08mである。P8は、上端長軸0.52m、短軸0.45m、下端長軸0.15m、短軸0.1m、深さ0.24mである。P9は、上端長軸0.4m、短軸0.25m、下端長軸0.2m、短軸0.1m、深さ0.12mである。P10は、上端長軸0.45m、短軸0.36m、下端は0.17mの円形を呈し、深さ0.22mである。P11は、上端長軸0.5m、短軸0.47m、下端長軸0.16m、短軸0.15m、深さ0.11mである。P12は、長軸0.5m、短軸0.45m、下端は0.1mの円形を呈し、深さ0.15mである。P13は、上端長軸0.46m、短軸0.31m、下端は0.19m、深さ0.6mである。P14は、上端長軸0.3m、短軸0.26m、下端は0.08mの円形を呈し、深さ0.05mである。P15は、上端長軸0.31m、短軸0.25m、下端は0.09mの円形を呈し、深さ0.05mである。P16は、上端長軸0.23m、短軸0.16m、下端長軸0.09m、短軸0.06m、深さ0.13m

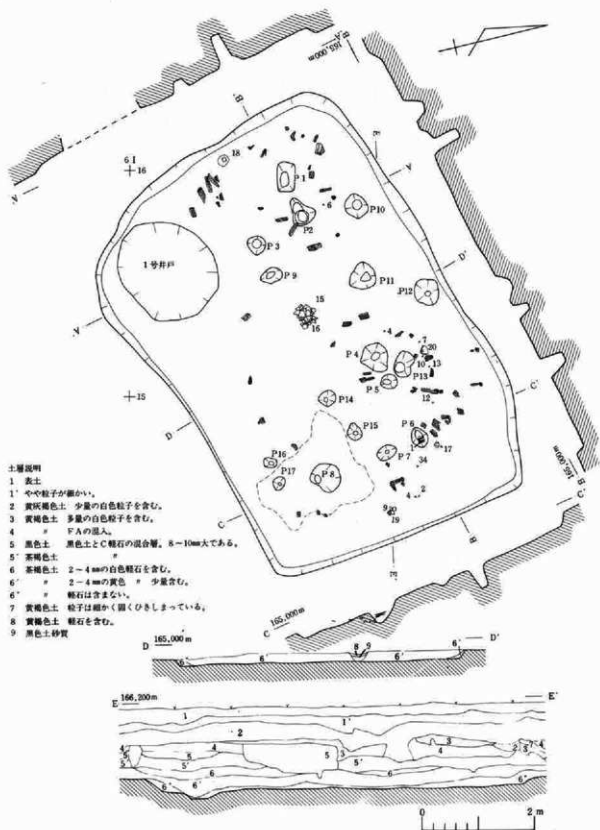


Fig.46 13号住居址実測図

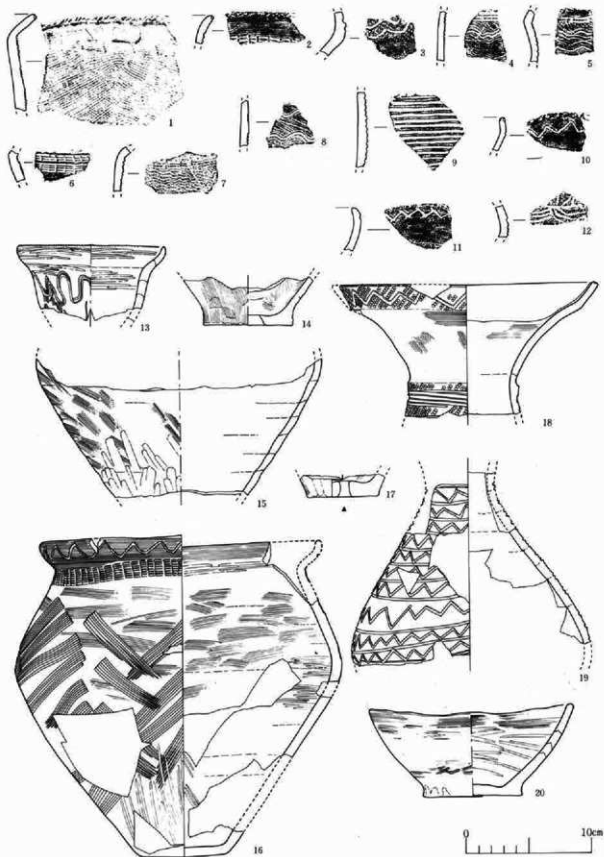


Fig.47 13号住居址出土遺物

第3章 各節

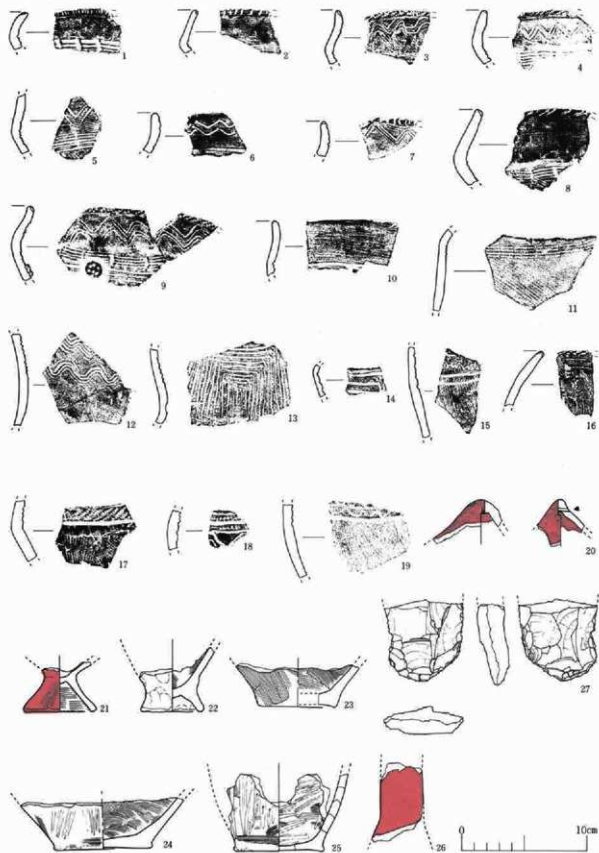


Fig.48 13号住居址出土遺物

である。P17は、上端長軸0.25m、短軸0.2m、下端長軸0.06m、短軸0.05m、深さ0.17mである。

はり床は、南東部分、P8周辺に広がりをもつ。

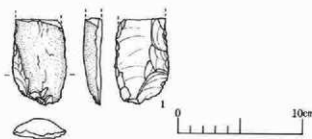
出土石器

石斧 (Fig.48-27、PL.44-8)

基部を欠損。現在の長さ6.5cm、幅6.3cm、厚さ1.9cmである。刃部は両面から剥離している。石材は頁岩である。重さ0.1kg。

石斧 (Fig.49-1、PL.44-9)

基部を欠損。表面と側面に自然面が残る。長さ6.9cm、幅4.2cm、厚さ1.6cmである。表面は一辺、裏面は両端に剥離が行なわれている。石材は、頁岩である。重さ0.06kg。

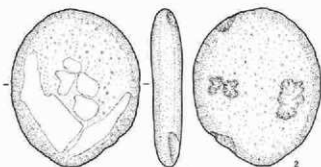


自然石 (Fig.49-2、PL.45-1)

長さ25cm、幅21cm、厚さ5cmの扁平な自然石で、一部剥離している。床面出土。石材は安山岩である。重さ3.366kg。

石皿 (Fig.49-3、PL.45-2)

推定で欠損している。現在の長さ21cm、幅12cm、縁の厚さ8.1cm、中央の厚さ4.1cmである。石皿の底部は扁平にすってある。皿状の縁から底までの深さは4cmである。石材は安山岩である。重さ1.95kg。



14号住居址 (Fig.50、PL.45-3)

5 I・J-23・24にわたり位置している。北西から南東に傾斜する。南側には10号住居址が近接する。規模は不明、壁は確認できなかった。北側は調査区外のため未調査である。一部で床面が確認できた。柱穴は2本のみ確認。P1は、上端0.32m、下端0.2mの円形を呈し、深さ0.25mである。P2は、上端0.45m、下端0.17mの円形を呈し、深さ0.25mである。南側を精査したが、14号住居址に該当する遺構は検出されなかった。住居址内では、道路寄りの地点から、土器破片がまとめて出土した。

また土層の観察でも、住居址の掘り方は検出できなかった。

Fig.49 13号住居址出土遺物

第3章 各 節

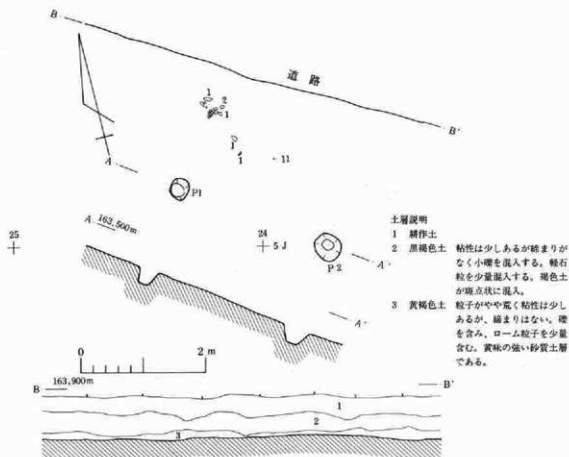


Fig.50 14号住居址実測図

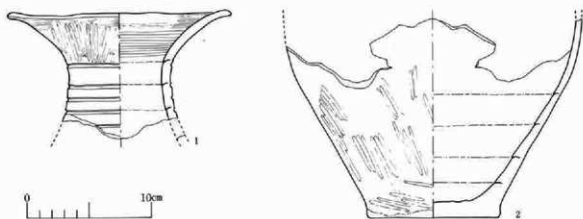


Fig.51 14号住居址出土遺物

15号住居址 (Fig.52, PL.46-1・2)

15号住居址は、6 G・H-3・4・5区にわたり位置している。地形は北西から南東に向けて傾斜している。近接する遺構は、17号住居址であり、北東に位置する。

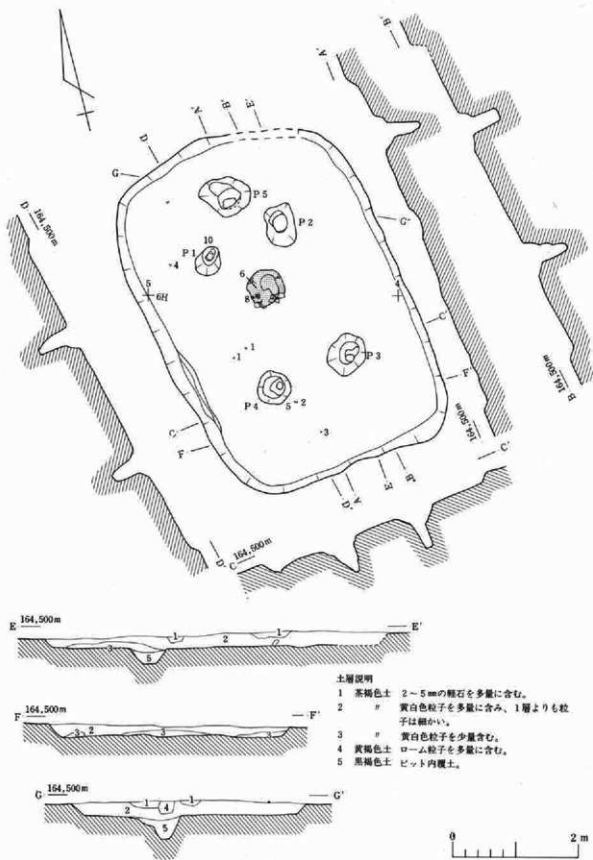


Fig.52 15号住居址実測図

第3章 各 面

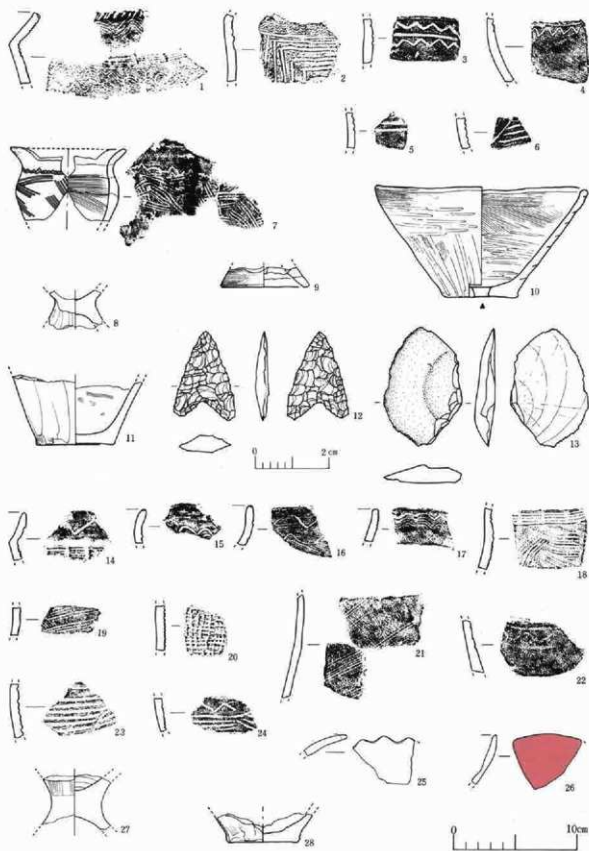


Fig.53 15号住居址出土遺物

規模は、長軸5.63m、短軸4.00mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は、約0.1mである。主軸方位は、 $N-10^{\circ}-E$ である。床面の状況は、ほぼ平坦であり、中央部分に炉が検出された。炉の規模は、長軸0.56m、短軸0.55mでほぼ円形を呈し、深さ0.08mである。焼土は僅かにみられる。炉の南部分に6個の自然石が検出された。柱穴は5本検出された。P 1は、上端長軸0.49m、短軸0.48m、下端長軸0.30m、短軸0.22m、深さ0.56mである。P 2は、上端長軸0.66m、短軸0.43m、下端長軸0.4m、短軸0.22m、深さ0.58mである。P 3は、上端長軸0.7m、短軸0.6m、下端0.1mの円形を呈し、深さ0.55mである。P 4は、上端0.55m、下端0.11mの円形を呈し、深さ0.55mである。P 5は、上端長軸0.83m、短軸0.21m、下端長軸0.21m、短軸0.12m、深さ0.68mである。

出土石器 (Fig. 53-12・13, PL. 48-4・5)

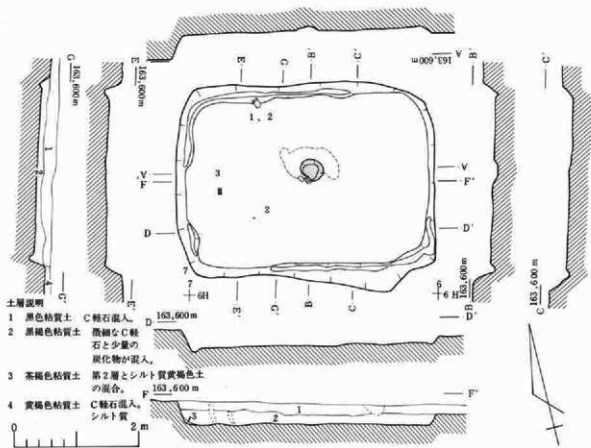
石鏃 (Fig. 53-12, PL. 48-4)

長さ2.3cm、幅1.6m、厚さ0.4cmである。両面から剥離されている。石材は黒曜石である。重さ0.0015kg。

削器 (Fig. 53-13, PL. 48-5)

長さ9.5cm、幅6.2cm、厚さ1.5cmである。片面は自然面を残す。石材は頁岩である。重さ0.088kg。

16号住居址 (Fig. 54, PL. 49-1・2)



16号住居址は、6G-6・7区にわたり位置している。西に8号住居址、東に15号住居址が近接する。

規模は、長軸4.14m、短軸3.1mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は約0.2mである。主軸の方位はN-75°-Wである。床面はしっかりしている。炉は中央部に検出され、0.4mの大きさで、ほぼ円形を呈し、深さ0.08mである。南部に2個の自然石を検出した。炉内には焼土がみられ、北側には木炭が広がっている。壁溝が北西コーナー、東南コーナー付近と、西南部に検出された。壁溝の幅は0.1m～0.05m、深さは、床面より約0.1m下がる。

出土石器 (Fig. 55-1、PL. 50-1) 床面出土

長さ16.1cm、幅9cm、厚さ11cmである。表面には僅かに擦痕がみられる。石材は安山岩である。重さ1.85kg。

17号住居址 (Fig. 56・57、PL. 52-1・2、53-1・2、54-1・2、55-1・2、56-1・2)

17号住居址は、6F・G・H-2・3、6G-4区にわたり位置している。南西部に接近して15号住居址が位置している。地形は北西から南東に向い僅かに傾斜している。

規模は、南限をおさえることができず、東西は、約4.6mの隅丸方形である。壁高は、0.1mである。主軸方位は、N-9°-Wである。床面の状況は、僅かに凸凹がある。炉は中央やや北側と思われる位置に検出された。長軸0.86m、短軸0.75mで東西に僅かに長く、深さ0.08mのすり鉢状を呈す。焼土が僅かに検出された。床面は、炉より南部分で炭化材が多く検出された。柱穴は17本検出され、主柱穴が何本になるか明確にすることができなかった。P1は、上端0.5m、下端0.13mの円形を呈し、深さ0.7mである。P3は、上端長軸0.5m、短軸0.37m、下端は0.1mの円形を呈し、深さ0.7mである。P3は、上端長軸0.74m、短軸0.58m、下端は0.18mの円形を呈し、深さ0.7mである。P4は、上端長軸0.4m、短軸0.36m、下端長軸0.1m、短軸0.06mの円形を呈し、深さ0.48mである。P5は、上端長軸0.56m、短軸0.55m、下端0.1mの円形を呈し、深さ0.25mである。P6は、上端長軸0.59m、短軸0.52m、下端は0.15mのほぼ円形を呈し、深さ0.55mである。P7は、上端長軸0.6m、短軸0.5m、下端長軸0.15m、短軸0.09mの楕円形を呈し、深さ0.51mである。P8は、上端長軸0.38m、短軸0.33m、下端は0.1mの円形を呈し、深さ0.27mである。P9は、P10と土壇状を呈しており、下面は僅かに段差をもつ。上端長軸1.5m、短軸0.5m、P9の下端長軸0.49、短軸0.28m、深さ0.3m、P10は、長軸0.4m、短軸0.16m、深さ0.35mである。P11は、上端長軸0.35m、短軸0.28m、下端0.15mのほぼ円形を呈し、深さ0.42mである。P12は、上端長軸0.65m、短軸0.6m、下端は0.1mのほぼ円形を呈す。P13は、上端長軸0.24m、短軸0.19m、下端長軸0.15m、短軸0.1mのほぼ円形を呈し、深さ0.1mである。P14は、上端長軸0.44m、短軸0.36m、下端0.1mのほぼ円形を呈す。P15は、上端長軸0.7m、短軸0.42m、下端は0.1mの円形を呈し、深さ0.2mである。この中で、深さや、掘り方のしっかりとした柱穴は、P1、P2、P3、P4、P6、P7、P11、P14である。

住居址北側部分で6号溝を切り構築している。

遺物の出土状況は、住居址全面にわたり検出された。炭化材は床面にほぼ密着した状況で出土しており、火災にあったものと考えられる。

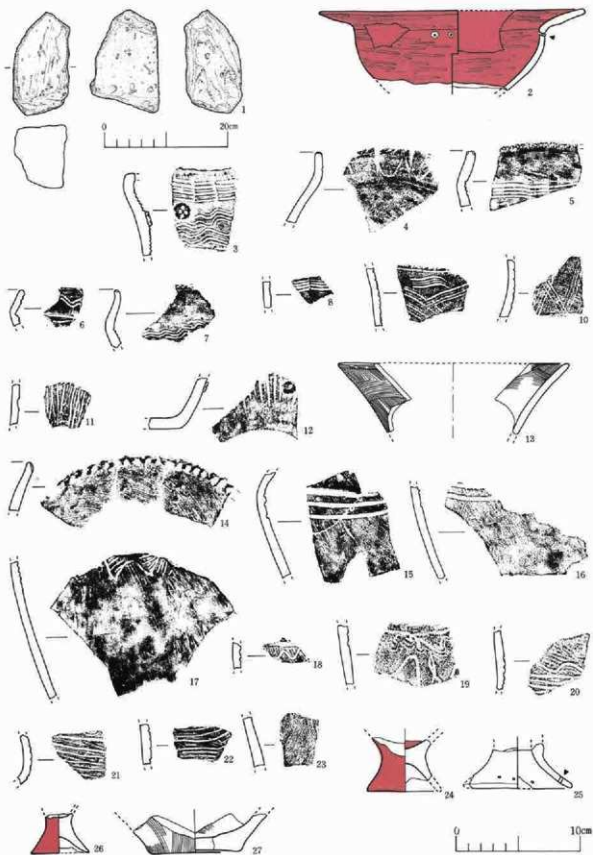


Fig.55 16号住居址出土遺物

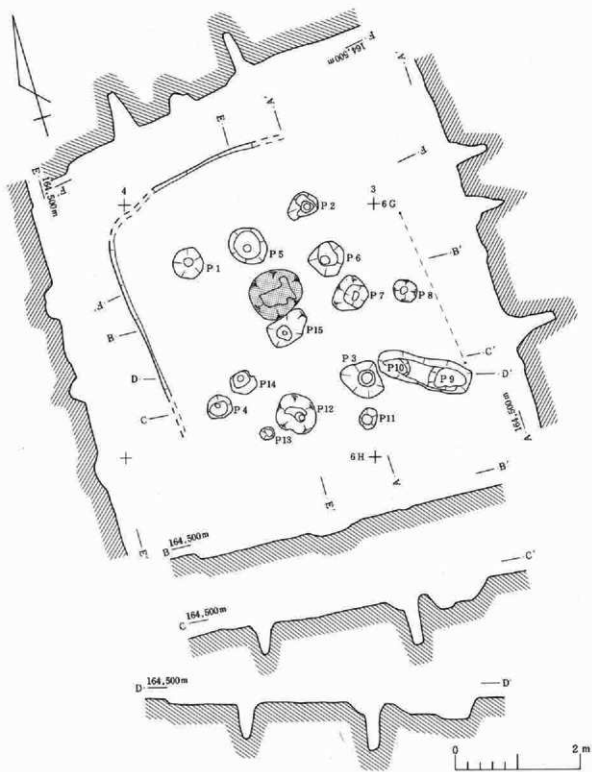
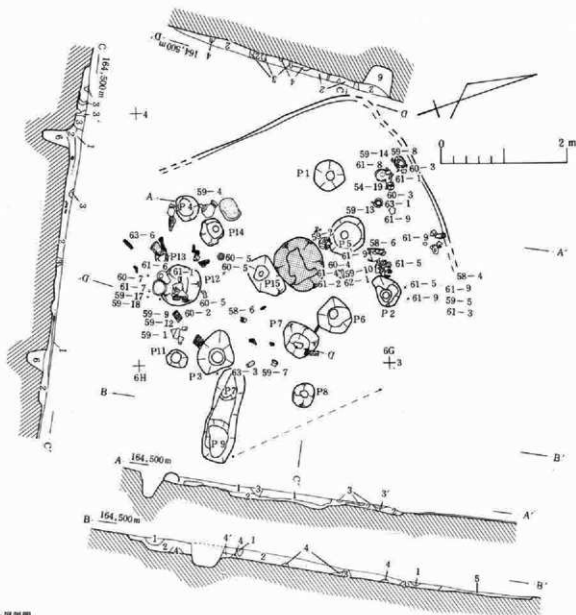


Fig.56 17号住居址実測図



土層説明

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------|----------------|
| 1 茶褐色土 ローム粒子を多量に含み、粘性がある。 | 3' 茶褐色土 大粒のC軽石を含む。 | 5 ローム粒子。 |
| 2 褐色土 ローム粒子を含み粘性が強い。炭化材を含む。 | 4 ロームブロック | 6 暗褐色土 ビット内覆土。 |
| 3 茶褐色土 C軽石層を若干含む。 | 4' 褐色土層の中にロームブロックが混入。 | |

Fig.57 17号住居址遺物出土状況

出土石器 (Fig. 63-1・2・3・4・5・6・7・8, PL. 62-6・7, 63-1・2・3・4・5・6)

凹石 (Fig. 63-1, PL. 62-6) 床面出土

長さ13.8cm、幅7cm、厚さ3.3cmである。裏面中央に約3cmの僅かに凹がみられる。石材は安山岩である。重さ0.54kg。

切片石器 (Fig. 63-2, PL. 62-7)

現存する長さ6.5cm、幅5.5cm、厚さ1.6cmである。刃部は両端を細かく剥離している。石材は、

第3章 各 節

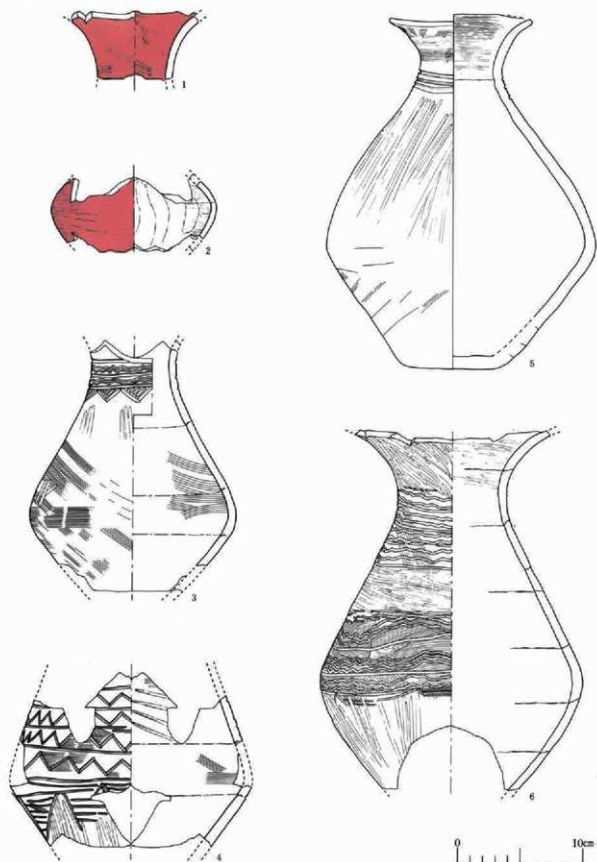


Fig.58 17号住居址出土遺物

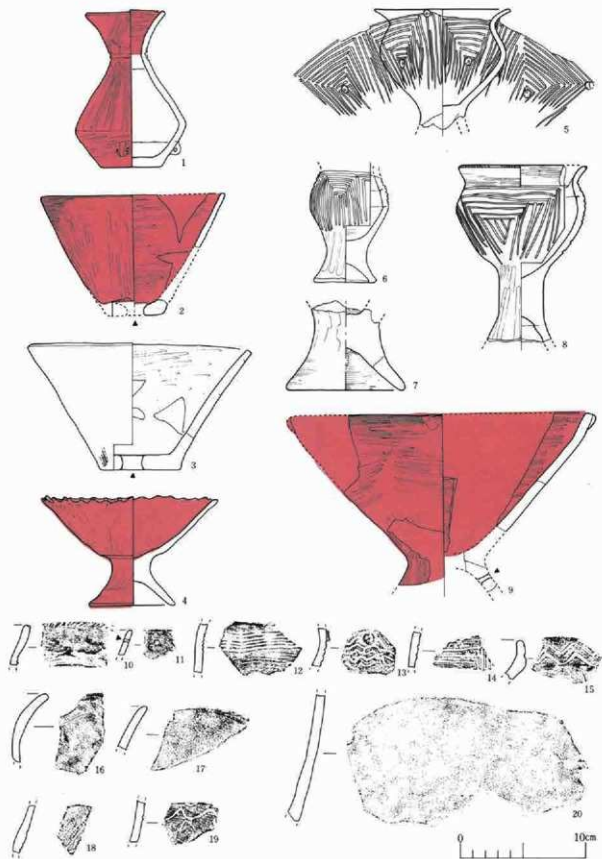


Fig.59 17号住居址出土遺物

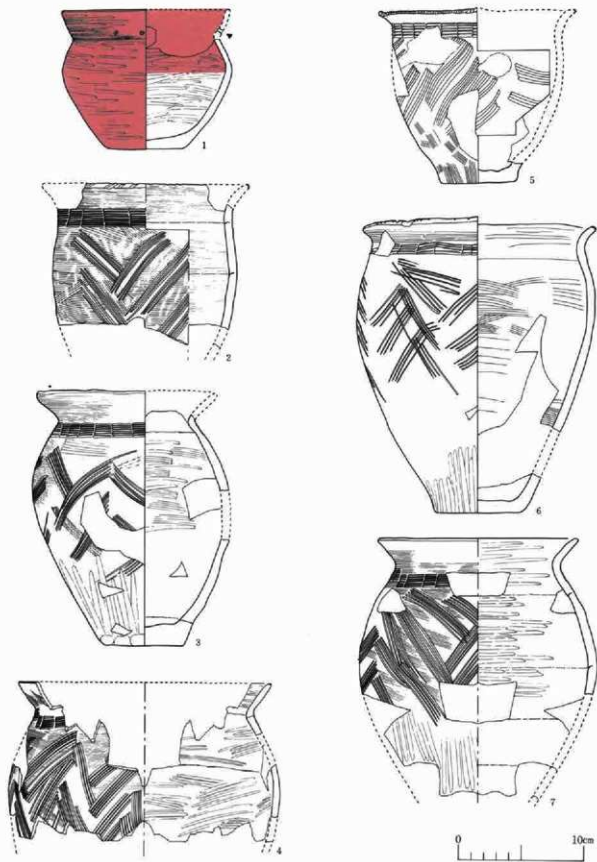


Fig.60 17号住居址出土遺物

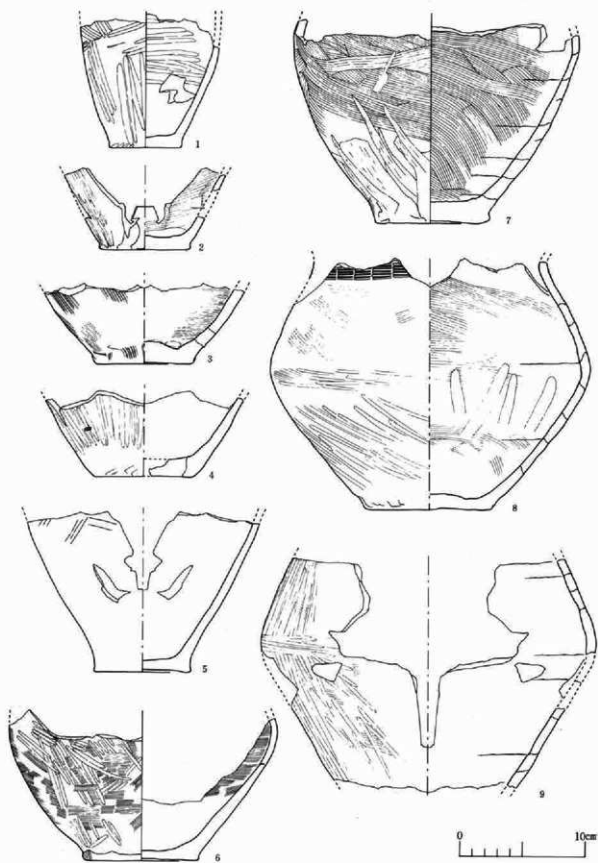


Fig.61 17号住居址出土遺物

頁岩である。重さ0.06kg。

磨製石斧 (Fig. 63-3, PL. 63-1)

長さ12cm、幅5.2cm、厚さ3.7cmの大型給刃である。刃部は両面から磨かれ、側面は僅かに稜をもつ。基部は打撃を受けてつぶれた状況を示す。裏面は剥離している。石器製作時に表・裏面とも細かくたたいて面をつくっている様相がみられる。石材は、斑礫岩である。重さ0.4kg。

削器 (Fig. 63-4, PL. 63-2)

長さ8.5cm、幅6.7cm、厚さ1.6cmである。表面は自然面を残す。石材はヒン岩である。重さ0.12kg。

台石 (Fig. 63-5, PL. 63-3) 床面出土

長さ38cm、幅26.5cm、厚さ10cmである。一部を欠損している。大きな自然石である。石材は安山岩である。重さ16.0kg。

自然石 (Fig. 63-6, PL. 63-4) 床面出土

長さ18cm、幅15.0cm、厚さ9.0cmである。表裏とも扁平で、立方体状を呈している。石材は安山岩である。重さ3.38kg。

削器 (Fig. 63-7, PL. 63-5)

長さ9cm、幅3.3cm、厚さ1.7cmである。菱形の断面を呈し、僅かに刃部剥離している。石材は頁岩である。重さ0.039kg。

磨製石斧 (Fig. 63-8, PL. 63-6)

基部に欠損。現存の長さ9.7cm、幅3.6cm、厚さ1.7cmである。表・裏面とも側面方向から敲打され、側面に刃部をもつ。先端部分は両面から磨かれ、刃部をつくる。表面は摩耗がよげしい。石材は頁岩である。重さ0.09kg。

その他に扁平片刃石斧が出土したが遺跡内にて発掘中に紛失。大きさは約2cm位で厚さ約0.5cm位であった。

18号住居址 (Fig. 64, PL. 64-1・2, 65-1)

18号住居址は、6L・M-18・19・20、6N-19・20に位置している。南に20号住居址が近接する。

規模は、長軸7.55m、短軸5.6mを測り隅丸方形を呈す。壁高は、0.15m~0.33mである。主軸方位は、N-77°-Wである。床面は、僅か東に傾斜し、凸凹がみられる。柱穴は13本検出されたが、主柱穴は、はっきりととらえられなかった。P1は、上端長軸0.28m、短軸0.24m、下端長軸0.18m、短軸0.12m、深さ0.14mである。P2は、上端長軸0.4m、短軸0.32m、下端長軸0.24m、短軸0.21m、深さ0.2mである。P3は、

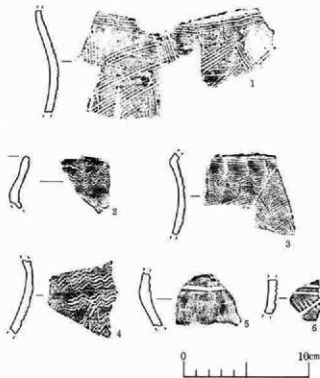


Fig. 62 17号住居址出土遺物

第1節 遺構と出土石器

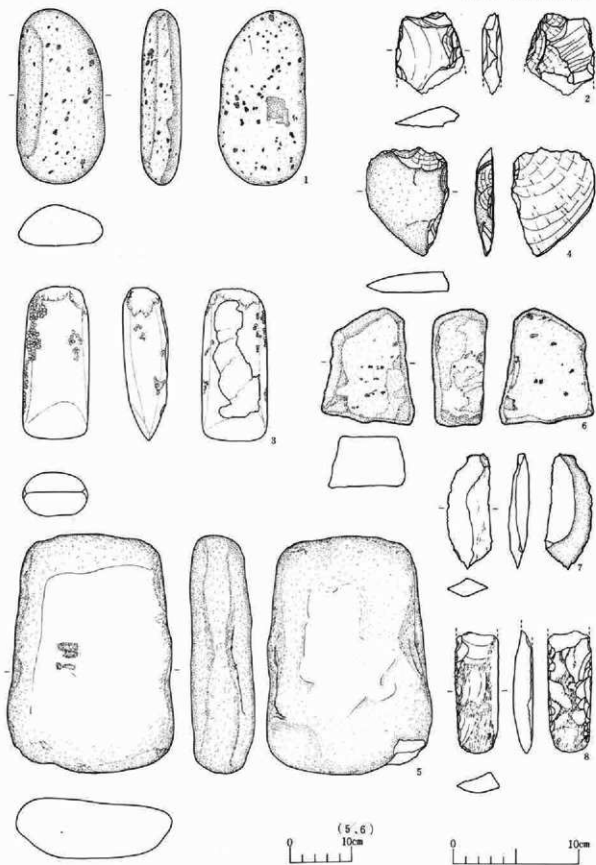


Fig.63 17号住居址出土遺物

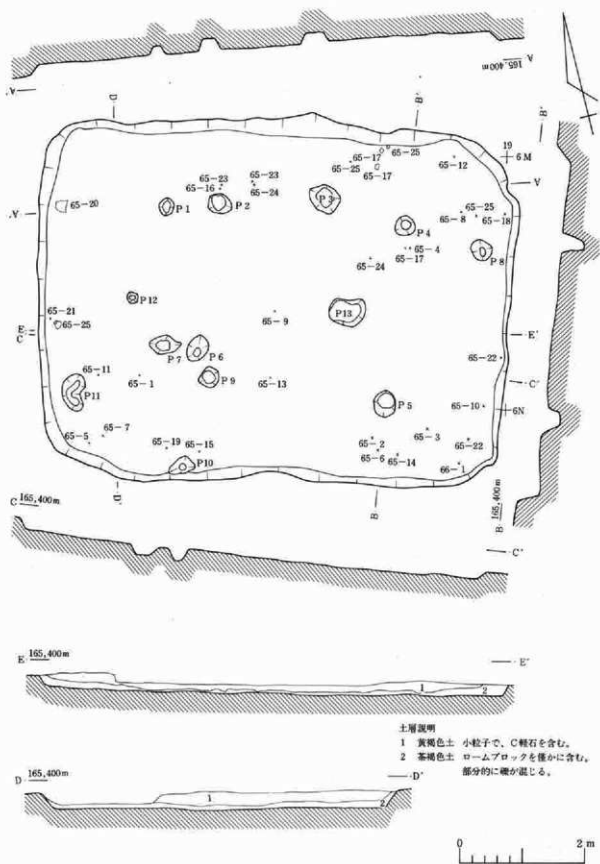


Fig.64 18号住居址実測図

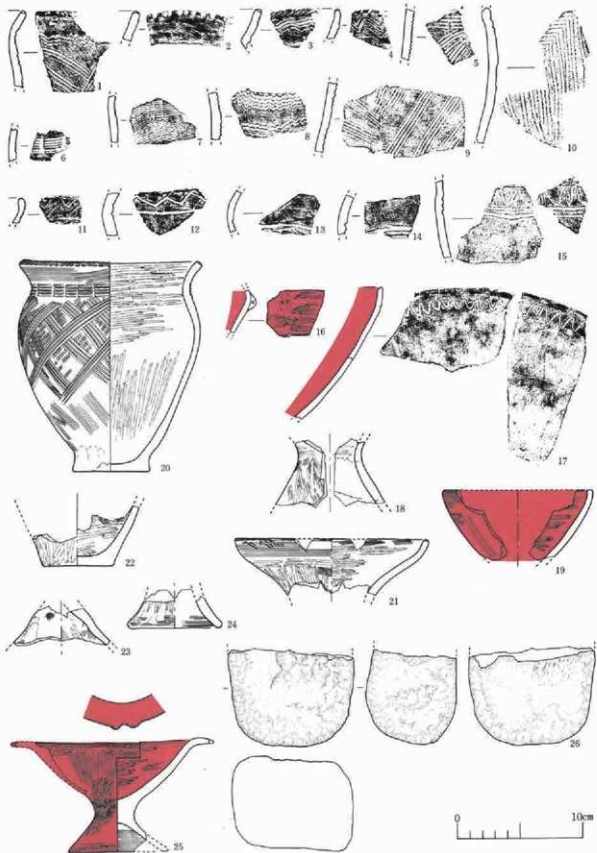


Fig.65 18号住居址出土遺物

第3章 各 節

上端長軸0.5m、短軸0.42m、下端長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.17mである。P4は、上端0.32m、下端0.15mの円形を呈し、深さ0.37cmである。P5は、上端長軸0.42m、短軸0.34m、下端は、0.25mの円形を呈し、深さ0.24mである。P6は、上端長軸0.43m、短軸0.3m、下端長軸0.15m、短軸0.1m、深さ0.18mである。P7は、上端長軸0.5m、短軸0.29m、下端長軸0.2m、短軸0.15m、深さ0.18mである。P8は、上端長軸0.35m、短軸0.3m、下端長軸0.15m、短軸0.08m、深さ0.12mである。P9は、上端0.3m、下端0.19mの円形を呈し、深さ0.1mである。P10は、上端長軸0.43m、短軸0.25m、下端は0.15mの円形を呈し、深さ0.1mである。P11は、上端長軸0.06m、下端0.03m、下端は不定形で、深さ0.11mである。P12は、上端0.18mの円形を呈し、下端長軸0.09m、短軸0.06m、深さ0.05mである。P13は、上端長軸0.58m、短軸0.4m、下端長軸0.48m、短軸0.3m、深さ0.1mである。

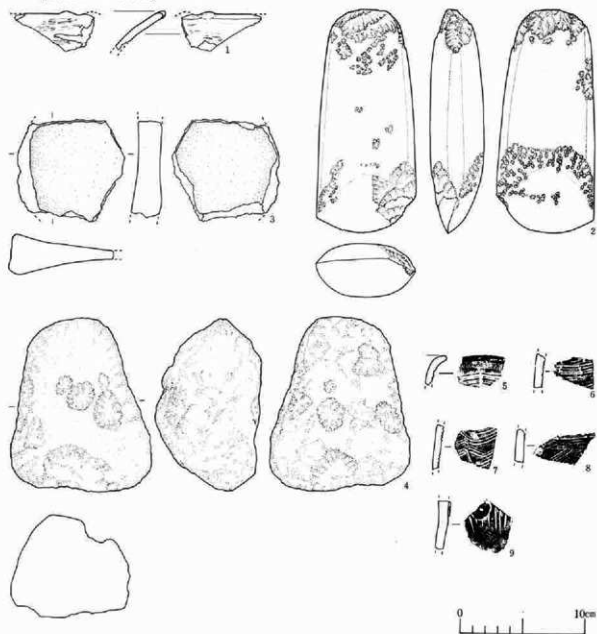


Fig.66 18号住居址出土遺物

出土石器 (Fig. 65-26, PL. 66-7, Fig. 66-2・3・4, PL. 66-9・67-1・2)

凹石 (Fig. 65-26, PL. 66-7) 床面出土

ほぼ半分ほど欠損しているものと思われる。現存での長さ7.5cm、幅10cm、厚さ7cmである。表面には、僅かに凹部がみられ、裏面には擦痕がみられる。石材は安山岩である。重さ0.6kg。

磨製石斧 (Fig. 66-2, PL. 66-9)

長さ17.5cm、幅7.9cm、厚さ4.3cm、の太型蛤刃である。刃部は両面から磨かれ、側面は僅かに稜をもつ。基部は打撃を受けてつぶれた状況を呈す。表裏とも製作時に細かくたたいた後、全面を磨いている。重さ1.0kg。

石皿 (Fig. 66-3, PL. 67-1)

四辺いずれもが欠損、表裏両面とも中央に向い凹状を呈している。長さ7.7cm、幅8.7cm、厚さ3.2cm~0.8cmである。石材は安山岩である。重さ0.02kg。

凹石 (Fig. 63-4, PL. 67-2)

長さ13.7cm、幅11.0cm、厚さ8.3cmの自然石を利用したものである。表裏両面とも使用痕がみられる。石材は安山岩である。重さ0.88kg。

19号住居址 (Fig. 67, 68, PL. 67-5, 68-1・2)

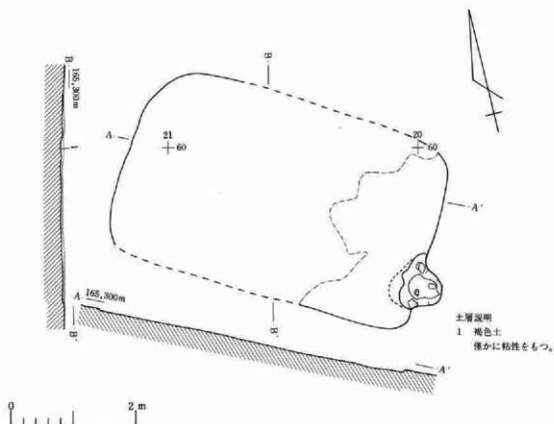


Fig.67 19号住居址実測図

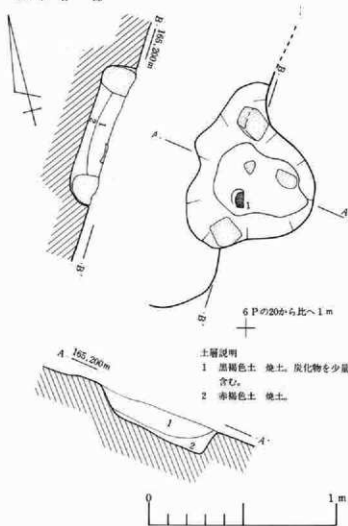


Fig.68 19号住居址地実測図

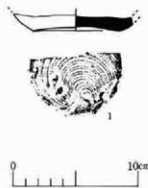


Fig.69 19号住居址出土遺物

19号住居址は、6 N、0-19・20区にわたり位置している。地形は、北西から南東に向い傾斜する。当住居址は20号住居址を切ってつくられている。北側に18号住居址、南東に21号住居址が隣接する。

規模は、長軸5.46m、短軸3.05mを測り、隅丸方形を呈している。壁高は0.05mである。主軸方位は、N-43°-Wである。

カマドは、東壁南部分に位置する。カマドの幅は、1.8 m、長さ1.35m、両袖には凝灰岩が使われている。カマド内からは、須恵器の杯底部が出土している。

20号住居址 (Fig. 70, PL. 69-1・2、70-1)

20号住居址は、6 N-19、6 0・P-19、20・21区にわたり位置している。

規模は、長軸7.12m、短軸5.56mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は約0.06 mである。主軸方位は、N-87°-Wである。北側部分は、19号住居址に切られている。床面は平坦で、中央に炉をもつ。炉の規模は、長軸0.64m、短軸

0.45m、深さ0.05mで焼土がみられる。はり床は、炉を中心として広範囲に検出された。柱穴は10本検出された。P1は、上端0.3m、下端0.33m、下端は0.2mの円形を呈し、深さ0.48mである。P3は、上端長軸0.68m、短軸0.45m、下端は0.18mの円形を呈し、深さ0.5mである。P4は、上端長軸0.76m、短軸0.68m、下端長軸0.18m、短軸0.12m、深さ0.58mである。P5は、上端長軸0.51m、短軸0.31m、下端長軸0.26m、下端長軸0.14m、短軸0.1m、深さ0.1mである。P7は、上端長軸0.4m、短軸0.24m、下端長軸0.26m、短軸0.14m、深さ0.24mである。P8は、上端長軸0.48m、短軸0.43m、下端0.27mの円形を呈し、深さ0.17mである。P9は、上端長軸0.65m、短軸0.46、下端長軸0.24m、短軸0.15mである。P10は、上端長軸0.4m、短軸0.32m、下端0.12m、深さ0.31mである。

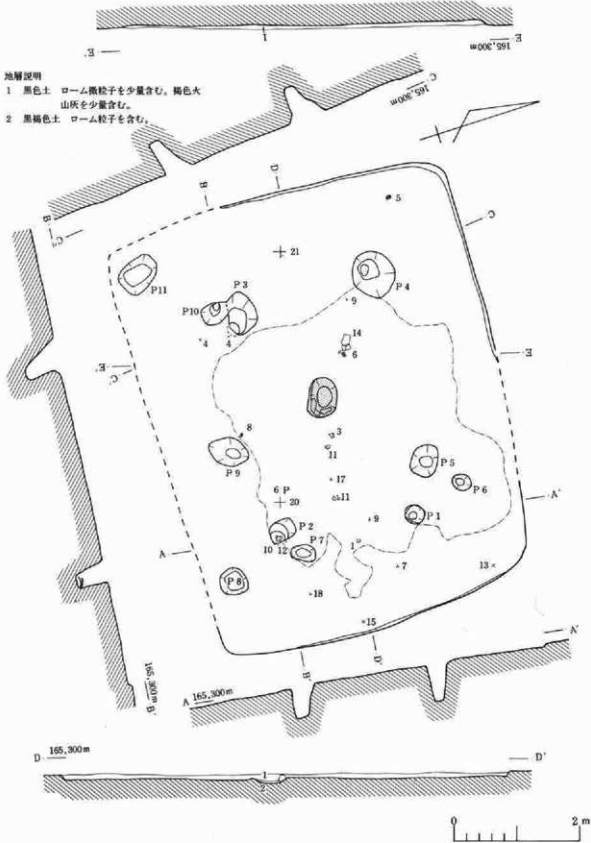


Fig.70 20号住居址実測図

第3章 各 節

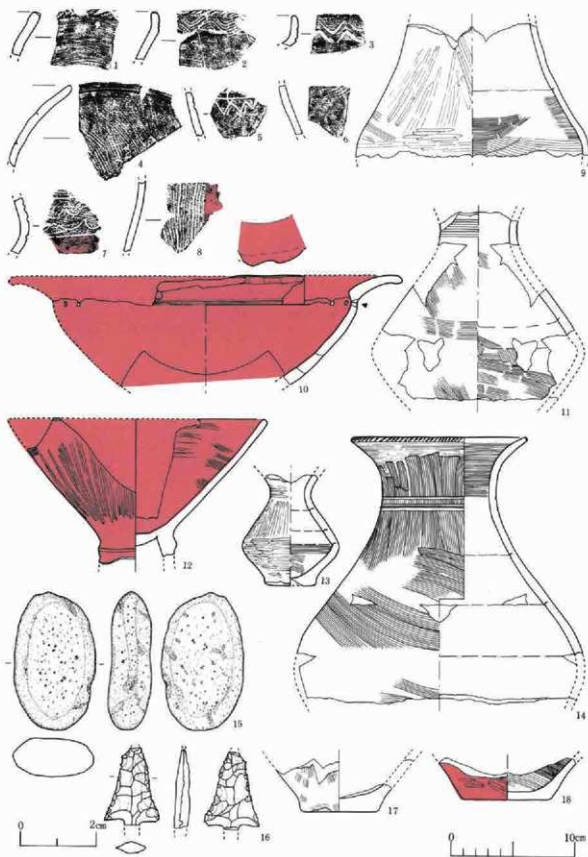


Fig.71 20号住居址出土遺物

出土石器 (Fig. 71-15・16, PL. 71-7・8)

自然石 (Fig. 71-15, PL. 71-7)

長さ11.2cm、幅6.7cm、厚さ3.3cm、石材は安山岩である。重さ0.25kg。

石鎌 (Fig. 71-16, PL. 71-8)

先端と基を欠損、長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、両面から剥離。安山岩。重さ0.001kg。

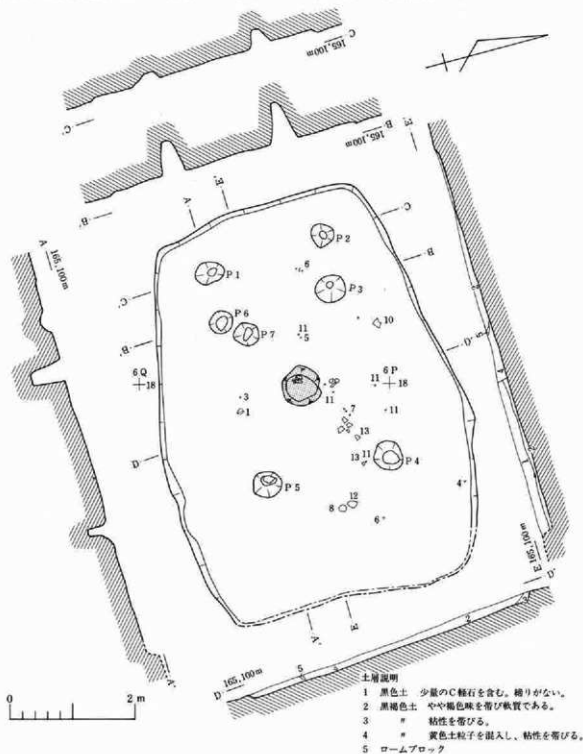


Fig. 72 21号住居址実測図

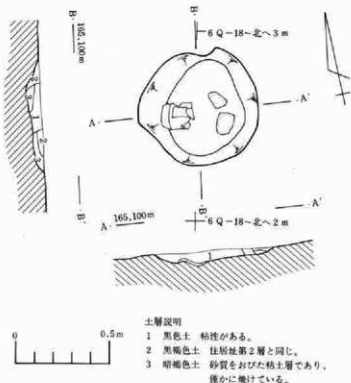


Fig.73 21号住居址炉実測図

0.45m、下端長軸0.26m、短軸0.2m、深さ0.4mである。P5は、上端長軸0.47m、短軸0.42m、下端長軸0.17m、短軸0.1m、深さ0.35mである。P6は、上端長軸0.4m、短軸0.34m、下端長軸0.22m、短軸0.15m、深さ0.52mの楕円形である。P7は、上端長軸0.4m、短軸0.35m、下端長軸0.22m、短軸0.1m、深さ0.16mの楕円形である。P3、P4、P5、P6は主柱穴と考えられる。

出土石器 (Fig.74-12、PL.74-7) 床面出土

すり石、長さ13cm、幅9.9cm、厚さ5cmである。表裏両面に擦痕がみられる。石材は安山岩である。重さ0.96kg。

22号住居址 (Fig.75、PL.75-1・2、76-1・2)

22号住居址は、6F-14、6F・G-15区にわたり位置している。北側は道路のため調査区からはずれており、調査は行えなかった。近接する遺構は、南に13号住居址がある。

規模は、長軸は不明、短軸は、3.38mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は、0.1mである。主軸方位は、N-0°-Eである。床面は、ほぼ平坦であるが、中央南部分に不定形な落ち込みが検出された。壁は、南側部分で検出され、西側は南部分コーナー付近で立ち上がり検出された。東側は、北側で僅かに検出された。炉址や、はり床等は未確認である。ピットは4本検出した。P1は、上端長軸0.7m、短軸0.66m、下端長軸0.15m、短軸0.13m、深さ0.3mである。P2は、上端長軸0.45m、下端長軸0.13m、短軸0.08m、深さ0.4mの楕円形を呈する。P3は、上端長軸1.4m、短軸0.8mの不整形をしており、深さ0.08mである。P4は、上端長軸0.67m、短軸0.55m、下端は、0.1mの円形を呈している。深さ0.2mである。

21号住居址 (Fig.72・73、P.L.72-1・2、73-1・2)

21号住居址は、6O・P-17・18区にわたり位置している。

規模は、長軸推定6.4m、短軸0.48mを測り、隅丸方形を呈す。壁高は0.15~0.05mである。主軸方位は、N-90°-Eである。中央に炉が位置し、規模は、0.65mの円形を呈し、深さ0.07mである。焼土は僅かに残る。柱穴は5本検出された。P1は、上端長軸0.48m、短軸0.32m、下端長軸0.15m、短軸0.1m、深さ0.15mである。P2は、上端0.35mの円形を呈し、下端長軸0.13m、短軸0.1m、深さ0.28mである。P3は、上端長軸0.49m、短軸0.42m、下端0.1m、深さ0.65mである。P4は、上端

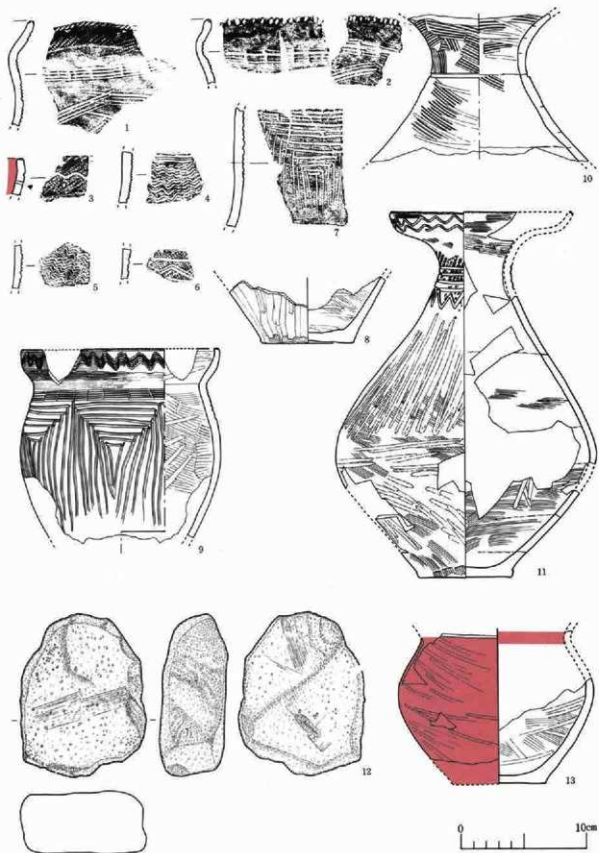


Fig.74 21号住居址出土遺物

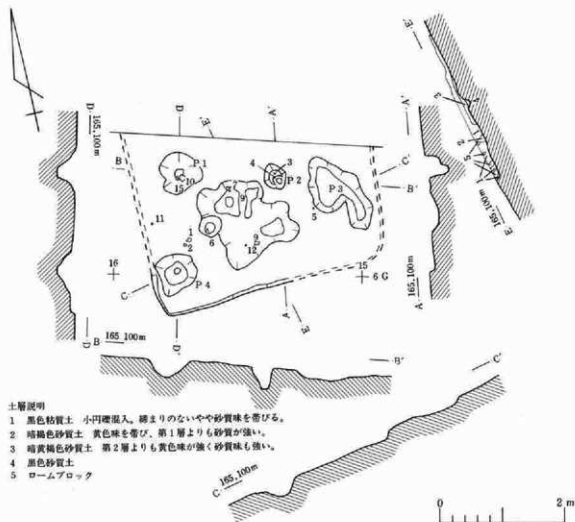


Fig.75 22号住居址実測図

出土石器 (Fig. 76-11・12, PL. 77-2・3)

削器 (Fig. 76-11, PL. 77-2)

長さ8.4cm、幅6.4cm、厚さ1.4cmである。石材は頁岩である。重さ0.09kg。

削器 (Fig. 76-12, PL. 77-3)

長さ6.9cm、幅4.1cm、厚さ1.8cmである。一边を両面から剥離し、刃部を形成している。石材は流紋岩である。重さ0.08kg。

第1節 遺構と出土石器

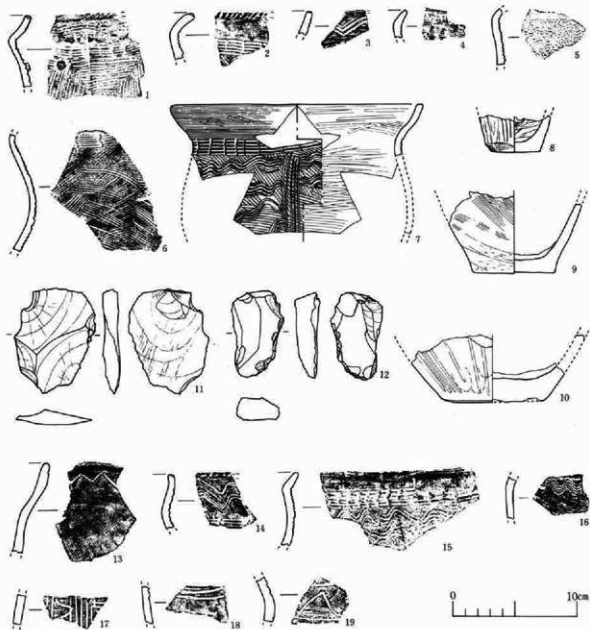


Fig76 22号住居址出土遺物

1号溝 (Fig. 77, PL. 78-1)

1号溝は、5 K-15、5 L・M-14・15区にわたり位置する。規模は、幅約0.9 m、深さ0.2 mの丸底を呈し、方位はN-7°-Eである。出土遺物は僅かであったが、調査隣接区において土取り作業が行なわれた際、1号溝内より出土した。当遺物の出土地点は、5 K-15区である。

出土石器 (Fig. 78-1, PL. 79-1)

凹石、長さ20cm、幅12.5cm、厚さ9.0 cm、石材は安山岩。重さ1.85kg。

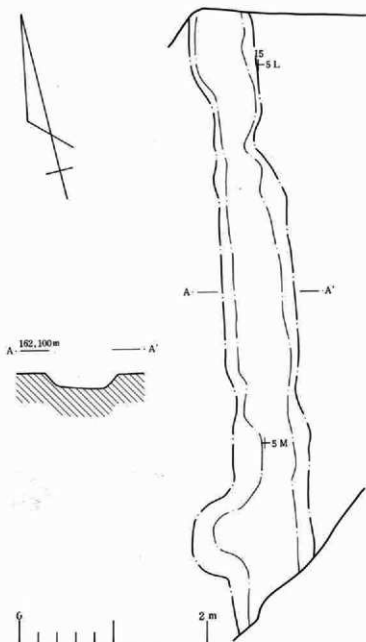


Fig.77 1号溝実測図

2号溝 (Fig. 79・80・81、P L. 78-2、80-1・2、81-1・2)

2号溝は、5 J-19、5 K・L・M・N-18・19、50-19、6 H-22・23、6 I-23、6 J・K-23・24、6 L・M-23、6 N・O-22・23、6 P・Q-21・22、6 R・S-20・21、6 T-18・19・20、6 U-17・18・19、6 V-17・18区で確認された。

2号溝東側部分、5 J-19・5 K・L・M・N-18・19、50-19区において確認された。

西側部分の溝は、6 H-22・23、6 I-23、6 J・K-23・24、6 L・M-23、6 N・O-22・23、6 P・Q-21・22、6 R・S-20・21、6 T-18・19・20、6 U-17・18・19、6 V-17・18区において確認された。

溝の規模は、上端で1.5 mから2.1 m、下端は、約0.2 mの幅をもち、深さは平均0.6から0.8 mをもち、溝の形は、V字形に近い部分とV字形になるところがある。東側はV字形で、西側はV字形が主である。東側・西側とも溝は、現地表面同様、南側に向い下がる事が明確になった。西側部分は広範囲に渡る調査になったため、この状況が

明確となった。北西部、61-23区付近において、溝の上端、165.40 m、下端、164.80 mを測り、南西部、6 V-17、18区付近では、上端、164.00 m、下端、163.0 mとおよそ1.4-1.2 mの比高をもつ。

北東部分の溝 (5 K-18区) では、上端、162.60 mであり、6 I-23区付近の西側部分の溝上端、165.40 m、で比高は、約2.8 mある。また下端部は、5 K-18区で162.00 m、6 I-23区付近で、164.80 mあり、比高は上端同様2.8 mを測る。

2号溝の東側 (5 M-18区) から西側 (6 K-24区) までの距離は、約122 mを測る。南北の距離

第1節 遺構と出土石部

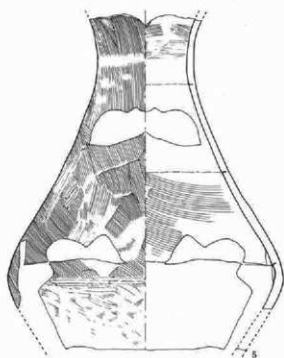
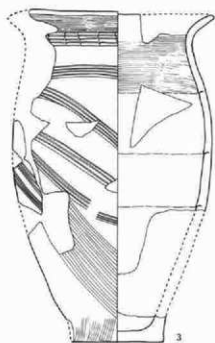
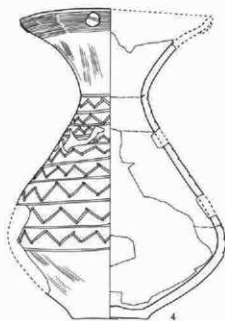
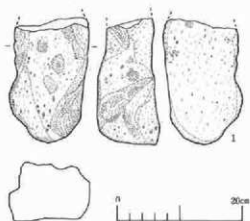


Fig.78 1号溝出土遺物

第3章 各 節

は確実な溝をおさえることができなかったが、駄目押しトレンチを南側に入れたところ、10・11・12号溝を確認した。しかし、形態の異なる弥生時代の溝であり、確実に2号溝かどうかは不明確であった。方向性から考えて、10号溝より南側に出ることは調査時において考えにくかった。一方北側部分は、調査後、土地改良に伴って水道埋設工事が行われ、立合いの結果、6V-W-2区において、露頭にC軽石下に掘り込まれた溝が検出され、位置だけを図面上に記録したが、2号溝になるか、9号溝の延長部分になるかは不明である。仮に推定すると、10号溝までの距離は、約140 mを測る。

土層説明

- 1層 茶褐色土 1-3cm大の礫を多量に含む、10㎡当り5個。
- 2層 茶褐色土 1層と同様であるが、10㎡当り2個程度の礫を含む。
- 3層 茶褐色土 黒色粒子の混入がある。
- 4層 黄褐色土 レンズ状に堆積し、砂質である。
- 5層 黒褐色土 1cm大の礫を含む、10㎡当り約20個出土、一部分C軽石が混入する。
- 6層 暗褐色土 上部は黒褐色を呈し、下部はやや黒く全体に0.5cm大の礫を含む、10㎡当り30個以上含む。
- 7層 黒褐色土 砂質土
- 8層 黄褐色土 砂質土
- 9層 灰褐色土 砂質土
- 10層 黒褐色土 砂質土

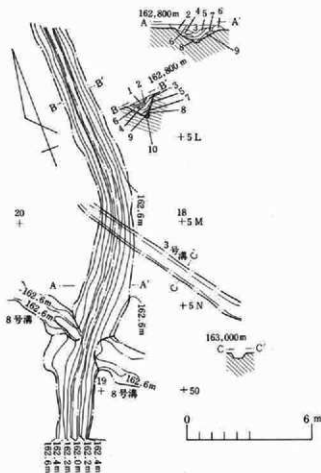


Fig. 79 2号、3号、8号溝実測図

6P-22区において、2号溝に0.4mの部分まで接近して、5号溝が立ち上がる。6P-21・22区の東側にトレンチを入れて、5号溝が延長するか確認してみたが、6P-22区において止まることが明確になった。このことから、2号溝を明らかに意識して、5号溝がつくられたことが推定できる。

出土石器 (Fig. 82-18、P.L. 82-4、Fig. 87-3、P.L. 86-3、Fig. 88-10、P.L. 87-3)

凹石 (Fig. 82-18、P.L. 82-4)

長さ7cm、幅5cm、厚さ4.3cmであり、欠損。両面から穴が穿ってある。石材は安山岩である。重さ0.15kg。

(5N-19区床面出土)

石斧 (Fig. 87-3、P.L. 86-3)

基部欠損、現存する長さ8.0cm、幅4.8cm、厚さ1.7cmである。刃部は両面から剥離されている。両面とも摩耗が激しい。石材は頁岩である。重さ0.08kg。

(6T-19区床面出土)

石斧 (Fig. 88-10、P.L. 87-3)

基部欠損、現存する長さ7.1cm、幅7.7cm、厚さ2.0cmである。刃部は両面から剥離されている。表面は、自然面を残している。石材は安山岩である。重さ0.14kg。

(覆土内出土)

3号溝 (Fig. 79、P.L. 88-1)

3号溝は、5J-21・22、5K-19・20・21、5L-18・19・20、5M-17・18、5N-17区に渡り位置している。主軸方位

第1節 遺構と出土石器

土層説明

- 第1層 茶褐色土 固く粒子が細かい。
- 第2層 茶褐色土
- 第3層 茶褐色土 しまりはあるが粘性に欠け、白色粒子を若干含む。
- 第4層 茶褐色土 粘性、しまりともなし (Fa)。
- 第5層 黒色土 多量の白色粒子 (浅間C軽石、大きき0.5-10mm) を含む。
- 第6層 黒褐色土 白色粒子及びローム粒子を含み、粘性でしまりがある。
- 第7層 砂利及び砂 ローム粒子を若干含む。
- 第8層 黒褐色土 粘性はあるがしまりに欠ける。
- 第9層 黒褐色土 粘性はあるがしまりに欠ける。
- 第10層 茶褐色土 しまりはあるが粘性なし。
- 第11層 黒褐色土 粘性はあるがしまりに欠ける、ローム粒子を若干含む。
- 第12層 黒褐色土 粘性はあるがしまりに欠ける、11層より土の粒子がこまかい。
- 第13層 砂

はN-34°-Wである。2号溝、3号住居址、4号住居址を切っている。幅約0.7m、深さ0.1mであり、上層からの掘り込みである。覆土から、弥生時代の高杯や、須恵器の甕胴部の破片が出土した。

4号溝 (Fig. 80, PL. 88-2)

4号溝は、6J・K-24・25区にわたり検出した。幅0.65m、深さ約0.1m、主軸方位はN-10°-Wである。調査計画場所に設定されていなかった部分のため、削平段階に入ってから調査で、土層図はとることができなかった。

5号溝 (Fig. 80, PL. 89-1・2, 90-1・2)

5号溝は、7J-2、7K-1・2、7L-1、6M-25、7M-1、6N-24・25、7N-1、6O-23・24・25、6P-22・23・24区にわたって検出された。北側部分7I-2区において遺構面の確認ができた。上端は幅1.0m、下端幅0.05mのV字形を呈する溝である。深さ約0.5mを測る。上端は標高165.30m、下端は標高164.80mである。南東端の上端面は削平されており掘り方は不明である。

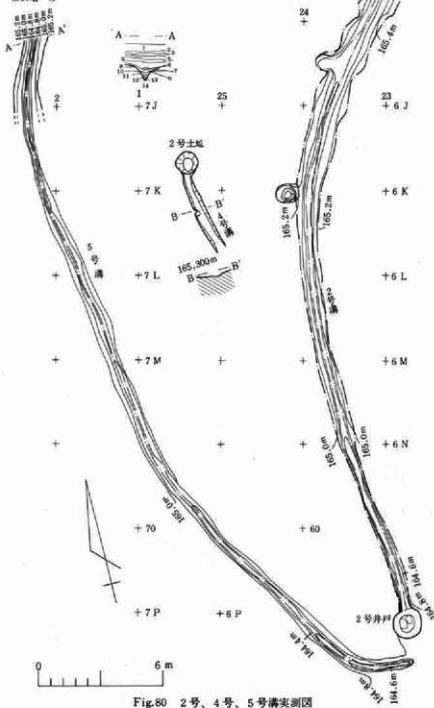


Fig. 80 2号、4号、5号溝実測図

第3章 各 節

下端は164.40mである。南東端は、6P-22区にあり、2号溝に0.4mと接して終結する。北側は東方向に僅かに変化している。

出土石器 (Fig. 91-6・7, PL. 91-8・9)

打製石斧 (Fig. 91-6, PL. 91-8)

基部欠損。現存する長さ7.2cm、幅5.0cm、厚さ1.1cmである。刃部は両面から剥離されている。石

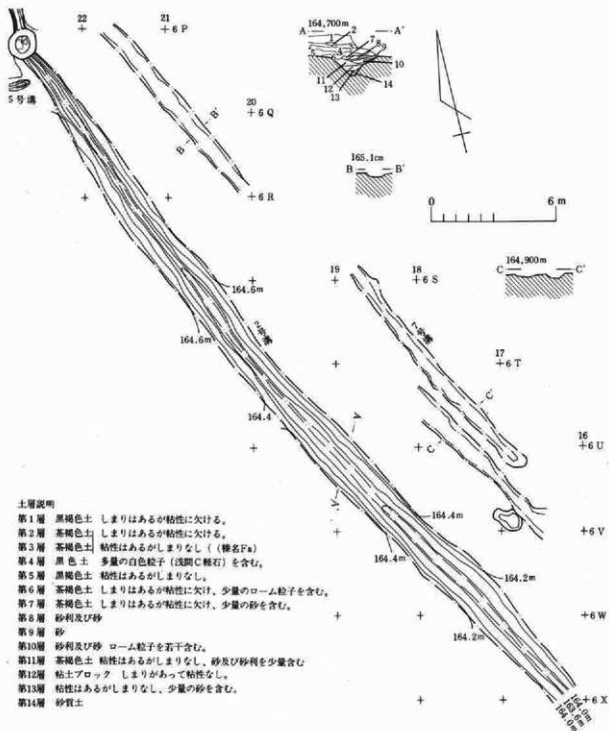


Fig.81 2号、7号溝実測図

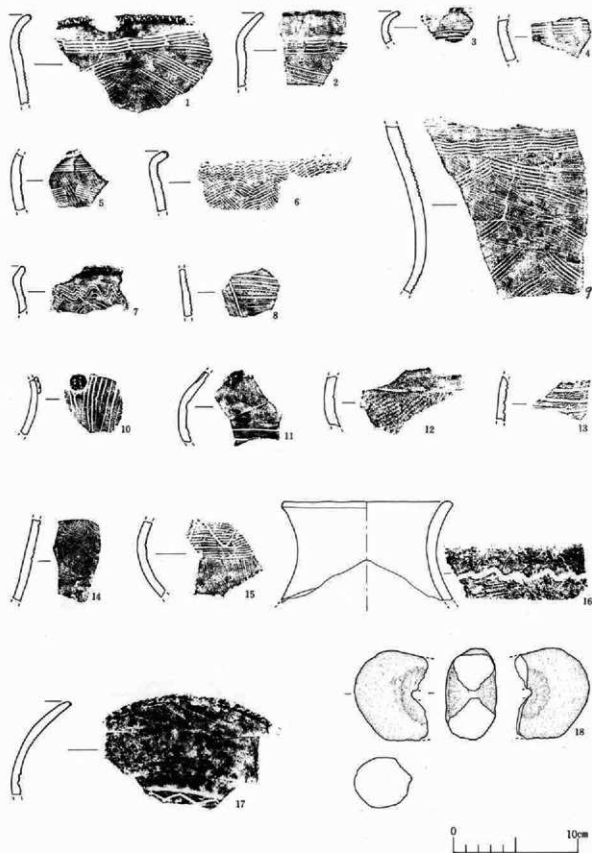


Fig.82 2号溝出土遺物(5N-18、19区)

第3章 各 節

材は安山岩である。重さ0.07kg。

削器 (Fig. 91-7, PL. 91-9)

長さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmである。表面は自然面を残す。石材は黒曜石である。重さ0.003kg。

6、6'号溝 (Fig. 92・93, PL. 92-1・2, 93-1・2)

6号溝は、6G-10、6H-10・11、6I-11、6F-2・3・4・5・6・7、6G-2区に渡り検出された。

6号溝は、6F-5・6・7区にわたり検出された。

6、6'号溝は、6F-5・6区にかけて、一本の溝になる。

6号溝は、6G-10、6H-10・11、6I-11区あたり南西面から北東に走り、6F-7区から6G-2区にかけて、東に向け延びている。6F-2・3区において、17号住居址に切られている。規模は、幅約0.8mである。深さ約0.3mである。6号溝もほぼ同様な計測値である。新旧関係は、土層で見える限り、6号溝が僅かに古い様相をもつが、覆土は、ほとんど同様であり、同一時期に使用されていた溝の可能性はある。

出土石器 (Fig. 95-14・15, PL. 94-3・4)

凹石 (Fig. 95-14, PL. 94-3)

長さ8.7cm、幅9.1cm、厚さ6.0cmである。両面に径3.0cm、深さ約1.0cmの凹面がある。石材は安山岩である。重さ0.54kg。

凹石 (Fig. 95-15, PL. 94-4)

長さ15.7cm、幅10.5cm、厚さ約6.0cmである。両面に1.5~2.0cmの凹面がある。石材は安山岩である。重さ0.9kg。

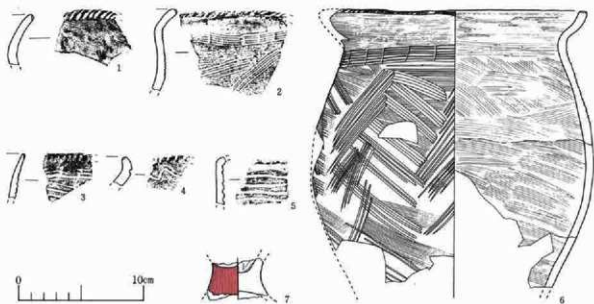


Fig.83 2号溝出土遺物

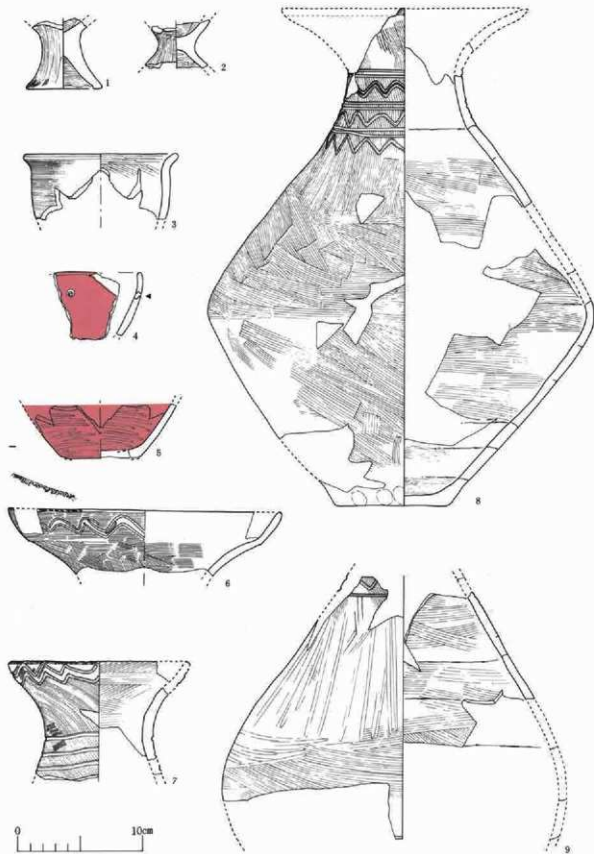


Fig.84 2号溝出土遺物

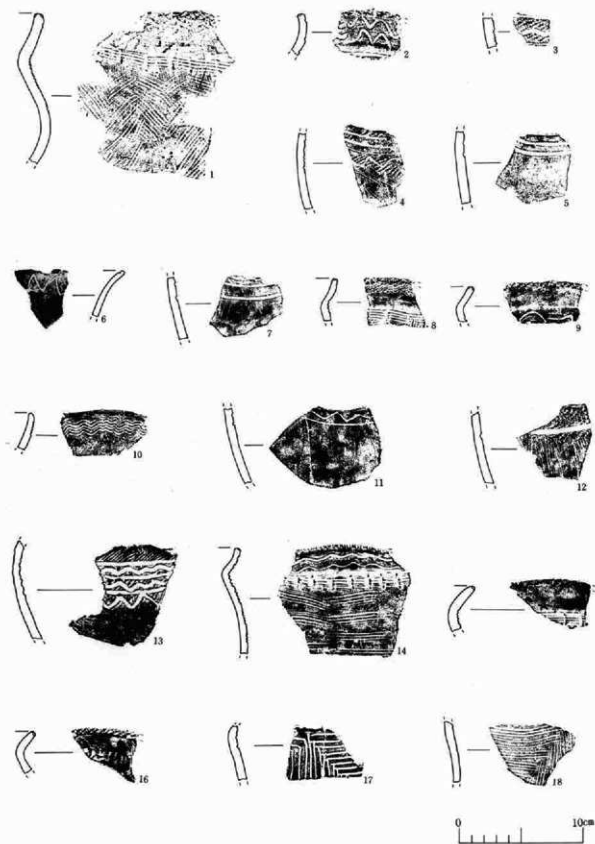
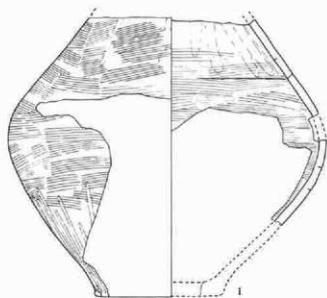


Fig.85 2号溝出土遺物 (61-23、6J-23、6Q-21、6S-20・21、6T-20)



7号溝 (Fig. 96, PL. 95-1・2)

7号溝は、6 P-20・21, 6 Q-20, 6 R-18, 6 S-17・18, 6 T-16・17・18 6 U-16・17区にわたり検出された。幅0.8 m、深さ0.03mの僅かな落ち込みが確認された。極めて不安定な状況である。

出土石器 (Fig. 97-1・2・3, PL. 97-2・3・4)

たたき石 (Fig. 97-1, PL. 97-2)

長さ約10cm、幅7.7cm、厚さ5.6cm、側面に僅かに、たたいた痕跡を確認できた。石材は安山岩である。重さ0.4kg。

床面出土。

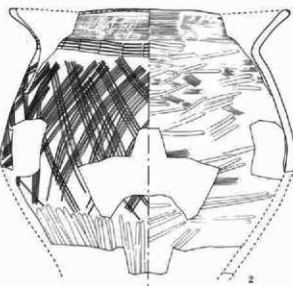
たたき石 (Fig. 97-2, PL. 97-3)

長さ10.8cm、幅9.2 cm、厚さ6.2 cmである。裏面に僅かに、たたいた痕跡を確認できた。石材は安山岩である。重さ0.6kg。

床面出土。

自然石 (Fig. 97-3, PL. 97-4)

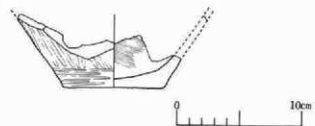
長さ9.0 cm、幅10.0cm、厚さ7.3 cmである。断面はほぼ四角を呈し、裏面に僅かに凹部分がみられるが自然面の可能性が多い。重さ0.84 kg。床面出土。



8号溝 (Fig. 16・34・79, PL. 13-1, 29-1)

5 M-19・20・21, 5 N-19・20区にわたり検出された。

上端は幅0.8 m、下端は幅0.4～0.5 mで、東に向い深くなる。6号住居址、11号住居址の覆土より上面から切り込んでおり時期は不明。



9号溝 (Fig. 98, PL. 98-1・2)

9号溝は5 M-6・7・8, 5 N-5・6・7, 5 O-4・5, 5 P-4区にわたり検出された。上端の幅1.5m、下端の幅0.2m、深さ0.6mのV字形を呈している。

Fig.86 2号溝出土遺物 (61-23, 6J-23)



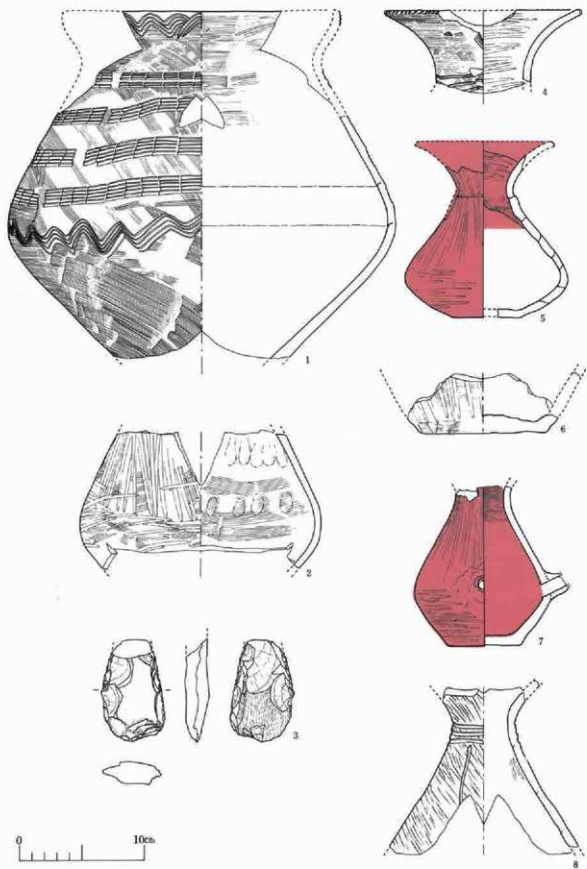


Fig.87 2号溝出土遺物 (6Q-21, 6T-19, 6U-18)

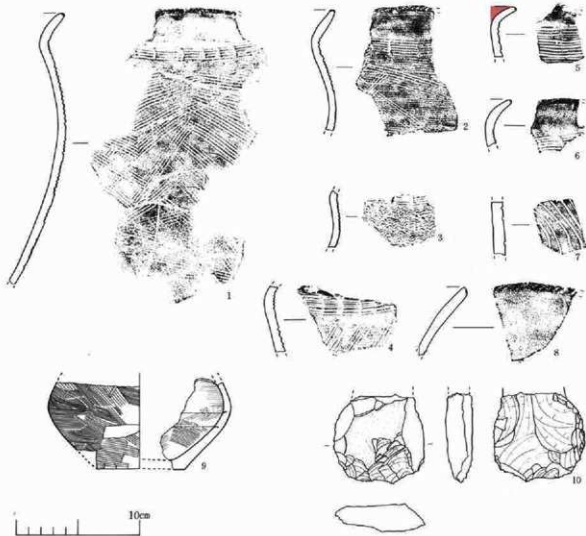


Fig.88 2号溝出土遺物（覆土）

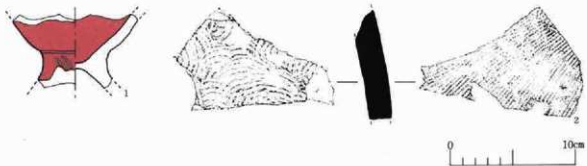


Fig.89 3号溝出土遺物

底面の傾斜は、南東に向い低くなる。9号溝の方向性は、北西および南東に延び、西側が溝の内側になる様相を呈している。溝の形態は、5号溝に類似するが、南北の範囲は不明である。

6 V・W-2区において確認された溝が連続するかは、不明であるが方向として、やや北にずれるにしろ、検出された部分での方向性は一番近い位置にくる。一方、南側に入れた確認トレンチで検出

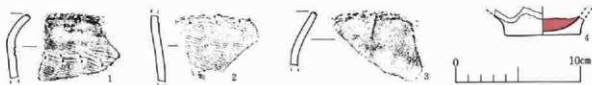


Fig.90 4号溝出土遺物

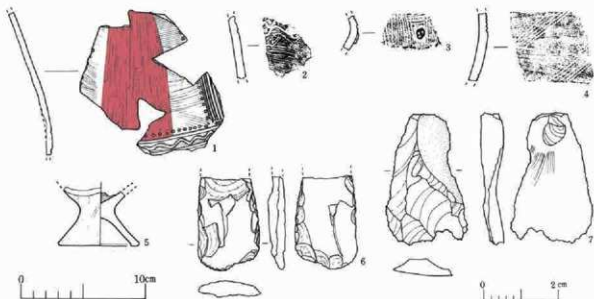


Fig.91 5号溝出土遺物

された10・11・12号溝はいずれも形態は類似しない。このため9号溝などの方向に延びるかをたしかめることができなかった。2・5・9号溝は庚申塚遺跡の規模を把握するために必要となる東・南の範囲を示唆している。

出土石器 (Fig. 99-7・8・9、100-1・2・3・4・5、PL. 99-2・3・4・5・6、100-1・2・3)

自然石 (Fig. 99-7、PL. 99-2)

長さ11.1cm、幅7.2cm、厚さ6.9cmである。溝底面出土、石材は安山岩。重さ0.46kg。

自然石 (Fig. 99-8、PL. 99-3)

長さ14.6cm、幅9.4cm、厚さ7.1cmである。裏面は僅かに、たたいた痕跡があるが明確でない。溝底面出土、石材は安山岩。重さ1.44kg。

自然石 (Fig. 99-9、PL. 99-4)

長さ約11cm、幅8.2cm、厚さ約6.8cmである。溝底面出土。石材は安山岩である。重さ0.68kg。

自然石 (Fig. 100-1、PL. 99-5)

長さ17.8cm、幅13.0cm、厚さ10.0cmである。裏面は中央に僅かに、たたいた痕跡があるが明確でない。石材は安山岩。重さ3.17kg。

凹石 (Fig. 100-2、PL. 99-6) 重さ3.51kg。

一部欠損、長さ20.0cm、幅14.4cm、厚さ11.4cmである。表裏両面に凹部分をもつ。石材は安山岩。

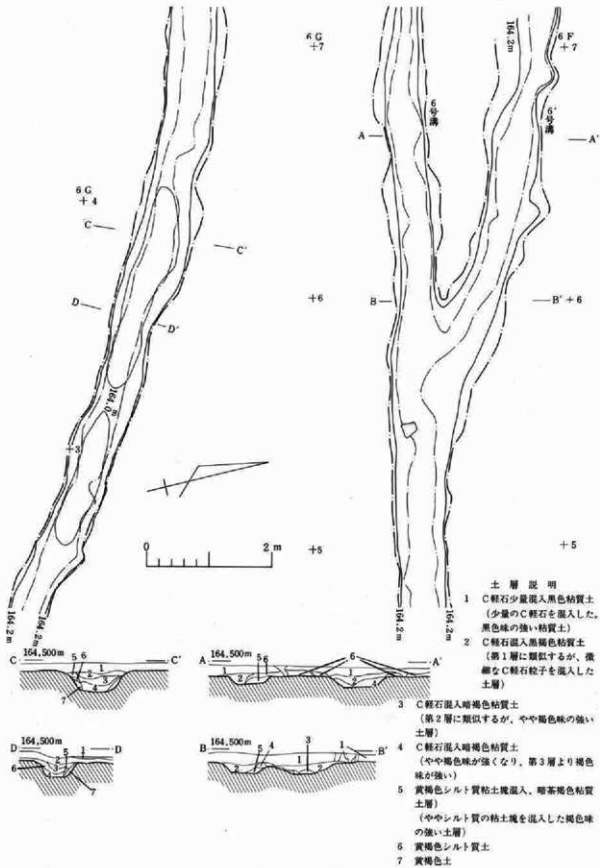


Fig.92 6号、6'号溝実測図

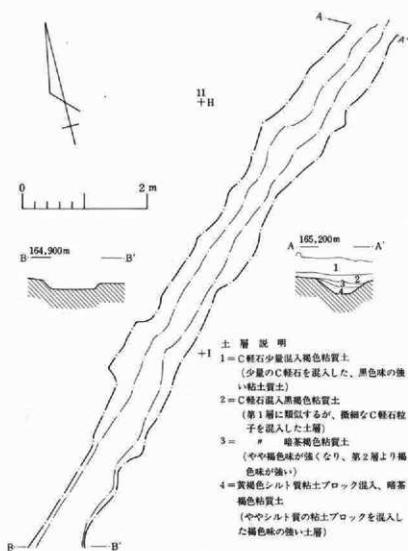


Fig.93 6号溝実測図

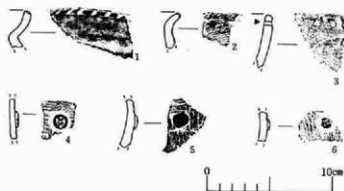


Fig.94 6号溝出土遺物

凹石 (Fig. 100-3, PL. 100-1)
 長さ16.0cm、幅9.6cm、厚さ8.8cm、表面には凹部をもつ。凹の直径約1.5cm、深さ約0.8cmである。他の部分には、擦痕等は見られない。溝底面出土。石材は安山岩である。重さ3.51kg。

自然石 (Fig. 100-4, PL. 100-3)
 長さ17.2cm、幅13.0cm、厚さ10.6cm、断面は三角形を呈する。石材は安山岩である。重さ2.69kg。

凹石 (Fig. 100-5, PL. 100-2)
 長さ10.6cm、幅6.9cm、厚さ1.2cmである。

表面は2ヶ所に凹部分をもち裏面は扁平である。2ヶ所にある凹部は、中央縦方向に2個並んでおり、直径約1.5cmの円形を呈し、深さ約0.3cmである。石材は安山岩である。重さ0.26kgである。溝底面出土。

9号溝出土石器は、溝底面から出土したものであり、自然石も、ほぼ同様な大きさをもつものが多い。周辺に同様な自然石の分布する場所はなく、擦痕等も観察できなかったが、遺跡内出土の自然石は遺構内、覆土出土を含めて、大きさ、形態等が近似すること。また周辺の自然堆積層の中に同様な礫層が分布しないことから考えて、なんらかの意味をもつ遺物と考えられる。

第1節 遺構と出土石器

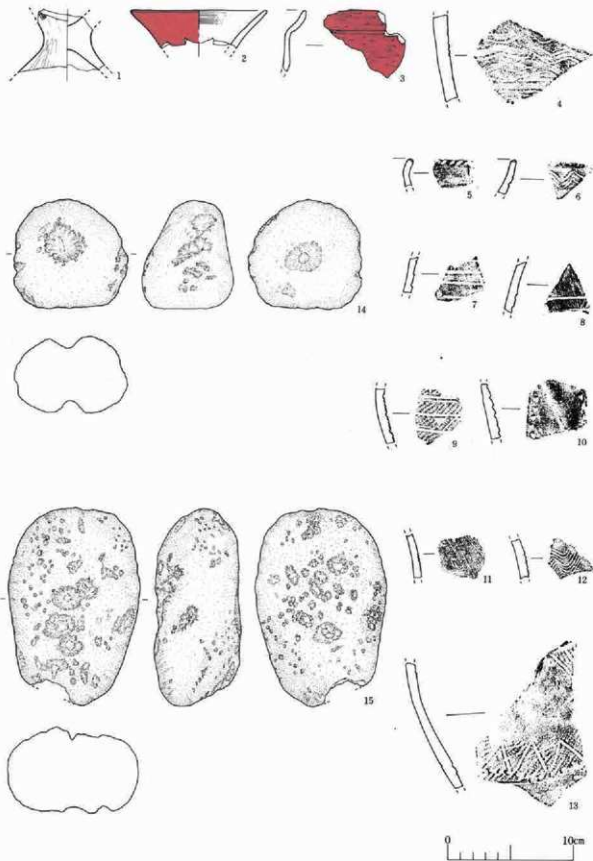


Fig.95 6号溝出土遺物

第3章 各 節

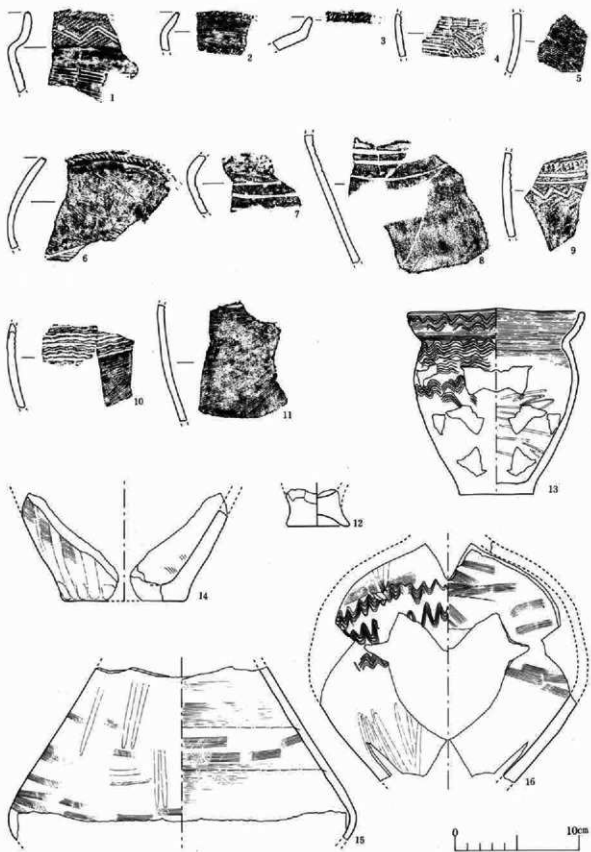


Fig. 96 7号溝出土遺物

10号溝 (Fig. 101, PL.100-5, 101-1・2)

10号溝は、2号溝の南限をおさえるために入れたトレンチに検出された溝である。狭い範囲での確認のため、明確ではないが、2号溝とは形態を異にする。

規模は、上端の幅1.7 m、下端の幅0.7 m、深さ0.45 mを計測する。溝底面は平底を呈している。方向性は、僅かに北側に内向する状況が観察できるが、明確には把握できない。時期は土層観察からみて、C軽石が上面に堆積することや、床面より刷毛目調整痕をもつ土器片の出土から、弥生時代中期後半の溝と考えられる。

11号溝 (Fig. 101, PL. 100-5, PL. 102-1・2)

11号溝は、10号溝と同様2号溝の南限を把握するために入れたトレンチの6 C'・D'・7区から検出された溝である。

規模は、上端の幅約1.2 m、下端の幅約0.39 m、深さ0.3 mを計測する。溝の底面は、平底を呈している。土層堆積は11号溝とはほぼ同様であり、遺物の出土は、床面と覆土内からであった。時期は弥生時代中期後半と考えられる。溝の方向は、僅かに北側に内向する。

出土石器 (Fig.103-10・11, PL.103-2・3)

凹石 (Fig. 103-10, PL. 103-2)

長さ10.5 cm、幅6.5 cm、厚さ4.9 cm、である。側面と裏面に凹部分

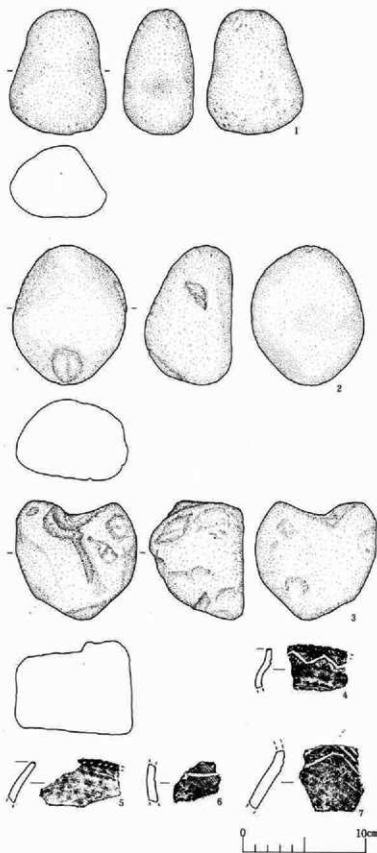


Fig.97 7号溝出土遺物

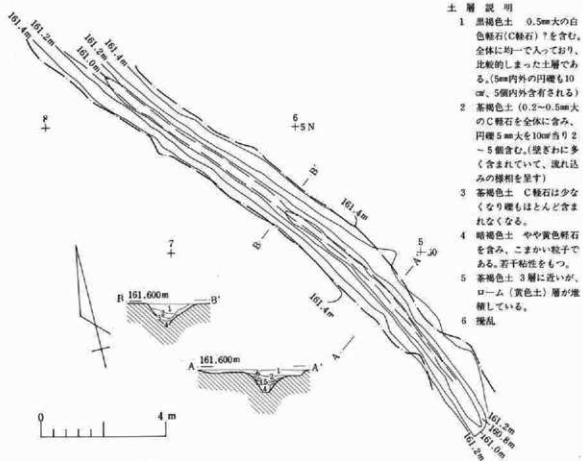


Fig.98 9号溝実測図

がある。凹部分の大きさは2.0×1.5cm、深さ0.5cmである。溝底面出土。石材は安山岩である。重さ0.32kg。

自然石 (Fig.103-11, PL.103-3)

3辺が欠損している。扁平な石である。現存する長さ16.4cm、幅16.6cm、厚さ6.4cmである。溝底面出土。石材は安山岩である。重さ2.6kg。

12号溝 (Fig.101, PL.100-5, 104-1・2)

12号溝は、10号溝・11号溝と同様2号溝の南限範囲を確認するために入れたトレンチの6B'・6・7区において検出された溝である。

規模は上端の幅1.44m、下端の幅0.2m、深さ約0.5mである。断面の形態はU字状を呈している。2号溝の形態とは異なる。遺物の出土状況は、溝掘り方部分と、覆土上面からであることから、溝の時期は、弥生時代中期後半以前である。溝の方向は、10号溝・11号溝より僅かに東側に北に向う傾向がみられる。

以上のことから、6Y・5・6~6G'・7・8区にかけて2号溝追求のトレンチを入れたが、形態がことなることから明確にすることができなかった。しかし、このトレンチにおいて弥生時代中期後半の遺構が、南に広がるのが明確になった。

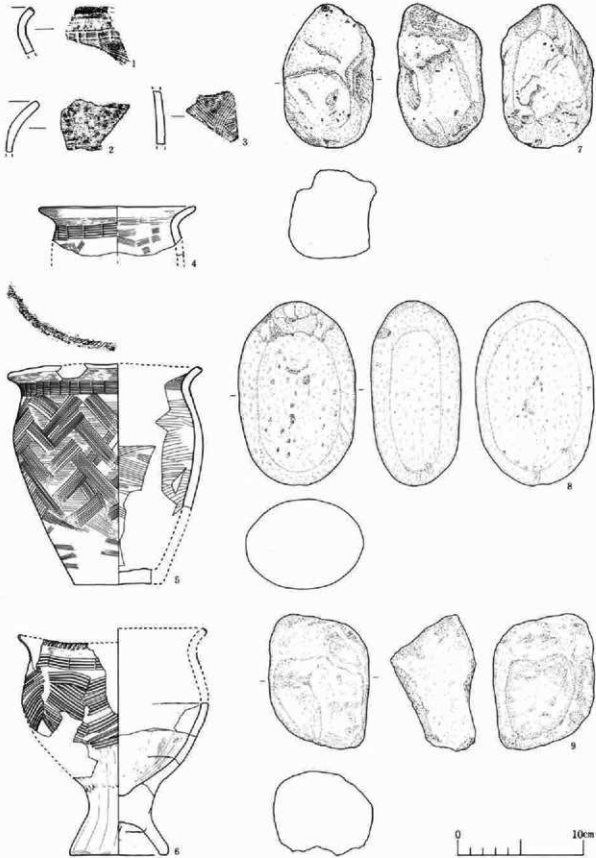


Fig.99 9号溝出土遺物

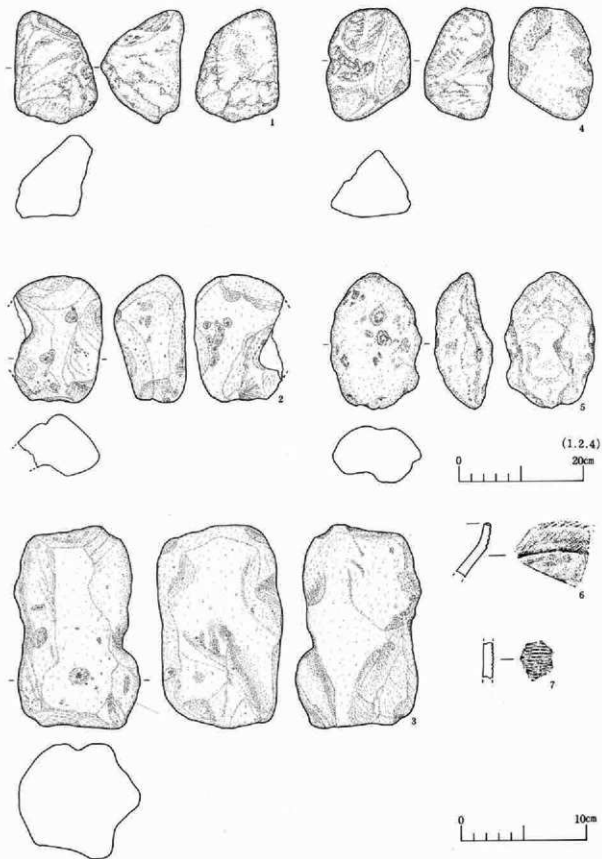


Fig.100 9号溝出土遺物

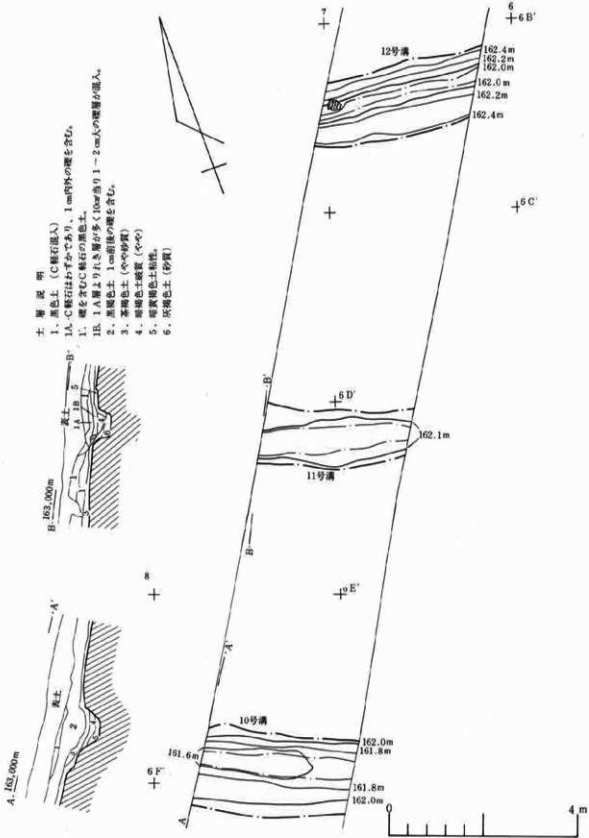


Fig. 101 10、11、12号溝実測図

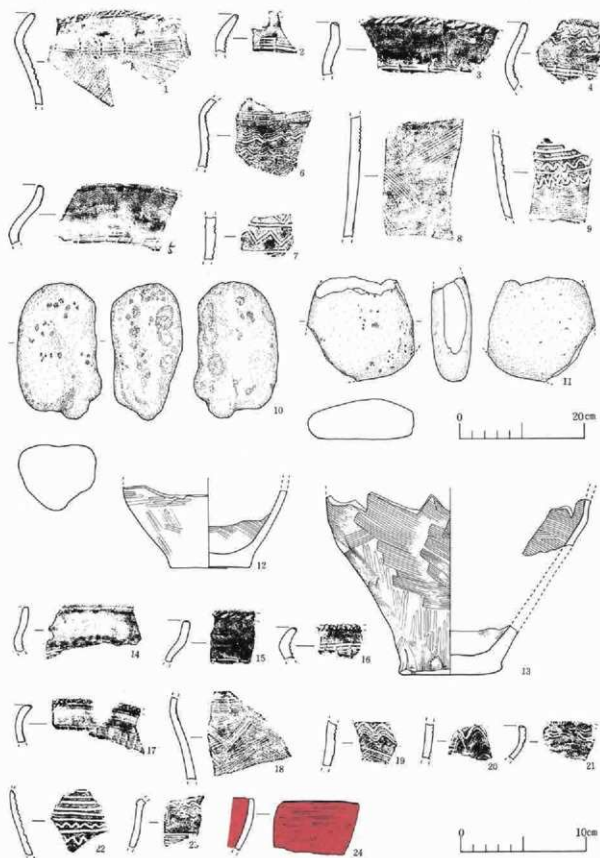


Fig.103 11号溝出土遺物

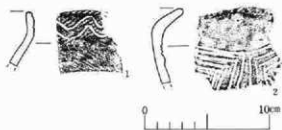


Fig.104 11号溝出土遺物



Fig.102 10号溝出土遺物

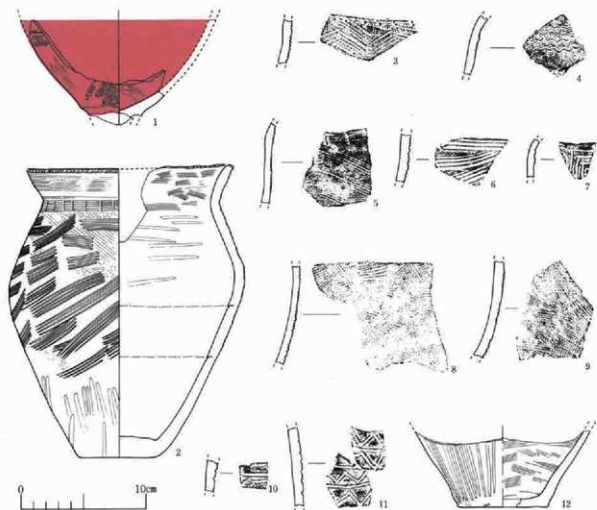


Fig.105 12号溝出土遺物

第3章 各 節

1号土壇 (Fig.106, PL.106-1)

1号土壇は5J-23区において検出された。

規模は、上端長軸(東西)約1.4m、短軸(南北)約1.33m、下端長軸(東西)0.82m、短軸(南北)0.72m、深さ0.62m、底面は平坦な円形を呈す土壇である。1層覆土より弥生式土器片が出土している。

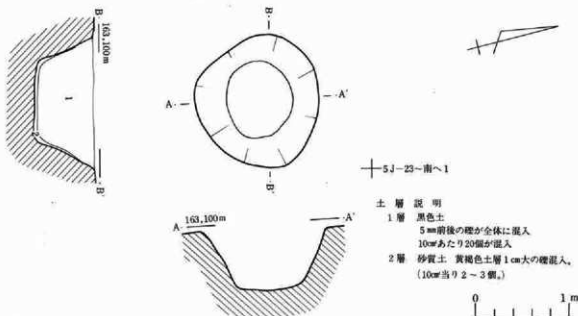
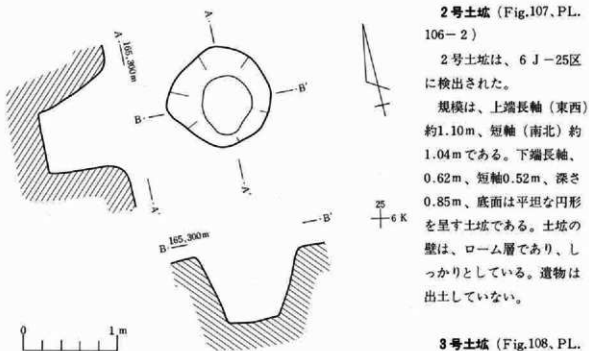


Fig.106 1号土壇実測図



2号土壇 (Fig.107, PL.106-2)

2号土壇は、6J-25区に検出された。

規模は、上端長軸(東西)約1.10m、短軸(南北)約1.04mである。下端長軸、0.62m、短軸0.52m、深さ0.85m、底面は平坦な円形を呈す土壇である。土壇の壁は、ローム層であり、しっかりとしている。遺物は出土していない。

3号土壇 (Fig.108, PL.107-1)

3号土壇は、6I-23区

Fig.107 2号土壇実測図

第1節 遺構と出土石器

に検出された。

規模は、上端長軸(南北)0.92m、短軸(東西)0.70m、短軸(東西)0.68m、深さ0.68m、底面は平坦で円形を呈す土壇である。2号溝は切っている。

1号井戸 (Fig.109, PL. 107-2、108-1)

1号井戸は、6H・I-15区に検出された。

規模は、上端長軸2.02m、短軸1.73m、下端長軸0.70mのほぼ円形を呈し、底面か

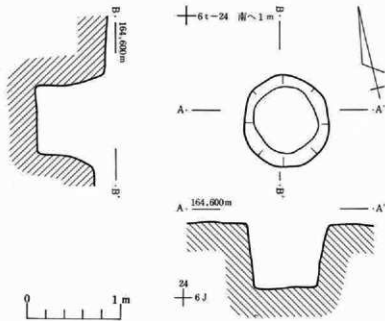


Fig.108 3号土壇実測図

ら0.2m上位で段をもつ。深さ1.47mである。当井戸は、13号住居址の覆土を切って掘り込まれている。

土層説明

1. 明茶褐色土 砂質土2~5mm大の礫を含む。10cmに1個。
2. 茶褐色土 砂質土
3. 暗茶褐色土
- 3* # 3層より粘性が強い。
4. 黄褐色土
5. 暗茶褐色土 粘性が強い。
6. # 砂質で水分を含む。
7. 黒褐色土 ビート質。
8. 砂利 2~3cm大の礫を含む。10cmあたり約8個。(砂を含む)
9. 暗茶褐色土 ビート質
10. 黒色土 ビート質

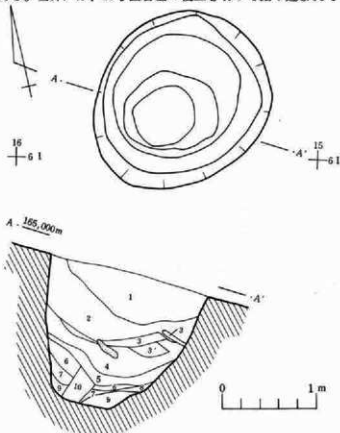


Fig.109 1号井戸実測図

2号井戸 (Fig.110, P L. 90-1)

2号井戸は6P-22区に検出された。

規模は、上端長軸1.5m、短軸1.32m、下端長軸0.82m、短軸0.70m、深さ1.35mのほぼ円形を呈し、底面は、ほぼ平坦である。内部覆土中より自然石3個が出土した。

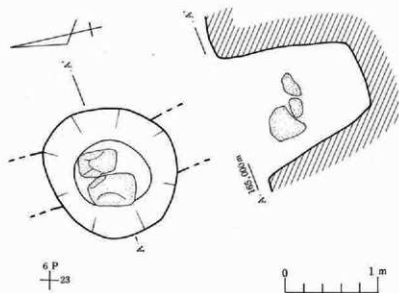


Fig. 110 2号井戸実測図

1号掘立建物址 (Fig. 111, PL. 108-1)

1号掘立は、6 H-15区を中心に検出された。柱穴は6本確認された。方位はN-29°-Eである。梁行2間、桁行2間、梁行の柱間は0.9 m、桁行の柱間は1.4 m、0.7 mである。柱穴は0.15~0.2 mの方形プランをもつものと、円形プランをもつものがみられる。深さは0.15~0.3 mである。南西に1号井戸址が検出されている。時期は不明。

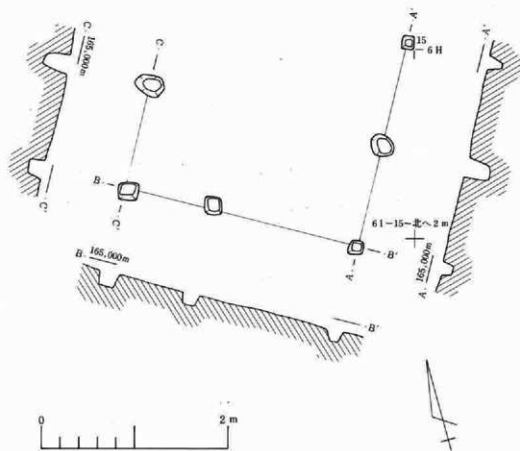


Fig. 111 掘立建物址実測図

第2節 遺構出土の土器観察表

1号住居址出土土器

図版番号 写真番号	部 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 地 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 6-2 PL. 4-2	壺	床 面 頸 部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 白	口縁部に向い僅かに薄くなる。	頸・①縄文 ②3条の区画横線文	施文単位は ①→②
Fig. 6-3 PL. 4-2	小型袋 (台付?)	床面% %	口 8.0	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	赤 褐	器内はほぼ均一である。胴部は丸みをもつ。口縁部は丸みをもつ。内外面とも口縁部は横撫で。	口・摩耗がはげしく不明。 頸・コの字重文。	
Fig. 6-4 PL. 4-2	袋	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒を多 量に含む 地 やや軟弱	赤 褐	器内は全体にほぼ均一。口縁部で僅かに薄い。口縁部は大きく外反しながらたち上がる。内外面とも口縁部は横撫で。胴部は横方向に荒磨き。	頸・5条1単位の縦状文、時計まわり。	
Fig. 6-5 PL. 4-2	壺	床 面 頸 部		胎 砂粒混入 地 堅緻	赤 褐	外面は縦方向に刷毛目。内面は横撫で。	頸・①2本の横線文 ②山形文	
Fig. 6-6 PL. 4-2	壺	床 面 口 縁 部	口 16.6	胎 砂粒を僅 かに含む 地 堅緻	赤 褐	頸部から口縁部に向けてラッパ状に大きく外反。巾3cmの粘土紐の輪積痕。外面は櫛状工具により器面調整後、横撫で整形。内面は横撫で。	口・縄文	
Fig. 6-7 PL. 4-7	壺	床 面 頸 部	頸 7.6	胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 褐	頸部から口縁部にかけて大きく外反。外面は櫛状工具で器面調整。内面は横方向に荒磨き。	頸・①地文に縄文 ②2本の横線文	施文単位は ①→②
Fig. 6-8 PL. 4-8	袋	床 面 胴中部から口縁部 %	口 16.8 胴 17.9	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	明褐色	胴部に最大幅があり丸みをもつ。頸部から口縁部にかけて外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は、胴部が厚く、頸部から口縁部にかけて薄い。外面胴部は刷毛目が横走。口縁部は横撫で。内面胴部は櫛状工具により横方向に器面調整後、胴部と口縁部に横方向に荒磨き。	頸・6条1単位の縦状文、時計まわり。 肩・櫛状文 胴・櫛状文	肩部~胴部 にかけて流 状文が連続
Fig. 6-9 PL. 4-3	鉢	床 面 胴下部から 口 縁 部 %	口 17.4	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	赤 褐	胴下部より口縁部に向い内湾しながらたち上がる。口縁端部は丸みをもつ。内外面に輪積痕。器内は横撫で。		内外面赤色 塗彩。
Fig. 6-10 PL. 4-4	高 杯	床 面 杯 部 %	口 18.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰 白	杯部の下位からほぼ直線で口縁部に向い。口縁部付近に至りやや内湾。器内は内湾する部分より口縁端部にかけて薄い。外面口縁部は横撫で。全体に摩耗がはげしい。内面胴部は横方向に荒磨き。		内外面赤色 塗彩。

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 6-11 PL. 4-5	壺	床面 頸部から口縁部	口 19.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	淡 橙	頸部より口縁部に向い外反。口縁上部で受け口状を呈す。 器内はほぼ均一、受け口部で僅かに薄い。 外面は頸部から口縁中部にかけて縦方向に刷毛目、口縁中部では 横方向に髹状工具で器面調整。口縁上部は横撫で。	口縁・刷毛目 口・2本の波状沈線文 頸・1本横線文が見られる。	
Fig. 6-12 PL. 4-6	壺	床面 底部	底 9.7	胎 砂粒混入 焼 堅緻	淡 黄	外面側下半部は髹状工具により縦方向に調整。 内面は磨磨き。		地成後に 底部穿孔
Fig. 6-13 PL. 4-9	甕	床面・覆土 %	口 25.6 高 22.0 底 6.5	胎 微細砂粒 小埋混入 焼 堅緻	淡 黄	底部は平底。胴部は内湾を呈す。口縁部は受け口状呈す。 頸部は押え肌。口縁端部は僅かに歪む。 外面胴部は刷毛目調整後、下半部は磨磨き。口縁部は横撫で。 内面胴部は刷毛目調整が横走後、側下半部は縦方向に磨磨き。 口縁部は横撫で。	口縁・縄文 口・2本の波状沈線文。 頸・6条1単位の縷状文、時計まわり。 肩・一部に髹描波状文1単位6条の羽状直線 文。肩部から胴部下半まで羽状直線文。	地文類位は ①縷状文② 髹描波状文 ③羽状直線 文
Fig. 6-14 PL. 4-10	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 褐	頸部上半部から口縁部にかけて外反。口縁上部でやや内湾。 口縁端部は平たい。器内は均一。	口縁・縄文 口・髹描波状文 頸・波状文が一部確認。	
Fig. 6-15 PL. 4-10	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にふい 橙	頸部上半部から口縁端部にかけて外反。器内は均一。 口縁端部は丸い。内外面とも横撫で。	口縁・刷毛目 頸・縷状文、時計まわり。	
Fig. 6-16 PL. 4-10	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰黄褐	器内は均一。口縁部に向い外反。 外面は斜方向に刷毛目。内面は横撫で。	頸・5条1単位の髹描波状文。	

2号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 9-1 PL. 6-1	甕	床面 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 褐	肩部から頸部にかけて内湾。頸部から口縁中位まで外反。口縁中 位で受け口状。器内は均一。外面口縁部横撫で、内面胴部は横方 向の磨磨き、口縁部は横撫で。	口縁・縄文 頸・5条1単位の縷状文、時計 まわり。肩・髹描波状文、ボタン状貼付文 (4つの円形刺突)	
Fig. 9-2 PL. 6-1	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 褐	胴部最大幅を中心とした破片。頸部は外反。器内はほぼ均一。 内外面とも髹状工具により器面調整。頸部外面は横撫で。		
Fig. 9-3 PL. 6-1	壺	床面 肩部から頸部		胎 小埋混入 焼 堅緻	淡黄橙	肩部は内湾。頸部は外反。器内は頸部で厚くなる。外面は斜方向 に器面調整。内面は横方向に髹目調整。	頸・6条1単位の髹描波状文3段。	

Fig. 9-4 PL. 6-1	裏 床面 胴部		胎 砂礫混入 焼 やや軟弱	明黄褐色	胴部下位から中位に向け内湾。 外面は刷毛目調整後、横方向に荒磨き。内面は櫛状工具で器面調整後、横方向に荒磨き。	胴・4条1単位の櫛状工具による羽状直線文	
Fig. 9-5 PL. 6-1	壺 床面 胴部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄褐色	器内は均一。外面は櫛状工具で調整後、縦方向に荒磨き。内面は横撫で。	胴・2本1単位の波状文を施した後、横線文を施文。	
Fig. 9-6 PL. 6-1	不明 床面 把手	横6.0+2 縦 3.0 幅 3.2	胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄褐色	把手は土器本体に付けたものと考えられ、僅かに接合面が湾曲。接合面は幅が広く、末端部に向い狭くなる。割れ目より粘土の板を2枚貼り合わせた状態が観察できる。 上・下面は櫛状工具により器面調整を行なっている。	把手・上面は横方向に最大幅部分で7条の横線文を描き、その後縦方向、接合部に向い3本の沈線のみ見える。	
Fig. 9-7 PL. 6-2	裏 床面 頸部から口縁部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	にぶい 黄褐色	口縁部は大きく外反。口縁部は僅かに薄くなる。口縁部は内外面とも横撫で。肩部は内外面とも斜方向に刷毛目調整。	口端・端文。胴・6条1単位の櫛状文時計まわり。肩・羽状直線文	
Fig. 9-8 PL. 6-3	裏 床面 宛形(転用)	直径約 7.0	胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄褐色	裏または、壺の胴部を転用。中央に輪横痕。やや湾曲。2つの穴があけられている。胴部の破片を丸くするためまわりを細かく打ちかいている。	裏か壺の胴部を転用。	
Fig. 9-9 PL. 6-6	裏 床面 胴部から口縁部 瓦	口 15.5	胎 小礫・砂 粒混入 焼 やや軟弱	赤土	胴部は中央で張る。口縁部は受け口状。器内は均一。外面胴部・口縁部は縦方向に荒磨り後、横方向に荒磨き。内面胴部は刷毛目調整後、横方向に荒磨き。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 9-10 PL. 6-4	壺 床面 胴下部	底 9.4 胴 23.9	胎 砂粒・小 礫混入 焼 堅緻	にぶい 黄褐色	底部から内湾しながら大きく外へ張り出す。最大幅は胴部。胴部内面最大幅部分に輪横痕。底部は内面で胴部の方から押しつけた痕跡。外面は磨目。外面胴部下位は磨目。胴部下中央部は斜方向に磨目。胴部最大幅部付近は横方向に荒磨き。内面は摩耗。		
Fig. 9-11 PL. 6-5	裏 床面・覆土 瓦	口 23.6 頸 20.8	胎 小礫混入 焼 やや軟弱	黄褐色	最大幅は口縁部。底部より胴中位に向け内湾。胴部から頸部にかけて僅かに内側に向き頸部に至る。口縁部は受け口状。粘土柱幅3.5cmの輪横痕。器内は胴下部と、口縁部で厚さを増す。外面胴下部は斜方向に刷毛目。胴中部から頸部にかける横方向に刷毛目。口縁部は横撫で。内面胴部は斜方向と横方向に刷毛目。口縁部は横撫で。	口・4条1単位の櫛状波状文。 頸・4条1単位の波状文、時計まわり。 肩・4条1単位の櫛状波状文の胴部まで3段施文	櫛状文施文後、肩部および胴部に櫛状波状文を施文。
Fig. 9-12 PL. 6-7	注口 注口部分	注口径約 1.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	淡褐色	注口上部の注口部分の破片。外面上方から穴をあけている。注口部分は外側より貼りつけてある。内面は櫛状工具により調整。一部分横撫で。		外面は赤色塗彩。
Fig. 9-13 PL. 7-1	裏(壺) 覆土 底部	底 6.5	胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	にぶい 黄褐色	外面は底部との接合部で荒研ぎ。胴部下位は横方向に刷毛目。底部は横方向に荒磨き。内面は底部に胴部の方向より粘土を押しつけている。		

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 9-14 PL. 7-3	壺	床土 胴下半部	底約10.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄褐色	底部から胴部にかけて僅かに内湾。器内は胴部下位で厚く、胴部 中位で薄い。外面胴下半部は縦方向に荒磨き、胴部は横方向に器 面調整。		
Fig. 9-15 PL. 7-2	壺	床土・覆土 胴部中位から頸部		胎 小粒混入 焼 堅緻	浅黄褐色	胴部に最大幅をもつ。頸部に向い内湾。頸部から口縁部に向い外 反。胴部中位は横方向に荒磨き。肩部は縦方向に荒磨き、および 刷毛目。頸部は刷毛目が細かく縦走。内面は稜状が微しい。	頸・4条1単位の稜状文が2段連続で時計ま わり。	

3号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 11-1 PL. 7-5	甕	床土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 褐	受け口状口縁。器内はほぼ均一。外面口縁部は横撫で。 内面頸部は刷毛目。口縁部は横方向に荒磨き。	口縁・縄文。 口・波状比線文が3本入る。 頸・稜状文、時計まわり。	
Fig. 11-2 PL. 7-5	甕	床土 口縁部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	浅黄褐色	受け口状口縁。器内は頸部がやや厚い。外面は横撫で。 内面は横方向に荒磨き。	口縁・先端の突った棒状工具により刺突。 口・帯描波状文。 頸・稜状文、時計まわり。	
Fig. 11-3 PL. 7-5	甕	床土 口縁部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	灰 白	受け口状口縁。外面口縁部は横撫で。 内面口縁部は横方向に荒磨き。	口縁・縄文。 口・4条1単位の帯描波状文。 頸・稜状文、時計まわり。	
Fig. 11-4 PL. 7-5	甕	床土 肩部から口縁部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	灰黄褐色	受け口状口縁。器内は口縁部で薄くなる。外面肩部は刷毛目がの こり、口縁部は内外面と内面頸部は横撫で。	口縁・刷毛目。 口・2本の削れた山形文を施文。 肩・6条1単位の帯描波状文。	
Fig. 11-5 PL. 7-5	甕	床土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰黄褐色	僅かに受け口状口縁。器内の厚さは均一。 外面は刷毛目が横走。内面は横撫で。	口縁・縄文。 口・①縄文②2本の波状比線文の施文順位。 頸・2本の沈線が横走。	ボタン状胎 付文は横に 沈線が入る
Fig. 11-6 PL. 7-5	甕	床土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄褐色	口縁部は内湾して口縁端部に至る（やや受け口状を呈す） 器内は頸部で厚い。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口縁・縄文。 口・7条1単位の帯描波状文。	
Fig. 11-7	甕	床土		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰黄褐色	口縁部は大きく外反する。器内は頸部で僅かに厚い。外面は斜方	口縁・刷毛目。	

PL. 7-5		口縁部		焼 堅緻		向に刷毛目が入り、器面調整を行なっている。内面は木口状工具と思われる横方向への調整。	
Fig. 11-8 PL. 7-5	小型甕	床 面 胴部から口縁部	口 12.5	胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	明黄褐色	最大幅は胴部ほぼ中央にあると推測される。口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも口縁部は横撫で、内面胴部は横状工具で横方向に器面調整。	頸・7条1単位の櫛歯状文、胴部に連続。波状文は1回するの6~8回切って放文
Fig. 11-9 PL. 9-1	甕	床 面 胴部から口縁部	口 14.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄褐色	最大幅は胴にあり、口縁部は受け口状。口縁部は内外面とも横撫で。	口縁・縄文。 口・4条1単位の櫛歯状文。 頸・4条1単位の波状文。 肩・地文は縄文。縦方向と斜方向に沈線。
Fig. 11-10 PL. 9-2	甕	床 面	口 18.5 胴 20.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 澄	口縁部は僅かに外反する。胴部に最大幅をもつ。外面胴部は縦方向、内面は横方向に沈磨き。	口縁・刷み目。 頸・重状文。 胴・4条1単位の櫛歯状文を4段もつ。
Fig. 11-11 PL. 9-3	甕	床 面・覆 土 肩部から頸部	頸 10.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 澄	頸部は口縁部に向い外反。外面肩部は、刷毛目。内面は磨目調整後、沈磨き。	頸・7条1単位の波状文。 肩・7条1単位の羽状直線文。
Fig. 11-12 PL. 7-5	甕	床 面 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄褐色	口縁部は受け口状。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面胴部は磨目調整。口縁部は内外面とも横撫で。内面胴部は横方向に沈磨き。	口・2本の山形文。 頸・6条1単位の波状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて7条1単位の羽状直線文。
Fig. 11-13 PL. 7-5	甕	床 面 肩部から頸部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	浅黄褐色	器内は頸部で薄くなる。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に沈磨き。	頸・重状文、時計まわり。 肩・4条1単位の櫛歯状文、胴部に続く。
Fig. 11-14 PL. 7-5	小型甕	床 面 胴 部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	暗黄褐色	器内はほぼ均一な厚みをもつ。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に沈磨き。	胴・コの字重文が肩部より続く。
Fig. 11-15 PL. 7-5	壺	床 面 底部から胴下半部	底 8.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄褐色	胴部中位に向いひろく。器内は胴中位に向け薄くなる。外面は縦方向に沈磨き、内面は一部分に輪横紋。	
Fig. 11-16 PL. 9-4	甕	床 面 底部から胴下半部	底 10.0	胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄褐色	胴部に向い張り出す。外面は輪撫で後、縦方向に沈磨き。外面に輪横紋がみられる。	
Fig. 11-17 PL. 9-7	壺	床 面 頸部から口縁部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	浅黄褐色	受け口状口縁。 外面頸部は刷毛目。口縁部は横撫で。	口縁・刷み目。 口・2条1単位の波状沈線文。
Fig. 11-18 PL. 9-7	壺	床 面 頸部から口縁部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄褐色	口縁部に向い大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は横撫で。	内面赤色染 彩。

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 11-19 PL. 9-7	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 褐	頸部は口縁部に向い外反。 外面は斜方向に楕圓整形。内面は横撫で。	頸・3本の横線文。	
Fig. 11-20 PL. 9-7	壺	床面 肩部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。 内外面とも横方向に刷毛目調整。	肩・沈線による山形文の下に横線文が入り、 腹方向に5条1単位の櫛歯流文が入る。	
Fig. 11-21 PL. 9-7	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部に向い外反。 内面は横撫で。	頸・篋状工具により格子目文。	22と同一個 体。
Fig. 11-22 PL. 9-7	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部に向い外反。 内面は横撫で。	頸・篋状工具により格子目文。	21と同一個 体。
Fig. 11-23 PL. 9-7	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	茶 褐	口縁部に大きく外反。 内外面とも横撫で。	頸・2本の横線文の間に、4条1単位の櫛 歯流文。	
Fig. 12-1 PL. 9-5	瓶	床面 底部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	底部から胴部に向け外反。胴部中央に向け薄くなる。 外面は斜方向に刷毛目、内面は斜方向に荒磨き。		
Fig. 12-2 PL. 9-6	高杯	床面 脚部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	淡 黄	接合部から脚、裾部にかけて大きくひろく。 外面は斜方向に刷毛目。内面は横撫で。		内外面とも 赤色色彩。
Fig. 12-3 PL. 10-3	壺	床面 肩部から頸部		胎 小砂粒混入 焼 堅緻	暗黄橙	頸部で口縁部に向け外反。 外面は縦方向に荒磨き。内面は横撫で。	頸・2本の横線文。 肩・縦方向に沈線、2本確認。	
Fig. 12-4 PL. 10-1	壺	床面 胴下半部から口縁部	口 6.9 頸 9.5 胴 30.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴部に最大幅をもち、口縁部は大きく外反。外面胴部は横撫で、 口縁部は横撫で。内面は斜方向に刷毛目調整。口縁部は横方向に 荒磨き。	口端・縄文、頸・縄文を地文にし、横線文と 山形文が交互に施文。	口縁部に凹 形の穴を穿 つ。
Fig. 12-5 PL. 10-2	篋	床面 5N-16区	口約20.0 頸約16.6 胴約18.6 底 6.9 高約24.0	胎 小砂粒混入 焼 堅緻	淡 黄	胴部は丸みをもち、口縁部は外反。 外面胴部は斜方向に刷毛目。胴下半部は斜方向に荒磨き。 口縁部は、内外面とも横撫で。内面胴部は斜方向に楕圓調整後、 一部分荒磨き。	口端・擬似縄文。 頸・籬状文、時計まわり、6条1単位。 肩・胴部にかけて羽状直線文。	全体に悉む。
Fig. 12-6 PL. 10-4	小型篋	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸みをもち薄くなる。 口縁部は、内外面とも横撫で。	頸・3条1単位の籬状文、時計まわり。 肩・3条1単位の羽状直線文。	
Fig. 12-7	篋	覆土		胎 砂粒混入	褐	口縁部は外反し、口縁端部は丸みをもち、器内は頸部で薄い。	口端・刷毛目。	

PL. 10-4		頸部から口縁部	地 やや軟弱		口縁部は内外面とも横撫で、外面頸部は縦方向に磨き。	頸・壺状文、時計まわり。	
Fig. 12-8 PL. 10-4	装	覆土 頸部から口縁部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は平たい。 外面頸部は斜方向に刷毛目、口縁部内外面は横撫で。	口端・繩文。 口・2条1単位の波状直線文。 頸・黄線文。	
Fig. 12-9 PL. 10-4	装	覆土 口縁部	胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	受け口状口縁。口縁部は平たい。 外面は横方向に刷毛目、内面は横撫で。	口端・繩文。 口・3条1単位の横波状文。	
Fig. 12-10 PL. 10-4	装	覆土 頸部から口縁部	胎 小礫混入 地 やや軟弱	褐	受け口状口縁を呈し、器内はほぼ均一。口縁部は平たい。 内外面とも横撫で。	口端・刷毛目。 頸・壺状文、時計まわり。	
Fig. 12-11 PL. 10-4	装	覆土 頸部から口縁部	胎 小礫混入 地 やや軟弱	橙	口縁部は、お平かに受け口状を呈す。口縁部は丸みをもつ。器内は均一。内外面とも横撫で。	口端・繩文？。 頸・7条1単位の横波状文。	
Fig. 12-12 PL. 10-4	装	覆土 胴部から頸部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	暗黄橙	胴部は大きく張り、頸部から口縁部にかけて外反。 内外面とも横撫で。	胴・肩部から横波状文。	
Fig. 12-13 PL. 10-4	装	覆土 肩部から頸部	胎 小礫混入 地 やや軟弱	にふい 黄 橙	肩部は丸みをもつ。器内は均一。 外面は斜方向に刷毛目、内面は斜方向に磨き。	頸・壺状文、時計まわり。 肩・山形文の中に横波線文。	
Fig. 12-14 PL. 10-4	装	覆土 肩部	胎 砂粒混入 地 堅緻	にふい 赤 褐	器内はほぼ均一。 外面は横方向に刷毛目、内面は斜方向に磨き。	肩・山形文の中に斜走波線文（平行）。	
Fig. 12-15 PL. 10-4	装	覆土 肩部から頸部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄	肩部は丸みをもつ。器内は外反。 外面は斜方向と縦方向に刷毛目。	頸・壺状文、時計まわり。肩・4条1単位の 横波状文。肩・胴部にかけて斜行直線文。	
Fig. 12-16 PL. 10-4	装	覆土 頸部	胎 砂粒混入 地 堅緻	明黄褐	口縁部に向けて外反を始める。外面は縦方向に磨き、内面は斜 方向に刷毛目。	頸・山形文と横線文。	外面赤色色 彩。
Fig. 12-17 PL. 10-4	装	覆土 胴部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にふい 黄 橙	胴部最大幅部の破片。器内はほぼ均一。 内面は斜方向に磨き。	胴・横波状文2段。胴部最大幅部にボタン状 貼付文施文（5個の穴を穿つ）。	
Fig. 12-18 PL. 10-4	装	覆土 肩部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	淡黄	器内はほぼ均一。 外面は横方向に刷毛目、内面は縦方向に磨き。	肩・黄線文と山形文が交互に施文。	
Fig. 12-19 PL. 10-4	装	覆土 肩部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	淡黄	器内は胴部寄りが多い。 外面は横方向に刷毛目、内面は横撫で。	肩・黄線文と山形文が交互に施文。	

5号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 15-1 PL. 12-2	蓋	床面 片	幅み径 4.4 口 14.0 高 8.4	胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	口縁部・幅み部端部は丸みをもつ。幅み部は内面を凹ませている。器内は接合部分で厚い。外面端部および内面は横撫で。外面胴部は縦方向の荒磨き。蓋と幅み接合部分は荒磨き。幅み四部分は横方向に荒磨き。		
Fig. 15-2 PL. 12-3	甕	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にじい 橙	頸部から口縁部にかけて外反。器内はほぼ均一。外面頸部には刷毛目が横走。口縁部は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。 頸・5条1単位の縞状文、時計まわり。 胴・一部に斜走する沈線。	
Fig. 15-3 PL. 12-3	甕	床面 肩部から頸部		胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	橘 灰	肩部から頸部に向い内湾し、頸部で僅かに外反。外面は刷毛目が斜走。内面は輪積痕の一部に残し、斜方向に荒磨き。	頸・縞状文、時計まわり。 肩・6条1単位の縞状文。 胴・6条1単位の縞状文。	縞状文が4段確認出来る。
Fig. 15-4 PL. 12-3	甕	床面 胴部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	橙	内湾しながら胴中央部へ張り出す。胴中央部に向い器内は厚さを増す。外面胴下部は縦方向に粗磨り。内面は横撫で。	胴・羽状直線文。	
Fig. 15-5 PL. 12-5	甕	床面 頸部から口縁部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	浅黄橙	頸部から口縁部に大きく外反。口縁部は受け口状。器内は均一。外面頸部から口縁部受け口実線まで縦方向に刷毛目。口縁部は内外面とも横撫で。内面頸部は刷毛目。	口・僅かに縞文か地文。 頸・地文に縞文。2条の平行沈線の間に流状沈線文を施文。	地文単位は縞文→流状沈線文。
Fig. 15-6 PL. 12-4	甕(蓋)	床面 底部から胴下部	底 8.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	赤 褐	底部から胴最大幅部に向けて大きくひろく。外面胴部は縦方向に荒磨き。底部は横方向に荒磨き。		

6号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 17-1 PL. 13-2	小型甕 (合付?)	床面 胴部から口縁部	口 11.4	胎 小礫混入 地 堅緻	にじい 橙	胴部の最大幅は中央より上位にある。頸部から口縁部にかけて外反。器内は均一。外面口縁部は刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	口端・縞文。 頸・8条1単位の縞状文、時計まわり。 胴・縞状文。	
Fig. 17-2 PL. 13-2	甕	床面 口縁部	口 19.0	胎 小礫混入 地 堅緻	にじい 橙	受け口状口縁。口縁部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも口縁部は横撫で。	口端・縞文。 頸・縞状文、時計まわり。	
Fig. 17-3	甕	床面		胎 砂粒混入	浅黄橙	受け口状口縁。	口端・先端の突った工具により刺突文を施文	

PL. 13-2		口縁部		焼 堅緻		外面口縁部は横撫で、内面頸部は横撫で、口縁部は横に荒磨き。	口・6条1単位の帯幅成状文。	
Fig. 17-4 PL. 13-2	裏	床面 口縁部		胎 小礫混入 地 堅緻	浅黄橙	受け口状口縁。器内はほぼ均一。外面は刷毛目による器面調整。	口縁・割目目。	
Fig. 17-5 PL. 13-2	裏	床面 頸部		胎 微細砂粒 地 堅緻	にぶい 橙	口縁部方向に僅かに外反。器内はほぼ均一で厚い。内面は横方向に荒磨き。	頸・帯状文、時計まわり。	
Fig. 17-6 PL. 14-1	裏	床面 底	口 14.0 底 7.0 高約14.5	胎 小礫混入 地 堅緻	にぶい 橙	胴部の最大幅はやや上位にあり、口縁部は大きく外反。器内は頸部より上位で僅かに薄い。外面は胴下半部で縦方向に荒磨き、口縁部は横撫で。内面は胴下半部で斜方向、胴中部から口縁部にかけて横方向に荒磨き。	口縁・割目目。 頸・5条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・帯幅成状文。 胴・肩部より連続して下半部まで帯幅成状文。	胴部は確定 復元。
Fig. 17-7 PL. 13-2	裏	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	にぶい 橙	胴下半部から中央部にかけての破片で内湾する。器内はほぼ均一。外面は木口状工具と思われる調整痕、内面は横方向の調整痕。	胴・4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 17-8 PL. 13-2	裏	床面 肩部から頸部		胎 小礫混入 地 堅緻	明赤褐	頸部で僅かに外反。器内はほぼ均一。外面は刷毛目が横・斜走、内面は横方向に荒磨き。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・3条1単位の羽状直線文が胴部まで連続。	
Fig. 17-9 PL. 13-2	小型袋 (台付?)	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	内湾を呈する。器内は薄く、ほぼ均一。外面は僅かに刷毛目、内面は横撫で。	胴・コの字重文、ボタン状貼付文。ボタン状貼付文には5つの円形刺突文を施文。	
Fig. 17-10 PL. 13-2	裏	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	にぶい 橙	器内は下位で厚く、中位に向い薄くなる。外面は横方向に木口状工具と思われる調整痕と縦方向に荒磨き。内面は斜方向に調整。	胴・コの字重文の下部、縦方向の沈線が確認できる。	
Fig. 17-11 PL. 14-2	高杯	床面 脚と杯の接合部		胎 小礫混入 地 堅緻	黄 橙	接合部の径は4.2cmである。外面接合部は荒磨き後、縦方向に荒磨き。内面脚部は横方向に荒磨き。		
Fig. 17-12 PL. 14-3	裏(底)	床面 底部から胴下半部	底 8.5	胎 砂粒・小 礫混入 地 やや軟弱	浅黄橙	胴下半部は大きく上方にひろく。外面胴下半部は木口状工具により斜方向に器面調整。底部は横方向に荒磨き。内面胴下半部は横方向に割目。底部中央に指痕あり。		
Fig. 17-13 PL. 13-2	壺	腹土 頸部	頸 9.0	胎 小礫混入 地 堅緻	にぶい 橘	口縁部に向い大きく外反。器内は口縁部に向けて薄くなる。外面は磨状工具により斜方向に調整。内面は横撫で。	頸・縄文地文後2本の平行沈線文の中に山形文を施文。	
Fig. 17-14 PL. 13-2	裏	腹土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	橙	口縁部は大きく外反し、口縁部でやや内湾。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面肩部から頸部にかけては刷毛目調整。口縁部は横撫で、内面頸部は横撫で、口縁部は横方向に荒磨き。	頸・4条1単位の帯状文、時計まわり。	
Fig. 17-15 PL. 13-2	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	器内はほぼ均一。外面は横方向に調整、一部縦方向に荒磨き。内面は横撫で。	頸・①帯幅成状文。 ②横線文。 ③山形沈線文。	施文順位は ①→②→③

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 17-16 PL. 13-2	壺	覆土 胴部から頸部		胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	褐 灰	胴部は球形状を呈す。器内は胴中で僅かに厚さを増す。内面は胴部で横方向の跑磨き、胴部で輪目が横走する。	頸・4条1単位の帯橋波状文。 肩・羽状直線文・5条1単位。 胴・羽状直線文が肩部から連続し、胴下半部までのびる。	
Fig. 17-17 PL. 13-2	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	胴中央部の破片と思われ、やや内湾する。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。内面は横撫で。	胴・沈線が3本確認できる。	
Fig. 17-18 PL. 14-4	高杯	覆土 脚部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	外面は縦方向に跑磨り後、跑磨き。		杯底部は破片。
Fig. 17-19 PL. 13-2	小型壺	覆土 胴部から口縁部	口 9.0	胎 小塊混入 地 堅緻	明赤褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は肩部で僅かに厚みを増す。外面胴部は縦方向に跑磨り。内面は僅かに輪縁痕を残す。内面と外面口縁部は横撫で。		内面は磨面
Fig. 17-20 PL. 13-2	壺	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	外面頸部は斜方向に刷毛目。内面は横撫で。	頸・4条1単位の帯状文が2段時計まわり、横線文が上位に入る。 肩・帯橋波状文を地文に、帯状文との境と帯橋波状文の上を切るように下位に2本の横線文が入る。下位の横線文の下に山形文が入る。	2号溝・5N —19区出土 破片と接合。

7号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 19-1 PL. 15-2	甕	床面 口縁部		胎 微細砂粒 地 堅緻	橙	受け口状口縁。器内は頸部でやや厚い。外面は横方向に刷毛目。内面は横撫で。	口端・縄文。 頸・一部帯状文が観察できる。時計まわり。	
Fig. 19-2 PL. 15-2	甕	床面 頸部		胎 微細砂粒 地 やや軟弱	橙	頸部でやや外反。器内はほぼ均一。外面は摩耗がはげしく調整痕は不明。内面は横方向の跑磨き。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・羽状直線文。	
Fig. 19-3 PL. 15-2	甕	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	赤 褐	器内はほぼ均一。 内外面は刷毛目が横走する。	肩・帯橋波状文。	
Fig. 19-4	高杯	床面		胎 微細砂粒	明赤褐	脚部の断は大きくひらき、脚部中央は内湾しながら上方へ向う。		内外面とも

PL. 15-2		脚部		地 堅緻		器内はほぼ均一、外面腹部は縦方向に磨き、脚中央部は縦方向に磨き、内面は横方向に磨き。		赤色塗彩。
Fig. 19-5 PL. 15-2	壺	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	頸部は僅かに沈線による段をもち口縁部に向い大きく外反。器内は口縁部に向い僅かに薄い。		
Fig. 19-6 PL. 15-2	甗	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	頸部で僅かに外反。器内は頸部で厚い、外面は網毛目が斜走。内面は横方向に木口状工具と思われる調整痕。	頸・縹状文、時計まわり。 肩・4条1単位の羽状直線文。 胴・羽状直線文が肩部から続く。	地文順位① 縹状文、② 羽状直線文
Fig. 19-7 PL. 15-2	甗	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	胴中央部分の破片と思われ内湾する。器内はほぼ均一、外面は縦方向に網毛目。内面は横方向に器面調整。	胴・5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 19-8 PL. 15-2	甗	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	外面は縦方向に網毛目。内面は横方向に調整痕。	胴・羽状直線文。	

8号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 22-1 PL. 17-1	蓋	床面 片	口 11.9 高 2.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁端部は器内が厚く丸みをもつ。 外面は横方向に磨き。内面口縁部は横溝で。		外面赤色塗彩。円孔2
Fig. 22-2 PL. 17-2	蓋	床面 掘み部一部欠損	口 8.6 高 4.6	胎 小硬混入 焼 堅緻	浅黄橙	台付袋を転用したと思われる蓋であり、蓋底部を蓋の身、台部を掘みに利用。外面は縦方向に磨き。磨状工具により羽状文、コの字重文の末端部分が見られる。内面は横方向の網目調整。		台付袋転用
Fig. 22-3 PL. 17-3	壺	床面 胴部から頸部片	胴 7.3 胴 16.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	頸部は球形状を呈し、頸部は沈線による僅かな段が見られる。内面に輪槽状。器内は胴部最大幅部分で薄く頸部で厚い。外面は縦方向に磨き。内面胴・頸部は磨状工具により横溝で。		外面は赤色塗彩。
Fig. 22-4 PL. 17-4	甗	床面 胴部上半 片	口 16.8 胴 14.0 胴 15.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻	褐 灰	頸部は丸みをもち頸部に至る。口縁端部は丸い。器内は口縁部で薄い。外面胴部は横方向に網目。肩部は横方向に網毛目。口縁部は横溝で。内面胴部は斜方向の網目。口縁部は横溝で調整。	頸・4条1単位の縹状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 22-5 PL. 17-5	鉢	床面 完 形	口 8.0 底 3.5 高 5.3	胎 硬混入 焼 堅緻	橙	頸部でやや内湾しながらたち上がる。口縁端部は丸い。器内は一定でない。外面は縦方向に磨き。口縁部は横溝で。底部は一方に削り、外面は横方向に磨き。外面磨き以前に波状文施文。	胴・上位に1条の波状直線文。	口縁部にやや歪み有り

国 取 番 号 写 真 番 号	部 種	出 土 位 置 遺 存 状 況	法 量 (cm)	胎 土 混 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 22-6 PL. 17-6	小型台 付甕	床 面 口縁部欠損 ⅞	胴 8.2 台 6.0	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	浅黄橙	胴底部は平らに削り、腰部は胴部で大きく張りをもち頸部に至る。裏内面に輪槽状。器内は胴部が厚い、外面台部・胴部は横方向に荒磨き。内面台部および腰部は横溝で。	頸・胴状文、時計まわり。	
Fig. 22-7 PL. 17-7	甕	床 面 底部から胴上半部 ⅓	胴 16.8 底 7.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 黄 橙	胴中央部は球形状に張る。器内は胴下半部が厚く、上半部が薄い。外面は胴下半部で横溝で。胴中部で斜方向の刷毛目調整。内面は横方向に刷目調整。	肩・胴下半部まで4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 22-8 PL. 18-1	甕	床 面 肩部から口縁部	口 18.5	胎 砂粒混入 地 軟弱	浅黄橙	口縁部は外反し、口縁部は平たい。器内は口縁部に向けて僅かに厚くなる。外面不明。内面は横溝で。	口縁・縄文、口・4条1単位の帯橋波状文。 頸・4条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・一部に羽状直線文。	
Fig. 22-9 PL. 18-2	甕	床 面 肩部から口縁部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	灰黄橙	胴部は大きく張る。口縁部は大きく外反。器内は口縁部で薄い。外面口縁部は横溝で。内面肩部は荒磨き。口縁部は横溝で。	頸・3条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・コの字文、ボタン状貼付文2個確認。	ボタン状貼 付文に7個 の円形刺突
Fig. 22-10 PL. 18-3	甕	床 面 胴部から口縁端部 ⅓	口 11.8	胎 微細砂粒 混入 地 堅 緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部で僅かに薄くなる。外面胴部は斜方向に刷毛目、口縁部は横溝で。内面胴部は刷毛目、口縁部は横溝で調整。	頸・3条1単位の帯状文。 胴・頸部からコの字文が施文。	
Fig. 22-11 PL. 18-4	壺	床 面 頸部から口縁部	口 13.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 黄 橙	頸部は大きく外反。口縁部は受け口状を呈す。口縁端部は丸い。外面頸部は刷毛目が斜走。口縁部は横溝で。内面口縁部は横溝で。	口・2本の波状波線文。	
Fig. 22-12 PL. 18-5	壺	床 面 頸部から口縁部	口 15.6	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 黄 橙	口縁部は大きく外反し、受け口状を呈す。器内はほぼ均一。外面頸部は縦、口縁部は斜方向に荒磨き。内面は横方向に荒磨き。		内外面とも 赤色地彩。
Fig. 22-13 PL. 18-6	壺	床 面 胴下半部 ⅓	胴 27.4 底 10.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は大きく張り出す。器内は胴中部で薄い。外面胴部は縦方向に荒磨き。内面は横方向に木口状工具痕が横走		
Fig. 22-14 PL. 18-5	甕	床 面 肩部から口縁部		胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は丸みをもち、口縁部は受け口状を呈す。器内は口縁部で薄くなる。外面肩部は縦方向に刷目調整。内面頸・口縁部は横溝で。内面肩部は斜方向に刷目調整。	頸・4条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて羽状直線文。	
Fig. 22-15 PL. 18-5	甕	床 面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。内外面とも横溝で。	口縁・縄文。 頸・帯橋波状文。	
Fig. 22-16	甕	床 面		胎 砂粒混入	淡 黄	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。	口縁・刷毛目。	内面赤色塗

PL. 18-5		口縁部		焼 やや軟弱		外面は刷毛目が横走。内面は不明。		彩
Fig. 22-17 PL. 18-5	裏	床面 口縁部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰 白		受け口状口縁。 内外面とも横撫で。	口・①地文に縄文②2本の波状沈線文③ボタン状貼付文(3つの円形刺突)	施文順位は ①→②→③
Fig. 23-1 PL. 18-7	裏	床面 口縁部	胎 砂粒混入 地 堅緻	橙		口縁部は大きく外反。口縁端部は丸い。器内はほぼ均一。 内外面とも口縁部は横撫で。	口縁・縄文。口・2本の波状沈線文。 頸・5条1単位の帯状文、時計まわり。	帯状文施文 後波状沈線
Fig. 23-2 PL. 18-7	鉢	床面 口縁部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰 白		胴部から口縁部に向けて内湾。口縁端部はやや内側に傾斜。 口縁端部外面に2つの突起。内外面とも横撫で。		内面は赤色 地彩 内面に横撫
Fig. 23-3 PL. 18-7	小笠鉢	床面 胴部から頸部	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 白 黄 橙		胴部は球形状に歪る。胴部から口縁部に向けて大きく外反。器内は胴下半部で薄く頸部に向けて厚みを増す。外面胴部は横方向に刷毛目。内面は胴部に木口状工具調整痕が横走。口縁部は横撫で。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・5条1単位の帯状文。 胴・帯状文が肩部から連続して施文。	
Fig. 23-4 PL. 18-7	裏	床面 肩部から口縁部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙		口縁部は大きく外反。器内は口縁部に至り厚くなる。外面は刷毛目。 内面は胴部に木口状工具調整痕が横走。口縁部は横撫で。	肩・コノ字重文が胴部へ連続。 胴・縄文施文後、コノ字重文。	
Fig. 23-5 PL. 18-7	壺	床面 胴部	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰 白 橙		胴部から口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。 外面は縦方向に調整。内面は木口状工具による器面調整痕が横走。	頸・縄文。	
Fig. 23-6 PL. 18-7	壺	床面 胴部	胎 小礫混入 地 堅緻	浅黄橙		口縁部に向け大きく外反。 外面は斜方向に磨目調整後、横撫で。内面は荒れが強い。	頸・横線文の間に山形文を施文。	
Fig. 23-7 PL. 18-7	壺	床面 肩部	胎 小礫混入 地 堅緻	灰 白 橙		器内は胴部寄りが厚く、肩部寄りが薄い。 外面は胴部に向けて磨目調整。	肩・地文に縄文施文後、2本の横線文を施文。	
Fig. 23-8 PL. 18-7	壺	床面 胴部	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 白 橙		僅かに外反。 内面は横撫で。	頸・帯状文施文後、横線文3本施文。	
Fig. 23-9 PL. 18-7	壺	床面 胴部	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	浅黄橙		器内はほぼ均一。 外面は斜方向の磨目調整。内面は横、縦方向に荒磨き。	頸・2本の横線文と波状沈線文を交互に施文	
Fig. 23-10 PL. 18-7	壺	床面 胴部	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	灰 白		器内は下部で厚みを増す。外面は斜方向に磨目調整後、沈線文を施文。後、縦方向の荒磨き。 内面は斜方向に刷毛目調整後、横方向の荒磨き。	頸・横線文と波状沈線文。	
Fig. 23-11 PL. 18-7	裏	床面 胴部から頸部	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 黄		器内は胴部に向い厚くなる。 内外面とも横撫で。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・帯状文施文後、ボタン状貼付文。 胴・肩部から4条1単位の帯状文。	ボタン状貼 付文に4つ の円形刺突

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 23-12 PL. 18-7	壺	床面 頸部		胎 微細砂粒 焼 やや軟弱	淡 橙	器内はほぼ均一。 外面は斜目調整、内面は横方向の撫で。	頸・縄文を地文に施した後、横線文、山形文を 施文。	
Fig. 23-13 PL. 18-7	壺	床面 頸部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面、頸部寄りは横方向の斜目調整、頸部寄り は斜方向に調整、内面は横撫で。	肩・2本の波状比線文。	
Fig. 23-14 PL. 18-7	甕	床面 胴部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙	胴部中央で丸みをもつ。器内は頸部で厚い。 外面は刷毛目による調整痕が横走。	肩・ボタン状貼付文（5個の円形刺突） 胴・肩部からコの字重文。	
Fig. 23-15 PL. 18-7	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 橙	器内はほぼ均一。内面に輪横痕がみられる。 外面は斜方向に刷毛目による撫で、内面は横方向の荒磨き。	胴・横線文、波状比線文。	

9号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 26-1 PL. 20-7	甕	床面 左	口 27.7 胴 39.8 底 8.9 高 45.3	胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	橙	胴部上位に最大幅をもち、頸部に向い大きく内湾。口縁部は受け 口状を呈する。口縁端部は後かに角張る。器内は胴下部および肩 部において厚い。外面底部寄りは横撫で、下部は縦方向に荒磨き 中位から肩部は横方向に刷毛目、口縁部は横方向に斜目調整。内 面は胴部全面に木口状工具と思われる横撫で、口縁部は横方向に 荒磨き。	頸・8条1単位の縦線文、時計まわり。 肩・胴下部にかけて羽状直線文。	
Fig. 26-2 PL. 21-2	壺	床面 完形	口 12.4 胴 18.2 底 8.6 高 26.6	胎 軽石混入 焼 堅緻	橙	胴部中位に最大幅をもち、口縁部において受け口状を呈す。口縁 部は歪む。口縁端部は丸みをもつ。器内は胴下部が厚く、口縁部 で薄い。内外面とも胴部から頸部にかけて木口状工具と思われる 調整痕。外面胴下半部は斜方向に荒磨り。口縁部は横撫で。		底部は焼成 後に穿孔す る。
Fig. 26-3 PL. 21-3	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 黄 橙	器内は肩部付近に至り厚くなる。外面は器面が摩耗、内面は肩部 付近で横撫で。頸部で横方向に荒磨き。	頸・4本の横線文。 肩・縄文を地文に2本の波状比線文施文。	
Fig. 26-4 PL. 21-3	小型甕	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 橙	内湾している。器内はほぼ均一。 外面は横方向に刷毛目。	肩・櫛形波状文。	
Fig. 26-5 PL. 21-3	甕	床面 胴下半部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	褐 灰	器内はほぼ均一。外面は刷毛目が斜走、内面は横方向に刷毛目調 整後、一部分縦方向に荒磨き。	胴・コの字重文の下部の文様と思われる。	

10号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 30-1 PL. 24-1	甕	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 口縁部は受け口状。器内は胴部で厚い。外面胴部は斜方向に刷毛目、口縁部は横撫で。内面胴部は横目が斜走し、頸部から口縁部にかけて横撫で。	口縁・割み目。口・帯掻波状文、5条1単位 頸・帯掻波状文。肩・帯掻波状文、5条1単位。 胴・帯掻波状文、5条1単位。	
Fig. 30-2 PL. 24-1	甕(7)	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙 胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は受け口状。口縁部は薄い。外面は広い調整、胴部は縦・横方向に横目。内面は多方向に横目。口縁部内外面は横撫で。		
Fig. 30-3 PL. 24-1	甕	床面 口縁部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙 口縁部は中位で僅かに内湾。 内外面とも横撫で。	口縁・刺突文。 口・5条1単位の波状文。	
Fig. 30-4 PL. 24-1	甕	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙 口縁部は僅かに受け口状。器内は口縁部で薄い。外面口縁部は横撫で。内面胴部および口縁部は荒磨き。	口縁・沈線による山形文が2本。 頸・4本の横線文。	
Fig. 30-5 PL. 24-1	甕	床面 肩部から頸部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙 頸部で僅かに外反。器内は均一。外面は横方向の刷毛目調整。内面は横方向の荒磨き。	頸・曇状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 30-6 PL. 24-1	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	灰 白 器内は肩部背りが厚い。外面は僅かに縦方向の横目による調整。内面は刷毛目が横走。	頸・2本の横線文の間に列点文。	
Fig. 30-7 PL. 24-1	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙 頸部は口縁部に向い外反。器内は胴部で厚きを増す。外面は横撫で。内面は肩部で横方向に荒磨き。頸部で横撫で。	頸・4条1単位の曇状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて、4条1単位の羽状直線文	
Fig. 30-8 PL. 24-1	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙 胴部は丸みをもち頸部から口縁部にかけて大きく外反。 器内は胴部で僅かに薄い。 外面は刷毛目が斜走。 内面は横方向に調整。	頸・5条1単位の曇状文、時計まわり。 肩・胴部にかけてコの字重文、ボタン状貼付文があり円形刺突7個施文。 胴・コの字重文の中心部にボタン状貼付文があり円形刺突8個施文。	
Fig. 30-9 PL. 24-1	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙 頸部は口縁部に向い外反。肩部で僅かに厚みをもち、外面は斜方向に刷毛目。内面は横状工具により多方向に調整。	頸・6条1単位の曇状文、時計まわり。 肩・胴部にかけてコの字重文が施文。	
Fig. 30-10 PL. 24-1	壺	床面 頸部		胎 小硬混入 焼 堅緻	明赤褐 口縁部に向けて大きく外反。器内は頸部上位で僅かに薄い。外面は荒削り。内面が荒れている。	頸・縄文を地文とし、横線文と波状沈線文を施文。	
Fig. 30-11 PL. 24-1	壺	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙 器内はほぼ均一。 外面肩部は斜方向に荒磨き。	頸・2段7条1単位の曇状文、時計まわりの間に横線文。	

図類番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎 地 成 色	色調	器形・整形の特徴	文 様	備 考
							肩・下位属状文直下に山形文を施した後、山形文内に4本の横線文を施文。	
Fig. 30-12 PL. 24-1	壺	床面 肩部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。 内面は横方向に刷毛目。	頸・沈線による横線文と山形文が交互に施文。	
Fig. 30-13 PL. 24-1	甕	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	胴部は大きく張る。器内はほぼ均一。内面は横方向に磨き。外 面は荒れている。	胴・帯橋状文が施文。	
Fig. 30-14 PL. 24-1	甕	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内は下位で僅かに厚い。外面は横方向の磨目整形。	胴・コの字文の下部の文様が見られる。	
Fig. 30-15 PL. 24-2	壺	床面 胴部から頸部	頸 7.0 胴 12.5	胎 砂粒多量 に混入 地 やや軟弱	浅黄橙	胴部は丸みをもち大きく張る。器内は頸部で僅かに薄い。内面 には輪轆痕がみられる。外面胴部は磨削り後、一部斜方向に磨き 内面は磨き落とす刷毛目。	肩・3段にわたり縷文を施文。	
Fig. 30-16 PL. 24-4	蓋	床面(貯蔵穴) 完形	横み 3.4 口 8.4 高 4.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	輪轆手法で成形し、横み部分は接合部分でくびれる。口縁端部は 丸みをもつ。全体に歪む。内外面ともほぼ横方向に磨き。横み 部分上面は刷毛目。		
Fig. 30-17 PL. 24-3	鉢	床面 尻	口 15.0 底 6.0 高 6.4	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	胴部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は角張る。 器内は口縁部に向い薄い。外面胴部は縦方向に磨削り後、口縁端部は 横方向に磨き。内面底面は押え。内面は横方向の磨き。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 30-18 PL. 24-5	小型壺	床面(貯蔵穴) 口縁部を一部欠損	口 11.4 胴 11.0 底 6.6 高 9.4	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴上部に張りをもつ。口縁部は外反。口縁中位でやや内湾。口縁 端部は丸みをもつ。口縁部に3つの円形の穴をあけており末貫通 1個がみられる。外面は横方向に器面調整。内面は磨削工具によ る撫でと、磨きが行なわれている。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 30-19 PL. 25-1	小型壺	床面(貯蔵穴) 胴の一部と口縁部 欠損	胴 12.6 底 6.9	胎 小礫混入 地 堅緻	橙	胴部中位で張りをもつ。胴部に2つの円形の穴をもつ。外面は全 体に横方向の磨き。内面は刷毛目が横走する。		外面胴部と 内面胴上半 部赤色塗彩
Fig. 30-20 PL. 25-2	高杯	床面 接合部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	外面胴部は接合部から下方に磨削り。内面は磨削工具により横方 向に器面調整。		
Fig. 30-21 PL. 25-3	高杯	床面(貯蔵穴) 接合部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰 白	胴・杯部の接合方法は杯の底部にヘソをつけ胴部の内に入れて接 合。		

						器内はほぼ均一。脚部は外面で寛削り。内面は横方向に磨目。		
Fig. 30-22 PL. 25-5	小型甕	床面 丸	口 8.0	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	によい 橙	胴上半部に僅かに丸みをもち、口縁部は外反。口縁端部は丸みをもつ。全体の歪む。内外面とも横撫で。輪積痕がある。	頸・5条1単位の縞状文。時計まわり。	
Fig. 30-23 PL. 25-4	高杯	床面 脚部と杯部の接合 部分		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	外面は杯部で縦方向の磨き、脚部で斜方向の磨き。内面杯部は磨き。脚部は磨状工具による調整。		
Fig. 30-24 PL. 25-6	台付甕	床面 丸	口 8.8 台 5.5 高 10.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻	明赤褐	胴上半部に張りをもち、口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は台部で厚く脚部はほぼ均一。外面脚部は接合部より下方に寛削り、口縁部は横撫で。内面口縁部は横撫で。	口端・刻み目 胴・頸部よりコ字重文。	
Fig. 30-25 PL. 25-7	台付甕	床面(貯産穴) 腹部と脚部	口 11.5 胴 11.5	胎 砂粒混入 焼 堅緻	によい 橙	脚部は球形状に張り、口縁部は大きく外反。口縁端部は僅かに丸い。器内は肩部から口縁部にかけて薄くなる。台部は腰の中に入った状態で出土した。同一個体の可能性もある。外面は胴部で斜方向、腹部は縦方向に刷毛目、口縁部内面は横撫で。内面は下半部で磨目。胴上部で磨き。	口端・刻み目 頸・コ字重文が胴下半部まで施文、4つのボタン状除付文。 胴・4区画のコ字重文をもつコ字重文の中心に2つのボタン状除付文を施文。	ボタン状除付文には指頭痕がある。 4-7つの円形刺突文。
Fig. 31-1 PL. 26-1	小型甕 (台付?)	床面(貯産穴) 口縁部の一部と底部を欠く。	口 13.0 胴 10.7	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	胴部中位で大きく張り。口縁部は大きく外反。口縁部中位から口縁端部に向けて僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。胴下半部は磨状工具により縦方向に調整後、一部磨き。外面胴中部は横方向、頸部は縦方向に刷毛目、口縁部内面は横撫で。内面脚部は横方向の磨き。	肩・胴部中位にかけ3段の帯幅施文。 帯幅施文は4条1単位。	
Fig. 31-2 PL. 26-2	壺	床面 肩部から口縁部	口 17.0 頸 9.1	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。内面には輪積痕。器内はほぼ均一。外面は多方向に刷毛目調整。口縁部は内面も横撫で。内面肩部は横方向に刷毛目。頸部は磨目調整が磨走。	頸・2本の横線文を施文。	
Fig. 31-3 PL. 26-3	甕	床面 胴部一部欠損	口 17.9 頸 16.2 胴 22.0 底 8.2 高 27.8	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	灰 白	胴部に最大幅をもつ。受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内は胴上位で僅かに薄い。外面底部付近は横撫で。胴下部で縦方向の磨削り。胴中位では横・斜方向の刷毛目。口縁部内面は横撫で。内面胴上半は磨目。	口端・枕線による山形文。 頸・5条1単位の縞状文。逆時計まわり。 胴・肩部から5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 31-4 PL. 26-4	甕	床面 口縁部一部欠損	口 27.0 頸 23.4 胴 24.7 底 8.3 高 31.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	口縁部に最大幅をもつ。受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内は胴上位で僅かに薄い。外面底部付近は横撫で。胴部は横方向に刷毛目。口縁部内面は横撫で調整。内面は胴部では全体に刷毛目が横走し、下部は後に横方向に磨き。	口端・縞文(擦走?) 頸・8条1単位の縞状文。時計まわり。 胴・肩部から胴下半部まで8条1単位の羽状直線文。	施文順位 ①縞状文 ②羽状直線文。

図面番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 31-5 PL. 26-5	甕	床面 底部から胴下部	底 8.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は縦方向に荒磨き。内面は磨目が斜走。		
Fig. 31-6 PL. 26-6	小型甕	床面 底部から胴下部	底 4.6	胎 小礫混入 地 堅緻	橙	内面に輪横紋。器内は全体に均一。 外面は僅かに磨目。内面は横撫で。		
Fig. 31-7 PL. 26-7	甕	床面 口 高	口 13.3 頸 8.0 胴 24.2 底 8.6 高 31.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	最大幅は胴部中位にあり歪む。頸部で僅かに角度を変え口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。外面底部付近は磨状工具により横方向の押え、胴部は横方向の刷毛目調整後、頸部から胴部中央に向け縦方向に荒磨き。頸部から口縁部にかけて横撫で。内面は底部を荒押え。胴下半部を横方向に磨状工具による撫で。胴上半部は斜方向に荒磨き。口縁部は横撫で。	口端・縄文。 頸・横線文。	外面胴下半部は吸灰。
Fig. 33-4 PL. 28-3	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	赤 橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。内面は荒れている。 外面は横方向に荒磨き。内面は横撫で。	口端・縄文。	
Fig. 33-5 PL. 28-3	甕	覆土 肩部から口縁部		胎 小礫混入 地 堅緻	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で僅かに薄くなる。外面肩部は横方向に荒磨き。口縁部は横撫で。内面肩部は磨状工具により調整後、口縁部も含めて横方向に荒磨き。	口端・縄文。	
Fig. 33-6 PL. 28-3	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は僅かに受け口状を呈す。器内はほぼ均一。 内外面とも横撫で。	口端・刷目目。 口・2本の波状沈線文。	
Fig. 33-7 PL. 28-3	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橘	口縁部は僅かに受け口状を呈す。器内はほぼ均一。 外面は横撫で。内面は、横方向の荒磨き。	口端・刷目目。 口・2本の波状沈線文。	
Fig. 33-8 PL. 28-3	甕	覆土 肩部から頸部		胎 微細砂粒 地 堅緻	明黄灰	頸部から口縁部に向い大きく外反。器内はほぼ均一。 内面は横方向の荒磨き。	頸・胴部にかけてコの字重文。	
Fig. 33-9 PL. 28-3	甕	覆土 頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	頸部から口縁部に向けて大きく外反。内面は荒れている。 外面は斜方向に刷毛目が入り、一部分は横撫で。 内面は磨状工具により器面調整。	頸・2本の横線文。	

11号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地 色 調	胎土 成 色 調	器形・整形の特徴	文 様	備 考
Fig. 36-1 PL. 30	甕	床面 肩部から口縁部	口 約 12.0	胎 砂粒、軽 石混入 地 堅緻	明黄橙	口縁は大きく外反。最大幅は頸部。器内は薄めて、ほぼ均一。 外面肩部は刷毛目が横走、口縁部は横撫で。内面は横撫で後、口 縁部は横方向に荒磨き。	口端・縄文。 頸・4条1単位の屢状文、時計まわり。 胴・頸部から3条1単位の羽状直線文。	
Fig. 36-2 PL. 30	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にふい 黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。 外面は横撫で。内面は横撫で後、横方向に荒磨き。	頸・屢状文、時計まわり。	
Fig. 36-3 PL. 30	甕	床面 口縁部	口 約 17.6	胎 砂粒混入 地 堅緻	にふい 橘	口縁部は僅かに外反。器内は口縁端部に向い薄い。口縁端部は丸 い。内外面とも口縁部は横撫で後、内面は横方向の荒磨き。	頸・屢状文、時計まわり。	
Fig. 36-4 PL. 30	甕	床面 口縁部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は外反し、口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部で僅かに 薄い。内外面とも口縁部は横撫で後、内面は横方向の荒磨き。	頸・帯幅状文。	
Fig. 36-5 PL. 30	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	受け口状口縁。器内はほぼ均一。 内外面とも口縁部は横撫で。	口端・縄文。 口・4条1単位の帯幅状文。	
Fig. 36-6 PL. 30	甕	床面 口縁部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも口縁部は横撫で後、内面は横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。口・2条1単位の山形文。 頸・屢状文、時計まわり。	
Fig. 36-7 PL. 30	甕	床面 口縁部		胎 軽石混入 地 堅緻	にふい 橘	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも口縁部は横撫で後、内面は横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。口・3条1単位の山形文。 頸・屢状文、時計まわり。	
Fig. 36-8 PL. 30	甕	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にふい 橙	口縁部は大きく外反。器内は口縁端部に向い薄くなる。 外面は横撫で。内面は横方向に刷毛目調整後、横方向に荒磨き。	口端・縄文。 口・2段にわたり、帯幅状文、7条1単位?	9と同一個 体と推定。
Fig. 36-9 PL. 30	甕	床面 頸部から口縁部		胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部中位において僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。器内は 頸部で僅かに薄い。 外面は横撫で。内面は横方向に刷毛目調整後、横方向に荒磨き。	口端・縄文。 口・2段にわたり、帯幅状文。 頸・5条1単位の屢状文、時計まわり。	8と同一個 体と推定。
Fig. 36-10 PL. 30	甕	床面 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にふい 橙	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で薄くなる。 内外面とも口縁部は横撫で。内面頸部は横方向に荒磨き。	口端・縄文。 頸・施文に縄文、2本の横線文。	
Fig. 36-11 PL. 30	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にふい 橙	口縁部は僅かに外反。器内は口縁部で薄くなる。 外面は横撫で。内面は刷毛目により斜方向に器面調整。	口・縄文。	
Fig. 36-12 PL. 30	小型甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	頸部は口縁部に向けて僅かに外反。器内はほぼ均一。 内面は横方向に荒磨き。	頸・5条1単位の屢状文、時計まわり。 肩・帯幅状文は肩部から頸部へ順次施文。	施文単位 ①屢状文②

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 装 形 の 特 徴	文 様	備 考
							胴・5条1単位の縞縞波状文が肩部から連続	縞縞波状文
Fig. 36-13 PL. 30	甕	床 面 肩部から頸部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向けて僅かに外反。器内はほぼ均一。 外面頸部は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	胴・縞状文、時計まわり。 肩・縞縞波状文、羽状直線文。 胴・肩部から羽状直線文を施文。	施文単位 縞縞波状文 が最終施文
Fig. 36-14 PL. 30	甕	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明赤褐	頸部は口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。 内面肩部は木口工具による調整痕が横走る。	胴・5条1単位の縞状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 36-15 PL. 30	甕	床 面 肩部から頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	胴・縞状文、時計まわり。 胴・肩部から羽状直線文。	
Fig. 36-16 PL. 30	甕	床 面 胴 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	明赤褐	胴部は張りをもつ。器内はほぼ均一。 外面は櫛状工具で横方向に器面調整。内面は横方向に荒磨き。	胴・羽状直線文。	
Fig. 36-17 PL. 30	甕	床 面 胴 部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	にぶい 褐	胴部中央に向い張り出す。器内はほぼ均一。 外面は刷毛目による調整後、一部荒磨き。内面は横方向の荒磨き。	胴・4条1単位の縞状工具による格子目文。	外面に煤付 着。
Fig. 36-18 PL. 30	甕	床 面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	胴部は丸みをもち、頸部から口縁に向けて外反。器内は頸部で僅 かに薄い。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に荒磨き。	胴・縞状文、時計まわり。 胴・肩部からコの字重文。	
Fig. 36-19 PL. 30	小型甕	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部から口縁部に向い大きく外反。器内はほぼ均一。 外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に歯目調整後、荒磨き。	肩・肩部から胴部に向けてコの字重文を施文。	
Fig. 36-20 PL. 30	甕	床 面 肩部から頸部	頸 約 16.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向け外反。胴部は大きく張り。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は刷毛目調整後、横に荒磨き。	胴・頸部からコの字重文を施文。	
Fig. 36-21 PL. 30	甕	床 面 胴 部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。 内面は横方向に荒磨き。	胴・縞状文、時計まわり。 胴・肩部からコの字重文を施文。	
Fig. 36-22 PL. 30	甕	床 面 胴 部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。 外面は刷毛目による器面調整。内面は横方向に荒磨き。	胴・肩部からコの字重文を施文。	
Fig. 36-23 PL. 30	甕	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。ボタン状貼付文を肩部にもつ。 器内はほぼ均一。 外面は刷毛目が横走。内面は横方向に荒磨き。	胴・縞状文、時計まわり。 肩・コの字重文上にボタン状貼付文施文。 胴・肩部よりコの字重文を施文。	ボタン状貼 付文に4つ の円形刺突
Fig. 36-24	甕	床 面		胎 砂粒混入	明褐灰	胴部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。	胴・肩部からコの字重文を施文。コの字重文は	

PL. 30		胴部		焼 堅緻		外面は縦方向に刷毛目調整、内面は横方向に荒磨き。	縦方向を先に施文。	
Fig. 36-25 PL. 30	葉	床面 肩部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	ボタン状貼付文を施文。器内はほぼ均一。 外面は横方向に刷毛目調整、内面は斜方向に櫛状工具で調整。	肩・ボタン状貼付文に8つの円形刺突。 胴・肩部よりコの字重文を施文。	
Fig. 36-26 PL. 30	小型葉	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	胴部は大きく張りをもつ。器内は胴部張り出し部分で薄い。 外面は横方向に刷毛目調整、内面は横方向の櫛目調整。	胴・コの字重文施文後、ボタン状貼付文。 ボタン状貼付文中央に円形竹管文。	
Fig. 36-27 PL. 30	鉢	床面 胴部から口縁部	口約15.7	胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	灰 白	口縁部で立ち上がる。口縁端部は丸い。器内は胴下部で厚い。 外面は胴部において縦方向、口縁部で横方向の荒磨き。 内面は横方向に荒磨き。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 36-28 PL. 30	鉢	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	灰 白	口縁部において僅かに内湾。口縁端部は丸みをもち、外面に突起 を貼付けている。器内は胴上部で厚い。外面胴部は縦、口縁部は 横方向に荒磨き。内面胴部は僅かに櫛目。口縁部は横撫で。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 36-29 PL. 28-4	鉢	床面 底部から胴下半部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	器内はほぼ均一。 内外面とも横方向に荒磨き。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 36-30 PL. 29-2	高杯	床面 杯、脚の接合部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	にぶい 橙	器内は杯部・脚部ともほぼ均一。脚部は外面で縦方向に荒磨り、 接合部で横方向の調整。杯部内面は横方向の荒磨き。		
Fig. 36-31 PL. 29-3	高杯	床面 杯、脚の接合部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	杯底部はへソ状をなし、脚部にはめ込んでいる。 杯部から接合部にかけて縦方向に荒磨き。脚部内面は横方向の櫛 目。杯部は横方向の荒磨き。		
Fig. 36-32 PL. 29-4	台付甕	床面 台部から甕底部	底 4.1	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	台部は短かく、接合部から甕部にかけて大きく外反。 外面は台・甕部ともに荒磨り。接合部は横方向に荒磨き。 甕内面は横方向に荒磨き。		
Fig. 36-33 PL. 29-5	高杯	床面 脚部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 濁	脚部は裾に向けて大きくひろく。外面は接合部から裾方向に荒磨 き。裾部は横方向に荒磨き。内面は櫛状工具による調整。		外面は赤色 塗彩。
Fig. 36-34 PL. 31-1	高杯	床面 脚部		胎 小礫混入 焼 堅緻	黄 橙	脚部は裾に向けて大きくひろく。外面は裾部に向い縦方向に荒磨 き。内面は接合部付近で、横方向の櫛目。裾部で荒磨き。		
Fig. 36-35 PL. 31-2	高杯	床面 脚部	底 8.8 脚高 4.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	脚部は裾に向けて大きくひろく。脚端部は丸みをもつ。 外面は接合部から裾に向け、裾部は横方向に荒磨き。内面は接合 部付近で櫛目。裾部で横撫で。		外面は赤色 塗彩。
Fig. 36-36	台付甕	床面	底 6.8	胎 砂粒混入	浅黄橙	台部は大きくひろく。台端部は平たい。右部外面は斜方向に荒		

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
PL. 31-3		台部		胎 堅緻		磨き、内面は横撫で。裏底部内面は横方向に磨き。		
Fig. 36-37 PL. 31-4	台付罎	床面 台部	底 7.5 台高 2.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にふい 橙	台部は縦に向けて大きくひろく、台端部は平たい。 外面台部は、櫛状工具により斜方向・内面は横方向に器面調整。		
Fig. 36-38 PL. 31-5	高杯	床面 脚部	底 10.0 脚高 4.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にふい 橙	脚部は縦に向けて大きくひろく、脚端部は丸みをもつ。 脚部外面は斜方向に、底部は横方向に磨き、内面は横方向に櫛目、底部は横撫で調整。		外面は赤色 塗彩。
Fig. 36-39 PL. 31-6	台付罎	床面 台部	底 8.2	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にふい 黄橙	台部は縦に向けて大きくひろく、台端部はひらいたい。		
Fig. 37-1 PL. 31-7	甕	床面 口縁部の一部欠損 %	口 22.4 胴 25.4 底 7.0 高 29.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 褐	最大幅は胴上位にある。口縁部は大きく外反、口縁端部は丸い。 器内はほぼ均一、外面底部付近は横撫で。胴部は斜方向に刷毛目 調整後、下半部は縦方向の磨き。口縁部は内外面とも横撫で、 内面胴部は刷毛目が横走る。	口縁・縄文。 胴・4条1単位の罎状文、時計まわり。 胴・肩部から3条1単位と4条の羽状直線文。	
Fig. 37-2 PL. 31-8	甕	床面 肩	口 20.8 胴 25.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	最大幅は胴中央にある。口縁部は外反、口縁端部は丸みをもつ。 器内はほぼ均一、外面胴部は斜方向に刷毛目。 口縁部内外面とも横撫で調整。内面胴部は櫛目調整後、磨き。	口縁・縄文。 胴・3条1単位の罎状文、時計まわり。 胴・肩部から3条1単位と4条の羽状直線文。	
Fig. 38-1 PL. 32-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にふい 褐	口縁部は受け口状を呈す。口縁端部は丸い。器内はほぼ均一。 内外面とも横撫で。	口縁・縄文。 口・波状沈線文。	
Fig. 38-2 PL. 32-1	壺	床面 頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	橙	器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整。	胴・地文に縄文を施した後、2本の横線文と波 状沈線文。	
Fig. 38-3 PL. 32-1	壺	床面 肩部から頸部		胎 微細砂粒 やや軟弱	にふい 橙	頸部で僅かに外反。器内は頸部で僅かに濃い、外面は斜方向に木 口状工具により器面調整。内面は斜方向に刷毛目調整。	胴・横線文と波状沈線文。	
Fig. 38-4 PL. 32-1	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	頸部から口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。口縁部寄り横撫で。内面は斜方向 に、刷毛目調整。		
Fig. 38-5 PL. 32-1	壺	床面 頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	橙	頸部から口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 内面は横方向に磨き。	胴・地文に縄文を施した後、2本の横線文と波 状沈線文を施文。	
Fig. 38-6	壺	床面		胎 砂粒混入	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目。内面は横方向に櫛目と		

PL. 32-1		肩 部		焼 堅緻		撫で。		施文。	
Fig. 38-7 PL. 32-1	壺	床 面 肩 部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	に い 橙	器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。		肩・山形沈線文施文後、横線文が山形文を切る。	施文単位 ①山形文 ②横線文
Fig. 38-8 PL. 32-1	壺	床 面 腹 部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明赤褐	頸部から口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 外面は横撫で。		肩・地文に縄文施文後、2本の横線文と波状沈線文を施文。	
Fig. 38-9 PL. 32-1	壺	床 面 腹 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	黄 橙	頸部から口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に磨目調整。内面は横撫で。		頸・2本の横線文。	
Fig. 38-10 PL. 32-1	壺	床 面 肩 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。無文部分は縦方向に磨磨き。内面は横方向に磨目調整。		頸・肩部寄りに横線文。 肩・腹方向に5条1単位の帯描波状文5列を施文後、沈線で両端を区画。	施文単位 ①帯描波状文 ②縦方向の沈線文。
Fig. 38-11 PL. 32-2	壺	床 面 肩 部	胴 25.2	胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	に い 橙	最大幅は胴部にある。器内はほぼ均一。外面は胴中央部付近で縦方向、肩部付近で横方向に磨目調整。胴部は一部分に磨磨き。内面は横方向に磨目調整。			
Fig. 38-12 PL. 32-3	壺	床 面 底部から肩部迄	胴 29.5 底 9.3	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	胴部中央に最大幅をもつ。器内は胴部に向い厚くなる。 内外面とも胴部は全面に刷毛目調整。			
Fig. 38-13 PL. 32-4	壺	床 面 肩 部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。内面に輪横痕。内外面とも刷毛目調整。外面は刷毛目調整後、縦方向に一部磨磨き。			
Fig. 38-14 PL. 32-5	壺	床 面 底部から胴下半部	底 9.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴中位に向けて大きく張る。器内は胴部に向け僅かに厚くなる。 外面は底部との接合部分に摺付工具による押え。器内は縦方向に刷毛目調整後、磨磨き。内面は磨目調整。			外面一部取 戻。
Fig. 38-15 PL. 33-2	小型壺	床 面 頸部から口縁部	口 11.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。 外面口縁部は横撫で。内面口縁部は横方向に磨磨き。		口端・縄文。 頸・帯状文、時計まわり。	
Fig. 38-16 PL. 32-6	小型壺	床 面 肩 (底部欠損)	口 10.4 肩 9.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	受け口状口縁。口縁部は僅かに丸みをもつ。器内は頸部で薄い。 外面胴部は斜方向に刷毛目。口縁部は横撫で調整。内面は横方向に磨磨き。		口端・縄文。口・5条1単位の波状沈線文。 頸・6条1単位の縦状文、時計まわり。 肩・5条1単位の波状沈線文を胴部まで連続。 胴・山形文の頂点にボタン状貼付文、5個。	ボタン状貼 付文に円形 刺突文施文
Fig. 38-17 PL. 33-1	小型壺	床 面・腹 土 胴中部から口縁部	口 11.0 肩 11.2	胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	受け口状口縁。口縁端部は平たい。器内はほぼ均一。外面胴部、 口縁部は刷毛目調整。内面胴部は横方向に磨目調整後磨磨き。口		口端・縄文。頸・4条1単位の縦状文、時計 まわり。肩・5条~3条1単位の羽状直線文。	内面口縁部 は赤色塗彩

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
						縁部は横撫で。	胴・羽状直線文が肩部より連続。	
Fig. 38-18 PL. 32-1	小型甕 床面 胴中部から肩部	口 11.9	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は縄文施文のため平たい。器内はほぼ均一。外面肩部は刷毛目。口縁部は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口端・縄文L.R. 頸・4条1単位の縷状文。時計まわり。肩・羽状直線文。胴・羽状直線文が肩部より連続。		
Fig. 39-2 PL. 33-4	小型甕 床面 胴部から口縁部	口 14.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 褐	口縁部は頸部ではほぼ直角に外に折れる。口縁端部は薄くなり丸みをもつ。外面胴部は刷毛目。口縁部は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	胴・頸部から縷状直線文を施文。	6号住居出土土器と接合する。	
Fig. 39-3 PL. 33-6	甕 覆土 口縁部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	灰	受け口状口縁。口縁端部は平たい。器内は頸部で厚みをもつ。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口端・縄文。 頸・7条1単位の縷状直線文。		
Fig. 39-4 PL. 33-6	甕 床面・覆土 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黒 褐	頸部は口縁部に向けて僅かに外反。器内は頸部で僅かに薄い。外面は斜方向に刷毛目調整。内面は磨目調整後、横方向に荒磨き。	頸・縷状文、時計まわり。 胴・肩部から4条1単位の格子目文を施文。		
Fig. 39-5 PL. 33-6	甕 床面・覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	褐 灰	口縁部は外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。内面は横撫で後、横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。口・5条1単位の縷状直線文 頸・縷状文、時計まわり。		
Fig. 39-6 PL. 33-6	鉢 床面 胴上半部から口縁部	口約17.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は内湾し、口縁端部は丸みをもつ。器内は均一。外面胴部は縦方向に荒磨き。内外面口縁部と内面胴部は横方向に荒磨き。		内外面赤色塗彩。7と同一。	
Fig. 39-7 PL. 33-6	鉢 覆土(5M-20) 胴上半部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は内湾し、口縁端部は丸みをもつ。器内は均一。口縁部に穿孔がみられる。外面胴部は縦方向に荒磨き。口縁部内外面と内面胴部は横方向に荒磨き。		内外面赤色塗彩。6と同一。	
Fig. 39-8 PL. 33-6	甕 床面・覆土 (5L-20) 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横方向に荒磨き。	胴・4条1単位の羽状直線文。	外面噴灰。	
Fig. 39-9 PL. 33-6	甕 床面・覆土 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	頸部から口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。外面は刷毛目調整。内面は木口状工具と思われる調整痕。	頸・縷状文、時計まわり。 肩・格子目文。 胴・肩部より4条1単位の格子目文を施文。	格子目文は一方に施文後他方向に施文。	
Fig. 39-10 PL. 33-5	小型甕 床面・覆土 胴中部から口縁部	口 10.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横撫で。	頸・5条1単位の縷状文、時計まわり。 肩・5条1単位の羽状直線文。 胴・羽状直線文が肩部より連続。		

Fig. 39-11 PL. 33-7	甕	床面 胴部から口縁部迄	口 15.0 胴 15.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 澄	胴上半部で大きく張りもち、口縁部は大きく外反。器内は口縁部で僅かに薄い。外面胴部は刷毛目調整。口縁部は内外面とも横撫で。内面胴部は磨目調整。	口端・縄文。 胴・5条1単位の垂状文、時計まわり。 肩・羽状直線文。胴・肩部より羽状直線文。	
Fig. 39-12 PL. 33-8	甕	床面・覆土 (5M-21) 胴部 から口縁部。	口 18.4	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。胴部は口縁部との接合部に擦拭工具の押え。胴部および内外面の口縁部は横撫で。内面胴部は本口状工具と思われる調整。	口端・縄文。胴・羽状直線文。 肩・羽状直線文。 胴・胴部より5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 39-13 PL. 34-2	甕	床面 迄	口 19.4 胴 20.3	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄澄	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸い。器内はほぼ均一。外面胴部は横方向に刷毛目調整。胴部と口縁部内外面は横撫で。内面胴部は磨目調整。	口端・縄文。胴・羽状直線文。 肩・羽状直線文。 胴・胴部より4-5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 39-14 PL. 34-3	壺	床面・覆土 (5L-20) 迄	口 15.3 胴 8.6	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄澄	口縁部は大きく外反。口縁上位で受け口状を呈す。口縁端部は丸い。内面に輪積前。器内は均一。外面胴部から胴部は縦方向、内外面の口縁部および内面胴部は横方向の刷毛目調整。	口端・刷毛目。 胴・3本の横線文、3条1単位の波状直線文。	横線文、上 2本は1単 位の工具。
Fig. 40-1 PL. 34-1	壺	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄澄	受け口状口縁。口縁端部は縄文施文のため平たい。器内は口縁部で僅かに薄い。内外面とも横撫で。	口端・縄文。 口・2本の波状直線文。	
Fig. 40-2 PL. 34-1	壺	覆土(5N-21) 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄澄	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。その後、内面は横方向に磨き。	口・山形文。	
Fig. 40-3 PL. 34-1	壺	覆土(5M-21) 口縁部	口の14.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	明赤褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は縄文施文のため平たい。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で後、磨き。	口端・縄文。	
Fig. 40-4 PL. 34-1	壺	覆土(5M-21) 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄澄	器内はほぼ均一。外面は刷毛目、内面は磨目調整。	胴・2列の横線文、2列の刺突文、2列の横線文、山形波線文が順次施文。	刺突文は内 形。
Fig. 40-5 PL. 34-1	壺	覆土(5M-20) 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄澄	胴部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横撫で。	胴・横線文、横方向に列点文。	
Fig. 40-6 PL. 34-1	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	灰・褐	器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目調整後、磨き。	胴・3本の横線文、上2本は連弧文?	
Fig. 40-7 PL. 34-1	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄澄	胴部は口縁部に向けて外反を始める。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。	胴・7本の横線文、単位は不明。	
Fig. 40-8 PL. 34-1	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	胴部は口縁部に向けて外反を始める。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。	胴・2本の太い横線文の間に斜行直線文と山形文。施文順位①斜行直線文②山形文。	
Fig. 40-9	甕	覆土(5M-21)	口 13.5	胎 微細砂粒	にぶい	胴部は口縁部に向けて大きく外反。口縁端部は縄文施文のため平	口端・縄文	

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
PL. 34-1		頸部から口縁部		胎土混入 地 厚織	橙	たい。器内は口縁部に向けて薄くなる。外面頸部および口縁部は横方向に刷毛調整。内面は横方向に磨き。		
Fig. 40-10 PL. 34-1	小型鉢	覆土(5M-12) 頸部から口縁部		胎土砂粒混入 地 厚織	浅黄橙	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも口縁部は横織で、内面頸部は横方向に磨き。	口・2本の波状波線文。 頸・帯状文、時計まわり。	
Fig. 40-11 PL. 34-1	甗	覆土 口縁部		胎土砂粒混入 地 厚織	橙	受け口状口縁。口縁端部は縄文施文のため平たい。器内は口縁部で僅かに薄くなる。口縁部は内外面とも横織で、内面頸部付近は横方向に磨き。	口縁・縄文。 口・7条1単位の磨描波状文。 頸・帯状文。	
Fig. 40-12 PL. 34-1	甗	覆土 頸部から口縁部		胎土微細砂粒 地 厚織	にぶい 橙	受け口状口縁。器内はほぼ均一。 内外面とも横織で、内面は一部横方向に磨き。	口縁・縄文。 口・2本の波状波線文を施文。	
Fig. 40-13 PL. 34-1	甗	覆土 胴部から頸部		胎土砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。内外面とも磨状工具で斜方向に器面調整後、縦方向に磨き。	頸・横線文。	
Fig. 40-14 PL. 34-1	甗	覆土 底部から頸部		胎土砂粒混入 地 厚織	橘 灰	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整後、磨き。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・羽状直線文、胴部に連続。	
Fig. 40-15 PL. 34-1	甗	覆土(5N-21) 胴部から頸部		胎土微細砂粒 地 厚織	にぶい 橘	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は磨状工具により横方向に器面調整後、磨き。	頸・帯状文、時計まわり。	
Fig. 40-16 PL. 34-1	甗	覆土(5M-21) 胴部から頸部		胎土砂粒混入 地 厚織	にぶい 橙	器内はほぼ均一。 内面は磨状工具により横方向に器面調整後、磨き。	肩・コの字重文の上にボタン状貼付文(10個の円形斜突)。胴・胴部から連続でコの字重文。	
Fig. 40-17 PL. 34-1	甗	覆土(5M-20) 胴部から頸部		胎土砂粒混入 地 やや軟弱	橙	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 外面頸部は横織で、内面は斜方向に刷毛目調整。	頸・5条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・5条1単位の磨描波状文。	
Fig. 40-18 PL. 34-1	甗	覆土(5N-20) 胴部		胎土微細砂粒 地 厚織	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 内面は横方向に磨き。	頸・8条1単位の帯状文、時計まわり。	
Fig. 40-19 PL. 34-1	甗	覆土(5N-21) 胴部		胎土微細砂粒 地 厚織	にぶい 橙	器内はほぼ均一。内外面とも横方向に刷毛目調整後、内面は横方向に磨き。	胴・羽状直線文。	
Fig. 40-20 PL. 34-1	甗	覆土(5N-21) 胴部		胎土砂粒混入 地 やや軟弱	黒 橘	胴部で張りをもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも磨状工具により斜方向に器面調整。	胴・3条1単位の磨描波状文が2段確認。	
Fig. 40-21	鉢	覆土(5N-20)		胎土砂粒混入	赤 土	口縁部はやや内湾する。口縁端部は平たい。		内外面とも

PL. 34-1		胴部から口縁部		地 堅緻		内外面とも横方向に磨磨き。		赤色塗彩。
Fig. 40-22 PL. 34-4	高 杯	覆土 (5M-21) 脚・杯の接合部		胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 褐	接合部から大きく口縁部方向にひろく。脚部は外面で縦方向に調整。杯部は外面で横方向に磨、内面は縦方向に磨磨き。		
Fig. 40-23 PL. 34-5	高 杯	覆土 (5N-21) 脚 部		胎 砂粒混入 地 堅緻	明赤褐	接合部から胴部に向けて大きく外反。脚部は縦方向に磨磨り。接合部は押えが残る。		
Fig. 40-24 PL. 35-1	台付壺	覆土 (5M-20) 台 部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐	台部は接合部から胴に向けて大きくひろく。台端部は平たい。外面は斜方向に器面調整。内面は横方向に磨目。裾部は横磨で。		
Fig. 40-25 PL. 35-1	壺	覆 土 胴部から肩部		胎 砂粒混入 地 軟弱	黄 橙	胴部は大きく丸みをもつ。器内はほぼ均一。内面最大幅に輪積痕。外面は肩部から胴最大幅部に向け磨磨き。内面は横に磨目調整。		
Fig. 40-26 PL. 35-2	壺	覆 土 胴部から肩部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	黄 橙	胴部で大きく張りをもつ。器内は肩部で僅かに厚みを増す。内外面は斜方向に刷毛目調整。		
Fig. 40-27 PL. 35-3	甗	覆土 (5M-21) 底部から胴下半部	底 5.6	胎 礫混入 地 堅緻	灰黄褐	底部から胴部に向けてひろく。底部は磨磨で。外面胴下半部は磨磨で。内面底部は貼り付け痕を残し、胴下部は横方向に磨磨き。		
Fig. 40-28 PL. 35-4	鉢 (?)	覆土 (5N-21) 底部から胴下半部	底 5.7	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰黄褐	底部から胴部に向けて大きくひろく。外面は縦方向に磨磨き。内面は横方向に磨磨き。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 41-1 PL. 35-5	壺	床 面 頸部から口縁部	口 15.7 頸 7.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面頸部は横磨で。口縁下位は斜方向に刷毛目調整。口縁部内外面は横磨で。	頸・2本の横線文の間に3条1単位の横線波状文。横線文を横線波状文が切って地文。	
Fig. 41-2 PL. 35-6	壺	床 面 頸 部	頸 6.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	橙	口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。内外面とも斜方向の刷毛目調整。	頸・横線文と山形文が交互に地文。	
Fig. 41-3 PL. 35-7	壺	床 面 頸 部	頸 9.1	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目、口縁部付立で横磨で調整。内面は磨目調整。	頸・3本の横線文を地文。	
Fig. 41-4 PL. 35-8	壺	床 面 底部から頸部	頸 8.2 胴 27.0 底 10.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	最大幅は胴中位にある。器内は胴中部で僅かに厚い。内面に輪積痕がある。内外面とも斜方向に刷毛目調整後、磨磨き。外面は横方向に磨磨き。肩部は縦方向の磨磨き。	頸・4条1単位の波状沈線文。	
Fig. 41-5 PL. 36-1	壺	床 面 胴下部から口縁部 完	口 15.2 頸 7.6 胴 22.0	胎 砂・礫混 入 地 堅緻	黄 橙	胴部中位に最大幅をもち、口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。胴部内外面は刷毛目調整。頸部外面は磨目調整。口縁部内外面は横磨で。	口端・縄文。 頸・縄文地文様。3本の横線文。	

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 41-6 PL. 36-3	壺	床 面 底部から胴部 1/3	胴 19.4 底 8.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	胴部中央付近で最大幅をもつ。器内は底部付近で厚い。 内外面は刷毛目調整、外面底部付近は磨状工具による押え、胴下 部は縦方向、最大幅部分は横方向の荒磨き。		
Fig. 41-7 PL. 36-2	壺	床 面 底部から胴下半部	底 8.2	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	胴部に向い大きくひろく。器内は胴部に向け薄くなる。 外面は縦方向に荒磨き。内面は横方向に刷毛目調整。		
Fig. 41-8 PL. 36-4	壺	床 面 底部から胴下部	底 9.0	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	胴部に向い大きくひろく。器内は胴中央部に向けて薄くなる。 外面胴部は磨状工具により器面調整後、縦方向に荒磨き。 内面は磨状工具により器面調整。		

12号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 43-1 PL. 38-1	甕	床 面 肩部から口縁部	口約12.5	胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 外面口縁部は横撫で。内面口縁部は横方向に荒磨き。	頸・5条1単位の帯縞波状文。	
Fig. 43-2 PL. 38-1	小型甕	床 面 底部から口縁部	口約8.0	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	灰 褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 口縁部内外面は横撫で。	頸・4条1単位の帯状文、時計まわり。	
Fig. 43-3 PL. 38-1	小型甕	床 面 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で僅かに薄くなる。 外面肩部は斜方向に刷毛目、口縁部は内外面とも横撫で。内面肩 部は横方向に荒磨き。	口縁・縄文。 頸・コの字重文の上にボタン状貼付文。 肩・頸部からコの字重文を施文、胴部に続く。	ボタン状貼 付文に3つ の円形刺突
Fig. 43-4 PL. 38-1	小型甕	床 面 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 軟弱	橙	口縁部は外反。器内は頸部で僅かに厚い。外面口縁部は横撫で。 内面肩部は磨状工具により器面調整。口縁部は横方向に荒磨き。	口縁・縄文。頸・5条1単位の帯状文、時計 まわり。肩・5条1単位の磨状工具による羽 状直線文。	帯状文施文 後、羽状直 線文を施文
Fig. 43-5 PL. 38-1	小型甕	床 面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸い。器内はほぼ均一。 内外面とも横撫で。	口縁・縄文? 頸・3本の横線文がみられる。	
Fig. 43-6 PL. 38-1	甕	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	赤 褐	器内はほぼ均一。 外面は横方向の刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	頸・帯状文、時計まわり。 胴・肩部から4条1単位の羽状直線文を施文。	
Fig. 43-7	壺	床 面		胎 微細砂粒	浅黄橙	上方に向い厚みを増す。	胴・縦方向に横目、周囲に円形刺突文。	

PL. 38-1		胴部		地 堅織		外面は縦方向の刷毛目調整。内面は横目調整。		
Fig. 43-8 PL. 38-1	壺	床面 胴部から肩部		胎 砂粒混入 地 堅織	澄	器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横目調整。	縦・山形文と横線文が交互に施文。 胴・縦方向に帯描直線文。併列して列点文。	
Fig. 43-9 PL. 38-1	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 堅織	澄	器内はほぼ均一。 外面は縦方向に磨磨き。内面は横目、刷毛目調整。	胴・2本の横線文の間に山形文を施文。	
Fig. 43-10 PL. 38-1	壺	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅織	明 濁	器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は一部横目調整。	胴・縦方向に帯描波状文。	
Fig. 43-11 PL. 38-1	鉢	床面 胴部から口縁部	口 12.6	胎 砂粒混入 地 堅織	浅黄澄	口縁部は僅かに内湾。口縁部は平たい。口縁部外面に突起がある。 器内はほぼ均一。内外面とも横方向の磨磨き。	口・突起状の貼付文。	内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 43-12 PL. 38-1	台付鉢	床面 台部	底 10.0	胎 砂粒混入 地 堅織	浅黄澄	台部は縦に向けて広がる。台縁部は平たい。器内は均一。外面は斜方向に磨目調整後、縦方向に一部磨磨き。内面は横磨磨き。		
Fig. 43-13 PL. 38-2	甕	床面・覆土 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅織	浅黄澄	頸部は口縁部に向けて外反。器内は頸部で僅かに厚みを増す。 外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に磨磨き。	頸・6条1単位の縷状文。肩・6条1単位の 帯描波状文。胴・6条1単位の帯描波状文。	肩部～胴部 に連続4段
Fig. 43-14 PL. 38-3	小型甕	床面 底	口 10.3 胴 9.8 底 5.2	胎 砂粒混入 地 堅織	浅黄澄	口縁部は外反。口縁端部は縄文施文のため平たい。器内は底部から口縁部に向けて薄くなる。外面胴下半部は縦方向に磨磨き。内面は横方向に磨磨き。	口端・縄文。 頸・4条1単位の縷状文。 胴・肩部から3段、4条1単位の帯描波状文。	縷状文を流 状文が切る
Fig. 43-15 PL. 38-4	壺	床面 口縁部	口 20.0	胎 砂粒混入 地 軟弱	浅黄澄	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面頸部は斜方向に刷毛目。口縁部内外面は横撫で。器面が荒れている。	口端・縄文。口・流紋状線文。 頸・6条1単位の縷状文。時計まわり。 肩・羽状直線文が、胴部まで連続。	
Fig. 43-16 PL. 38-5	甕	床面 肩部から口縁部	口 22.8 胴 18.5	胎 微細砂粒 地 堅織	明濁灰	口縁部は外反し、中位から僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。 器内はほぼ均一。外面口縁部は横撫で。内面は横方向の磨磨き。	口端・刷毛目。	
Fig. 43-17 PL. 38-6	甕	床面 胴部から頸部	胴 14.3	胎 小礫混入 地 やや軟弱	にぶい 澄	頸部は口縁部に向けて外反。器内は肩部から頸部にかけて厚い。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整。	頸・4条1単位の縷状文。時計まわり。 胴・4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 43-18 PL. 38-1	甕	床面 胴下半部	底 9.7	胎 小礫混入 地 堅織	澄	器内は胴部に向けて薄くなる。外面胴部は磨目調整後、縦方向の磨磨き。内面は一部分に磨目調整。		
Fig. 43-19 PL. 38-2	甕	床面 底部から脚部	胴 18.6 底 8.7	胎 砂粒混入 地 堅織	にぶい 澄	胴部は大きく張る。器内は胴部に向けて薄くなる。外面底部は磨磨き。胴部は一部分で磨磨き。内面は横方向の磨目調整。		
Fig. 43-20	甕	床面	底 7.0	胎 砂粒混入	澄	胴部中央に向けて大きくひろく。瓶の穴はやや斜方向にあけられ		

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
PL. 39-3		底部		焼堅緻		れている。外面底部は一方に寛磨き。底部と胴部の接合部は磨目が横走。胴下部及び内面は寛磨き。		
Fig. 44-1 PL. 39-4	壺	床面 頸部から口縁部	口 23.0	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	灰白	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸い。器内はほぼ均一で口縁部で僅かに薄くなる。内外面とも磨目調整。外面口縁部は横撫で。	頭・横線文がまわる。	
Fig. 44-2 PL. 39-5	壺	床面 胴下半部 片	胴 26.9 底 10.3	胎 小砂混入 焼 やや軟弱	黄橙	胴部は大きく張りをもつ。器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目調整後、横方向の撫で。内面は斜方向に磨目調整。	胴・4本の沈線による連続文。	
Fig. 45-1 PL. 40-3	壺	覆土 片	胴 28.2 底 10.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴中央部で大きく丸みをもち張る。器内は胴下部で僅かに厚い。内面に輪積状。外面は脚載人幅部で横方向に磨目、胴下部で縦方向の磨面調整。内面は横方向に磨目調整。		
Fig. 45-2 PL. 40-4	壺	覆土 片	胴 26.6 底 8.9	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄橙	胴中央部で大きく丸みをもち張る。器内はほぼ均一。外面胴部は磨目調整後、胴下部は縦方向に寛磨き。内面は横方向に磨目調整。		
Fig. 45-3 PL. 40-5	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	灰褐	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも口縁部は横撫で。	口端・割れ目。口・4条1単位の帯幅波状文 頭・帯状文、時計まわり、4条? 肩・帯幅波状文。	
Fig. 45-4 PL. 40-5	壺	覆土 胴部から口縁部		胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	褐灰	受け口状口縁。口縁端部は丸い。器内は口縁部で僅かに薄い。外面口縁部は刷毛目調整。内面は横方向に寛磨き。	口・2本の波状沈線文。 胴・6条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・6条1単位の帯幅波状文が胴部に連続	帯幅波状文 上から下に 順次施文。
Fig. 45-5 PL. 40-5	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	器内はほぼ均一。外面は刷毛目調整。内面は横方向に寛磨き。	胴・6条1単位の帯幅波状文。	
Fig. 45-6 PL. 40-5	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて外反。外面は横撫で。内面は横方向に寛磨き。	胴・コの字重文の上にボタン状貼付文。 胴・頸部から胴部にかけてコの字重文。	ボタン状貼 付文に円形 刺突文。
Fig. 45-7 PL. 40-5	小型壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	胴部は丸みをもち張る。器内は薄くほぼ均一。外面は横方向に刷毛目。内面は横方向に寛磨き。	胴・コの字重文。	
Fig. 45-8 PL. 40-5	小型壺	覆土 胴下半部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	胴部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に寛磨き。	胴・コの字重文の下部と思われる。	
Fig. 45-9	甕	覆土		胎 砂粒混入	灰褐	器内はほぼ均一。	頭・横線文または帯状文と思われる。	

PL. 40-5		胴部		焼 堅緻		内面は横方向に荒磨き。	肩・4条1単位の羽状直線文。 胴・4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 45-10 PL. 40-5	不明	覆土 口縁部		胎 小礫混入 焼 堅緻	にぶい 橙	器内はほぼ均一。口縁部は丸みをもつ。 器面が荒れており調整不明。	口・2条の平行直線文。	縄文土器?
Fig. 45-11 PL. 40-5	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 外面は横方向に荒磨き。内面は横撫で。	頸・横線文。	
Fig. 45-12 PL. 40-5	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて僅かに外反。 外面は縦方向に荒磨き。内面は横方向に荒磨き。	頸・2本の横線文が確認できる。	
Fig. 45-13 PL. 40-5	壺	覆土 胴部から口縁部	口 14.0	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	口縁部は大きく外反。口縁部は丸い。輪軸直有り。器内はほぼ均一。外面頸部は楕円調整。内外面とも口縁部は横撫で調整。	口縁・縄文。	
Fig. 45-14 PL. 40-5	鉢	覆土 胴上半部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は内湾。器内はほぼ均一。口縁部に突起を付け円形の穴を貫通。内外面とも横撫で。		外面は赤色塗彩。
Fig. 45-15 PL. 41-1	台付甕	覆土 台部	底 7.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	接合部から裾に向けて大きくひろく。右端部は平たい。 接合部は指頭による押え。		
Fig. 45-16 PL. 41-2	高杯	覆土 脚部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	接合部から裾に向けて大きくひろく。 外面は縦方向に荒磨り。		

18号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地或	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 47-1 PL. 43-1	甕	床面 胴部から口縁部	口 17.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で僅かに薄くなる。口縁部は丸みをもつ。外面は刷毛目。内面は楕円。口縁部は内外面とも横撫で。	口縁・刷毛目。頸・4条1単位の縞状文、時計まわり。肩から胴部にかけて4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 47-2 PL. 43-1	小甕	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橘	口縁部は外反。口縁部は丸みをもつ。器内は均一。外面は横撫で。内面は横方向の荒磨き。	口縁・縄文。 頸・縞状文、時計まわり。	
Fig. 47-3 PL. 43-1	甕	床面 口縁部		胎 小礫混入 焼 堅緻	明赤褐	受け口状口縁。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。	口・地文に縄文を施した後、2本の流状直線文を施文。	
Fig. 47-4	甕	床面		胎 砂粒混入	にぶい	頸部は僅かに外反。器内はほぼ均一。外面は器面が荒れており頸・縞状文。		

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
PL. 43-1		肩部から頸部		焼 やや軟弱	橙	形は不明。内面は横方向に荒磨き。	胴。肩部から2段の襷描波状文を施文。	
Fig. 47-5 PL. 43-1	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 橙	肩部は丸みをもつ。頸部は口縁部に向い外反。器内は口縁部で僅かに薄い。外面胴部は横方向に刷毛目。内面は横方向に磨き。	頸・2条1単位の襷状文、時計まわり。肩・波状文様文。	
Fig. 47-6 PL. 43-1	甕	床面 肩部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向い外反。外面は横方向に刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	頸・7条1単位の襷状文、時計まわり。	
Fig. 47-7 PL. 43-1	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面一部は刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	頸・5条1単位の襷状文、時計まわり。肩・5条1単位の襷描波状文。	襷状文は波状文に切られている。
Fig. 47-8 PL. 43-1	甕	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	胴・襷描波状文。	
Fig. 47-9 PL. 43-1	甕	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄 褐	器内は下位で厚みをもつ。外面は斜方向に刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	胴・等間隔に横線文を施文。	
Fig. 47-10 PL. 43-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	受け口状口縁。口縁端部は縄文のため平たい。器内はほぼ均一。内外面とも頸部寄りには磨目。口縁部外面は横撫で。内面は横方向の荒磨き。	口端・縄文。 口・山形文。	
Fig. 47-11 PL. 43-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄 褐	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部に向い薄くなる。内外面とも横撫で調整を行った後、口縁部内面は横方向に荒磨き。	口・山形文。	
Fig. 47-12 PL. 43-1	壺	床面 胴部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	明 褐	僅かに内湾。内面は横方向に磨目。	胴・横線文、連瓦文。	
Fig. 47-13 PL. 43-1	小型壺	床面 胴部から口縁部	口 12.0	胎 微細砂粒 焼 堅緻	黄 橙	受け口状口縁。口縁端部は薄く丸みをもつ。外面胴部は横方向に刷毛目。外面口縁部と内面全体は横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。肩・2条1単位の襷描波状文 胴・波状文。現存写は、22号住居址と接合。	22号住居址 では 赤土。
Fig. 47-14 PL. 44-4	甕	床面 底部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	胴中央部分で丸みをもち張る。器内はほぼ均一。外面下部は縦方向に荒磨り。内面は荒れが激しく僅かに輪積状。		
Fig. 47-15 PL. 41-4	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄 橙	胴部に向い大きく外反。外面底部付近は押え板があり、その上を斜方向に磨目。内面は斜方向に磨目。		

Fig. 47-16 PL. 41-5	甕	床面 底	口 23.0 胴 26.2 高 25.7 底 7.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	に ぶ い 澄	最大輪は胴上位にあり丸みをもつ。受け口状口縁。口縁端部は丸みをもち、僅かに内湾。器内はほぼ均一。外面胴下部は縦方向に荒磨き。胴部は横方向に刷毛目。口縁内外面は横撫で。内面胴下部は横方向の刷毛目。上位は磨き目。	口・山形文。 胴・7条1単位の縹状文、時計まわり。 胴・胴部から7条1単位の羽状直線文。	
Fig. 47-17 PL. 41-6	瓶	床面 底	底 5.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	に ぶ い 澄	穴の部分は外から内へ向けて穿孔。外面は縦方向に荒磨り。内面は磨目。		
Fig. 47-18 PL. 41-7	甕	床面 頸部から胴部	口 21.4 頸 8.7	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄澄	受け口状口縁。口縁端部は縄文地文により平たい。器内は頸部で厚く口縁部は薄し。内外面とも横方向に刷毛目調整。	口端・縄文。口・地文に縄文地文後、山形文 頸・縄文地文後横線文によって切られる。	
Fig. 47-19 PL. 41-8	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	澄	胴部から頸部へ向い丸みをもつ。頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内面に輪横筋。外面は横方向に刷毛目。	頸から胴部・横線文と山形文を交互に施文。 横線文を施文後、山形文を施文。	
Fig. 47-20 PL. 41-9	鉢	床面 底	口 16.4 底 8.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 澄	内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸みをもつ。内外面とも胴下半部は刷毛目が横走。口縁部は横撫で。		
Fig. 48-1 PL. 43-2	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄澄	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部で僅かに薄くなる。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。 頸・縹状文、時計まわり。	
Fig. 48-2 PL. 43-2	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	に ぶ い 澄	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で薄くなる。内外面とも横撫で。内面はその後荒磨き。	口端・縄文を圧痕。 頸・縹状文、時計まわり。	
Fig. 48-3 PL. 43-2	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	に ぶ い 澄	受け口状口縁。器内はほぼ均一。口縁部外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口端・縄文。口・3条1単位の波状沈線文。 頸・縹状文、時計まわり。	
Fig. 48-4 PL. 43-2	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	に ぶ い 澄	口縁部は外反。中位より僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口端・縄文。口・2条1単位の山形文。 頸・5条1単位の縹状文、時計まわり。	
Fig. 48-5 PL. 43-2	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 澄	受け口状口縁。器内はほぼ均一。外面は刷毛目が斜走。内面は横方向に荒磨き。	口・2条1単位の山形文。 頸・5条1単位の縹状文、時計まわり。	
Fig. 48-6 PL. 43-2	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	に ぶ い 澄	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。	口・2条1単位の山形文。 横撫で。	
Fig. 48-7 PL. 43-2	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	濁 灰	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁端部で薄くなる。内外面とも横方向に荒磨き。	口端・刷毛目。外面に細い横線文。 口・3条1単位の山形文、2本の横線文。	横線文と山形文間に2本の横線文
Fig. 48-8	甕	覆土		胎 砂粒混入	浅黄澄	口縁部は大きく外反。口縁端部外側が丸みをもつ。器内は口縁部	口端・刷毛目。	

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
PL. 43-2	甕	頸部から口縁部		焼 堅緻		部に向い薄い。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。		
Fig. 48-9 PL. 43-2	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は外反。口縁中位より端部に向い僅かに内湾。器内はほぼ均一。外面は横撫で。内面は横撫で後に荒磨き。	口端・縄文。口・5条1単位の断橋流状文。頸・5条1単位の縹状文。肩から胴部・縹状文。コの字重ね文上にボタン状貼付文。	ボタン状貼付文に円形刺突文。
Fig. 48-10 PL. 43-12	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 褐	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。内面はその後横方向に荒磨き。	縹・縹状文。時計まわり。	
Fig. 48-11 PL. 43-2	甕	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面と内面肩部は斜方向に磨目。頸部は横撫で。	頸・4条1単位の縹状文。時計まわり。	
Fig. 48-12 PL. 43-2	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 褐	器内はほぼ均一。胴下半部は縦方向に荒磨き。中央部は横方向の刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	胴・5条1単位の断橋流状文を2段施文。	
Fig. 48-13 PL. 43-2	甕	覆土 胴部から肩部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 褐	胴部は丸みをもち張る。器内はほぼ均一。内面最大幅部分は横方向に磨目調整後、荒磨き。	肩から胴部・コの字重文。	
Fig. 48-14 PL. 43-2	甕	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目。	頸から胴部・コの字重文。	
Fig. 48-15 PL. 43-2	壺	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黒 褐	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目。内面は横撫で。	頸・2本の波状流状文。肩・擬似縄文(刺突文を地文)2本の横線文。	
Fig. 48-16 PL. 43-2	壺	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。頸部付近は縦方向に磨目。	口端・縄文。	
Fig. 48-17 PL. 43-2	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 橙	肩部から頸部の変遷点で幅立ちに立ち上がる。器内は頸部で薄くなる。外面は縦方向に磨目。内面は横方向に磨目。	頸・地文に縄文を施文後、横線文。	
Fig. 48-18 PL. 43-2	壺	覆土 頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	明赤褐	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。内面は横撫で。	頸・地文に縄文を施文後、横線文、流状流状文。	
Fig. 48-19 PL. 43-2	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄 橙	肩部は頸部に比して僅かに器内が薄い。外面は斜方向に刷毛目。内面は横撫で。	頸・2本の横線文の間に山形文。	
Fig. 48-20 PL. 44-1	蓋	覆土 組み部(?)		胎 砂粒混入 焼 堅緻	白 灰	楕円形になると考えられる。組み部に円形の穴を穿っているが、未貫通である。外面は横方向に荒磨き。内面は横撫で。		内外面とも赤色塗彩

Fig. 48-21 PL. 44-2	高杯	覆土 脚部	脚	5.9	胎砂粒混入 焼堅緻	明赤褐色	裾部に向い大きくひろく、裾端部は面取りを行っている。器内はほぼ均一。外面は斜方向に荒磨き。内面は横方向に磨目。		外面は赤色 塗彩。
Fig. 48-22 PL. 44-3	台付甕	覆土 台部	台	5.0	胎微細砂粒 焼堅緻	浅黄褐色	輪積収が僅かに残り歪む。台部は裾に向いひろく。外面は指痕直があり、一部分荒磨き。		
Fig. 48-23 PL. 44-5	甕	覆土 底部	底	6.3	胎砂粒混入 焼やや軟弱	浅黄褐色	胴部中位に向い大きく外反。内外面とも磨目。		
Fig. 48-24 PL. 41-3	甕	覆土 底部から胴下半部	底	7.8	胎砂粒混入 焼堅緻	浅黄褐色	胴中央部に向い張る。器内は胴中央に向い薄くなる。外面は斜方向に磨目。底部との接合部は磨状工具により押し直。内面は横方向に磨目。		
Fig. 48-25 PL. 44-6	甕	覆土 底部から胴下半部	底	7.4	胎砂粒混入 焼堅緻	澄	胴中央部に向い張り出す。器内は底部が薄い。外面は縦方向に荒磨き。底部との接合部は横撫で。内面は横方向に荒磨き。		
Fig. 48-26 PL. 44-7	高杯	覆土 脚部	胎		胎砂粒混入 焼堅緻	浅黄褐色	棒状の脚部で、器部で大きくひろく。縦方向に荒磨き。		外面は赤色 塗彩。

14号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 51-4 PL. 45-4	壺	床面 胴部から口縁部	口 18.0	胎砂粒混入 焼堅緻	澄	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面頸部は横方向に刷毛目。口縁部は縦方向に荒磨き。口縁端部および内面は横撫で。	瓶・5本の横線文を施す。	
Fig. 51-2 PL. 45-5	甕	床面 胴下半部 互	胴 24.9 底 10.4	胎砂粒混入 焼堅緻	淡褐色	胴部は丸みもち張る。器内は胴中位に向けて薄くなる。外面胴最下部は距押し。胴部は縦方向に荒磨き。内面は横方向に刷毛目調整。		

15号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 53-1 PL. 47-1	甕	床面 胴部から口縁部		胎砂粒混入 焼堅緻	明褐色	口縁部は大きく外反。中位で僅かに内湾。器内はほぼ均一。内面は横撫で調整後、荒磨き。	口端・駒目目。口・6条1単位の帯幅或杖文 頸・6条1単位の帯状文、時計まわり。	

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
							肩・6条1単位の帯幅或状文が2段施文。	
Fig. 53-2 PL. 47-2	壺	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	明 褐	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。 外面は横方向の刷毛目調整後、胴部から肩部にかけて一部分に縄文を施文。内面は磨目調整。	頸・帯幅或状文。 肩・胴部にかけてコの字重文。 胴・地文に縄文。	コの字重文は横方向が先行施文。
Fig. 53-3 PL. 47-2	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	器内はほぼ均一。 外面は横方向に刷毛目調整。	胴・横線文と山形文が交互に施文。	
Fig. 53-4 PL. 47-2	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	器内はほぼ均一。外面は肩部寄りでは斜方向に刷毛目調整。頸部は横線で、内面は横線で後、横方向に磨磨き。	頸・横線文、山形文。	
Fig. 53-5 PL. 47-2	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	器内はほぼ均一。 内外面とも荒れており整形不明。	頸・2本の横線文。	
Fig. 53-6 PL. 47-2	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	頸部は口縁部に向けて外反。 外面は斜方向に刷毛目調整。	胴・山形文の内側に3本の平行沈線。	
Fig. 53-7 PL. 47-3	小型壺	床面 口		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	口縁部は大きく外反。器内は頸部から口縁部にかけて薄くなる。全体的に粗雑である。外面口縁端部は横線で、内面胴部は横方向に磨目調整。	頸・帯幅或状文。 胴・羽状直線文。	
Fig. 53-8 PL. 47-4	高杯	床面 脚と杯の接合部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	接合部から脚部は傾に向けてひろく。脚部外面は縦方向に向い磨磨き。杯部内面は磨磨き。		
Fig. 53-9 PL. 48-1	台付甕	床面 台端部	底 7.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	瓶部はひろく。台端部は平たい。内面は輪積状が有る。 内外面とも横線で。		
Fig. 53-10 PL. 48-2	瓶	床面 口縁部一部を欠損	口 17.3 底 6.2 高 8.7	胎 砂粒混入 地 堅緻	明赤褐色	底部から口縁部に向けて大きくひろく。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部に向い僅かに薄くなる。外面胴下半部は縦方向に磨磨き。口縁部は内外面とも横線で。内面胴部は磨目調整。		内面に有機物付着。
Fig. 53-11 PL. 48-3	甕	床面 胴下部	底 6.4	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	胴中央部に向けてひろく。器内は胴中央部に向けて薄くなる。外面は縦方向に磨磨き。底部との接合部は櫛状工具による押え。内面は横方向に刷毛目調整。		
Fig. 53-14 PL. 47-5	甕	覆土 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	口縁部は外反。口縁中位より僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部で僅かに薄くなる。口縁部は横線で。	口・山形文。 頸・帯状文、時計まわり。	

Fig. 53-15 PL. 47-5	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 堊 堅緻	灰 黒	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。 内外面とも横撫で。内面は横撫で後、横方向に荒磨き。	口端・縄文。 頸・帯流状文。	
Fig. 53-16 PL. 47-5	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 堊 やや軟弱	灰 白	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 外面口縁部以外は刷毛目調整。内面は横撫で。	口端・縄文。 口・2本の波状北縁文。	
Fig. 53-17 PL. 47-5	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 堊 堅緻	浅黄橙	口縁部は外反し、端部で僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。 内面は横方向に荒磨き。	口・5条1単位の帯流波状文。	
Fig. 53-18 PL. 47-5	甕	覆土 頸部から頸部		胎 砂粒混入 堊 堅緻	浅黄橙	頸部は僅かに丸みをもち張り。器内はほぼ均一。 内外面とも刷毛目調整。	頸・帯状文、時計まわり。肩・羽状直線文が 頸部に連続。胴・肩部から羽状直線文。	
Fig. 53-19 PL. 47-5	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 堊 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。 内外面とも横方向に刷毛目調整。	胴・羽状直線文。	
Fig. 53-20 PL. 47-5	甕	覆土 肩部		胎 砂粒混入 堊 堅緻	にぶい 橙	器内はほぼ均一。 内面は斜方向の刷毛目調整後、横方向に荒磨き。	肩・帯状文。縦・横方向に縄文。	
Fig. 53-21 PL. 47-5	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 堊 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。 内外面とも横方向の刷毛目調整。	胴・羽状直線文。	
Fig. 53-22 PL. 47-5	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 堊 軟弱	浅黄橙	頸部から頸部にかけて器内はほぼ均一。 器面が荒れており、整形は不明。	頸・横線文の間に山形文を施文。	
Fig. 53-23 PL. 47-5	甕	覆土 頸部		胎 砂粒混入 堊 堅緻	黒 灰	頸部は口縁部に向けて僅かに外反。 内外面とも刷毛目調整。	頸・横線文施文後山形文。	横線文を山 形文が切る
Fig. 53-24 PL. 47-5	甕	覆土 頸部		胎 砂粒混入 堊 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて僅かに外反。器内は薄くほぼ均一。 内外面とも器面が荒れており、整形状態は不明。	頸・山形文、4本の横線文、3本の斜行線文。	
Fig. 53-25 PL. 47-5	高杯(?)	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 堊 軟弱	浅黄橙	高杯の杯部口縁と思われる。波状(籠冠状)を呈す。 器面は荒れており、整形状態は不明。		
Fig. 53-26 PL. 47-5	壺?	覆土 口縁部		胎 微細砂粒 堊 やや軟弱	浅黄橙	口縁部中位において内湾。口縁端部は内面を荒削り。 内外面とも横撫で調整。		外面赤色塗 彩。
Fig. 53-27 PL. 48-6	高杯	覆土 杯と脚部の接合部		胎 砂粒混入 堊 やや軟弱	浅黄橙	外面接合部は縦方向に荒磨き。内面脚部・杯部は荒磨き。		
Fig. 53-28 PL. 48-7	甕	覆土 底部		胎 砂粒混入 堊 やや軟弱	浅黄橙	胴下位は胴中位に向けて外反。外面は磨状工具により底部との接 合部を押えている。内面は荒れが激しく(整形状態は不明)。		

16号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 土成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 55-2 PL. 50-2	高杯	床面 杯部	口 21.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	頸部から口縁部にかけて大きく外反、口縁端部は丸い。器内はほぼ均一。焼成後、2個の穴を穿つ。内外面とも横方向の磨磨き。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 55-3 PL. 51	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明褐灰	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内外面とも刷毛目調整後、内面は横方向に磨磨き。	胴・6条1単位の縞状文。 肩・ボタン状貼付文に4つの円形突起文。 胴・5条1単位の縞描波状文2段のみ確認。	
Fig. 55-4 PL. 51	壺	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 軟弱	灰 白	受け口状口縁を呈し、口縁部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも器面が荒れている。	口端・縄文。 口・波状比線文。	
Fig. 55-5 PL. 51	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	受け口状口縁を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で調整後、内面は横方向に磨磨き。	口端・縄文。 胴・4条1単位の縞状文。時計まわり。	
Fig. 55-6 PL. 51	甕	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 橙	受け口状口縁を呈す。器内は口縁部で薄くなる。内外面とも横撫で調整。	胴・2条1単位の山形文。 肩・縞線文・2本確認（縞状文?）	
Fig. 55-7 PL. 51	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	受け口状口縁を呈す。器内は口縁部で薄くなる。内外面とも横撫で調整。	口端・縄文。 胴・縞描波状文。	
Fig. 55-8 PL. 51	甕	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。外面は横方向に刷毛目。内面は横方向に磨目調整。	胴・縞状文。時計まわり	
Fig. 55-9 PL. 51	甕	覆土 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。内面は横方向に磨磨き。	胴・縞状文。時計まわり。肩・4条1単位の縞描横線文。胴・4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 55-10 PL. 51	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	明褐灰	器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。	胴・4条1単位の格子目文。	
Fig. 55-11 PL. 51	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	器内はほぼ均一。内外面とも横方向に刷毛目調整。	胴・コの字重文の下部と思われる。	
Fig. 55-12 PL. 50-3	甕	覆土 底部から胴下半部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。	胴・コの字重文の下部と思われる。コの字重文上にボタン状貼付文を施文。	ボタン状刺交文1個。
Fig. 55-13 PL. 51	壺	覆土 口縁部	口 18.8	胎 砂粒混入 焼 軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。口縁部内外面は横撫で調整。		

Fig. 55-14 PL. 51	壺	腹土 口縁部	口の約17.4	胎 小硬混入 地 軟弱	淡 橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目調整、内面は横撫で後、縦方向に荒磨き。	口縁・外面から内側に押捺。	
Fig. 55-15 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	淡 橙	頸部から口縁部に向い大きく外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目調整後、縦方向に荒磨き。内面は横撫で。	胴・3本の横線文。	16番と同一 個体?
Fig. 55-16 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	淡 橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目調整後、縦方向に荒磨き。内面は横撫で。	胴・2本の横線文を確認。	15番と同一 個体?
Fig. 55-17 PL. 51	壺	腹土 肩部から頸部		胎 微細砂粒 地 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。内面に輪槽痕。外面は縦方向に磨目調整後、荒磨き。内面は多方向に荒磨き。	胴・山形文と施文後、平行沈線文。	
Fig. 55-18 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	僅かに外反。外面は斜方向に磨目調整。内面は横撫で調整後、縦方向に荒磨き。	胴・横線文と山形文を施文。	
Fig. 55-19 PL. 51	壺	腹土 肩部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内は胴部に向い僅かに厚みを増す。内面は斜方向に磨目調整。全体的に器面は荒れている。	肩・横線文、波状沈線文。	
Fig. 55-20 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	僅かに内湾。器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目調整。内面は横方向の調整。	胴・沈線による横線文と波状文。	
Fig. 55-21 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面は横方向に器面調整。内面は横方向に磨目調整。	胴・沈線による横線文と波状文の一部。	
Fig. 55-22 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。内外面は横方向に磨目調整。	胴・横線文。	
Fig. 55-23 PL. 51	壺	腹土 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部に向い外反。僅かに歪む。外面は斜方向に刷毛目調整。		
Fig. 55-24 PL. 50-4	高杯	腹土 脚部	底 6.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	脚部は裾に向いひろく。脚端部は丸みをもつ。外面は縦方向に荒磨き。脚部内面は横方向に荒磨き。		外面と杯部 内面に赤色 塗彩。
Fig. 55-25 PL. 50-5	台付鏡 (?)	腹土 台部	底 8.8	胎 砂粒混入 地 軟弱	淡 黄	台部は裾に向い大きくひろく。裾端部は僅かに荒杖工具により面取り。器面は荒れており不明。裾部片側に2個、対面に1個(割れているため2個確認できず)の円形の穴を穿っている。		
Fig. 55-26 PL. 50-6	高杯	腹土 脚部	底 4.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	淡 橙	脚端部に向いひろく。脚端部は平たい。外面接合部は横撫で。脚部は荒磨き。内面は横方向に刷毛目調整。		外面赤色塗 彩。

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 地 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 55-27 PL. 50-7	甕	覆土 底部	底 7.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	底部との接合部分より大きく胴中央部に向いひろく、胴較下部は 底部との接合のための備状工具で器面調整。内面は横方向に刷毛目。		

17号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 地 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 58-1 PL. 57-1	壺	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。 内外面とも横方向に刷毛目調整。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 58-2 PL. 57-2	壺	床面・覆土 胴部	胴 13.3	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	胴部は丸みをもち大きく張る。器内はほぼ均一。 外面は横撫で調整。		外面は赤色 塗彩。
Fig. 58-3 PL. 57-3	壺	床面 口	頸 6.8 胴 16.5	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 白	胴部は丸みをもち大きく張る。頸部は口縁部に向け外反。器内は ほぼ均一。内面に輪積痕。外面胴部は斜方向に磨目調整。最大幅 部分は横撫で。肩部は磨目調整。内面は磨目調整。頸部は横撫で。	頸・3本の横線文の間に2本1単位の波状文 最下位の横線文下に山形文を施し、山形文 の中に3-4本の平行沈線文を施す。	
Fig. 58-4 PL. 57-4	壺	床面 頸部から肩部	胴約19.6	胎 小礫混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は丸みをもち大きく張る。胴下半部は厚く、肩部は僅かに薄 い。胴下半部は刷毛目調整後、縦方向に磨磨き。胴上半部は刷毛目 内面は横方向に刷毛目調整後、肩部は斜方向に磨磨き。	肩・胴中位までは横線文と山形文が交互に施 す。胴・3本の横線文の下に山形文を施し、山 形文の中に4-6本の平行沈線文を施す。	山形文内に 円形刺文を 施す。
Fig. 58-5 PL. 57-5	壺	床面 完 形	口 11.3 頸 6.6 胴 21.8 底 7.8 高 28.6	胎 小礫混入 地 堅緻	浅黄橙	最大幅は胴部中位にある。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸み をもつ。器内は下半部で厚く、頸部から口縁部にかけて僅かに薄 い。胴下半部は斜方向に磨磨き。頸部から胴中央部にかけては縦 方向に細かい磨磨き。口縁部は内外面とも横撫で。	頸・横線文が施文され、2本は終結するが、 1本は半分ほどまわり切れる。	
Fig. 58-6 PL. 57-6	壺	床面 口	頸 8.7 胴 20.9	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は丸みをもち大きく張る。口縁部は大きく外反。器内は胴部 中位で厚い。内面には輪積痕が見られる。 外面は斜方向に刷毛目調整後、最終的に磨磨きを行っている。 内面は頸部から口縁部にかけて磨磨き。	頸・肩部にかけて横線文の間に2本の波状沈 線文を4回繰返し施文。肩・横線文の間に2 本の波状沈線文を4段施文(横線文を波状沈 線文が切る)。胴・横線文の間に波状沈線文を3 回繰返し施文。波状沈線文は上位区画より2 条2回4本、3本、2本を施文。	胴下半部は 山形文を施 す。
Fig. 59-1 PL. 58-1	小型壺	床面 完 形	口 6.4 頸 2.8	胎 微細砂粒 混入	黄 橙	最大幅は胴部にあり、口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをも つ。胴下半部分に突起を付けている。突起には円形の穴を穿つ。		外面と内面 口縁部は赤

			胴 8.9 底 4.9 高 12.8	胎 堅緻		外面胴下半部分は横、胴上半部分は縦方向に荒磨きが行なわれている。内面口縁部は横撫で調整。 胴部は摩耗痕がある。		色塗彩。
Fig. 59-2 PL. 58-2	瓶	床面 瓦	口 14.9 底 4.6 高 9.4	胎 砂粒混入 地 堅緻	明褐色	底部から口縁部に向いひろく、口縁端部は篋状工具により面取りを行ない平たい。底部中央に円形の穴を穿つ。外面胴部は縦方向に荒磨き。内面口縁部は横撫で調整。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 59-3 PL. 58-3	瓶	床面 瓦	口 18.0 底 6.4 高 10.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄褐色	底部から僅かに外反し口縁部に至る。端部は平たい。器内は底部より口縁部に向い漸くなる。底部中央に円形の穴を穿つ。外面胴下位は篋状工具による押え。胴から口縁部にかけて節目調整。内面は横方向に荒磨きが行なわれている。		口縁部は僅かに歪む。
Fig. 59-4 PL. 58-4	高杯	床面 口縁の一部を欠損	口 14.0 接合 3.1 底 6.8 高 8.4	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰白	胴部は縦に向い大きくひらき、端部は平たい。杯部は口縁部に向い大きくひらく。口縁端部は波状(冠冠状)を呈す。胴部は横撫で。接合部から胴部にかけては縦方向に荒磨き。杯部は外面で縦方向に荒磨き。内面は横撫で。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 59-5 PL. 59-1	小型台 付甕	床面 裏面瓦	口 10.8 胴 8.4 胴 10.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	胴部は丸く張る。口縁部は大きく外反。口縁端部は薄く丸をもつ。接合部は割れており、底部の底はへソ状の突起をもつ。内外面とも口縁部は横撫で。内面胴下半部は節目調整。胴上半部は横方向に荒磨き。		胴部から胴下半部にかけてコの字重文と地文 4区画で1周する。各単位の上端にボタン状 貼付文を施文。ボタン状貼付文の中心には円 形刺突文を穿つ。
Fig. 59-6 PL. 59-2	小型台 付甕	床面 口縁部を欠損瓦	胴 6.3 底 5.1	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄褐色	台部は縦に向いひろき。端部は平たい。胴部は中央で丸をもち張る。器内は台部で厚い。内面に輪積痕がみられる。台部外面は縦方向に荒磨き。壁部内面は横撫で調整。		胴部から胴部にかけてコの字重文が施文され、 4区画で1周する。
Fig. 59-7 PL. 59-3	台付甕	床面 台部	底 9.7	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	浅黄褐色	台部は縦に向いひろく。端部は丸をもつ。器内は台端部に向い漸くなる。外面は縦方向に荒磨り。胴部は内外面とも横撫で。内面接合部は横方向に節目調整。		
Fig. 59-8 PL. 59-4	台付甕	床面 口縁部・胴部 一部分を欠損。	口 10.2 胴 9.1 胴 10.3	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄褐色	台部は縦に向いひろく。胴部は丸をもち、口縁部は大きく外反。口縁端部は丸をもつ。器内は台部で厚い。台部には輪積痕がある。台部外面は縦方向に荒磨り。胴部は刷毛目が横走。口縁部は横撫で。壁内面は荒磨き。		口端・細かい刺目。 胴・胴部からコの字重文が施文され、3区画 で1周する。
Fig. 59-9 PL. 59-5	高杯	床面・覆土 瓦	口 24.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	明赤褐色	胴部は僅かに残存し、胴部に向いひろく。杯部は口縁部に向い大きくひらき、口縁上位で内湾。口縁端部は平たい。胴部上位に2つの穴を穿つ。杯部外面は斜・横方向に節目調整。内面は横方向に荒磨き。胴部内面は横方向に荒磨き。		口端・貼付文。

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 59-10 PL. 60-1	甕	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	口縁部は外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも横撫で。	口縁・筋目 線・縷状文、時計まわり。	
Fig. 59-11 PL. 60-1	高杯小 鉢(?)	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 軟弱	浅黄橙	口縁部はひらく。口縁端部は丸みをもつ。器内は薄い。 器面は荒れており外面は横撫で。内面は理磨きが一部で見られる。	口・2つの円形の穴を穿っている。	
Fig. 59-12 PL. 60-1	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。 内外面とも横方向に刷毛目調整。	頸・5条1単位の縷状文、時計まわり。 肩・5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 59-13 PL. 60-1	小型甕	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	胴部は丸みをもつ。器内は胴下半部が厚い。胴中にボタン状貼 付文を施文、内面は横方向に理磨き。	胴・波状沈線文の上にボタン状貼付文を施文 し、3つの円形刺突文を施文。	
Fig. 59-14 PL. 60-1	甕	床面 肩部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	器内はほぼ均一。外面は横方向の刷毛目。内面は櫛状工具により 横方向に器面調整。	肩・胴部にかけてコの字重文を施文。	
Fig. 59-15 PL. 60-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	受け口状口縁。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部に向い薄く なる。内外面とも横撫で調整。内面は一部で横方向に筋磨き。	口・地文に縦引縄文施文後、2本の波状沈 線文を施文。	
Fig. 59-16 PL. 60-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整後、口縁部内面は横撫で調整。		
Fig. 59-17 PL. 60-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整後、内面口縁部は横撫で調整。		
Fig. 59-18 PL. 60-1	壺	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁端部に向い外反。器内はほぼ均一。 口縁部は横撫で調整。	頸・山形文の内側に円形刺突文を施文。	
Fig. 59-19 PL. 60-1	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	灰 白	器内はほぼ均一。 内外面とも横方向に横目調整。		
Fig. 59-20 PL. 60-1	壺	床面 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橘 灰	胴下半部の破片であり、中位に向けてひらく。器内はほぼ均一。 外面は細かい刷毛目が横走し、内面は横方向に横目調整。		
Fig. 60-1 PL. 59-6	小型甕	床面 %口縁一部欠損	口 13.6 頸 11.8 胴 13.6 底 6.2 高 10.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	明褐色	胴部は大きく丸みをもち張り。受け口状口縁を呈し、口縁端部は 丸みをもつ。口縁部に2つの円形の穴を穿つ。器内は底部から口 縁部に向い薄くなる。 内外面とも横方向に理磨き。		外面全部・ 内面上半部 は赤色塗彩

Fig. 60-2 PL. 60-2	裏 床面 胴部から口縁部	口 16.6 底 13.9	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。胴部は内外面とも縦方向に刷毛目調整。口縁部は横撫で。	口端・筋み目。頸・8条1単位の鬚状文、時計まわり。胴・6条1単位の羽状直線文。	
Fig. 60-3 PL. 60-4	裏 床面 %	口 14.4 胴 10.9 底 6.5 高 20.5	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	胴部に最大幅があり、丸く張る。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は胴下部より口縁部に向けて薄くなる。外面胴部は器面が荒れている。胴下半部は寛磨きが行なわれている。口縁部は内外面とも横撫でが行なわれ、内面胴上半部は横方向に横目調整。	頸・7条1単位の鬚状文、時計まわり。胴・胴部から胴部にかけて5・7条1単位の羽状直線文と地文。	全体に歪む
Fig. 60-4 PL. 60-3	裏 床面 胴部から口縁部	口 20.2 胴 17.4 底 21.6	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 褐	胴部は丸みをもち大きく張る。口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面胴部は横・口縁部は斜方向に刷毛目調整。内面は寛磨き。	口端・筋み目。頸・6条1単位の鬚状文、時計まわり。胴・胴部から6条1単位の羽状直線文。	羽状直線文は全面性に欠ける。
Fig. 60-5 PL. 61-1	裏 床面 %	口 15.8 胴 13.7 底 6.2 高 14.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は底部より口縁部に向い薄くなる。外面胴最下部は底部接合のため櫛状工具を細かく押しついている。胴下半部は斜方向に横目による調整痕がみられる。内面は斜方向に刷毛目調整。	口端・縄文。頸・5条1単位の鬚状文、時計まわり。胴・5条1単位の羽状直線文が胴部から連続している。	
Fig. 60-6 PL. 61-3	裏 床面 %	口 18.9 胴 17.2 底 6.9 高 23.8	胎 砂粒混入 地 軟弱	浅黄橙	最大幅は胴部にあり、丸みをもち張る。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。外面は胴下半部において縦方向に寛磨き。胴中位から胴部にかけて櫛状工具により横方向に砂面調整。口縁部は内外面とも横撫で。内面胴部は櫛状工具により砂面調整。	口端・縄文。頸・4条1単位の鬚状文、時計まわり。胴・胴部から4条1単位の羽状直線文。	口縁部付近は歪む。
Fig. 60-7 PL. 61-2	裏 床面 %	口 16.3 底 13.3 高 19.3	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	最大幅は胴部にあり、丸みをもち張る。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。外面胴部は刷毛目調整後下半部は縦方向に寛磨き。口縁部は横撫で。内面胴上半部は横方向の寛磨き。	頸・6条1単位の鬚状文、時計まわり。胴・胴部から6条1単位の羽状直線文が連続。	
Fig. 61-1 PL. 61-4	裏 床面 底部から胴部	底 5.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 褐	底部から胴部にかけてひろく。器内は底部で厚く、胴部は僅かに薄い。胴最下部は底部接合のため荒押し。胴部外面は縦、内面は斜方向に寛磨き。		
Fig. 61-2 PL. 61-5	裏 床面 底部から胴下半部	底 7.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	濃い 橙	底部から胴部にかけて大きくひろく。器内は胴上位に向い薄くなる。外面は縦方向に寛磨き。内面は斜方向に刷毛目調整。		
Fig. 61-3 PL. 61-6	裏 床面 底部から胴下半部	底 7.8	胎 小礫混入 地 堅緻	濃い 橙	底部から胴部にかけて大きくひろく。器内は底部中央で厚く、胴部はほぼ均一。底部の接合は櫛状工具による押し痕。胴部は内外面とも刷毛目調整。		
Fig. 61-4	裏 床面	底 8.0	胎 砂粒混入	浅黄橙	底部から胴部に向い内湾しながら立ち上がる。器内は胴部に向い		

図版番号 写真番号	部 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 色 調	色 調	部 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
PL. 61-7		底部から胴下半部		地 やや軟弱		薄くなる。外面胴部は縦方向に荒磨き。		
Fig. 61-5 PL. 61-8	甕	床 面 底部から胴部	底 7.9	胎 小硬混入 地 軟弱	黄 橙	底部から胴部に向い大きく張りをもつ。器内は上位に向い薄くなる。		
Fig. 61-6 PL. 62-1	甕	床 面 底部から胴中位	胴 21.5 底 9.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴中位で丸みをもち張る。器内は底部から胴中位に向けて僅かに薄くなる。内面に輪横痕。胴下位と底部の接合部は磨状工具による押え痕。胴部は横方向の刷毛目調整後、斜方向に荒磨き。内面は横方向に刷毛目調整。		
Fig. 61-7 PL. 62-2	甕	床 面 底部から胴中位	胴 22.0 底 9.2	胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	胴中位は丸く張る。器内は底部から胴中位に向けて薄くなる。内面は輪横痕がみられる。内外面とも刷毛目調整。外面胴下位で荒磨り。		
Fig. 61-8 PL. 62-3	甕	床 面 口縁部欠損	胴 18.9 胴 26.0 底 10.3	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	胴部は大きく張りをもつ。器内はほぼ均一。内面に輪横痕。外面胴下半部は斜・中央部で横方向に荒磨き。肩部は磨目調整。内面は全面に刷毛目調整後、一部分は荒磨き。	胴・5条1単位の簾状文、時計まわり。	
Fig. 61-9 PL. 62-4	甕	床 面 胴 部	胴 27.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	明褐色	胴中央部は丸みをもち張る。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整後、胴中位で横・肩部、胴下半で縦方向に荒磨き。		
Fig. 62-1 PL. 62-5	甕	床 面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黒 褐	胴部は丸みをもち張る。頸部は口縁部に向かい外反。器内は頸部で薄くなる。内外面とも刷毛目調整後、内面は斜方向に荒磨き。	胴・5条1単位の簾状文、時計まわり。 胴・肩部から3〜6条1単位の羽状直線文。	
Fig. 62-2 PL. 62-5	甕	覆土(6F-3) 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	受け口状口縁を呈し、口縁端部は丸い。器内は口縁部で薄い。口縁部は内外面とも横撫で調整。	口・網橋波状文、5条1単位?	
Fig. 62-3 PL. 62-5	甕	覆土(6F-3) 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	胴部は丸みをもち大きく張る。頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面胴部は横方向に刷毛目。内面は横方向に荒磨き。	胴・9条1単位の簾状文、時計まわり。 肩・網橋波状文、胴・羽状直線文。	地文順位は 頸→肩→胴
Fig. 62-4 PL. 62-5	甕	覆土(6F-3) 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。	胴・4条1単位の網橋波状文4段確認。	
Fig. 62-5 PL. 62-5	壺	覆土(6F-3) 頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	明褐色	頸部は口縁部に向けて外反。器内はほぼ均一。内面に輪横痕。外面は縦・内面は横方向に刷毛目調整。	胴・横線文。	
Fig. 62-6 PL. 62-5	壺	覆土 肩部(?)		胎 微細砂粒 混入	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。	胴・地文に縄文施文後、2本の横線と山形文が地文を切って施文されている。	内面は赤色 塗彩。

				焼 堅緻		内面は横方向に磨き。		
--	--	--	--	------	--	------------	--	--

18号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 65-1 PL. 65-2	甕	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部に向い薄い。外面胴部は刷毛目、口縁部は横撫で。内面は刷毛目調整後、横方向に磨き。	口端・縄文。 頸・3条1単位の帯描波状文。 肩・胴部にかけて3条1単位の羽状直線文。	
Fig. 65-2 PL. 65-2	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 褐	口縁部は外反し、口縁中位で僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。	口端・刷毛目。	
Fig. 65-3 PL. 65-2	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	口縁部は僅かに受け口状を呈し、口縁端部は縄文地文で平たい。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で後、内面は横方向に磨き。	口端・縄文。口縁部、4条1単位の帯描波状文。頸・波状沈線文?	
Fig. 65-4 PL. 65-2	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部に向い薄い。内外面とも横撫で後、内面は横方向に磨き。	口端・刷毛目。 口・3条と2条1単位の帯描波状文。	
Fig. 65-5 PL. 65-2	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内面は横方向に磨き。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・胴部に向けて羽状直線文。	
Fig. 65-6 PL. 65-2	甕	床面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内面は横方向に磨き。	頸・6条1単位の帯状文、時計まわり。	
Fig. 65-7 PL. 65-2	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	肩部は丸く張り、頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内外面とも刷毛目。	頸・帯状文、時計まわり。 肩・胴部に向けて羽状直線文。	帯状文を羽状直線文が切る。
Fig. 65-8 PL. 65-2	甕	床面 胃部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	僅かに丸く頸部へ移行。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は斜方向に磨き。	肩・帯描波状文、2段。	
Fig. 65-9 PL. 65-2	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄 橙	胴下半部の破片。器内はほぼ均一。内外面とも刷毛目調整。	胴・5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 65-10 PL. 65-2	甕	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	褐 灰	胴部は僅かに張り頸部に至る。頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。内面は横方向に磨き。	頸部から肩部までコの字重文。	
Fig. 65-11	甕	床面		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は丸みをもつ。内面は横撫で	口・帯描波状文。	

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 色調	胎土 色調	器形・整形の特徴	文様	備考
PL. 65-2		口縁部		地 やや軟弱		後、横方向に磨き。		
Fig. 65-12 PL. 65-2	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に磨き。	頸・2本の横線文の間に山形文。	
Fig. 65-13 PL. 65-2	壺	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	明赤褐	頸部は口縁部に向けて大きく外反。器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目。内面は横方向に刷毛目調整。	頸・2本の横線文。2本の連弧文。	
Fig. 65-14 PL. 65-2	壺	床面 頸部		胎 微細砂粒 地 堅緻	明褐灰	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内外面とも横方向に刷毛目。内面は刷毛目後、横方向に磨き。	頸・2本の横線文。	
Fig. 65-15 PL. 65-2	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面頸部は縦方向に磨き工具による磨面調整。内面は横方向に刷毛目。	頸・2条1単位の横線文2段の間に波状沈線文。	横線文を波状沈線文が切る。
Fig. 65-16 PL. 65-2	鉢	床面 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	黒 褐	胴部上位の破片。胴上半で内湾。最大幅部分に突起状貼付。円形の穴を穿つ。内外面とも横方向に磨き。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 65-17 PL. 65-2	鉢	床面 胴部		胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	灰 白	口縁部で僅かに立つ。口縁端部は丸い。器内は胴下部で僅かに厚い。外面胴部は縦方向に磨き。口縁部は横撫で。内面は全体に横方向に磨き。	口・波状沈線文。	
Fig. 65-18 PL. 65-2	小型壺	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	頸部は口縁部に向い外反。器内は頸部から口縁部に向い薄い。外面胴部は縦方向に磨き。頸部と内面は横方向に刷毛目。		
Fig. 65-19 PL. 65-2	鉢	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	褐 灰	口縁部に至り僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面胴部は横撫で。内面は横方向に磨き。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 65-20 PL. 66-1	甕	床面 口縁部一部欠損	口 14.7 頸 12.6 胴 14.6 底 6.2 高 16.2	胎 砂粒混入 混入 地 堅緻	橙	胴部は丸く張る。口縁部は大きく外反。器内は胴部中位で僅かに薄い。外面胴下位は、底部との接合部で縦方向に磨き。胴部は斜方向に磨き工具により調整。口縁部は内外面とも横方向に撫で。内面はその横方向に磨き。外面胴下部は縦。胴上部は横方向に磨き。	口端・縄文、頸・4条1単位の縦線文、時計まわり。 肩・地文に縄文、格子目文が胴部につづく。 胴・地文に縄文。4条1単位の羽状格子目文を施文。	出土時に赤色顔料が中に入っていた。
Fig. 65-21 PL. 66-2	壺	床面 頸部から口縁部	口 15.6	胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	にふい 橙	頸部は口縁部に向い外反。口縁部は受け口状。外面頸部は磨き工具により斜方向に磨面調整後、縦方向に磨き。口縁部は内外面とも横撫で後、横方向に磨き。		

Fig. 65-22 PL. 66-3	装	床面 胴下部	底 5.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	底部から胴部にかけて外反。器内は胴下部に向けて僅かに薄い。外面は縦・斜方向に荒磨き。内面は横方向に荒磨き。		
Fig. 65-23 PL. 66-4	高 杯	床面 脚部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	接合部付近から底部に向い開く。外面は縦方向に荒削り後、一部分刷毛目。内面は刷毛目調整後、荒磨き。		
Fig. 65-24 PL. 66-5	台付盤	床面 台部	底 7.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	台底部に向い大きく開く。台端部は平たい。器内はほぼ均一。外面は縦方向の荒削り後、底部は横方向の荒磨き。台部中位は縦方向の荒磨き。内面底部は横撫で。		
Fig. 65-25 PL. 66-6	高 杯	床面 弘	口 16.0 接 3.2 底 8.0 高 8.5	胎 微細砂粒 混入 焼 堅緻	浅黄橙	脚と杯の接合部は下から全体の5/6に位置する。脚は底部に向い大きくひらき端部は平たい。杯部は口縁部に向い大きくひらき、口縁部は水平にひらき、2つの突起が向い合うように4ヶ所にある器内は端部に向い薄くなる。外面底部は横方向の荒磨き。杯部との接合部は細かな荒磨き。杯胴部は縦方向、口縁部は横方向に荒磨き。脚部内面は横撫で。杯部内面は横方向の荒磨き。	脚部下面、 杯部内外面 に赤色塗彩	
Fig. 66-1 PL. 66-8	高 杯	床面 口縁部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	灰黄緑	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みを呈し、2つの突起をもつ。器内はほぼ均一。外面は横撫で。内面は横方向に荒磨き。		
Fig. 66-5 PL. 67-3	装	覆土 頸部から口縁部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。	腹・蓋状文。時計まわり。	
Fig. 66-6 PL. 67-3	装	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内外面とも横方向に刷毛目。	腹・5条1単位の蓋状文。時計まわり。	
Fig. 66-7 PL. 67-3	装	覆土 肩部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は櫛状工具により斜方向に器面調整。内面は横方向に荒磨き。	肩・櫛状文2段。	
Fig. 66-8 PL. 67-3	装	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	器内はほぼ均一。内外面とも刷毛目。	腹・蓋状文。時計まわり。	
Fig. 66-9 PL. 67-3	装	覆土 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。内外面とも刷毛目。	胴・コノ字重文下位。ボタン状貼付文。	ボタン状貼 付文に1個 の円形刺突

19号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 69-1 PL. 67-4	杯	カマド内 底部	底 7.5	胎 白色紅物 小礫混入 焼 堅緻	灰	糸切底。		須恵器

20号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 71-1 PL. 70-2	甕	床 面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は外反し、口縁中位で僅かに内湾する。器内はほぼ均一、 内外面とも横撫で調整。	口縁・縄文 (LR)	
Fig. 71-2 PL. 70-2	壺	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく立つ。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一、 内外面とも横撫で調整。	口縁・縄文。 口・6条1単位の横縞波状文。	
Fig. 71-3 PL. 70-2	甕	床 面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にじい 橙	受け口状口縁を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁端部 に向い薄くなる。頸部は横撫で後、横方向に磨き。	口・縄文。2条1単位の横縞波状文。	
Fig. 71-4 PL. 70-2	壺	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 白	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸い。内面に輪積痕が見られ器 内はほぼ均一。頸部は斜方向に縞目。口縁部内外面は横撫で。		
Fig. 71-5 PL. 70-2	壺	床 面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	頸部は口縁部に向い外反を始める。器内はほぼ均一。 内外面とも横方向の撫で。	頸・2本の横縞文と山形文を施文。	
Fig. 71-6 PL. 70-2	壺	床 面 頸部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	灰 白	器内はほぼ均一。 内外面とも横撫で。	頸・縄文。	
Fig. 71-7 PL. 70-2	壺	床 面 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴中位の破片で、大きく張りをもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも斜方向に縞目調整。	胴・最大幅部分に2条1単位の波状文。胴下 半部に赤色塗彩。	8と同一個 体と推定。
Fig. 71-8 PL. 70-2	壺	床 面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。 外面は縦方向に磨き、内面は横撫で。	胴・縦方向に横縞直縞文を施文。一部赤色塗 彩。	7と同一個 体と推定。
Fig. 71-9 PL. 70-2	壺	床 面 頸部から頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	明褐色	頸部は丸みをもち大きく張り。頸部は口縁部に向い外反。器内は ほぼ均一。外面胴部は横、肩部は縦方向に磨き、内面は横撫で。		

Fig. 71-10 PL. 70-3	高杯 柱穴内(P2) 杯部		胎砂粒混入 焼堅織	黄澄	杯部は大きく立ち、口縁部は外反。口縁端部は丸く2つの突起をもつ。器内は胴上半で薄く、口縁部との変遷点で厚い。外面胴部は斜方向に刷毛目調整。口縁部は内外面とも横方向に荒磨き。	頸・2つの穴を穿つ。	内外面とも赤色塗彩。
Fig. 71-11 PL. 71-2	壺 床面 胴部から頸部		胎砂粒混入 焼堅織	浅黄澄	胴部は大きく張り、頸部は口縁部に向い大きく外反。器内はほぼ均一。外面胴部は横、肩から頸部にかけて縦方向に刷毛目調整。内面は横撫で。	頸・帯横線文。	17と同一個体?
Fig. 71-12 PL. 71-1	高杯 床面 杯部片	口 21.0	微細砂粒混入 焼堅織	灰白	胴との接合部に凸帯がある。杯底部はヘソ状突起。杯部は直線的に口縁に至る。口縁端部は平たい。器内は杯部ではほぼ均一。外面は縦・内面は横方向に荒磨き。口縁部は内外面とも横撫で調整。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 71-13 PL. 71-3	小型壺 床面 胴部片	頸 3.3 胴 8.0 底 4.0	胎砂粒混入 焼堅織	澄	胴部は大きく張り、頸部から口縁部に向い大きく外反。内面に輪轆痕がみられる。器内は胴下半部で厚い。胴下半部と頸部は横、胴上部は縦方向に荒磨き。内面は横方向に横目調整。		
Fig. 71-14 PL. 71-4	壺 床面 胴部から口縁部	口 14.6 頸 8.6 胴 22.8	胎砂粒混入 焼堅織	浅黄澄	胴部は大きく張り、口縁部は大きく外反。胴部には輪轆痕がみられる。外面胴部は横、頸部は縦方向に刷毛目調整。口縁部は内外面とも横撫で。	口縁・擬似縄文。 頸・3条の横線文。	口縁部に窪が付着。
Fig. 71-17 PL. 71-5	壺 床面 底部から胴下半部	底 6.3	胎砂粒混入 焼堅織	浅黄澄	胴部に向い大きくひろく、外面は縦方向に荒磨り。内面は底部で荒磨り。胴部は横方向に刷毛目調整。		11と同一個体?
Fig. 71-18 PL. 71-6	鉢 床面 底部から胴下部	底 6.9	胎砂粒混入 焼堅織	赤黄	胴部は大きくひろく、外面は横方向に荒磨き。内面は横方向に横目が残る。		外面は赤色塗彩。

21号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成 色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 74-1 PL. 74-1	壺	床面 肩部から口縁部		胎砂粒混入 焼堅織	浅黄澄 口縁部は僅かに受け口状を呈す。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目。内面は刷毛目調整後、荒磨き。	口縁・縄文、口・縄文、肩・4条1単位の垂状文、時計まわり、肩・羽状直線文。	
Fig. 74-2 PL. 74-1	壺	床面 肩部から口縁部		胎砂粒混入 焼堅織	明黄濁 受け口状口縁を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面胴部は横目、口縁部は横撫で。内面胴部は横目調整後、口縁部も含めて荒磨き。	口縁・縄文。 頸・4条1単位の垂状文、時計まわり、肩・胴部にかけて4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 74-3 PL. 74-1	壺	床面 口縁部		胎砂粒混入 焼堅織	澄 口縁部は僅かに内湾しながら立つ。器内はほぼ均一。口縁部に円形の穴を穿つ。内面は横方向に荒磨き。	口縁・縄文。 口・地文に縄文施文後、流状沈線文。	内面は赤色塗彩。

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 74-4 Pl. 74-1	甕	床面 胴部から頸部		胎砂粒混入 焼堅緻	褐	器内は頸部で厚い。 内外面とも横方向に刷毛目整形。	頸・鬚状文、時計まわり。 肩・4条1単位の横線波状文が胴部まで連続。	鬚状文を波 状文が切る。
Fig. 74-5 Pl. 74-1	甕	床面 胴部		胎砂粒混入 焼堅緻	橙	器内は薄く、ほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。内面は刷目調整 後、斜方向に荒磨き。	肩・5条1単位の横線波状文が3段確認。	
Fig. 74-6 Pl. 74-1	壺	床面 頸部		胎砂粒混入 焼堅緻	灰白	器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。	頸・地文に縄文地文後、横線文、2条1単位の 山形文を施文。	
Fig. 74-7 Pl. 74-1	甕	床面 胴部から頸部		胎砂粒混入 焼堅緻	明赤褐	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横方向に荒磨き。	頸・鬚状文、時計まわり。 胴・肩部からコの字重文を施文。	
Fig. 74-8 Pl. 74-2	甕	床面 底部から胴下半部		胎砂粒混入 焼堅緻	明褐	胴中位に向けて大きくひらく。器内は底部付近が厚い。底部と胴 部の接合部分は刷目の押え痕がある。内外面とも荒磨き。		
Fig. 74-9 Pl. 74-3	甕	床面 胴部から口縁部	口 16.0 頸 13.8 胴 15.9	胎砂粒混入 焼堅緻	明黄褐	受け口状口縁を呈し、口縁部は丸みをもつ。胴部は張りをもつ 器内はほぼ均一。外面胴部は斜方向に刷毛目。頸部から口縁部に かけては横撫で。内面胴部は横目。口縁部は横方向に荒磨き。	口端・縄文。口・5条1単位の横線波状文。 頸・5条1単位の鬚状文、時計まわり。 胴・肩部からコの字重文を施文。	コの字重文 8区画で一 周。
Fig. 74-10 Pl. 74-4	壺	床面 肩部から頸部	頸 7.7	胎砂粒混入 焼堅緻	黄橙	頸部は沈線により僅かな段をつくり、口縁部に向い大きく外反。 口縁部は丸い。器内は頸部で僅かに厚い。外面と内面胴部は斜 方向・頸部で横方向に刷目調整を行なっている。輪縁痕がある。	頸・横線文。	
Fig. 74-11 Pl. 74-5	壺	床面 光	口 14.5 胴 20.7 底 7.5 高 28.9	胎砂粒混入 焼堅緻	浅黄橙	最大幅は胴中位にある。口縁部は大きく外反し、受け口状口縁を 呈す。口縁部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 外面胴部は刷目調整後、荒磨き。口縁部は横撫で。内面胴部は刷 毛目調整。頸部は横方向に荒磨き。	口端・縄文。 口・2本の波状沈線文。 頸・地文に縄文を施文し、4本の横線文の下 位に山形文を施文。	地文単位 ①縄文 ②横線文 ③山形文
Fig. 74-13 Pl. 74-6	小型壺	床面 底	頸 11.8 胴 15.5 底 7.4	胎砂粒混入 焼やや軟弱	明赤褐	胴部は丸みをもつ。頸部は口縁部に向い外反。器内は底部から頸 部に向い僅かに厚い。外面は斜方向に荒磨き。内面胴下半部は斜 方向に横目。肩部は横方向に荒磨き。		外面および 内面頸部は 赤色後彩。

22号住居址出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 76-1 PL. 77-1	甕	床面 前部から口縁部		胎 小礫混入 地 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁中位で受け口状を呈す。器内は頸部が僅かに薄い。外面は刷毛目調整。内面頸部は磨目。	口縁・縄文、口・3条1単位の櫛掻波状文、頸・4条1単位の簾状文、時計まわり。肩から胴部にかけてコの字重文。	ボタン状粘付文に7個の円形刺突
Fig. 76-2 PL. 77-1	甕	床面 頸部から口縁部		胎 小礫混入 地 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。口縁部外面は横撫で。内面は横方向の磨き。	口縁・刷目。頸・5条1単位の簾状文、時計まわり。肩・羽状直線文。	
Fig. 76-3 PL. 77-1	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は内湾ぎみに立ち、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも横撫で。	口縁・擬似縄文、口・3条1単位の櫛掻波状文。	
Fig. 76-4 PL. 77-1	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は薄くなり丸みをもつ。内外面とも横撫で。	肩・簾状文、時計まわり。	
Fig. 76-5 PL. 77-1	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内面は横方向に磨き。	頸・簾状文、時計まわり。肩から胴部にかけて櫛掻波状文。	
Fig. 76-6 PL. 77-1	甕	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	胴部は丸みをもち、大きく張る。頸部は口縁部に向い外反。器内は胴下半部が厚く、頸部が薄い。外面は横方向の刷毛目。内面は横方向の磨き。	頸・6条1単位の簾状文、時計まわり。肩から胴部にかけて羽状直線文。	
Fig. 76-7 PL. 77-1	甕	床面 胴部から口縁部	口 20.4 頸 17.0 胴 18.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	明褐色	胴部は丸く、口縁部は受け口状。器内はほぼ均一。外面胴部は磨目、口縁部は横撫で。内面は横方向の磨き。	頸・5条1単位の簾状文、時計まわり。肩から胴部にかけて縦方向に5条1単位の磨目区画文、5条1単位の櫛掻波状文4段確認。	
Fig. 76-8 PL. 77-4	小型甕	床面 底部から胴下部	底 4.3	胎 小礫混入 地 堅緻	橙	底部から胴部に向い外反。外面底部と胴部の接合部は斜方向に刷毛目。胴部は縦方向に磨き。内面は斜方向に磨き。		
Fig. 76-9 PL. 77-5	甕	床面 底部から胴下部	底 7.0	胎 小礫混入 地 やや軟弱	褐色	底部から胴部大幅部に向けて大きくひろく。器内は上に向い薄い。外面胴部は最下部で斜方向に磨目。上位に向い磨目状。		
Fig. 76-10 PL. 77-6	甕	床面 底部から胴下部	底 8.0	胎 砂粒混入 地 やや軟弱	明黄褐色	底部から丸みをもちながら胴部大幅部に向けて立ち上がる。器内は底部が厚い。外面は指痕状による成形後、縦方向の磨き。		
Fig. 76-13 PL. 77-7	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	口縁部は大きくひろき受け口状を呈す。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部への変遷点で僅かに薄くなる。外面頸部は斜方向に磨目、口縁部は横撫で。		

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文 様	備 考
Fig. 76-14 PL. 77-7	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	口縁部は僅かに受け口状、口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面口縁部は横溝で。	口縁・縄文、口・5条1単位の櫛溝波状文、頸・帯状文、時計まわり。	
Fig. 76-15 PL. 77-7	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は外反、口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面口縁部は横溝で。内面頸部から頸部にかけては磨き。	頸・5条1単位の帯状文、時計まわり。肩・櫛溝波状文。	
Fig. 76-16 PL. 77-7	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	口縁部に向い外反。内外面とも横溝で。	頸・5条1単位の櫛溝波状文。	
Fig. 76-17 PL. 77-7	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内は均一。内面に輪積痕がある。外面は横方向に刷毛目。内面は横方向に磨き。	胴・コの字重文間に、縦方向に波状沈線文。	
Fig. 76-18 PL. 77-7	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は、縦方向に刷毛目調整。内面は横溝で。	頸・3本の横線文を確認。	
Fig. 76-19 PL. 77-7	壺	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	胴部最大幅は丸く張る。器内は、胴上位で薄くなり始める。内外面とも、刷毛目調整。	胴・横線文と山形文が交互に施文。	横線文が山形文を切る

1号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文 様	備 考
Fig. 78-2 PL. 79-3	鉢	覆土 胴上半部		胎 微細砂粒 混入 地 堅緻	黄 橙	胴部は僅かに内湾しながら立つ。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部で僅かに薄い。口縁部は内外面とも横方向の磨き。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 78-3 PL. 79-2	甕	覆土 (5 K-14) %	口 16.2 頸 13.4 胴 15.9 底 7.6 高 26.0	胎 砂粒が主 で小礫混 入 地 やや軟弱	黄 橙	長胴形を呈し、口縁部は大きく外反、口縁端部は丸みをもつ。器内は胴下半部で厚く、肩部から口縁部に向けて薄くなる。胴下半部は櫛状工具で縦方向に調整。胴中央部は斜方向に刷毛目、口縁部は横溝で。内面胴部は横方向に磨目調整が行われている。	頸・4条1単位の帯状文、時計まわり。胴・肩部から4条1単位の羽状直線文を施文	
Fig. 78-4 PL. 79-4	壺	覆土 (5 K-14) %	口 15.3 頸 5.4 胴 17.3 底 6.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	胴下半部にて最大幅をもち、頸部はしまる。口縁部は外反。口縁部は受け口状を呈す。口縁端部は丸みをもつ。器内は胴下半部で僅かに厚い。輪積痕がみられる。胴下半部は斜方向に器面調整を行ない、胴上半部から頸部にかけて	口・ボタン状貼付文を3個確認。ボタン状貼付文には横線文が入る。胴・頸部から横線文と山形文が交互に施文。9区画。	

			高 25.0			縦方向に刷毛目調整。口縁部は横撫で調整。	
Fig. 78-5 PL. 79-5	壺	覆土(5 K-14) 5	頸 7.7 胴 22.0	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は丸く張りをもつ。頸部は口縁部に向い大きく外反。器内は胴下半部が厚い。輪積痕がみられる。外面胴部は斜・頸部は縦方向に刷毛目調整後、荒磨き。内面は横方向に磨目調整。	

2号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 構成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 82-1 PL. 82-1	甕	床面(5 N-19) 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黒・褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面胴部は横方向に刷毛目。口縁部は横撫で。	口縁・縄文、頸・4条1単位の縷状文、時計まわり。肩・5条の羽状直線文。	
Fig. 82-2 PL. 82-1	甕	床面(5 N-19) 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも全面を磨目調整。	頸・4条1単位の縷状文、時計まわり。胴・胴部にかけて4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 82-3 PL. 82-1	甕	床面(5 N-19) 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	明赤褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。内外面とも横撫で。	口縁・割み目? 頸・3条の縷状文。	
Fig. 82-4 PL. 82-1	甕	床面(5 N-19) 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は横撫で。内面は横撫で後、横方向に荒磨き。	頸・4条1単位の縷状文、時計まわり。	
Fig. 82-5 PL. 82-1	甕	覆土(5 M-18) 胴部から頸部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目。内面は横方向に荒磨き。	頸・7条1単位の縷状文、時計まわり。肩・胴部にかけて7条1単位の羽状直線文。	
Fig. 82-6 PL. 82-1	小型甕	床面(5 N-19) 胴部から口縁部	口 11.4	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	胴部は丸く張り。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横撫で。内面胴部から頸部にかけては横方向の磨目調整後、荒磨き。	口縁・縄文、頸・6条1単位の縷状直線文。肩・胴部にかけて羽状直線文。	
Fig. 82-7 PL. 82-1	甕	床面(5 N-19) 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は全体的にほぼ均一。口縁部に至り僅かに薄い。口縁部は内外面とも横撫で。内面胴部は斜方向に刷毛目調整。	頸・4条1単位の縷状直線文2段確認。	
Fig. 82-8 PL. 82-1	小型甕	床面(5 N-19) 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黒・褐	胴部は丸く張りをもつ。頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目。内面は横方向に刷毛目。	肩・山形文と思われる内側に数条の縷状文。	
Fig. 82-9 PL. 82-1	甕	床面(5 N-19) 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黒・褐	胴部は丸く張り。頸部は口縁部に向い外反。器内は胴部が薄い。内外面とも横方向に刷毛目。内面胴部は刷毛目後横方向の荒磨き。	頸・5条1単位の縷状直線文2段施文。胴・胴部から5条1単位の羽状直線文。	

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 82-10 PL. 82-1	小型甕	覆土(5N-19) 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 黄橙	胴部は下半から中位にかけての破片、胴中央部にボタン状貼付文 器内は胴下位より中央位にかけて薄くなる。外面は横方向に刷毛 目調整。内面は横方向に荒磨き。	胴・コの字重文の中心部は縦方向に波状沈線 文を施文。	胴中央部の ボタン状貼 付文に4個 の円形刺突
Fig. 82-11 PL. 82-1	壺	覆土(5N-19) 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	口縁部に大きく外反。器内はほぼ均一。 外面は縦方向に刷毛目調整後、横撫で。内面は横撫で。	胴・2本の横線文を施記。	
Fig. 82-12 PL. 82-1	壺	床面(5N-19) 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 褐	器内はほぼ均一。外面は荒れて整形方法不明。 内面は横撫で。	胴・横線文、縄文。	
Fig. 82-13 PL. 82-1	壺	床面(5N-19) 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。内面は横方向に器面調整。	胴・帯括弧状文施文後、横線文。	
Fig. 82-14 PL. 82-2	壺	床面(5N-19) 胴下半部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	器内はほぼ均一。外面胴部は斜方向に刷毛目調整。	胴・帯括弧状文。	
Fig. 82-15 PL. 82-2	壺	床面(5N-19) 頸部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	黄 橙	頸部は口縁部に向い大きく外反。器内はほぼ均一。 外面は胴部で縦方向に器目調整。内面は横撫で。	胴・帯括弧線文を山形文が切る。	
Fig. 82-16 PL. 82-3	壺	床面(5N-19) 頸部から口縁部	口 14.0 頸 11.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも口縁部は横撫で。	胴・波状沈線文。	
Fig. 82-17 PL. 82-2	壺	床面(5N-19) 頸部から口縁部		胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部大きく外反。器内はほぼ均一。外面頸部は縦方向に刷毛目 調整。口縁部と内面は横方向に撫で。	口縁・縄文、 胴・横線文、山形文。	横線文施文 後、山形文
Fig. 83-1 PL. 82-5	壺	床面(5N-19) 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部に向 い僅かに薄い。外面頸部は斜方向に磨目。口縁部および内面は横 撫で。	口縁・縄文。	
Fig. 83-2 PL. 82-5	甕	床面(5M-19) 胴部から口縁部	口 12.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	胴部は丸く張る。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。 器内は口縁部で僅かに薄い。外面胴部は横方向に刷毛目。口縁部 は内面も横撫で。内面胴部は横方向に磨目調整。	口縁・縄文。 胴・5条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・胴部にかけて5条1単位の羽状直線文	
Fig. 83-3 PL. 82-5	甕	床面(5M-19) 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	口縁部は、やや外反。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は内外面と も横撫で。内面頸部は斜方向の磨目。	口縁・羽目。胴・帯状文、時計まわり。 肩・帯括弧による羽状直線文。	
Fig. 83-4 PL. 82-5	甕	覆土(5M-18) 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	褐	口縁部は受け口状呈す。口縁端部は丸みをもつ。 口縁部は内外面とも横撫で。	口縁・縄文。 口・波状沈線文。	

Fig. 83-5 PL. 82-5	甕	床面(5M-19) 胴部から腹部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	頸部は口縁部に向い外反。外面は縦方向に刷毛目。 内面は横撫で。	胴・頸部からコの字重文と思われる横線文が 残る。
Fig. 83-6 PL. 83-1	甕	覆土 胴部から口縁部	口 21.6 頸 18.0 胴 22.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	口縁部は受け口状を呈す。胴部は丸く大きく張り最大幅がある。 器内はほぼ均一であり口縁部で僅かに厚い。 内外面とも斜方向に刷毛目調整。口縁部は横撫で。	口端・縄文。 頸・6条1単位の籐状文、時計まわり。 胴・胴部にかけ4~6条1単位の羽状直線文
Fig. 83-7	高杯	覆土 杯・脚の接合部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 白	接合部、外面は縦方向に荒削り後、磨磨き。 脚、杯部の内面は磨目。	外面は赤色 塗彩。
Fig. 84-1 PL. 83-3	高杯	床面(5N-19) 脚部	底 6.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	脚部は裾に向い大きくひろく。裾端部は平たい。器内は裾部で薄 い。外面脚部は縦方向に荒削り後、磨磨き。裾部は一部横撫で。 内面は刷毛目調整。	
Fig. 84-2 PL. 83-3	高杯	床面(5N-19) 接合部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	脚部、胴部とも端部に向い大きくひろく。外面脚部は縦方向に荒 磨き。内面は脚部、杯部とも横方向に磨目調整。	
Fig. 84-3 PL. 83-4	小形甕	覆土(5N-19) 胴部から口縁部	口 12.4	胎 小礫混入 焼 堅緻	明赤褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。輪積痕。器内は口 縁部で薄い。外面頸部から口縁部にかけては横撫で。内面は横方 向に荒磨き。	
Fig. 84-4 PL. 83-5	鉢	覆土(5N-19) 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明赤褐	口縁部は僅かに内湾。口縁端部は丸みをもつ。輪積痕。器内は胴 部で一部厚い。外面胴下部縦方向に、中位から口縁部および内面 は横方向に荒磨き。	内外面とも 赤色塗彩。 粒痕がある 穴を穿つ。
Fig. 84-5 PL. 83-6	鉢	覆土(5M-19) 胴下半部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	灰 白	器内は底部から胴部に向けて僅かに薄い。 内外面とも横方向に荒磨き。	内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 84-6 PL. 83-7	壺	床面(5N-19) 頸部から口縁部	口 22.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈す。口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部 で僅かに薄い。外面頸部は斜方向に、内面は横方向に磨目。 口縁部は内外面とも横撫で。	口端・縄文。 口・2本の波状沈線文。
Fig. 84-7 PL. 83-8	壺	床面(5N-19) 頸部から口縁部	口 15.0 頸 8.8	胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁上半で受け口状を呈す。口縁端部は丸 みをもつ。器内は頸部で厚い。外面頸部は斜方向に刷毛目。 口縁部は内面も横撫で。内面頸部は横方向に刷毛目調整。	口端・縄文。 口・地文に縄文、2条の波状沈線文。 頸・4条の横線文。
Fig. 84-8 PL. 85-1	壺	床面(5N-19) 足	口 20.0 頸 9.3 胴 31.0 底 9.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	最大幅は胴部中位で大きく張る。口縁部は大きく外反。端部で僅 かに受け口状。器内はほぼ均一。 内外面とも刷毛目。口縁部は横撫で。 内面には輪積痕がみられる。	頸・横線文と山形文が交互に3段施文され、 横線文は2本1単位とし、山形文は上位が2 本1単位、中、下位は1本である。

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 発成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
			高 40.0					
Fig. 84-9 PL. 85-2	壺	床面(5N-19) 胴部から頸部		胎 砂粒混入 発 堅緻	浅黄橙	胴部は丸く大きく張り、外面胴部は横方向の刷毛目調整、肩部は縦方向に荒磨き、内面は刷目調整。	頸・2本の横線文の間に波状沈線文。	6号住居出土土器片と接合。
Fig. 85-1 PL. 84	甕	床面(6I-23) 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 発 堅緻	明赤褐	胴部は丸く張り、口縁部は受け口状、器内は頸部で厚い、胴部は内外面とも刷目調整、口縁部は内外面とも横撫で。	口端・縄文、口・地文に縄文、山形文、頸・5条1単位の縦状文、時計まわり、胴・肩部から5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 85-2 PL. 84	甕	床面(6I-23) 口縁部		胎 砂粒混入 発 堅緻	明赤褐	口縁部は丸く立つ、外面は横撫で、内面は横方向に荒磨き。	口端・縄文、口・2本の波状沈線文、頸・鬚状文、時計まわり。	
Fig. 85-3 PL. 84	壺	床面 頸部		胎 砂粒混入 発 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反、内面は荒れており不明。	頸・地文に縄文、平行する横線文間に山形文。	
Fig. 85-4 PL. 84	壺	床面(6I-23) 頸部		胎 砂粒混入 発 堅緻	にぶい 橙	器内はほぼ均一、外面は斜方向に刷目調整後、縦方向に荒磨き、内面は横撫で後、横方向に荒磨き。	肩・地文に縄文、3本の横線文の下に山形文。	
Fig. 85-5 PL. 84	壺	床面 頸部		胎 微細砂粒 発 堅緻	灰 白	器内はほぼ均一、外面は横方向に刷毛目、内面は横方向に刷毛目調整、一部分は縦方向に荒磨き。	肩・3本の横線文。	
Fig. 85-6 PL. 84	高杯	床面(6I-23) 口縁部		胎 微細砂粒 発 堅緻	黄 橙	口縁部は大きくひろく、口縁端部は丸みをもつ、器内は口縁端部で薄くなる、内外面とも横撫で。	口・内面口縁部に山形文。	内外面とも赤色塗彩。
Fig. 85-7 PL. 84	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 発 堅緻	橙	頸部は口縁部に向い外反する、器内はほぼ均一、外面は斜方向に刷毛目調整、内面は横撫で。	肩・3本の横線文。	
Fig. 85-8 PL. 84	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 発 堅緻	黒 褐	口縁部は受け口状を呈し、器内は口縁部で薄くなる、口縁部は内外面とも横撫で、内面頸部は横方向に刷毛目。	口端・縄文、口・中位から端部にかけて鬚状横線文、頸・鬚状文、時計まわり。	一部で鬚状文が刷目を切る。
Fig. 85-9 PL. 84	甕	覆土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 発 堅緻	灰 褐	口縁部は受け口状を呈し、内外面とも横撫で。	口端・縄文、頸・鬚状文。	
Fig. 85-10 PL. 84	甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 発 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は丸みをもつ、外面は横撫で、内面は横方向に荒磨き。	口・5条1単位の鬚状波状文。	

Fig. 85-11 PL. 84	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一、外面は縦方向、内面は横方向に刷毛目調整。	頸・山形文、横線文。	
Fig. 85-12 PL. 84	壺	覆土 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 菊	器内はほぼ均一、頸部から肩部にかけて縦方向に磨き、内面は横方向に刷毛目調整。	頸・地文に縄文、横線文。	
Fig. 85-13 PL. 84	壺	床面(6Q-21) 頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 白	頸部は口縁部に向い外反。輪轆痕が見られる。外面は横方向に刷毛目調整。	頸・縄文を施した後、3本の横線文と山形文を交互に施文。	
Fig. 85-14 PL. 84	甕	床面 胴部から口縁部	口約15.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	菊	胴部は丸みをもつ。口縁部は受け口状を呈し、端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。口縁部は内外面とも横撫で、内面胴部は横方向に磨目調整。	口端・刻目目。口・2本の波状沈線文。頸・5条1単位の縞状文、時計まわり。胴・肩部から5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 85-15 PL. 84	甕	床面 頸部から口縁部	口約16.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	に言い 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横撫で、内面頸部附近は横方向に磨き。	口端・縄文。 頸・縞状文、時計まわり。	
Fig. 85-16 PL. 84	甕	床面 胴部から口縁部		胎 微細砂粒 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反、外面口縁部は横撫で、内面は横方向に磨き。	口端・縄文。 肩・羽状直線文。	
Fig. 85-17 PL. 84	甕	覆土 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内は頸部で薄くなる。外面は横方向に刷毛目調整、内面は荒れているため不明。	胴・頸部からコの字重文を施文。	
Fig. 85-18 PL. 84	甕	覆土 胴部から肩部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	鳩 灰	器内はほぼ均一、内外面とも横方向に刷毛目調整。	肩・胴部にかけてコの字重文を施文。	コの字重文は3条1単位の縞状工具を使用。
Fig. 86-1 PL. 85-3	壺	覆土(6I-23) 底約10.2	胴 25.8 底約10.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴部中央は丸みをもち大きく張る。胴上半部に輪轆痕。器内はほぼ均一。内外面とも横方向に磨目調整後、外面胴下半部は縦方向に磨き。		
Fig. 86-2 PL. 85-4	甕	覆土 写	口 23.0 胴 18.2 胴 23.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻	に言い 橙	胴部は丸みをもち大きく張る。口縁部は大きく外反。口縁部は丸みをもつ。器内は口縁部で薄くなる。外面は横方向に刷毛目。胴下半部は縦方向に磨き、口縁部は横撫で、内面は磨き。	口端・刻目目。 頸・4条1単位の縞状文、時計まわり。 胴・2~3条1単位の縞による格子目文施文。	
Fig. 86-3 PL. 85-5	壺	覆土(6J-23) 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈す。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横撫で。		内外面とも赤色塗彩。
Fig. 86-4 PL. 85-6	高杯	覆土(6J-23) 接合部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰 白	胴部は横方向に磨き。内面は磨状工具により調整。		脚部外面と杯部内外面は赤色塗彩。

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 86-5 PL. 85-7	甕	覆土(6J-23) 底部から胴下半部	底 8.2	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	胴上位に向けて大きくひろく。器内は胴上に向けて薄くなる。内外面とも磨き。		
Fig. 87-1 PL. 86-1	甕	床面(6Q-21) 1/5	口 22.4 頸 19.5 胴 31.7	胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰白	最大幅は胴部にある。口縁部は受け口状を呈し、端部は丸みをもつ。胴部に輪積痕。器内は下半部で厚みをもつ。胴部は内外面とも刷毛目調整。口縁部は横撫で。	口・4条1単位の帯橋波状文。 肩・4~5条1単位の簾状文が4段施文。 胴・中央部に5条1単位の帯橋波状文。	胴部の破片は 19号位置から床 面出土が接合
Fig. 87-2 PL. 86-2	甕	床面(6T-19) 胴部から肩部	胴 19.7	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴部は丸みそもち大きく張る。外面は磨状工具により器面調整後磨き。内面は横方向に磨き。内面に後頸痕がみられる。		
Fig. 87-4 PL. 86-4	甕	床面 頸部から口縁部	口 16.0 頸 7.7	胎 微細砂粒 焼 堅緻	黄橙	口縁部は大きく外反。口端部は丸い。器内は頸部で僅かに厚い。外面は斜方向に磨目。器面調整後横撫で。内面は横方向に磨き。	口端・縄文。 頸・3本の横線文を繰記。	
Fig. 87-5 PL. 86-5	甕	覆土(6T-18) 1/5	口 1.2 頸 4.8 胴 13.0 底 5.5 高 14.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴下半部において最大幅をもつ。頸部は僅かに段をもち口縁端部に向けて外反する。口縁部は丸みをもつ。器内は頸部で僅かに厚みを増す。外面胴上半部は縦方向、胴中位以下は横方向に磨き。胴部に輪積痕が残る。		外面と内面 口縁部は赤 色塗彩。
Fig. 87-6 PL. 86-6	甕	床面(6T-19) 底部から胴下位	底 10.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	胴部に向けて大きくひろく。外面は底部との接合部は横方向に磨目調整。胴部から底部に向けては縦方向に磨き。		
Fig. 87-7 PL. 86-7	注口	床面(6U-18) 口縁部が欠損	頸 4.5 胴 11.2 底 6.0 注 1.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰白	胴部は大きく張りもち、最大幅部分に注口を付ける。器内は胴下半部が厚い。外面胴下半部は横方向、胴上半部は縦方向に磨き。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 87-8 PL. 87-1	甕	床面(6U-18) 1/5	頸 5.0	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	頸部は口縁部に向い大きく外反。外面は斜方向に磨目調整。内面は荒れており不明。	頸・3本の横線文。 肩・縦方向に沈線。	
Fig. 88-1 PL. 87-4	甕	覆土 1/5		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	胴部は大きく丸みそもち張る。口縁部は外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。口縁部は内外面とも横撫で。内面胴部は横方向に磨き。	口端・縄文。 頸・5条1単位の簾状文、時計まわり 胴・肩部から5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 88-2 PL. 87-4	甕	覆土 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黒褐	胴部は丸みをもつ。口縁部は外反し、僅かに受け口状を呈す。器内は頸部で厚みをもつ。胴部は内外面とも横方向に磨目。口縁部は内外面とも横撫で。	口端・縄文。 頸・6条1単位の簾状文、時計まわり。 胴・4~6条1単位の羽状直線文。	

Fig. 88-3 PL. 87-4	甕	覆土 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	暗 褐	頸部は口縁部に向い外反。外面は整形状態不明。 内面は横方向に磨目調整。	頸・胴状文、時計まわり。 肩・4条1単位の帯縹波状文3段確認。	
Fig. 88-4 PL. 87-4	甕	覆土 肩部から胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内は頸部で僅かに厚みをもつ。 外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に磨目調整後、斜方向に磨磨き。	頸・7条1単位の帯状文、時計まわり。 肩・5条1単位の羽状直線文。	
Fig. 88-5 PL. 87-4	甕	覆土 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	暗 褐	口縁部は大きく外反。外面口縁部は横撫で。 内面肩部は横方向に刷毛目調整。口縁部は磨磨き。	口縁・縄文。 頸・肩部にかけて横方向に帯縹横線文施文。	内面口縁部 は赤色塗彩
Fig. 88-6 PL. 87-4	甕	覆土 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。 内面口縁部は横方向に磨磨き。	口縁・縄文L.R。 頸・帯状文、時計まわり。	
Fig. 88-7 PL. 87-4	甕	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	器内は厚い。 内外面とも斜方向に刷毛目調整。	肩・沈線文6本を確認。	
Fig. 88-8 PL. 87-4	壺	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。 内外面とも横撫で。	口縁・縄文。	
Fig. 88-9 PL. 87-2	壺	覆土 胴下半部	胴 15.0 底 7.3	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	胴部は大きく張りをもつ。器内は胴部下位で厚みをもつ。外面底部との接合部は棒状工具により押え痕。胴下半部は横方向に磨目。胴中央部は横方向に刷毛目調整。胴上半部分は斜方向に磨目調整。内面は横方向に刷毛目。輪積痕が残る。		

3号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地成	色調	器形・整形の特徴	文	様	備考
Fig. 89-1 PL. 91-1	高杯	覆土(5M-19) 接合部		胎 砂粒混入 地 堅緻	黄 橙	胴部との接合部は僅かに段をもつ。接合部は縦方向に磨磨き。 胴部内面は縦方向に刷毛目調整。			外面および 杯部内面は 赤色塗彩。
Fig. 89-2 PL. 91-2	甕	覆土(5M-19) 胴部		胎 微細砂粒 地 堅緻	灰	器内はほぼ均一。内面はあて目、外面は叩き目が見られる。			須恵器。

4号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 90-1 PL. 91-3	甕	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。内外面胴部は斜方向に刷毛目調整。口縁部は内外面とも横撫で。	口縁・縄文。 胴・2条1単位の縷状文、時計まわり。	
Fig. 90-2 PL. 91-3	甕	床面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	橘	胴部は口縁部に向い僅かに外反。器内は胴部よりで僅かに薄い。外面は斜方向に刷毛目調整。内面は櫛状工具により器面調整。	頸・縷状文、時計まわり。	
Fig. 90-3 PL. 91-3	壺	床面 胴部から口縁部		胎 砂粒混入 やや軟弱	橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。外面は横撫で。内面は横撫で後、横方向に磨き。	口縁・縄文 (LR)。	
Fig. 90-4 PL. 91-4	鉢 (?)	床面 底部	底 6.0	胎 微細砂粒 焼 堅緻	灰白	胴部との接合部は横撫で。		内面は赤色塗彩。

5号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 91-1 PL. 91-5	壺	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	灰白	胴部は大きく張りをもつ。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。他器部分は縦方向に、内面は横方向に磨き。	肩・縦方向に櫛掃文を胴部まで施した後、これに沿って円形刺突文を施文。 胴・2本の横縷文の間に波状縄文、上位に横縷文の上に円形刺突文が施文。	肩部は縦方向、無文帯部に赤色塗彩。
Fig. 91-2 PL. 91-6	甕	覆土 (6P-24) 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	に近い 橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に磨目調整。内面は横方向に磨き。	胴・波状縄文。	
Fig. 91-3 PL. 91-6	小型甕	覆土 (6P-24) 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄橙	胴部は大きく張り。胴部最大巾部分にボタン状貼付文。内外面は横方向に刷毛目。	胴・コの字重文上にボタン状貼付文施文。	ボタン貼付文は3つの円形刺突。
Fig. 91-4 PL. 91-6	甕	覆土 (6P-24) 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄橙	胴部は僅かに張り。器内は胴下部で厚みをもつ。内外面は横方向に刷毛目調整。	胴・6条1単位の羽状直縷文を施文。	内外面に僅か付着。
Fig. 91-5 PL. 91-7	高杯	覆土 (6O-24) 脚部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	基部に向い大きくひろく。脚端部は平たい。脚部は縦方向に刷毛目調整。内面は斜方向に刷毛目調整。		

6号溝出土土器

図面番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 95-1 PL. 94-1	高杯	床面 接合部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	黄 橙	胴部は丸みをもち、杯部は薄い。胴部外面は縦方向に刷目調整。 内面は不明。杯部外面と接合部は縦方向に荒磨き。		
Fig. 95-2 PL. 94-2	壺	覆土(6F-4) 口縁部	口 11.0	胎 微細砂粒 焼 堅緻	灰 褐	口縁部は大きく外反。器内は口縁部に向い薄くなる。 口縁部は内外面とも横方向に荒磨き。		外面赤色色 彩。
Fig. 95-3 PL. 94-5	小型壺	床面 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は丸みをもつ。外面頸部は斜 方向、肩部から頸部は横方向に荒磨き。内面は横方向に荒磨き。		内外面とも 赤色色彩。
Fig. 95-4 PL. 94-5	壺	床面(6I-10) 肩部から頸部		胎 小礫混入 焼 軟弱	浅黄橙	器内は厚い。内外面とも荒れており整形状態は不明。	頸・帯幅横線文。 肩・帯幅波状文3段確認。	
Fig. 95-5 PL. 94-5	壺	覆土(6F-4) 口縁部		胎 砂粒混入 焼 軟弱	浅黄橙	口縁部は大きく外反。外面は横撫で。	口端・刷目目。	
Fig. 95-6 PL. 94-5	壺	覆土(6F-4) 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にふい 橙	受け口状口縁を呈す。内外面とも横撫で調整後、内面は横方向に 荒磨き。	口端・縄文?。 口・2本の波状沈線文。	
Fig. 95-7 PL. 94-5	壺	覆土(6F-4) 胴部		胎 砂粒混入 焼 軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目調整。内面は横撫で。	頸・4本の横線文を確認。	
Fig. 95-8 PL. 94-5	壺	覆土(6F-5) 頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にふい 橙	口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。 内面は横撫で。	頸・2本の横線文確認。	
Fig. 95-9 PL. 94-5	壺	覆土(6F-6) 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明赤褐	口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内面は横方向に荒磨き。	頸・地文に縄文、3本の横線文が縄文を切る。縄文LR。	
Fig. 95-10 PL. 94-5	壺	覆土(6F-4) 肩部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	器内は頸部寄りで僅かに薄くなる。外面は横撫でと、縦方向の荒 磨き。	肩・縦方向に列点文を施文。	
Fig. 95-11 PL. 94-5	壺	覆土(6F-4) 胴部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にふい 橙	器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は荒れていて 調整痕は不明。	胴・4条1単位の羽状直線文。	
Fig. 95-12 PL. 94-5	壺	床面(6J-10) 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	僅かに内湾みである。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方 向に刷目調整。	胴・帯幅波状文。	
Fig. 95-13 PL. 94-5	壺	覆土(6F-5) 肩部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向けて外反をはじめる。器内は頸部で僅かに厚み を増す。内面肩部に輪積痕。外面は磨目。内面は縦方向に調整。	頸・地文に縄文、山形文。肩・胴部寄りに縄 文施文後山形文。山形文谷部に凹形竹管文。	

6号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 94-1 PL. 94-6	甕	床面 頸部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部で薄い。内外面とも横撫で。	口縁・刷み目。	
Fig. 94-2 PL. 94-6	小型甕	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 褐色	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で薄い。内外面とも横撫で。	口縁・縄文。頸・肩撞波状文。	
Fig. 94-3 PL. 94-6	鉢(7)	床面 口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明灰褐	内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は丸みをもつ。口縁部に円形の穴を2個穿つ。器内はほぼ均一。		
Fig. 94-4 PL. 94-6	小型甕 (台付)	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	明赤褐	頸部は僅かに外反。頸部と胴部の中間点にボタン状貼付文。器内はほぼ均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に磨き。	頸・肩撞波状文。 肩・胴部に向けコの字重文を施文。コの字重文の肩の部分にボタン状貼付文。	ボタン状貼付文は4つの円形刺突
Fig. 94-5 PL. 94-6	小型甕 (台付)	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 褐色	胴下半部の破片。器内は胴中位に向けて薄くなる。胴中位にボタン状貼付文。外面は横方向に刷毛目。内面は斜方向に磨き調整。	胴・コの字重文の中心にボタン状貼付文。	
Fig. 94-6 PL. 94-6	小型甕 (台付)	床面 胴部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 褐色	胴中位にボタン状貼付文。器内は胴中位で薄くなる。内外面とも横方向に刷毛目調整。	胴・コの字重文の中心にボタン状貼付文。	ボタン状貼付文は4つの円形刺突

7号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 焼成	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 96-1 PL. 96-1	甕	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	口縁部は受け口状。器内は頸部で僅かに薄い。内外面とも頸部は刷毛目。口縁部は横撫で。	口縁・縄文L.R. 口・地文に縄文2条1単位の山形文。頸・4条1単位の葉状文。時計まわり。肩・肩撞による羽状直線文。	
Fig. 96-2 PL. 96-1	甕	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 褐色	口縁部は大きく外反。外面は横撫で。内面は横方向に磨き。	口縁・縄文。	
Fig. 96-3	甕	床面		胎 砂粒混入	明赤褐	口縁部は受け口状を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器内は口縁部	口縁・刷み目	

PL. 96-1		口縁部		地 堅緻		で薄くなる。内外面とも頸部寄りで横方向に荒磨き。 口縁部は内面も横撫で。		
Fig. 96-4 PL. 96-1	裏	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 褐	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。内外面とも横方向に 刷毛目調整。	頸・腹状文。時計まわり。 肩・胴部にかけて羽状直線文。	
Fig. 96-5 PL. 96-1	裏	床 面 胴 部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 褐	器内は下部で僅かに薄い。内外面とも斜方向に刷毛目調整。	胴・5条1単位の帯描波状文。	
Fig. 96-6 PL. 96-1	裏	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	口縁部は大きく外反する。器内はほぼ均一。 外面頸部は斜方向に横目調整。口縁部と内面は横撫で。	口縁・肩目。 頸・地文に縄文地文後、横線文。	
Fig. 96-7 PL. 96-1	裏	床 面 頸 部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	口縁部は大きく外反。器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目調 整。内面は横撫で。	頸・3本の横線文。	
Fig. 96-8 PL. 96-1	裏	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄 橙	頸部は口縁部に向い外反する。器内はほぼ均一。 外面は横撫で後、縦方向に荒磨き。内面は斜方向に横目調整。	頸・3本の横線文。	
Fig. 96-9 PL. 96-1	裏	床 面 頸 部		胎 砂粒混入 地 堅緻	明灰褐	頸部は口縁部に向い外反する。器内は上位で薄くなる。外面は地 文に縄文地文後、縦方向に横目調整。内面は斜方向に刷毛目。	頸・地文縄文。横線文下に2穴1単位の列点 文。2条1単位の横線文。山形文とツブ。	
Fig. 96-10 PL. 96-1	表	床 面 頸 部		胎 砂粒混入 地 堅緻	灰 白	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は横・斜方向に 横目調整。内面は横方向に刷毛目調整。	頸・横線文3本間に3条1単位の帯描波状文 横線文を帯 描波状文が 切る。	
Fig. 96-11 PL. 96-1	表	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	器内はほぼ均一。内外面とも横目調整。	頸・横線文1条。	
Fig. 96-12 PL. 96-2	台付裏	床 面 台 部	底 4.8	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	台部は僅かに中央が凹状を呈す。器は丸みをもつ。 外面は縦方向に荒磨り。台部は横撫で。	蓋の組み部 か？	
Fig. 96-13 PL. 96-3	裏	床 面 %	口 14.4 頸 12.0 胴 13.8 底 6.0 高 15.1	胎 砂粒混入 地 堅緻	黒 褐	頸部は上位で丸みをもつ。受け口状口縁を呈す。口縁端部は丸みをも つ。器内は胴下部より中部にかけて薄くなり。胴中部から口縁 部まではほぼ均一。外面胴下部は縦方向に刷毛目調整。口縁部 は内外面とも横撫で。内面は横方向に荒磨き内面胴部は刷毛目調 整。	口・2条1単位の波状文。 頸・4条1単位の帯描波状文。 肩・4条1単位の帯描波状文。 胴・4条1単位の帯描波状文。	帯描波状文 は3段にわ たり縄文。
Fig. 96-14 PL. 96-4	裏	床面(6T-18) 胴下半部	底約10.3	胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	器内は胴下部より中部にかけて僅かに薄くなる。外面胴部は斜方 向に横目。底部との接合部は横撫で。内面は横方向に横目調整。		
Fig. 96-15	表	床 面	胴約28.0	胎 小礫混入 地 橙		胴部は大きく張る。器内は頸部付近で僅かに薄い。外面は横方向		

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
PL. 96-5		胴上半部		焼 灰 磁		に刷毛目調整後、縦方向に荒磨き。内面は横方向に刷毛目調整。		
Fig. 96-16 PL. 97-1	壺	床 面 胴 部	胴 22.6	胎 砂粒混入 焼 灰 磁	浅黄橙	胴部は球形に近い丸みをもつ。器内は胴下部で厚く、中位で薄くなり、頸部付近に至り厚くなる。胴下半部は縦方向に荒磨き。胴中部は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整。	刷・4条1単位の縞縞波状文が胴部より続く。	
Fig. 97-4 PL. 97-5	壺	覆 土 頸部から口縁部		胎 小埋混入 焼 灰 磁	黄 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。内面は横撫で後、横方向に荒磨き。	口縁・縄文。	
Fig. 97-5 PL. 97-5	壺	覆 土 口縁部		胎 微細砂粒 焼 灰 磁	浅黄橙	受け口状口縁を呈す。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。内外面とも横撫で。	口縁・縄文、口・地文に縄文、山形文、刷・縞状文、時計まわり。	
Fig. 97-6 PL. 97-5	壺	覆土(6丁-18) 頸 部		胎 砂粒混入 焼 灰 磁	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整後、斜方向に刷毛目調整。	刷・2本の横縞文。	
Fig. 97-7 PL. 97-5	壺	覆 土 胴 部		胎 小埋混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	胴中位の破片である。胴部は大きく張る。外面は斜方向に刷毛目調整。内面は荒れており不明。	刷・張り出し部に3本の波状縞文。	

9号溝出土土器

図版番号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 99-1 PL. 97-6	壺	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 灰 磁	褐	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。胴部は内外面とも刷毛目調整。口縁部は内外面とも横撫で。	口縁・縄文、刷・9条1単位の縞状文、時計まわり。肩・羽状直縞文。	5と同一個体。
Fig. 99-2 PL. 97-6	壺	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 灰 磁	黄 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。器内はほぼ均一。外面頸部は斜方向に刷毛目調整。口縁部は横撫で。内面頸部は横方向に刷毛目調整。口縁部は横方向に荒磨き。	刷・縞状文、時計まわり。	
Fig. 99-3 PL. 97-6	壺	床 面 胴 部		胎 砂粒混入 焼 灰 磁	にぶい 橙	器内はほぼ均一。内外面とも横方向に刷毛目調整。	刷・6条1単位の羽状直縞文が交差する。	
Fig. 99-4 PL. 97-7	小型壺 (合什?)	床 面 頸部から口縁部		胎 小埋混入 焼 やや軟弱	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横撫で。	刷・5条1単位の縞状文、時計まわり。	
Fig. 99-5	壺	床 面	口 15.8	胎 砂粒混入	褐	胴部は丸みをもり、口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。	口縁・縄文、刷・9条1単位の縞状文、時計	1と同一個

PL. 92-8		%	期 13.7 期 15.2	焼 整 練		器内は下半部が厚く、口縁部に向い薄い。胴部は内外面とも横方向に刷毛目調整。口縁部は内外面とも横撫で。	まわり。 胴・肩部から9条1字位の羽状直線文。	体 底部は噴灰。
Fig. 99-6 PL. 99-1	台付甕	床 面 裏部写欠損	口 15.2 期 13.4 期 15.1 径 5.2 底 8.2 高 18.0	胎 砂粒混入 焼 整 練	黄 橙	台部裾に向い大きくひらく。台端部は平たい。腹部は胴中位で丸みをもたせ、大きく膨る。口縁部は大きく外反し、端部は丸みをもつ。器内は台部で厚く、腹部は口縁部に向い薄くなる。外面台部は下半部から縦方向に荒磨き、台端部は横撫で、胴部は斜方向に刷毛目調整。口縁部は横撫で。胴中位から口縁部にかけては荒磨き。内面に輪積灰がみられる。	口縁・刷毛目。 胴・4条1単位の簾状文。時計まわり。 胴・肩部から4条1単位の羽状直線文。	羽状直線文 は時計まわり。
Fig. 100-6 PL. 100-4	甕	裏土(50-4) 口縁部		胎 微細砂粒 混入 焼 整 練	灰 白	受け口状口縁。口縁端部は縄文地文のために平たくつぶれている。器内は口縁部で僅かに薄くなる。内外面とも横撫で。内面受け口部は横方向に刷毛目調整。	口縁・縄文。口・縄文。	
Fig. 100-7 PL. 100-4	甕	裏土(50-4) 胴 部		胎 小粒混入 焼 整 練	明赤褐	器内はほぼ均一。内面は刷毛目調整。	肩・縄文。	

10号溝出土土器

図 版 番 号 写 真 番 号	器 種	出 土 位 置 遺 存 状 況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 102-1	甕	床 面 肩 部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	器内は均一。斜方向に刷毛目調整。		

11号溝出土土器

図 版 番 号 写 真 番 号	器 種	出 土 位 置 遺 存 状 況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 103-1 PL. 103-1	甕	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 整 練	黒 褐	口縁部は大きく外反。器内は口縁部で薄い。肩部は斜方向に刷毛目調整。口縁部は横撫で。内面は横方向に調整。	口縁・縄文L.R。胴・4条1単位の簾状文。時計まわり。肩・胴部にかけて櫛状工具により羽状直線文。	
Fig. 103-2 PL. 103-1	甕	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 整 練	橙	口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みをもつ。内外面とも横方向に荒磨き。	口縁・刷毛目。 胴・簾状文。時計まわり。	
Fig. 103-3 PL. 103-1	甕	床 面 頸部から口縁部		胎 小粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	受け口状口縁を呈す。器内は頸部で薄い。外面口縁部は横撫で。内面口縁部は縦方向に荒磨き。	口縁・縄文。 胴・簾状文。時計まわり。	

図版番号 写真番号	部 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎 土 焼 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
Fig. 103-4 PL. 103-1	甕	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	橙	受け口状口縁を呈す。口縁端部は縄文地文のため平たい。器内は口縁部で薄い。内外面とも口縁部は横撫で。内面頸部は斜方向に刷毛目調整。	口縁・縄文。 口・2条1単位の波状沈線文。 頸・縹状文。時計まわり。	
Fig. 103-5 PL. 103-1	甕	床 面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	受け口状口縁を呈す。端部は丸みをもつ。口縁端部に向い薄い。外面口縁部は横撫で。内面頸部は横方向に磨き。	口縁・先の尖った工具により刺突文。類似縄文。口・7条1単位の帯状波状文。 頸・縹状文。時計まわり。	
Fig. 103-6 PL. 103-1	甕	床 面 胴部から頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	橙	頸部は口縁部に向い外反。器内は胴部が薄い。胴部内外面とも横撫で。内面胴部は斜方向に刷毛目調整。	頸・5条1単位の縹状文。時計まわり。 肩・肩部から胴部にかけて帯状波状文(3段確認)。	
Fig. 103-7 PL. 103-1	壺	床 面 胴 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	にぶい 橙	器内は均一。外面は横方向に刷毛目調整。	胴・横線文と山形文が交互に施文。	施文順位は ①山形文 ②横線文
Fig. 103-8 PL. 103-1	甕	床 面 胴 部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内は均一。外面は横方向に刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整。後縦方向に磨き。	胴・8条1単位の羽状直線文。	
Fig. 103-9 PL. 103-1	壺	床 面 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	にぶい 橙	器内は均一。外面肩部は横方向に刷毛目調整。胴部は縦方向に刷毛目調整。	頸・3本の横線文。下位二段は山形文。横線文が交互に施文。	
Fig. 103-12 PL. 103-4	壺	床 面 底部から胴部	胴 13.1 底 6.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻	黄 橙	胴部は丸く大きく張る。胴中央で薄い。外面胴下半部は縦方向に磨き。胴中央は横方向に磨き。内面は横方向に刷毛目調整。		
Fig. 103-13 PL. 103-5	壺	床 面 底部から胴部	底 8.4	胎 小礫混入 焼 堅緻	明 橙	胴部は大きく張る。器内は胴中央で薄い。外面胴下半部は横方向に磨き。胴部は斜方向に刷毛目調整後、縦方向に磨き。内面は斜方向に刷毛目調整。		
Fig. 103-14 PL. 103-6	甕	覆 土 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	にぶい 橙	口縁部は内薄しながら立ち上がる。器内は頸部が薄い。口縁部内外面とも横撫で。	頸・縹状文。時計まわり。	
Fig. 103-15 PL. 103-6	甕	覆 土 頸部から口縁部		胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄橙	受け口状口縁。器内は頸部で薄い。外面口縁部は横撫で。内面口縁部は横方向に磨き。	口縁・縄文。 頸・縹状文。時計まわり。	
Fig. 103-16 PL. 103-6	甕	覆 土 頸部から口縁部		胎 小礫混入 焼 堅緻	にぶい 橙	口縁部は大きく外反。口縁端部で薄くなる。内外面とも横撫で後内面は横方向に磨き。	口縁・縄文。 頸・縹状文。時計まわり。	

Fig. 103-17 PL. 103-6	裏	床面 頸部から口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	口縁部は大きく外反、内外面とも、口縁部は横撫で、	口縁・縄文L.R。 胴・鬘状文、時計まわり。	18と同一個 体?
Fig. 103-18 PL. 103-6	裏	床面 胴部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄橙	肩部は丸みをもち、頸部は口縁部に向い外反。 肩部は内外面とも磨目調整。	胴・7条1単位の鬘状文。 肩・8条1単位の羽状直線文。	17と同一個 体?
Fig. 103-19 PL. 103-6	裏	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	浅黄	頸部で僅かに外反、器内はほぼ均一。内外面とも斜方向に刷毛目 調整。	胴・5条1単位の磨指波状文。 肩・羽状直線文。	
Fig. 103-20 PL. 103-6	裏	覆土 胴部		胎 砂粒混入 地 堅緻	灰	器内はほぼ均一。斜方向に刷毛目調整。	胴・磨指波状文。	
Fig. 103-21 PL. 103-6	裏	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 地 軟弱	浅黄橙	受け口状口縁を呈し、口縁端部は丸みをもち僅かに厚くなる。 内外面とも横撫で。	口縁・擬似縄文。 口・4条1単位の磨指波状文。	
Fig. 103-22 PL. 103-6	裏	覆土 頸部		胎 砂粒混入 地 やや軟弱	黄橙	口縁部に向い外反する。器内はほぼ均一。横撫で。	胴・横線文。 肩・横線文と山形文が交互に2段。	
Fig. 103-23 PL. 103-6	裏	覆土 肩部から頸部		胎 砂粒混入 地 堅緻	灰黄	頸部は、口縁部に向い外反。内面に輪轆痕。器内はほぼ均一。 外面横撫で。内面は斜方向に刷毛目調整。	胴・5条1単位の磨指波状文。 肩・鬘状文。	
Fig. 103-24 PL. 103-6	鉢	覆土 口縁部		胎 砂粒混入 地 堅緻	赤生	内湾しなから立ち上がる。口縁端部で僅かに薄くなり平たい。	内外面とも 赤色塗彩。	
Fig. 104-1 PL. 105-1	裏	頸部方 口縁部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	浅黄橙	受け口状口縁を呈す。器内はほぼ均一。口縁部は横撫で。	口縁・縄文L.R。 口・地文に縄文抽文後、2本の波状沈線文。	
Fig. 104-2 PL. 105-1	裏	頸部方 肩部から口縁部		胎 小礫混入 地 やや軟弱	にぶい 橙	口縁部は大きく外反、口縁端部は丸みをもち、器内は口縁部で厚 い。口縁端部は内外面とも横撫で。	胴・頸部にかけてコの字重文と地文。	

12号溝出土土器

図版番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土 地色	色調	器形・整形の特徴	文様	備考
Fig. 105-1 PL. 105-2	高杯	床面(溝端方) 杯部		胎 砂粒混入 地 堅緻	赤生	杯外面底部は僅かに段をもつ。器内はほぼ均一。 内外面とも横方向の見磨き後、縦方向に見磨き。		内外面とも 赤色塗彩。
Fig. 105-2 PL. 105-3	裏	覆土 口縁部の一部を欠	口 16.6 頸 14.3	胎 砂粒混入 地 堅緻	にぶい 橙	最大巾は胴部上位にあり、口縁部に向かい大きく外反する。 器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整後、胴下半部は縦方	口縁・刷毛目。 頸部・5条1単位の鬘状文、時計まわり。	

図 版 番 号 写 真 番 号	器 種	出 土 位 置 遺 存 状 況	法 量 (cm)	胎 土 施 成	色 調	器 形 ・ 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
		損	胴 18.8 底 6.5 高 23.0			向に荒磨き。内外面とも口縁部は横撫で後、一部荒磨き。内面胴下部は荒磨き。	肩・肩部から胴部にかけて羽状直線文施文。	
Fig. 105-3 PL. 105-4	甕	溝堀方 肩部から頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	黒 褐	器内はほぼ均一。外面は縦方向に刷毛目調整。内面は斜方向に横目調整。	頸・羅紋文。時計まわり。 肩・羽状直線文。	
Fig. 105-4 PL. 105-4	甕	溝堀方 肩部から頸部		胎 小礫混入 焼 堅緻	橙	頸部は口縁部に向い外反。器内は頸部で薄くなる。内外面とも斜方向に刷毛目調整。	胴・4条1單位の横橋波状文が2段にわたり施文。	
Fig. 105-5 PL. 105-4	甕	溝堀方 肩部から頸部		胎 小礫混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	頸部は口縁部に向い外反。器内は頸部で薄くなる。内外面とも横方向に刷毛目調整。	頸・羅紋文。時計まわり。 肩・羽状直線文。	
Fig. 105-6 PL. 105-4	甕	溝堀方 胴 部		胎 砂粒混入 焼 堅緻	暗 灰	器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横方向に荒磨き。	胴・羽状直線文。	
Fig. 105-7 PL. 105-4	甕	溝堀方 肩部から頸部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	淡 黄	頸部は口縁部に向い外反。器内はほぼ均一。 外面は斜方向に刷毛目調整。内面は横撫で。	胴・肩部からつの字重文を施文。	
Fig. 105-8 PL. 105-4	甕	溝堀方 胴 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄橙	胴下半部が僅かに厚い。輪轆痕がみられる。 外面胴部は斜方向に横目調整。内面は横方向に横目調整。	胴・羽状直線文。	
Fig. 105-9 PL. 105-4	甕	覆 土 胴 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	浅黄橙	器内は下半部で厚い。 外面は斜方向に横目調整。内面は横方向に木口状工具により調整。	胴・羽状直線文。	
Fig. 105-10 PL. 105-4	壺	覆 土 頸 部		胎 砂粒混入 焼 やや軟弱	浅黄橙	器内はほぼ均一。外面は斜方向に刷毛目調整。	頸・3条の横線文。	
Fig. 105-11 PL. 105-4	壺	堀 方 肩 部		胎 小礫混入 焼 堅緻	褐 灰	器内はほぼ均一。横方向に刷毛目調整。	肩・横線文と山形文が交互に施文。	
Fig. 105-12 PL. 105-5	甕	覆 土 底部から胴下半部		胎 小礫混入 焼 堅緻	橙	器内は胴中央部に向けて薄くなる。底部との接合部は横押え。外面は縦方向に荒磨き。内面は木口状工具による調整。		

第3節 グリット出土遺物

縄文土器 (Fig. 112, PL. 108-2)

1 胴部破片で赤褐色を呈し、胎土中には砂礫を混入する。地文は連歯状工具による条線である。条線上に横位と縦位の細い粘土紐を貼付け、その浮線上に篋状工具で綾杉状の刻目を施している。刻目は横位浮線上のみ認められる。また、浮線間には円形刺突が施されている。諸磯a式の新しい段階と思われる。

2~4 2は口縁部破片で茶褐色を呈し、胎土中には砂礫を混入する。口唇部はやや外反する。連歯状工具による集合条線文である。口唇直下には円形文様が構成され、下部には「く」文様が作出されている。3は口縁部破片で灰褐色、ないしは赤褐色を呈している。胎土中には少量の小砂礫を混入する。口端は平坦である。2と同様な集合条線が施文されているが、上下の文様間に無文部を介在させている。4は口縁部破片で、表面は黒褐色ないしは褐色であり、裏面は褐色を呈している。口唇部内面に粘土紐を貼付け、丸味をもたせている。口端は綾杉状集合条線文を作出し、以下は平行集合条線文を構成している。条線上にはボタン状浮文を添付し、口唇部内外面にかけ粘土瘤を貼付けている。2~4は諸磯c式段階と思われる。

5 口縁部から胴部にかけての破片で褐色、ないしは黒色を呈する。口縁部断面形態はやや内湾し口端は平口に整形されている。無文土器であるが、諸磯式段階のものと思われる。

6 口縁部破片で褐色を呈する。部分的に炭化物が付着している。波状口縁であり、波頂部より垂下する沈線と、斜位の沈線により区画される。区画内は「RL」の縄文が施されている。加曾利E4式段階と思われる。

7・8 7は口縁部破片で波状口縁形態となり、褐色を呈する。沈線で菱形に区画し、内部は「LR」の縄文が施されている。口唇頂上は沈線で楕円区画し、「LR」の縄文が施されている。8は口縁部破片で褐色を呈し、口唇部は逆「く」字状に内湾する。沈線で「J」字状に区画し、外縁に沿って列点が施される。7~8は称名寺式段階と思われる。

9~11 9は口縁部破片で茶褐色を呈する。部分的に炭化物が付着している。波状口縁となり、口唇部内面は陵をもつ。波頂部には沈線で「{ }」文様と、口縁に沿って平行沈線が施文される。以下は斜位沈線により、逆三角形に区画し、地文は「LR」の縄文が施される。また、波頂部内面は棒状工具による円形刺突が施される。10は色調・胎土等9と類似する。口縁部に近い胴部破片と思われる。縦位の沈線とやや湾曲した斜位の沈線が施され、地文は「RL」の縄文である。11は胴部破片で褐色を呈する。沈線区画はやや湾曲する。地紋は「RL」である。堀ノ内1式段階と思われる。

12~14 12は口縁部破片で黒色、ないしは赤褐色を呈する。山形口縁となり、頂上部より垂下する降帯を貼付け隆帯上を加压している。この隆帯より口縁に沿って、斜位二条の沈線を施文している。口縁内面は陵をもち、頂上部に円形刺突を施している。13は口縁部破片で褐色を呈する。逆「ハ」字形に突出した頂上部に刻目を施している。頂上部に粘土瘤を貼付け、刺突を加えている。また、口縁に沿って、三条の平行沈線を施文している。地文は「LR」である。14は口縁から胴部にかけての破片で、黒褐色ないしは茶褐色を呈する。器面は丁寧調整されている。口縁部はやや外反し、頸部は屈曲し、膨らみをもっている。器表面には炭化物の付着が認められる。口縁に平行した七条の沈線が施され、頸部に瘤状の隆起があり、円形刺突が施されている。胴上半分に三叉文が認められる。地文

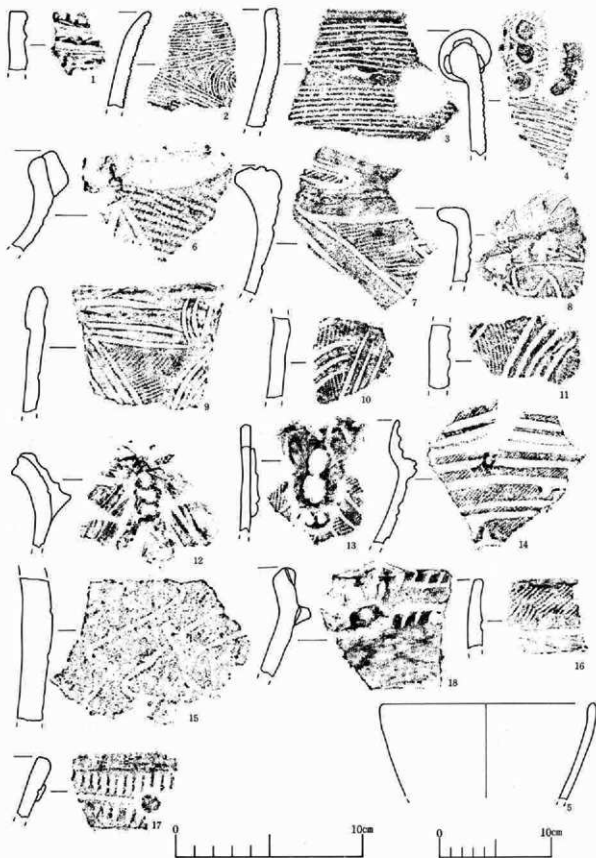


Fig. 112 グリット出土縄文土器

は「LR」である。12は安行1式、13は安行2式、14は安行3a式段階と思われる。

15-18 15は胴部破片で赤褐色を呈する。やや湾曲した間隔の広い沈線文が施されている。16は口縁部破片で茶褐色を呈する。口唇部は平縁で内面に稜をもっている。横位二条の沈線が施される。地文は「L」の無節縄文である。17は口縁破片で、灰色に近い褐色である。口縁部断面形態は直立し、口唇はやや丸味をもっている。横位二段笥状工具にて刻目を施し、沈線で区画している。沈線上に円形の粘土瘤を貼付けている。18は口縁部から胴にかけての破片であり、胎土・色調等17と類似する。断面形態は逆「く」字形に若干内湾し、口唇部はわずかに外反する。口唇から屈曲部にかけて、粘土瘤を貼付け、瘤状突起を作出している。次に、笥状工具にて刻目を施し、沈線で区切っている。17と18の文様構成は類するが、施文順序は逆である。15は中期後半、16は後期前半、17・18は後期後半段階と思われる。

弥生土器

1 壺 (Fig.113-1, PL.109-1)

5 L-19区出土。小円礫混入擬似ローム層上面の2号溝に近接する地点で検出された。

頸部から口縁部にかけての3分の1ほど残存する。口径は、23.8cm、器肉は、頸部で約0.7cm、口縁端部で約0.5cmである。胎土は、白色粒子が混入している。焼成は堅く、しめられている。色調は、にぶい橙である。器形は、頸部から口縁部に向い大きく外反し、口縁部は受け口状を呈している。口縁部は丸みをもつ。整形は、外面頸部で斜方向に備状工具により調整。内面は、斜方向に刷毛目調整が行なわれている。口縁部は内外面とも横撫で調整が行なわれている。文様は、口縁端部に刻み目を入れ、口縁部は2条1単位の波状沈線文が施文されている。内面は赤色塗彩が行なわれている。

2 壺 (Fig.113-2, PL.109-4)

6 H・I-5・6区にかけて出土、浅間C軽石層・小円礫混入擬似ローム層混入土層中内より検出された。胴部中位から口縁端部にかけての破片である。口径は約11.8cm、頸径は約10.0cm、胴最大径は約14.3cmである。胎土は、白色粒子が混入している。焼成は、堅くしまっている。色調は、黄橙である。器形は、胴部で丸く大きく張りをもち頸部に至り、口縁部に向い外反する。器肉は胴部で厚く、口縁端部で薄くなる。口縁端部は丸みをもつ。整形は、外面胴部から頸部にかけて横方向に刷毛目調整後、荒磨きが行なわれている。内面は斜方向に撫で底が残る。内面胴部から頸部にかけて幅2cmの粘土紐による輪積痕が残る。口縁部は、内外面とも横撫でが行なわれている。

3 壺 (Fig.113-3, PL.109-2)

5 M-24区出土。黒褐色粘質土層下部で検出された。胴下部から頸部にかけて2分の1残存する。頸径は約10.2cm、胴最大幅部は約14.3cmである。胎土は、白色の小礫が混入している。焼成は、やや軟弱である。色調は、黄橙である。器形は、胴部で大きく張りをもち頸部に至る。頸部は口縁部に向い外反をはじめる。器肉は胴下半部が厚く、頸部は僅かに薄くなる。文様は、頸部で5条1単位の備状工具による籠状文が時計まわりに施文。肩部から胴下部にかけて5条1単位の備状工具による波状文が施文。内面は横・斜方向に刷毛目調整が行なわれているが、一部に輪積痕が見られる。

4 甕 (Fig.113-4)

5 P-5区出土。浅間C軽石下の茶褐色土層内から検出された。9号溝に近接する。底部が4分の1残存する。底径約7.8cm。器形は、底部から胴部に向けて外反している。器肉は、底部で約0.7cm

第3章 各 節

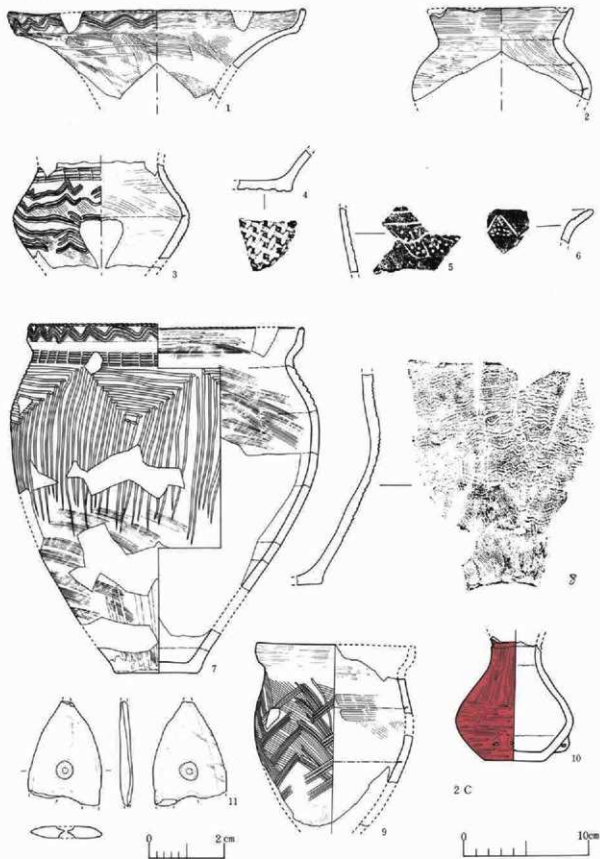


Fig.113 5L-17 5M-24·25 5N-18 6G-11 6N-18 6HI-5·6

胴下部で約0.5cmである。整形は、外面底部接合部分で斜方向に篋削りが行なわれている。胴部寄りでは斜方向に篋磨きが行なわれている。底部は網代底が残る。

5 壺 (Fig. 113-5, PL. 109-5)

6 I-6区出土。浅間C軽石層・小円礫混入疑似ローム層混入土層中より検出された。

肩部から頸部にかけての破片である。胎土は、黒色・白色の小粒子が混入している。焼成は軟弱である。色調は浅黄橙である。器肉はほぼ均一であり、約0.4cmである。外面は器面が荒れており一部分に刷毛目が横走している。内面は斜方向に篋磨きが行なわれている。文様は、頸部に2条の横走する沈線文の中に刺突文が施文され、頸部から肩部にかけて波状沈線文が施文され、円形竹管文が施文されている。

6 高杯 (Fig. 113-6, PL. 109-6)

5 M-25区出土。浅間C軽石層・小円礫混入土層中より検出された。

高杯の口縁部の破片と考えられる。胎土は、黒色粒子を含んでいる。焼成は、堅くしまっている。色調は黄橙である。器形は、杯体部から口縁部にかけての変遷点があり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸みをもち、器肉は均一で、ほぼ0.5cmである。外面口縁部は横方向に撫で痕が残っている。内面は横方向に篋磨きが行なわれている。文様は、内面口縁部に山形沈線文を施文し、山形文の内側に円形竹管文を施文している。内面は、全面に赤色塗彩が行なわれており、外面は一部分に赤色塗彩が残る。

7 甕 (Fig. 113-7, PL. 109-3)

5 M-24区出土。浅間C軽石層・小円礫混入疑似ローム層混入土層中より検出された。

胎土は白色の小礫が混入し、焼成は堅くしまっている。色調は暗黄褐色である。一部吸炭部がある。口径22.4cm、頸径21.2cm、胴最大幅径25.0cm、底径7.0cm、高さ28.1cmであり、胴最大幅部は、中位上半に位置し、大きく張りをもつ。口縁部は受け口状を呈しており、口縁端部は丸みをもつ。器肉は、口縁部で僅かに薄くなる。整形は、外面胴部は斜方向に刷毛目調整後、下位で縦方向に篋磨きが行なわれている。外面の口縁部は横撫でが行なわれている。内面は、胴中位から頸部にかけて斜方向に刷毛目調整が行なわれ、口縁部は、横撫で調整後、横方向に篋磨きが行なわれている。文様は、口縁端部で刻み目、口縁部は、4条1単位の櫛描波状文が施文されている。頸部は、5条1単位の簾状文が時計まわりに施文。肩部から胴中位にかけてはコの字重文が7区画施文され、一周している。

8 甕 (Fig. 113-8, PL. 110-2)

6 G-11区出土。黒色粘質土層内より検出された。

底部から頸部にかけて5分の1ほどの破片である。胴部は丸みもち張る。頸部は口縁部に向い外反をはじめる。器肉は胴下半部で厚く、胴中位で僅かに薄くなり、頸部付近で厚くなる。整形は、外面胴下半部は、斜方向に刷毛目調整、胴中位から頸部にかけては横方向に刷毛目調整が行なわれている。内面は、斜方向に櫛目調整後、部分的に横撫でが行なわれている。文様は、頸部から胴下半部上位にかけて、横方向に櫛状工具により7段階の波状文が施文されている。5条1単位の櫛状工具を使用し、頸部から下位に順次施文している。胎土は砂質で白色鉱物を混入する。焼成は堅くしまっている。色調は、にぶい黄橙である。

9 甕 (Fig. 113-9, PL. 110-1)

5 N-18区出土。3号住居址の南部分、黒色土層中より検出された。

第3章 各 節

胴下半部分から口縁部にかけて3分の2が残存する。口径13.0cm、胴最大幅径13.0cm、頸径11.3cm、である。胴部は丸みをもち大きく張る。口縁部は受け口状を呈する。器内は胴下半部で厚みをもち、肩部で僅かに薄い。口縁端部は丸みをもつ。整形は、外面胴下半部で縦方向に篋削りが行なわれており、胴部は斜方向に櫛状工具により器面調整を行なっている。頸部から口縁部にかけては横方向に撫で調整が行なわれている。内面は、櫛状工具により調整後、一部分は篋磨きが行なわれている。口縁部は横方向に櫛目が残る。胎土は小礫と白色粒子が混入している。焼成は堅くしまっている。色調は黄橙である。外面の一部に煤が付着する。内面に一部輪積痕がみられる。

10 小型壺 (Fig. 113-10, PL. 110-3)

6N-18区出土、茶褐色土層より検出された。口縁部を欠損する。

頸径4.0cm、胴最大幅径9.4cm、底径4.7cmである。胴部は丸みをもち、大きく反外する。頸部は僅かに段をもつ。器内は胴下半部で厚く、肩部で僅かに薄くなる。内面に輪積痕がみられる。整形は外面胴下半は横・肩部は縦方向に篋磨きが行なわれている。胴下半部に突起を1個もち、穴を穿ってある。胎土は黒色粒子を含み、焼成は良好。色調は外面底部を含め赤色塗彩が行なわれている。

11 石椀 (Fig. 113-11, PL. 110-4)

5N-19区出土。一部欠損、両面から穴を穿っている。刃部は両面から削っている。一部分に擦痕がみられる。石材は輝緑凝灰岩質準片岩である。重さ、0.002kgである。

瓦 (Fig. 114, PL. 110-5)

平瓦、6H-5・6区の耕作土から出土した。表面は布の圧痕が、背面には縄目条の印痕が見られる。胎土に夾雑鉱物は少ないが、黒色の微鉱物が特徴的に入る。焼成は普通であり、甘くもなく焼締るほどでもない。色調は還元された灰色を呈する。

この平瓦の製作技法は、寄木状の単位が不明瞭のため、桶巻作りによるものか一枚作りによるものか察しがたい。胎土に見る黒色鉱物の多さは、その製作地域として安中市秋間古窯跡群のそれと共通しているため、秋間古窯跡群製と考えられる。

なお、縄印平瓦の製作は、上野国分寺建立前後から、平安時代中頃に至るまで続いてゆくが、秋間古窯跡群の検討からすれば、10世紀前葉には、窯跡群の構成が終息に向うため、この瓦片の年代親も、およそ、その間に置きうるであろう。

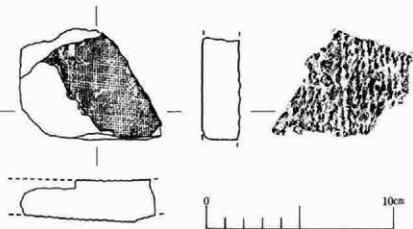


Fig. 114 6H-5・6

北側水道工事のために確認した土層 (Fig. 115)

発掘調査終了後、周辺等において工事のある場合通報をしてほしい旨を清里地区土地改良区に連絡しておいた結果、水道工事により溝の断面が見られるとの通報があった。

当事業団から職員2名が現地に行き、水道埋設地点の位置を測量し、上層断面を実測した。

その結果次の基本土層が確認できた。

1 層 耕作土

1' 層 F P (榛名二ツ岳降下軽石層)を含まない固い褐色土に似ている。

1° 層 川砂利層

2 層 F P を含む固い褐色土層。

2' 層 C P (浅間C降下軽石層)まじりの固い褐色土層。

2° 層 浅間C降下軽石層。

3 層 F A (二ツ岳降下火山灰層)

4 層 C P 含む黒色土層。

4' 層 黒色土の粘性とC P とが混じった土層。

4° 層 砂利層。

5 層 黒色土、粘性がある。

6 層 茶褐色土、粘性がある。

6° 層 砂質土層。

7 層 ローム層。

以上の土層が見られた。

6 C - 2 区、および6 E - 2 区において2本の溝が確認された。

6 C - 2 区の溝は断面で確認できた上端の幅約2.5 m、深さ約0.9 m、底部の幅約0.3 mである。

当溝の掘り込み面は、浅間C降下軽石下である。浅間C降下軽石下に黒色土で粘性のある土層堆積を掘り込み面としていることが明確になった。

6 E - 2 区の溝は断面で確認できた上端の幅約1.5 m、深さ約0.45 m、底部の幅約0.2 mである。

当溝の掘り込み面は、6層中であると考えられる。

6 C - 2、6 E - 2 区の溝を比較すると6 E - 2 区の掘り込み面が一層下位からであることがとらえられた。両溝ともC軽石層下に間層をもって掘り込まれていることから、弥生時代の溝の可能性があるとされる。また2号溝、5号溝、9号溝との関係も断面図、位置、方向性などから考えると連続する可能性がある。

また水道工事に伴って土層図作成地点6 S - 1 ~ 6 B - 1 区にかけての狭い範囲での確認であったことから、これらの開発に伴う調査では、6 C - 2 区以北にも調査のメスを入れることが必要である。

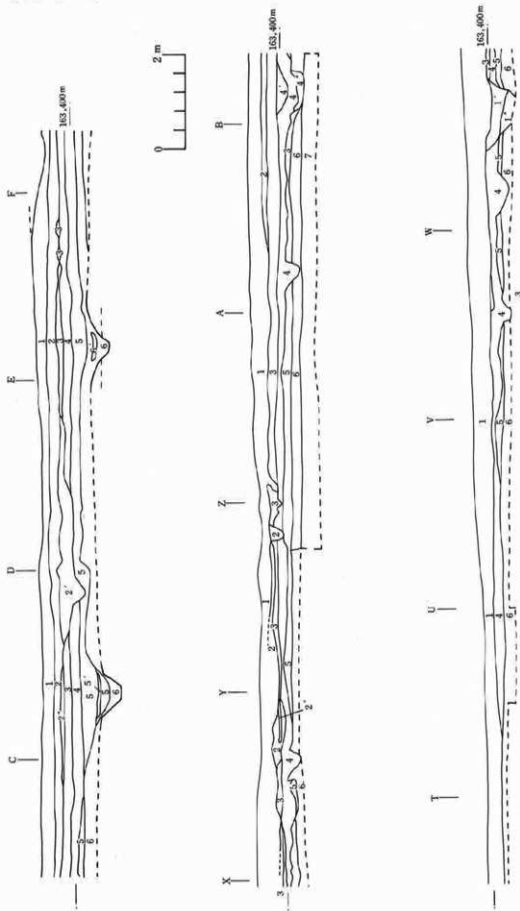


Fig.115 北園水道工事のために確認した土層

ま と め

清里・庚申塚遺跡は、弥生時代中期後半の環濠集落を中心とし、他に平安時代の住居址1軒、井戸、溝、土坑などを検出した。また遺構は未確認であったが遺物として縄文土器、瓦が出土している。

各時期のまとめ

縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であったが、18個の土器片がグリット内より出土した。時期的には前期から晩期までである。

弥生時代

〈環濠〉当遺跡で確認できた環濠は、2号溝と5・9号溝の2本である。

2号溝の形態はV字形に近い形をし、上端で1.5m～2.1m、下端で0.2mの幅をもち、平均0.6～0.8mの深さである。このことから、東側の端を5M-18区、西側の端を6K-24区までの規模であり、約112mを測る。南北の端は調査中に入れた環濠確認トレンチの結果、遺跡南側で確認できた。10、11、12号溝の形態が2号溝に類似はしないものの、方向性から10号溝以南に広がる可能性は少ないと考えられる。出土遺物からみて、11、12号溝は2号溝と同一時期の遺物を出土している。また北端は調査終了後、水道管埋設工事の際、カット部分断面に2本の溝が確認された。図上復原した結果、6V・W-2区に位置し、2本の溝もV字形を呈していた。2号溝また5・9号溝に類似することが明確となった。以上のことから南北の規模は最大限10号溝までとすると約140m、12号溝までとすると、約128mであり、6W・V-2区で確認した2本の溝の南溝から12号溝までの距離は約97mである。5号溝は遺跡内西端を北西から南東方向に延びる溝であり、形態はV字形を呈す。6P-22区において、2号溝に0.4mと接近して立ち上がり終結している。9号溝は遺跡内東側で確認され北西から南東方向に延びる溝である。形態はV字形を呈している。形態では2号溝とも類似するが、5・9号溝は、溝の底部が極めて狭いのにに対し、2号溝は約0.2mの平坦な底部を呈している。9号溝は東西に延びる状況を呈しており、東の限界を確認するには至らなかった。仮に溝の形態と出土遺物から判断して、5・9号溝が同一の遺構であるとするならば、東西200mを越える規模の環濠になる。また6P-22区における2号溝との接近部分で5号溝が立ち上がるのは、2号溝の存在を意識して止めたものか、5号溝が終結した部分を通す様に2号溝を設置したものか、集落の拡大による溝の拡張、付けかえを行ったものかなど様々な推測ができる。ただし、5号溝は、6P-22区で立ち上がり後、2号溝の内側では確認できず、南北の範囲は、北側では6V・W-2区で検出された2本の溝の一つであることは確実にあり、南側では10・11・12号溝いずれになるかは明確にとらえられなかった。

〈住居址〉環濠内でとらえられた弥生時代中期後半の住居址は21軒である。2号溝（環濠）より外にでる住居址は、6号住居址（2号溝に切られている）を含めて4軒ある。いずれも中期後半の遺物を出土していることにより、切り合い関係等から2～3期の新旧関係がある。調査範囲の中で環濠（5・9号溝）より外に出て検出された弥生時代の遺構はなかった。

環濠は北西から南東に向けて設置され、地形的に前橋台地、微高地上東南部緩斜面に集落を設けていることが2つの環濠とも共通している。

各住居址は、隅丸方形を呈しており、住居址中央付近に炉址をもつ。炉址内には焼けた石が1・2個残されていた。貯蔵穴の確認された住居址は10号住居址1軒であった。

まとめ

環濠内および住居址内で出土した遺物は、甕・壺・鉢・高杯・台付甕・甌・蓋・注口土器・打製石斧・磨製石斧・石槌・石皿・凹石・台石・砥石・石匕などがある。住居址によって遺物出土量は様々であるが、遺構によってはセットとして豊富な資料をもつものがある。主な器種別の特色では

①甕形土器

甕形土器では口縁部が受け口状を呈し、口縁端部に縄文や刻み目、口縁部は櫛描波状文・縄文・波状沈線文・無文、頸部は等間隔止簾状文が主であり、肩部から胴部にかけては櫛状工具による簾状文・羽状直線文・格子目文や沈線による波状文・横線文・コの字重文、ボタン状貼付文などが主に施文されている。

②壺形土器

壺形土器は胴部は大きく張りもち、口縁部は受け口状を呈すものと、ラッパ状になるものがある。口縁端部は縄文、刻み目、無文のものが主である。口縁部は縄文、波状沈線文、ボタン状貼付文、櫛描波状文、頸部は地文に縄文をもち、波状沈線文や横線文を施文するもの。簾状文、平行線文などを文様とするものが主である。肩部から胴部にかけては横線文と波状沈線文や山形文が交互に施文されるものや、沈線区画の中に櫛描波状文が施文されるものがある。無文土器・小型壺形土器では塗彩されているものが主である。

③鉢形土器

鉢形土器は出土数が少ないが赤色塗彩されたものが多く出土している。

④高杯

高杯は口縁部が大きく外に開き4個の突起をもつものや、口縁部が波状(鶏冠状)を呈すものがあり、いずれの高杯も赤色塗彩がなされている。

⑤台付甕

台付甕の文様構成は甕形土器には類似している。

⑥甌

甌は、底部中央に1個の穴をもつ。

⑦蓋

蓋は、摘みをもつもの、高杯、台付甕を転用したものなどがある。

⑧注口土器

注口土器は1個が2号溝床面より出土した。赤色塗彩されている。

以上簡単に遺跡、遺物の概略を記した。

県内における環濠集落は、本報告書作成時に調査された高崎市浜尻遺跡がある。従来関東地方では高地性集落にこの例が多かったが、^{B1)}庚申塚、浜尻両遺跡とも微高地上の発見であった。時期的にもほとんど同一時期で縄文中期の範疇である。この期の土器を出土する地域は他に長野県、埼玉県、東京都西部などに見ることができる。

歴史時代

歴史時代の遺構は住居址1軒、とグリット内出土の瓦である。

今回調査した資料の中で検討した結果、土器の分類等でいくつか気付いたことがあったが、紙数に制限があり割愛せざるをえなかった。今後何らかの形で記述するつもりである。

注1 中村昌人・桜井孝「浜尻遺跡」高崎市文化財調査報告書第26集 高崎市教育委員会 1981

付編 1

群馬県東下井出及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について

早稲田大学教育学部地学教室教授（理学博士）

中 村 忠 晴

東下井出及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料試料は群馬県埋蔵文化財調査事業団から早稲田大学系属校早稲田実業学校教諭市毛薫氏を通して提供を得たので、その試料について発光分光分析、X線回折 E P M A などにより測定を行ったので、その結果について報告する。

試料

提供の試料は東下井出遺跡出土の土状試料 3 の 10 試料及び清里・庚申塚遺跡住居址 出土の土状試料 1、塗彩土器試料 9 の 10 試料である。試料の詳細は〔表 1〕に示す。

測定

〔表 1〕の試料中で測定に必要な試料量が得られたものについて、下記の測定を行った。

発光分光分析

20 試料中で No 4、No 12、No 14～No 19 については測定に十分な試料量が得られなかったので他の 12 試料について測定を行った。試料採取に当り、各試料をシリカゲルを用いたデシケーター中にて一昼夜乾燥後、泥状試料については実体顕微鏡（約 20 倍）下で微粒鉱物岩石の混入のないよう注意して採取した。測定波長域は $2450 \text{ \AA} \sim 3450 \text{ \AA}$ として、次の測定条件にて写真乾板上に輝線として得た。

測定条件 分光器：JASCO-CT100MGRATING MONOCHROMETER、電源：JASCO LOW VOLTAGE A.C. ARC ROWER SUPPLY、電極：ナショナルカーボンスベシヤル ϕ 6.15mm、試料穴： f 2mm、 d 4mm、励起電圧：300V、励起電流：6A、励起時間：25秒、極間電圧：40～50V、電極間隔：3mm、スリット巾：0.005mm、結像法：スリット結像、集光法：シリンドリカルレンズ使用、写真乾板：KODAK SA-1、現像：KODAK D-19・ $20^{\circ}\text{C} \pm 1^{\circ}\text{C}$ ・3分、定着：フジフィス 6分。

また参考試料としてチタン、マンガン（いずれも純正化学製特級酸化物）も同条件で測定した。波長測定標準試料として、ジョンソンマッセイ製純鉄を用いた。測定は各元素の輝線の強弱を島津製プロジェクターを用い、肉眼的観測により行なった。その結果は、写真乾板を〔図 1〕に観測結果を〔表 2〕に示した。この分析の結果を考察すると、珪素、アルミニウム、マグネシウム、マンガ、カルシウム、チタン等を確認したがこれ等は混入した岩石の成分と考えられる。また水銀、鉛は検出されていない。〔表 2〕の結果から明らかに赤色顔料の主成分は鉄であることが確認できる。ただチタンの検出は主成分の鉄に関係するものと思われるが更に検討を必要とし、本実験では不明である。また東下井出遺跡出土試料と清里・庚申塚遺跡出土試料とは、定性的ではあるがその組成は殆ど同じと思われる。

X線回折

赤色顔料の鉱物種同定を目的として測定を行った。試料は発光分光分析に供した 12 試料について測

定した。試料ホルダーは少量の試料が有るため、3mm×15mm×0.2mmの溝をスライドガラスに作製し使用した。測定条件は次に示す。

測定条件 理学電機製、ターゲット：鉄、発生X線：鉄K α （マンガンフィルター使用）印加電圧：30KV、フィラメント電流：15mA、時定数：1、ゴニオメーター回転速度：2Q-2°/分、チャート速度：1cm/分、スリット系：1°-0.3°-1°、フルスケール：1×10⁸CPS（ただし参考試料は2×10⁸CPS）。なお参考試料として、酸化鉄（Ⅲ）（純正化学製特級試薬）・赤鉄鉱（赤谷鉱山産）を試料と同条件で測定した。測定結果はいずれも殆ど同様であり、相違するところは赤鉄鉱構造のシグナルの僅かな強度差及び混入している鉱物の多少による強度差の程度であった。したがって、代表として東下井出遺跡出土のNo5（4区15住R-1泥状試料1、No9（13住P-1原形の塗彩土器）と清里・庚申塚遺跡出土No20（18号住居址泥状試料）の三試料のX線回折チャート及び参考試料のX線回折チャートを〔図2〕に示した。測定結果から考察すると、いずれの試料にも赤鉄鉱のシグナルが見られるが参考試料と比較すると赤鉄鉱構造を持っている量は比較的少なく褐鉄鉱（非晶質）の部分が多いと推察できる。また他のシグナルは石英や長石類で、肉眼的観察により微粒岩石の混入が見られていることと一致している。さらに赤色顔料の色差は赤鉄鉱の量が多いと褐色を増し、非晶質の褐鉄鉱は石英が多いと赤色が強くなるように推察される。

EPMA分析

試料量が十分採取できなかった塗彩土器片試料について、塗布されている赤色顔料の組成分析を目的とし、電子線を用いて極微細部（約1 μ^2 ）の非破壊分析器であるEPMAにより測定を行った。試料は塗彩土器片から測定に適当な5mm×5mm程度に加工し安く、両遺跡に関連するよう選んだ。選択した試料は東下井出遺跡出土No10（4区南側表土土器片）、清里・庚申塚遺跡出土のNo15、No17（3号住居址土器片）の三試料について測定した。測定条件は次に示す。

測定条件 分析器：JEO L50A、取出角度：35°試料電流：1.5×10⁻⁸A（MgOに於て）、加速電圧：15KV、ビーム径： f 1 μ 、蒸着膜厚：300Å（炭素）、分光結晶：PET・RAP、フルスケール：500CPS。

測定の結果は〔図3〕に示す。分析結果を考察すると、いずれの試料も各元素のシグナル強度は殆ど同じである。また発光分光分析の結果と殆ど一致している。したがって両遺跡出土土器に用いられた赤色顔料はほぼ同じ材質であると推察できる。硅素とアルミニウムのシグナル強度に多少の差違がある。これは赤色顔料中に微粒子の鉱物岩石が混入しており、石英や長石類などの分布が多少相違するものと考えられる。

東下井出遺跡4区15住R-1（No5）と清里・庚申塚遺跡18号住居址（No20）について両試料は泥状で〔表1〕に示したように、色の相違が見られる。また試料量も比較的多量にあるので、二三の検討を試みた。

赤色顔料の回収

赤色顔料は顕微鏡観察により超微粒子であることが見られたので、水を用いて鉱物、岩石粒子を簡単に分離することを試みた。操作は約3gの試料を500mlのピーカーに取り、蒸留水を500ml加え、超音波を用いて30秒間攪拌し、約30秒間放置して懸濁液を集め、遠心分離によって微粒子を回収した。この操作は殆ど懸濁がなくなるまでくりかえした。この試料をNoDとし、放置時間約10秒の試料をNo

C、放置時間数秒のものをNaB、残渣をNaAとした。実験結果を〔表3〕に示す。この粒度分別は簡易に行ったため粗雑ではあったが、或る程度分別することができた。試料No.5-AとNo.20-Aは砂状で鉱物・岩石質を主とし、両試料の粒径は同様で肉眼的には差違は判別できない。しかし色の相違から試料No.5-Aには石英が多く試料No.20-Aには有色鉱物が多いものと観察した。したがって試料No.5-DとNo.20-Dの色の相違は石英や有色鉱物が微細粒子で混入し、その割合或いは量の違いにあると考えられる。そこで試料No.5-DとNo.20-Dについて、X線回析を前記と同じ条件で測定した。測定結果は〔図4〕に示す。X線回析チャートより、試料No.5-Dには比較的強度のある石英のシグナルが見られ、石英の極微粒子が混入しているのが判かる。試料No.20-Dには石英や長石類も少なく赤鉄鉱のシグナルも試料No.5-Dよりやや大きい。このことから色の相違は混入した鉱物種とその量に関係するものと考えられる。なお混入している鉱物岩石の粒径の様子を知るために粗粒の部分ではあるが、赤色顔料と殆ど分離できたNo.5-AとNo.20-Aの試料について粒度分布をしらべてみた。その結果を〔表4〕に示す。この結果を考察すると、その分布は非常に類似しており、興味ある結果が得られた。また〔図2〕・〔図4〕のX線回析の結果から赤鉄鉱の含有量は少なく褐鉄鉱（非晶質）が多いと思われるのでNo.5-DとNo.20-Dの試料について灼熱減量を測定した。その結果はそれぞれ10.1%、12.3%の値を得た。これは褐鉄鉱が比較的多く存在していることを示すものと考えられる。この実験で有機物混入の影響を考慮せねばならぬがその混入については強熱の初期に臭、煙、試料の炭化の現象が観察されなかったので、分析値への影響は殆どないものと思われる。

総括

各測定結果を総じて考察する。

- 1 東下井出遺跡及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料は褐鉄鉱と赤鉄鉱の混合しているものであり、鉄丹であることが認められる。
- 2 塗彩土器の赤色顔料の色の相違は混入する鉱物種の相違とその量に関係するものと推察する。
- 3 両遺跡出土の赤色顔料は組成、混入する鉱物、岩石の粒度分布、結晶質と非結晶質の割合など非常に類似しており、関係の深いものと思われる。
- 4 鉄丹の場合、一般にチタンの顕著な検出が見られるので興味ある元素と思うが今後の検討に待つ。
- 5 赤色顔料は鉄丹と認められたが、原産地との関連は必要情報が誠に不十分で断定することは現時点では困難である。

本報告では十分な実験と検討ができず、推察の域を脱することを得なかった。今後も微力ながら追究を続け問題点の解決への一助となることを願っている。

おわりに本報告のデータを得るに当たり、測定に多大の援助を得た早稲田大学教育学部技術職員雨宮たつみ女史、同学部学理科学生藤本幸司君に深く感謝の意を表す。

補 追

〔表3〕の試料No.5とNo.20の各CとDについて、粒子の状況を知るため走査型電子顕微鏡（日立製）により観察した。その結果を〔図5〕に示す。肉眼観察の色はCとDは余り差はないが、いずれも鉱物、岩石の細粒が見られる。このことは塗彩土器片のEPMA分析（赤色顔料塗布部を原形のまま、極微細部分の組成分析〔表3〕参考）の結果に示されている硫酸塩鉱物の所在と一致している。ここではその事実のみを示し、原因或はその理由については今後の検討を待つ。

表1 試料採取場所

試料番号	試料採取場所	内 観 的 色 ・ 其 の 態
1	4区 9住 R-6	灰味のある赤茶色で泥状・微粒状物粒石を混入
2	4区 9住 R-12	赤茶色で泥状・微粒状物粒石を混入
3	4区 10住 R-1	灰色を帯びた赤褐色で泥状・微粒状物粒石の混入やや多い
4	4区 12住 P-4	赤褐色・赤砂土部片
5	4区 15住 R-1	赤茶色で泥状・微粒状物粒石の混入やや多い
6	4区 16住 R-1	灰味はやや強い赤褐色・微粒状物粒石の混入やや多い
7	4区 16住 R-2	赤茶色で泥状・微粒状物粒石の混入やや多い
8	4区 16住 R-3	灰味はやや強い赤褐色・微粒状物粒石を混入
9	13住 P-1	赤茶色・赤砂土部片
10	4区 南側土上層片	赤茶色・赤砂土部片
11	3号住 居 址	赤褐色・赤砂土部片
12	3号住 居 址	赤褐色・赤砂土部片
13	3号住 居 址	暗味を帯びた赤褐色・赤砂土部片
14	3号住 居 址	暗味を帯びた赤褐色・赤砂土部片
15	3号住 居 址	暗味の強い赤褐色・赤砂土部片
16	3号住 居 址	暗味を帯びた赤褐色・赤砂土部片
17	3号住 居 址	暗味を帯びた赤褐色・赤砂土部片
18	3号住 居 址	赤味はやや強い赤褐色・赤砂土部片
19	3号住 居 址	暗味を帯びた赤褐色・赤砂土部片
20	18号住 居 址	暗赤褐色で泥状・微粒状物粒石の混入やや多い

(注) 赤砂土部の細粒中にも微粒状物粒石が混入している。

表2 発光分光分析結果

元素	発光波長(nm)	放射線番号															
		1	2	3	5	6	7	8	9	10	11	13	20				
Hg	2536.52	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3125.66	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3131.83	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pb	2613.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2833.07	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2873.32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fe	2522.85	S	S	M	2 S	S	M	M	M	M	M	S	S	S	S	S	S
	2772.11	M	M	M	S	S	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M
	2983.57	2 S	2 S	2 S	3 S	2 S	2 S	S	S	S	S	2 S	2 S	S	2 S	2 S	S
Ti	3088.03	2 W	3 W	3 W	2 W	3 W	2 W	3 W	2 W	3 W	2 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W
	3361.26	W	W	2 W	W	3 W	W	2 W	3 W	2 W	3 W	W	W	3 W	W	3 W	3 W
	3570.44	3 W	3 W	3 W	3 W	-	3 W	3 W	3 W	-	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W
Mn	2533.73	2 W	2 W	W	3 W	2 W	W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W
	2540.39	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W
	2852.13	W	2 W	M	W	2 W	M	W	2 W	M	W	2 W	W	W	W	W	W
Mg	2862.70	2 W	3 W	W	2 W	3 W	W	2 W	2 W	3 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W
	2881.58	2 S	2 S	2 S	2 S	M	S	M	S	M	S	M	M	M	M	M	M
	2516.12	S	S	S	S	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W
Ca	3173.33	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W
	3158.87	3 W	3 W	3 W	-	3 W	3 W	3 W	-	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W
	3082.16	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W	W
Al	3092.71	2 W	W	W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W
	3092.71	2 W	W	W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W	2 W

(注) 3 S、2 S、S、M、W、2 W、3 W 七種類の炭化度とする。
放射線 放射線

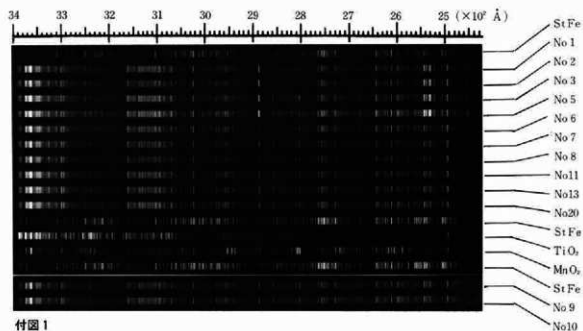
表3 粒度分布別

	No. 5		No. 20	
	分離の重量%	肉眼的色	分離の重量%	肉眼的色
A	23.2	僅かに茶を帯びた白色	58.4	やや褐色を帯びた灰色
B	1.1	白茶色	0.4	灰褐色
C	36.4	白味を帯びた赤茶色	23.8	褐色
D	39.0	やや淡い赤茶色	17.4	やや暗い褐色

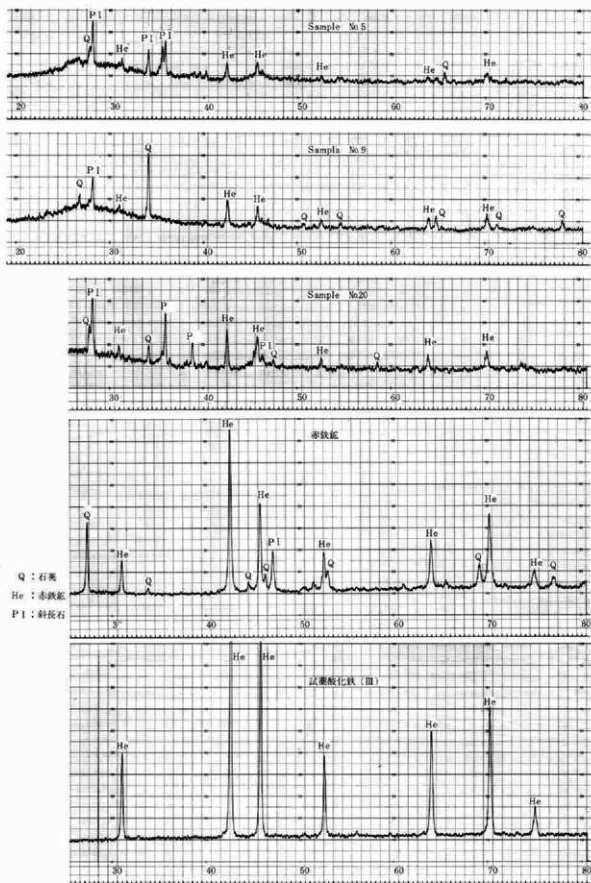
表4 粒度分布

粒度 mesh	No 5 - A 重量%	No 20 - A 重量%
32 以上	7.3	5.8
32~ 42	2.7	5.7
42~ 65	8.3	12.2
65~ 80	7.6	8.5
80~100	7.3	7.4
100 以下	66.8	60.4

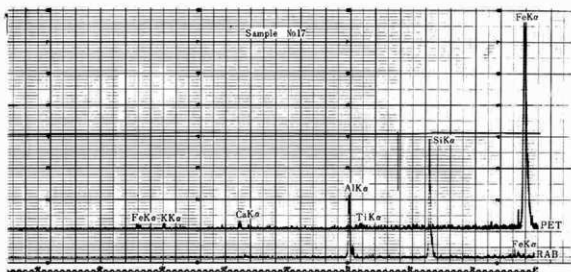
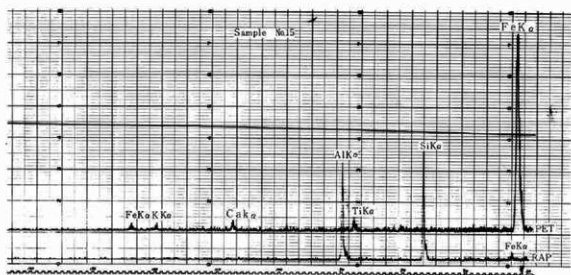
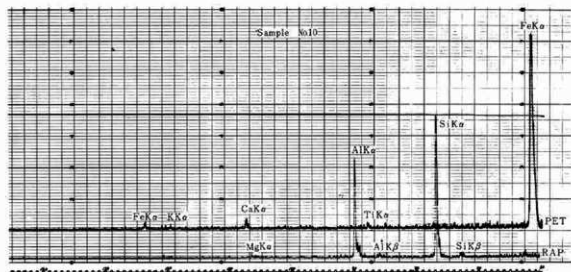
図1 発光分光分析結果



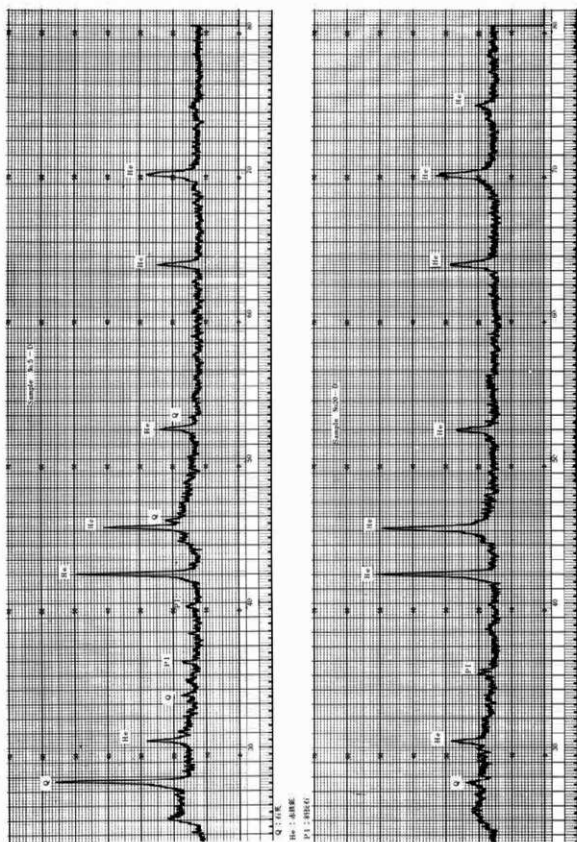
付図1



付図2 X線回折子 ← t

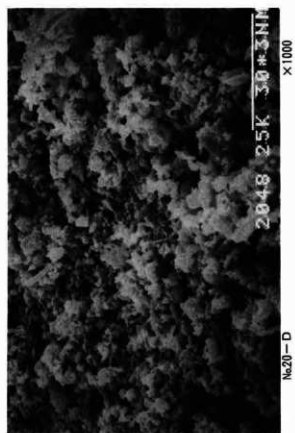
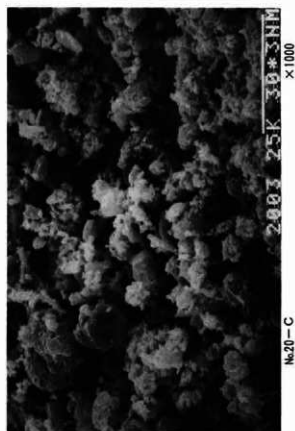
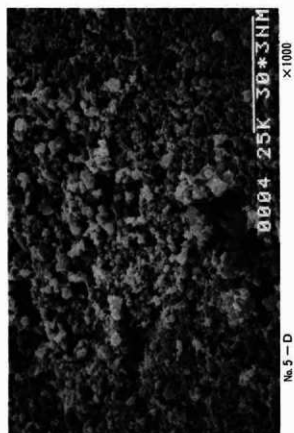
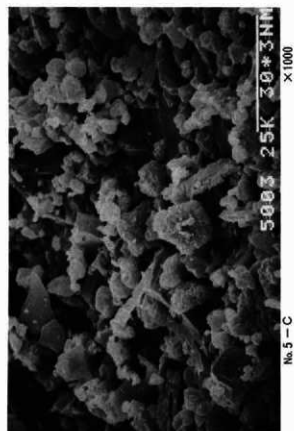


付図3 EPA分析チャート



付図4 X線回折チャート

付図5



付
録

付編 2

原子吸光分析還元気化法による赤色顔料の分析

群馬県工業試験場

花 岡 絃 一

東下井出遺跡 (10億分の1)

発掘区出土資料	ppb
4区 南側表土	17ppb
4区 9号住居址R-1	40
" R-2	57
" R-3	64
" R-4	46
4区 12号住居址R-1	55
4区 15号住居址R-1	26
4区 13号住居址R-1	42
4区 16号住居址R-2	27
" R-3	37

清里・庚申塚 (10億分の1)

発掘区出土資料	ppb
2号 住 居 址	5 ppb
3号 " "	7
11号 " "	0
13号 " "	0
14号 " "	0
17号 " "	0
18号 住 居 址 A	0
18号 住 居 址 B	0
18号 住 居 址 C	0
20号 住 居 址	0

注：1. ppb：10億分の1

2. 清里・庚申塚遺跡は土器片のため土器粘土とともに試料化した。18号住居址は土器片と顔料である。

3. 清里・庚申塚遺跡、東下井出遺跡とも結果は、水銀含有量は微量であった。

圖 版



1 全景 (南から)



2 全景 (東側) (南西から)

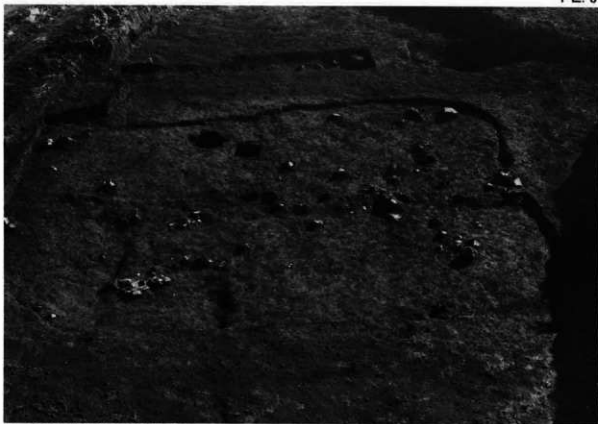
PL. 2



1. 全景(西側)調査中(東から)



2. 全景(西側)調査後(東から)

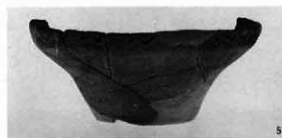
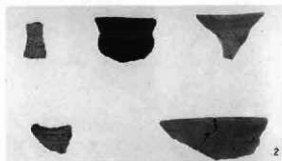
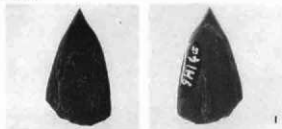


1. 1号住居址遺物出土状況（西から）



2. 1号住居址全景（南から）

PL. 4



1~8. 1号住居址床面出土遺物

9. 1号住居址床面、覆土出土遺物

10. 1号住居址覆土出土遺物



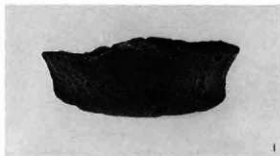
1. 2号住居址遺物出土状況（西から）



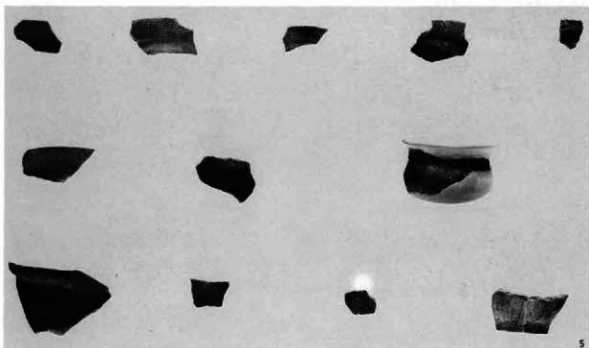
2. 2号住居址全景（南から）



1~7、2号住居址出土遺物



1~4. 2号住居址出土遺物



5. 3号住居址出土遺物

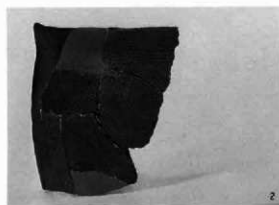
PL. 8



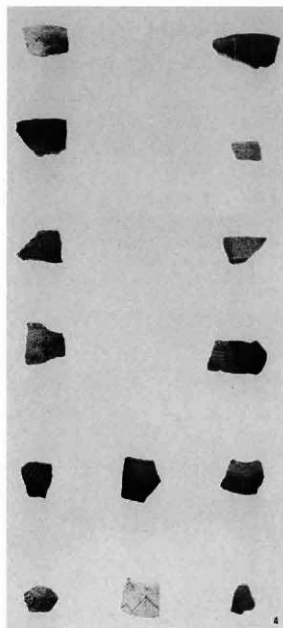
1. 3号住居址遺物出土状況（西から）



2. 3号住居址全景（北から）



1~7. 3号住居址出土遺物



1～4. 3号住居址出土遺物



1. 4号住居址全景（西から）



2. 5号住居址全景（東から）



1. 5号住居址炉



2



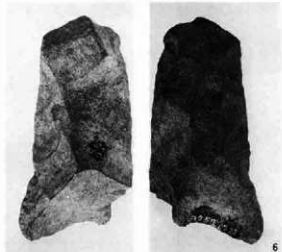
5



3



4

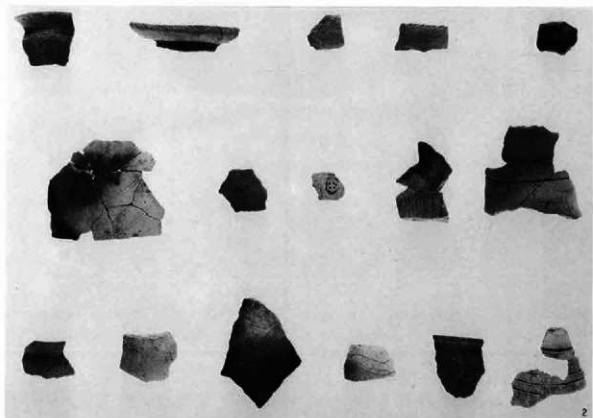


6

2~6, 5号住居址出土遺物

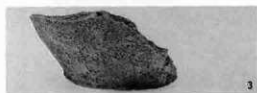
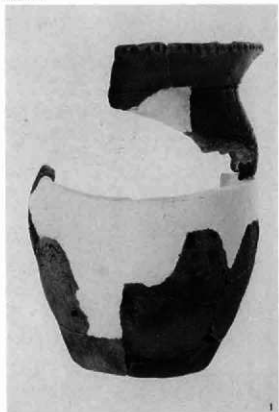


1. 6号住居址全景（西から）、8号溝



2. 6号住居址出土遺物

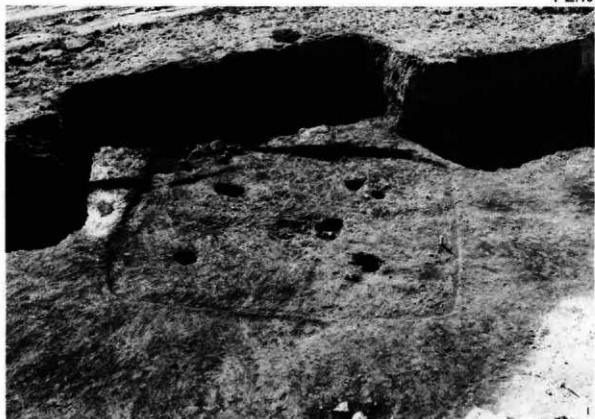
PL.14



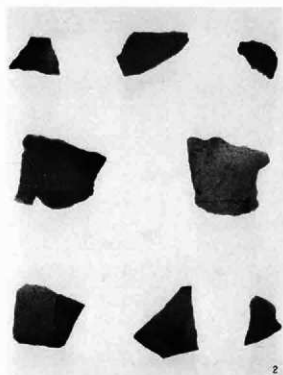
1~4. 6号住居址出土遺物



5. 7号住居址炉



1. 7号住居址全景（北東から）



2



3

2~3. 7号住居址出土遺物



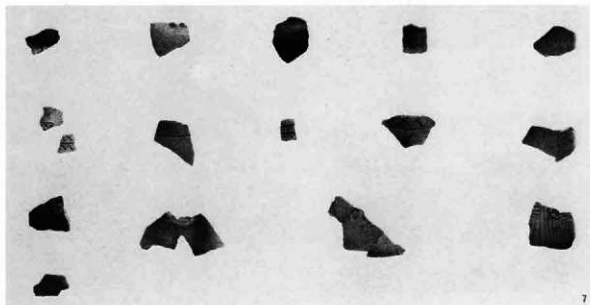
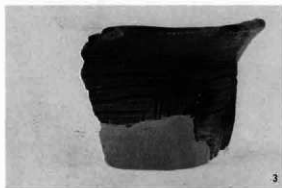
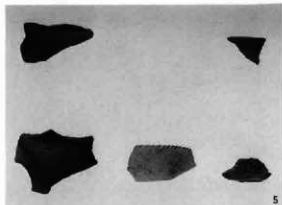
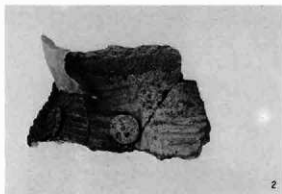
1. 8号住居址遺物出土状況



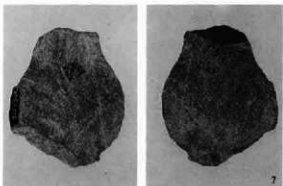
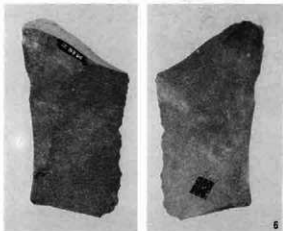
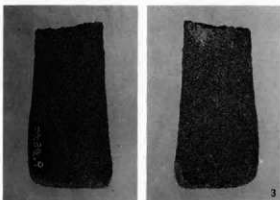
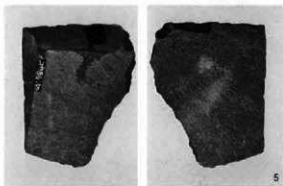
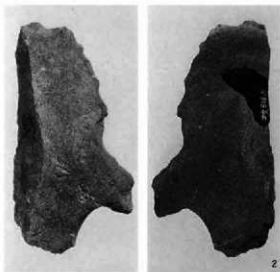
2. 8号住居址全景(南西から)



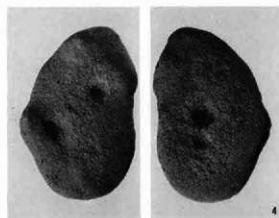
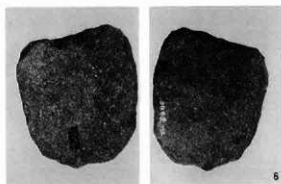
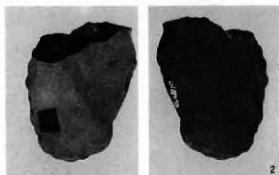
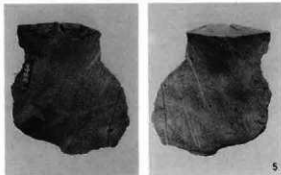
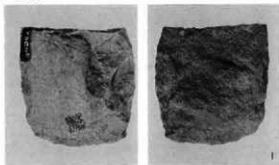
1~7. 8号住居址出土遺物



1～7. 8号住居址出土遺物

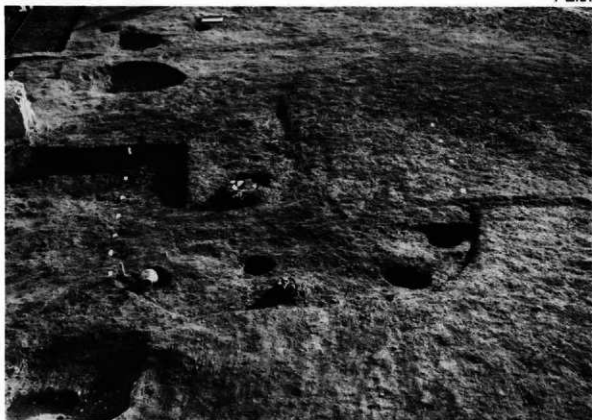


1～7. 6号住居址出土遺物



1～6. 8号住居址出土遺物

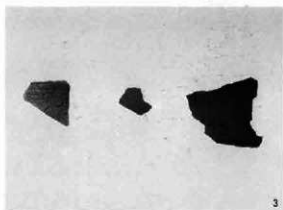
7. 9号住居址出土遺物



1. 9号住居址全景（北から）



2



3

2～3. 9号住居址出土遺物

PL.22



1. 10号住居址貯藏穴内遺物出土状況



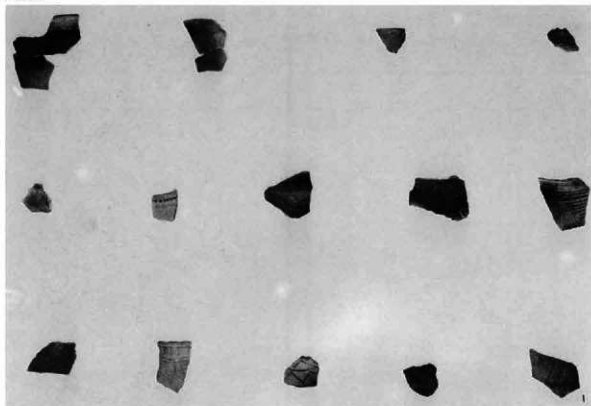
2. 10号住居址炉



1. 10号住居址遺物出土状況(南から)



2. 10号住居址全景(南から)



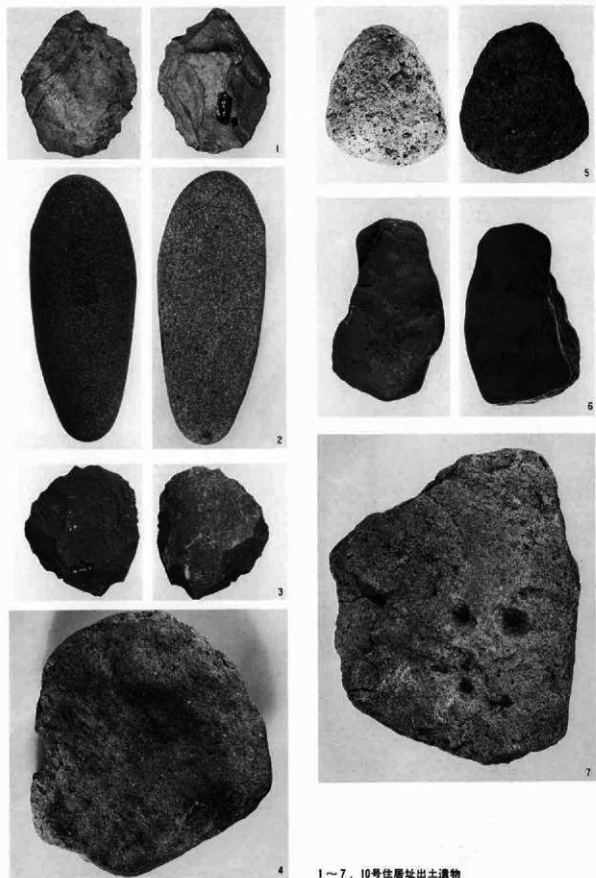
1～5. 10号住居址出土遺物



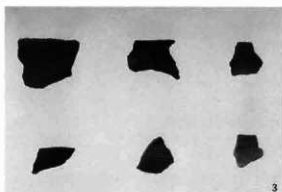
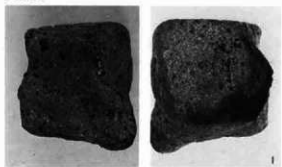
1～7、10号住居址出土遺物



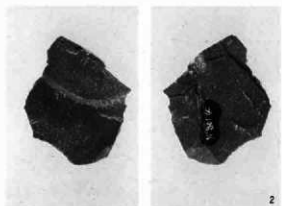
1～7. 10号住居址出土遺物



1～7. 10号住居址出土遺物



1～3. 10号住居址出土遺物



4. 11号住居址出土遺物



5. 11号住居址遺物出土状況



1. 11号住居址全景（西から）



2



4

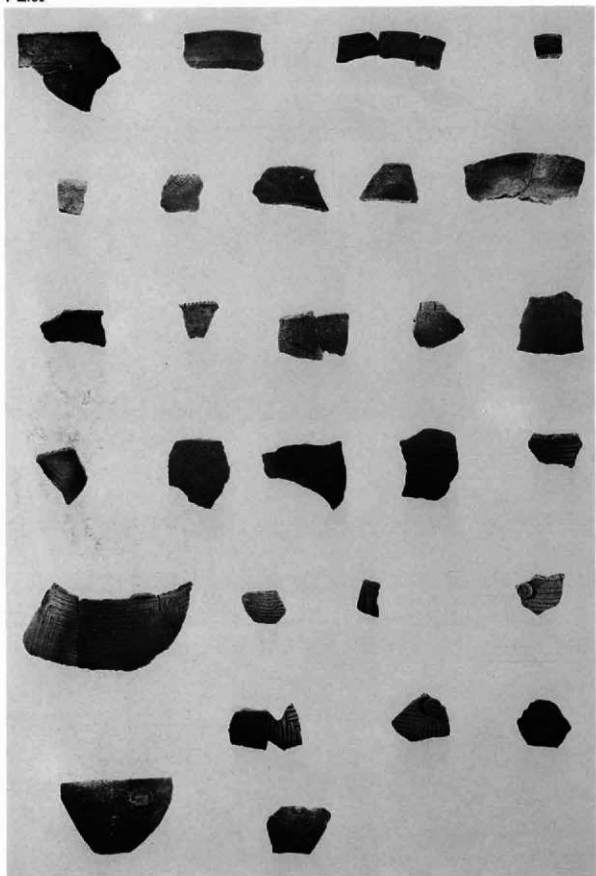


3



5

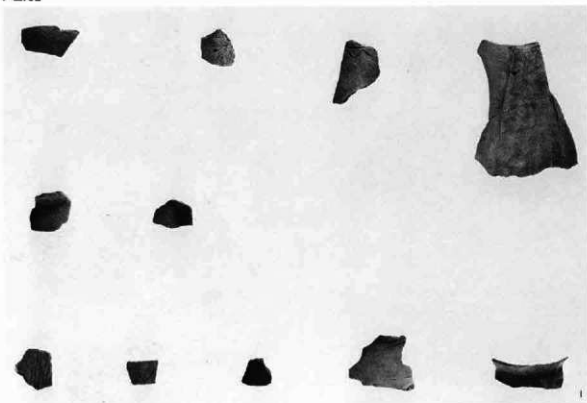
2～5. 11号住居址出土遺物



11号住居址出土遺物



1～8. 11号住居址出土遺物



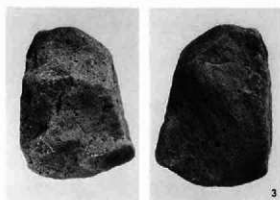
1～6. 11号住居址出土遺物



1



2



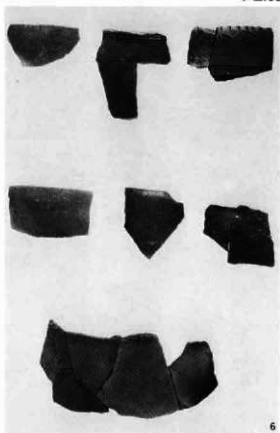
3



4



5



6

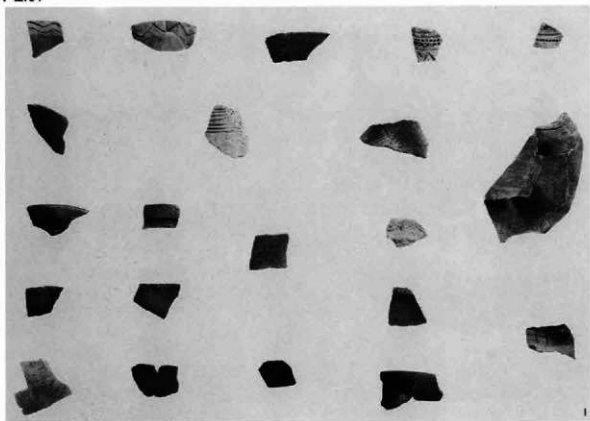


7



8

1~8. 11号住居址出土遺物



1～5. 11号住居址出土遺物



1～8. 11号住居址出土遺物

PL.36



1~4. 11号住居址出土遺物



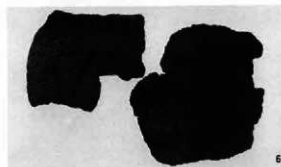
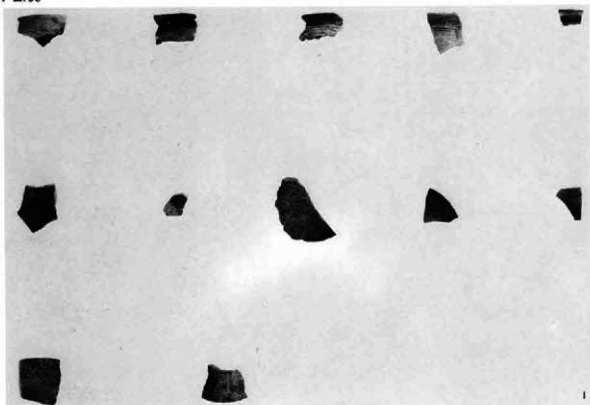
5. 12号住居址遺物出土状況



1. 12号住居址炉



2. 12号住居址全景 (南東から)



1~6. 12号住居址出土遺物



1



5



2



6



3



7



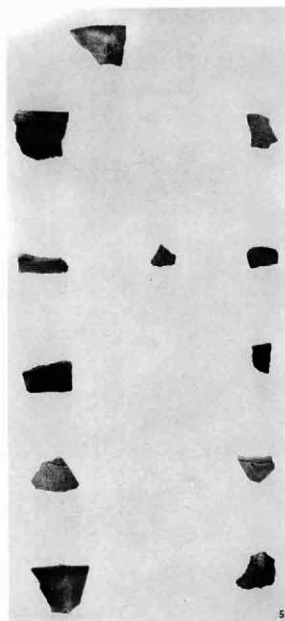
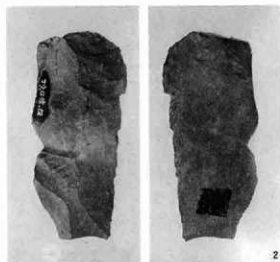
8



4



9





1



2



3



4



5



6



7



8



9



1~2. 12号住居址出土遺物

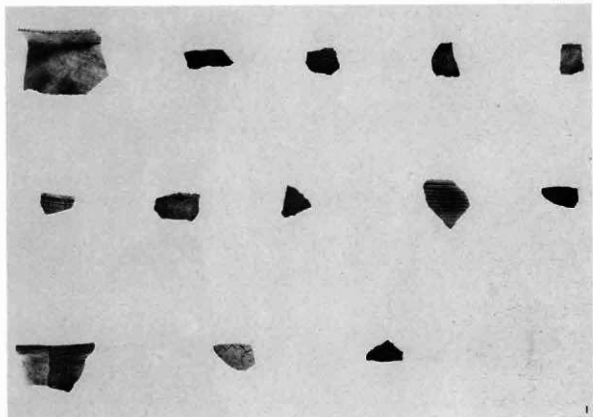
3~9. 13号住居址出土遺物



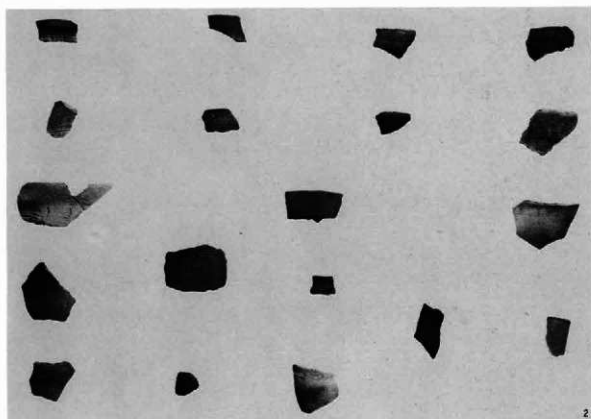
1. 13号住居遺物出土状況



2. 13号住居址全景（南東から）



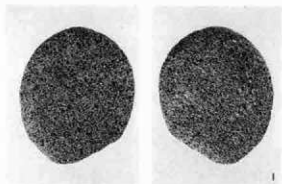
1. 13号住居址出土遺物



2. 13号住居址出土遺物



1~9. 13号住居址出土遺物



1~2. 13号住居址出土遺物



3. 14号住居址全景



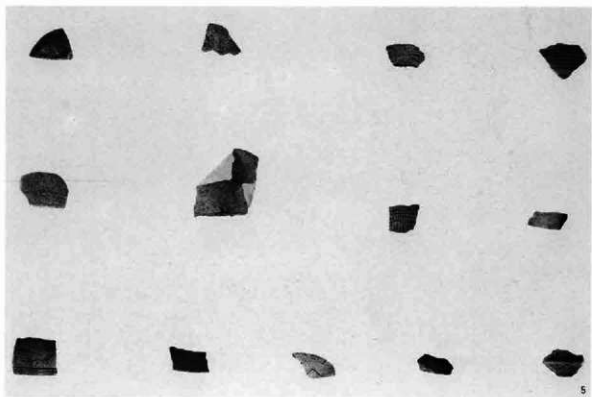
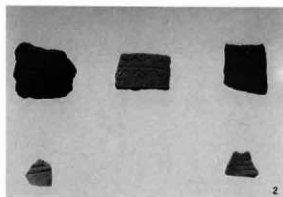
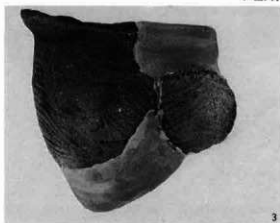
4~5. 14号住居址出土遺物



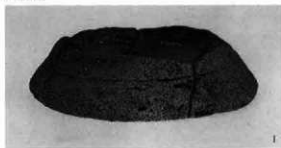
1. 15号住居址炉（東から）



2. 15号住居址全景（南東から）



1～5. 15号住居址出土遺物



1~7. 15号住居址出土遺物



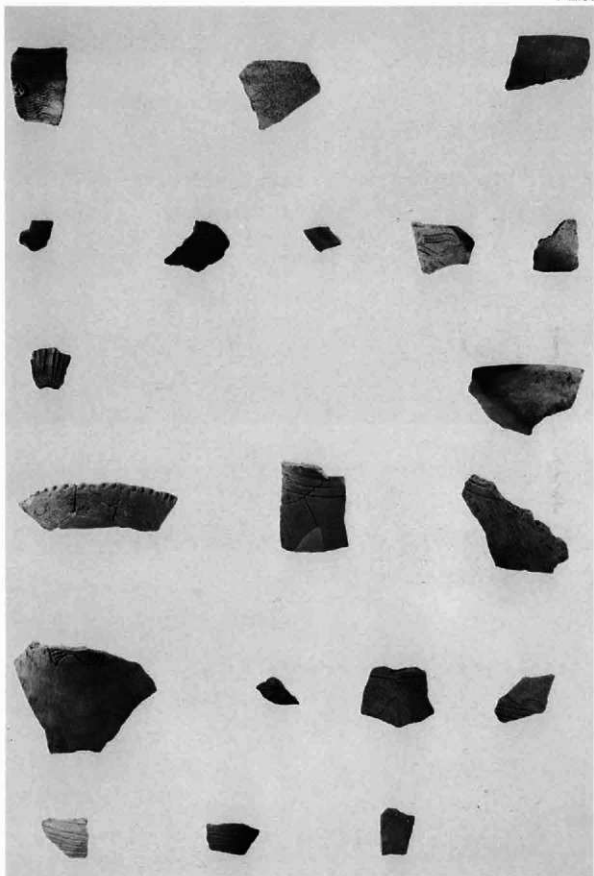
1. 16号住居址炉（南から）



2. 16号住居址全景（南から）



1～7. 16号住居址出土遺物



16号住居址出土遺物

PL.52



1. 17号住居址遺物出土状況



2. 17号住居址遺物出土状況



1. 17号住居址遺物出土状況



2. 17号住居址遺物出土状況

PL.54



1. 17号住居址遺物出土状況



2. 17号住居址遺物出土状況



1. 17号住居址遺物出土状況



2. 17号住居址木炭・遺物出土状況（南から）

PL.56



1. 17号住居址遺物出土状況（南から）



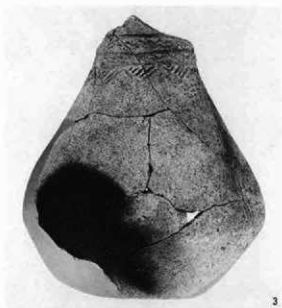
2. 17号住居址全景（南東から）



1



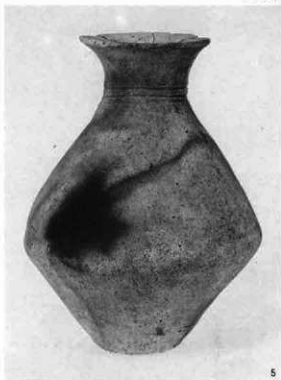
2



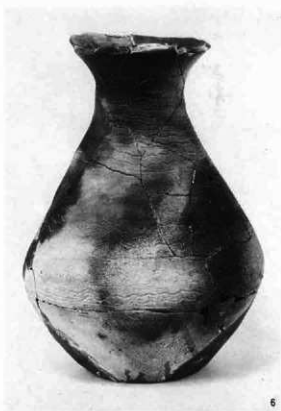
3



4



5

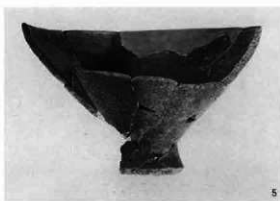


6

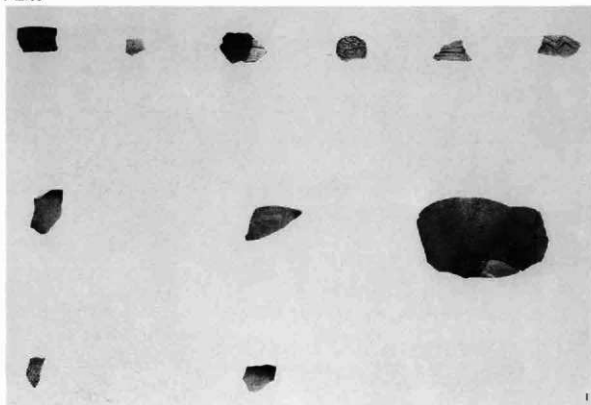
1~6. 17号住居址出土遺物



1~4. 17号住居址出土遺物



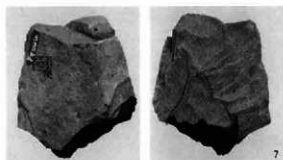
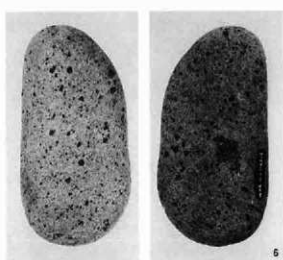
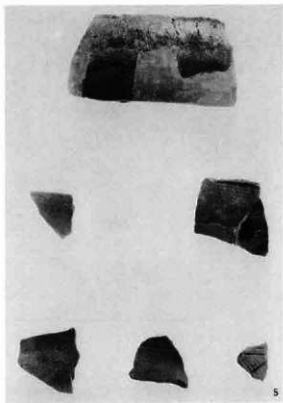
1~6. 17号住居址出土遺物



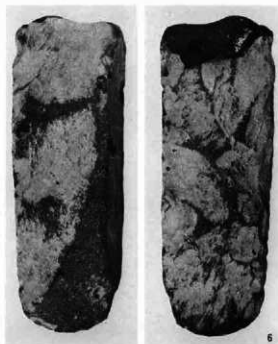
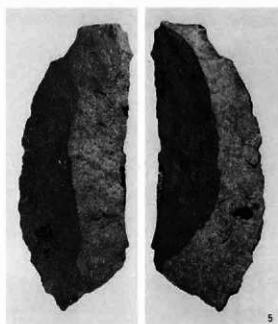
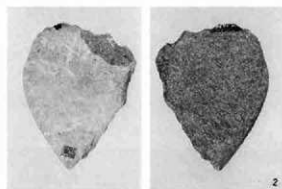
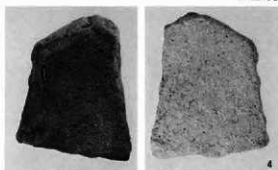
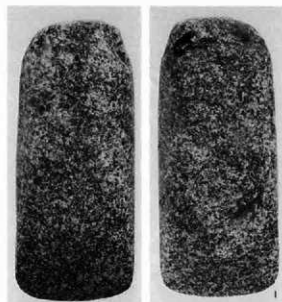
1～4. 17号住居址出土遺物



1~8. 17号住居址出土遺物



1～7. 17号住居址出土遺物



1～6. 17号住居址出土遺物



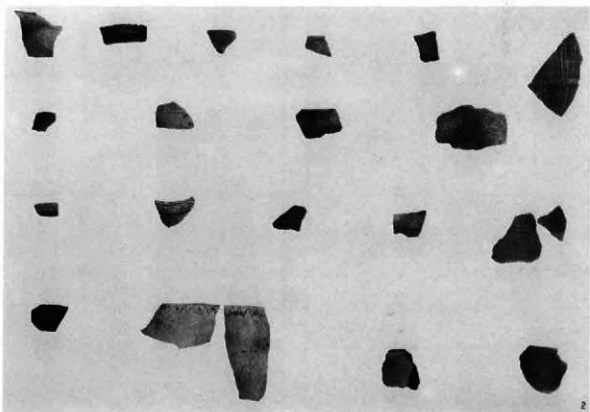
1. 18号住居址遺物出土状況（南から）



2. 18号住居址遺物出土状況（南から）



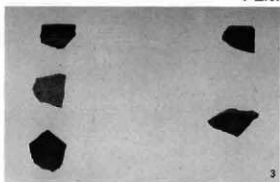
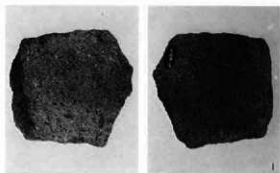
1. 18号住居址全景 (西から)



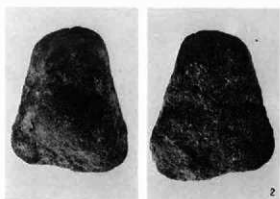
2. 18号住居址出土遺物



1~9, 18号住居址出土遺物



1～3. 18号住居址出土遺物



4. 19号住居址壘内出土遺物



5. 19号住居址壘 (南東から)

PL.68



1. 19号住居址西 (南から)



2. 19号住居址全景 (北から)

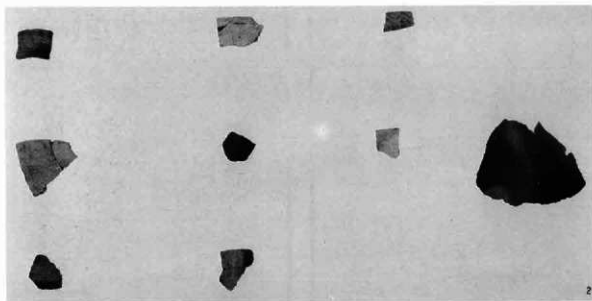
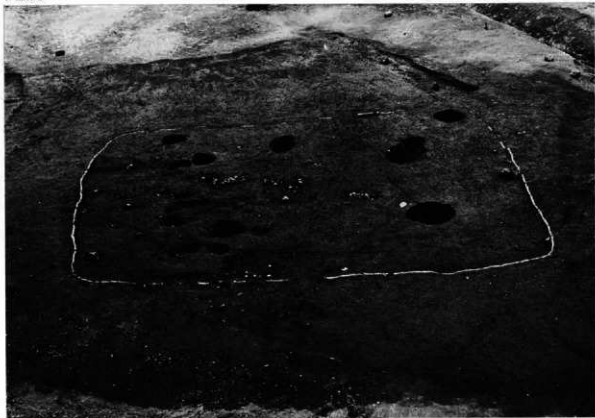


1. 20号住居址柱穴内遺物出土状況



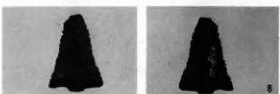
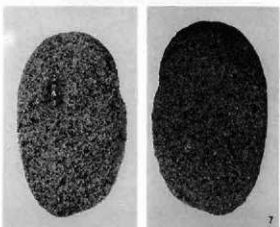
2. 20号住居址炉

PL.70



1. 20号住居址全景

2~3. 20号住居址出土遺物



1～8. 20号住居址出土遺物

PL.72



1. 21号住居址遺物出土狀況



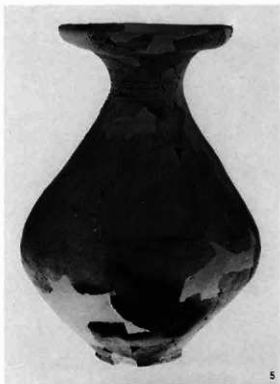
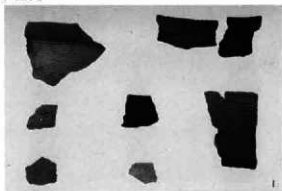
2. 21号住居址炉



1. 21号住居址遺物出土状況（北から）



2. 21号住居址全景（北から）



1～7. 21号住居址出土遺物



1. 22号住居址土層



2. 22号住居址遺物出土狀況

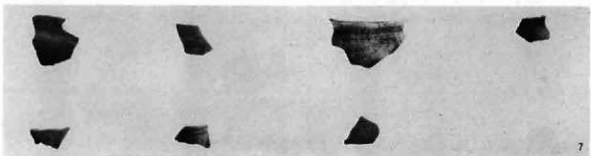
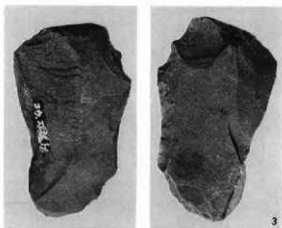
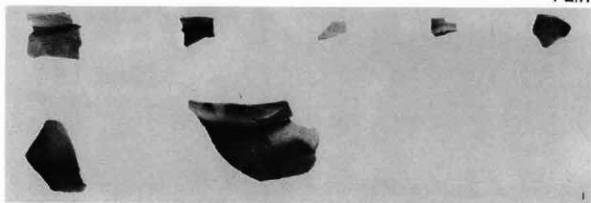
PL.76



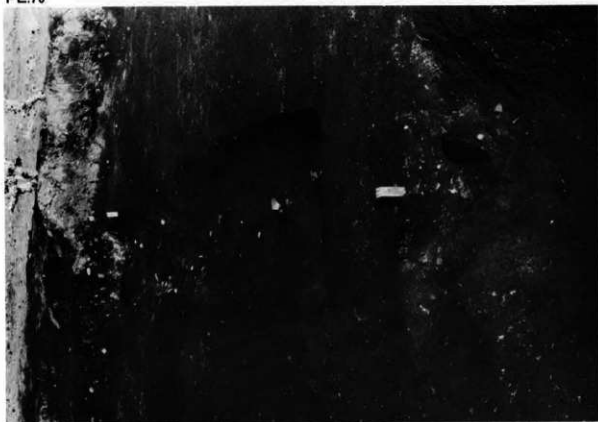
1. 22号住居址遺物出土状況（南から）



2. 22号住居址全景（南から）



PL.78



1 中野名峯 (黒石)



2 中野名峯 (黒石)



1~5. 1号溝出土遺物



1. 2号溝6 T-18、19区遺物出土状況（西から）



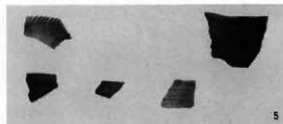
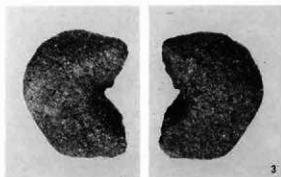
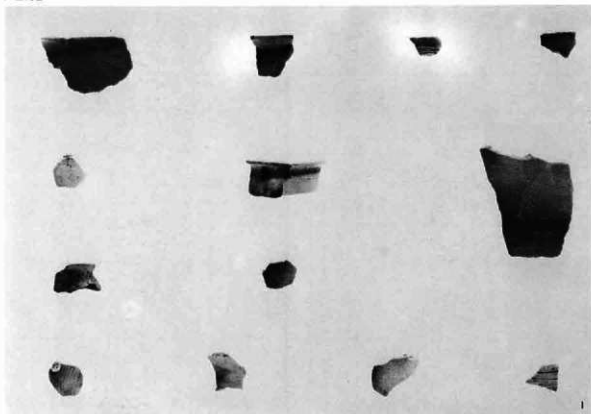
2. 2号溝6 U-18区注口土器出土状況（西から）



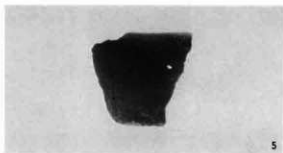
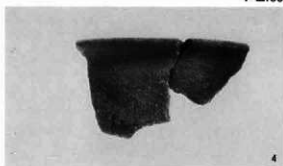
1 2号溝とト・ウ・Y-18 19区付近(田原小)



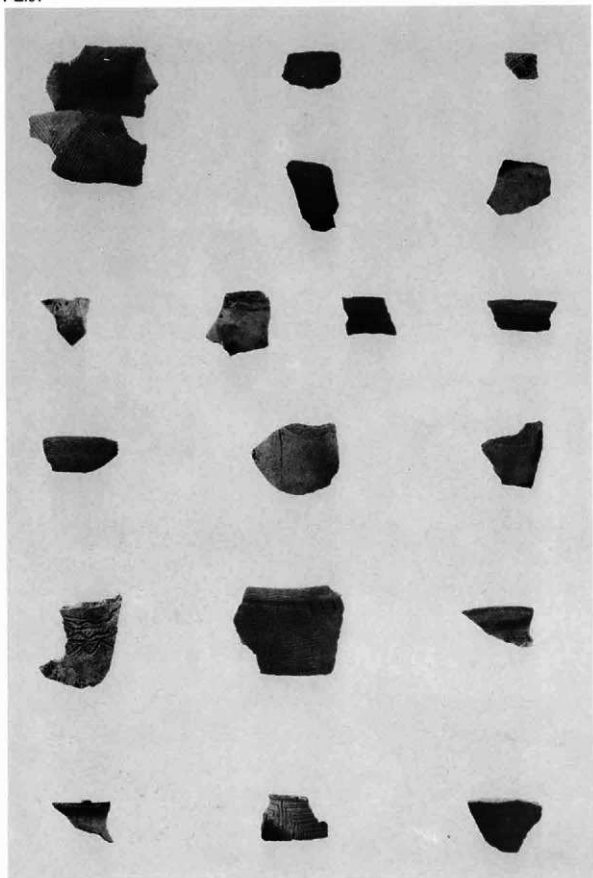
2 2号溝掘削跡の排水溝(田原小)



1~5. 2号溝出土遺物



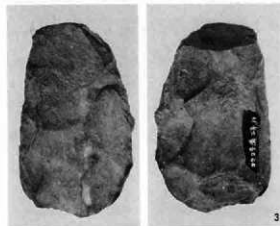
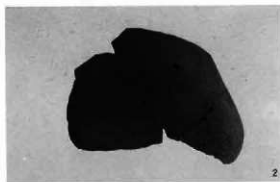
1~8. 2号溝出土遺物



2号清出土遺物 (61-J-23、6Q-21、6S-20-21、6T-20区)



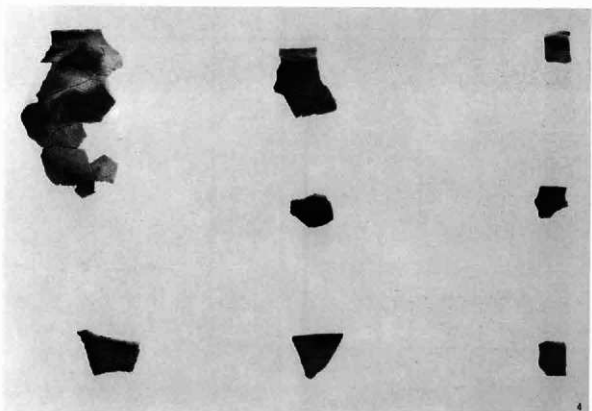
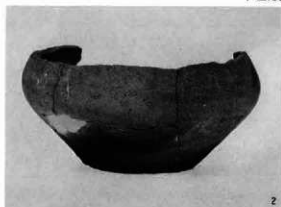
1～7. 2号溝出土遺物



1～7. 2号洞出土遺物

1. 2号溝出土遺物 (6U-18区)

2~4. 2号溝出土遺物 (覆土)



PL.88



二の字殿



2. 4号溝全景(南から)



1. 5号溝土層（南から）



2. 5号溝遺物出土状況（南から）

PL.90



1. 5号溝と2号溝接近部・2号井戸 (南西から)



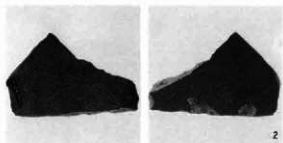
2. 5号溝全景 (南から)



1



7



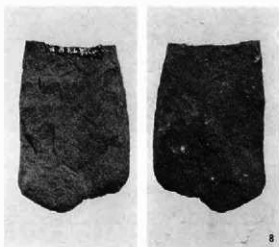
2



3



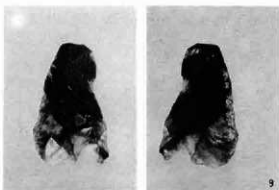
4



8



5



9



6

1~2. 3号清出土遺物

3~4. 4号清出土遺物

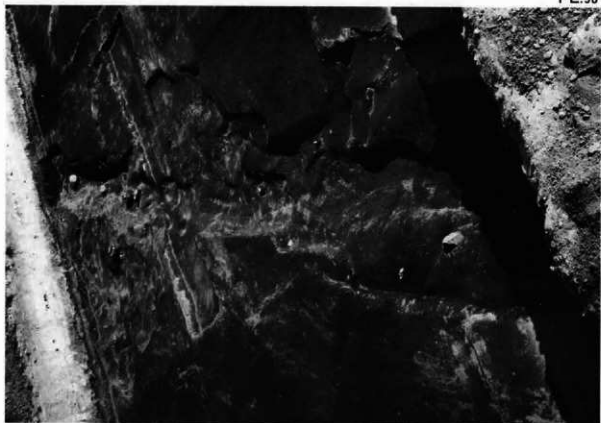
5~9. 5号清出土遺物



1. 6・6'号溝土層 (東から)



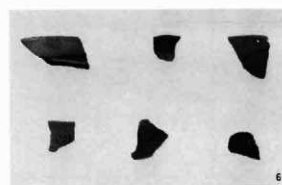
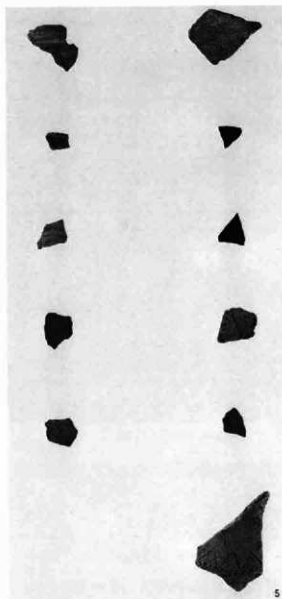
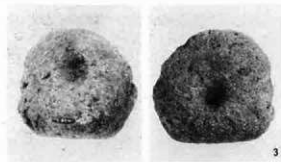
2. 6・6'号溝遺物出土状況 (西から)



1. 6号墓69-10, 64-10, 11, 61-11区(证明小5)



2. 6号墓64-2, 7区(证明小5)



1~5. 6号溝出土遺物

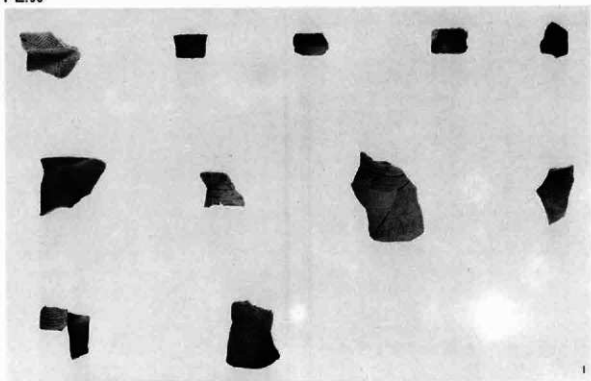
6. 6号溝出土遺物



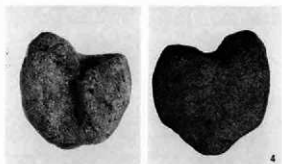
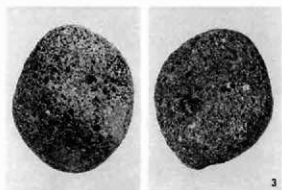
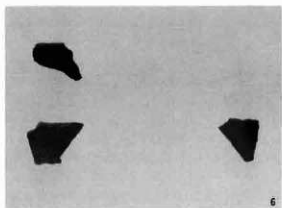
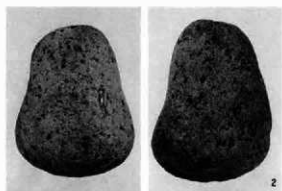
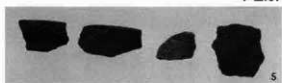
1. 7号溝遺物出土状況（北西から）



2. 7号溝全景（北西から）（南側の大溝は2号溝）



1～5. 7号溝出土遺物



1~5, 7号清出土遺物、6~8, 9号清出土遺物

PL.98



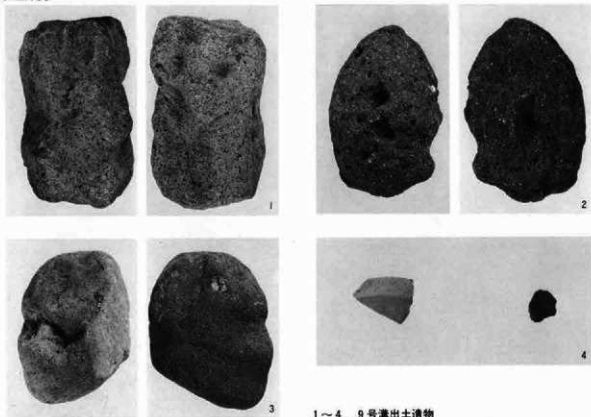
1. 9号溝土層（東南から）



2. 9号溝土層（東南から）



PL.100



1～4. 9号溝出土遺物



5. 南側遺構確認トレンチ (10・11・12号溝全景)(北から)



1. 10号清土層 (東から)



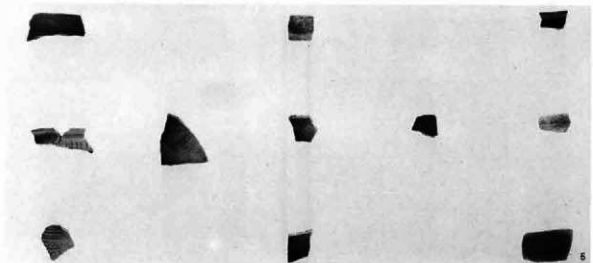
2. 10号清土層 (東から)



1. 11号溝土層（東から）



2. 11号溝全景

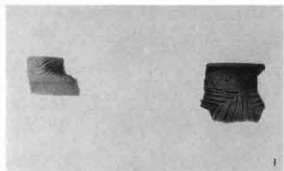




1. 12号溝遺物出土状況（東から）



2. 12号溝全景（東から）



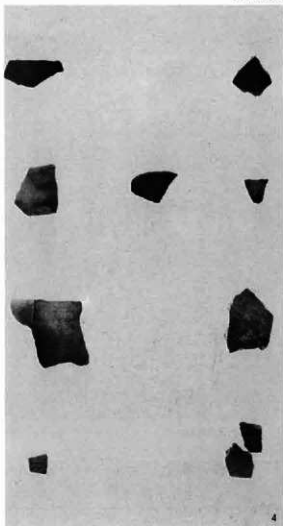
1



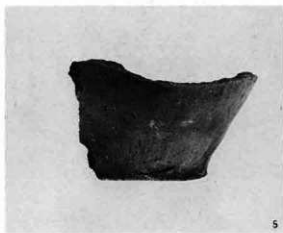
2



3



4

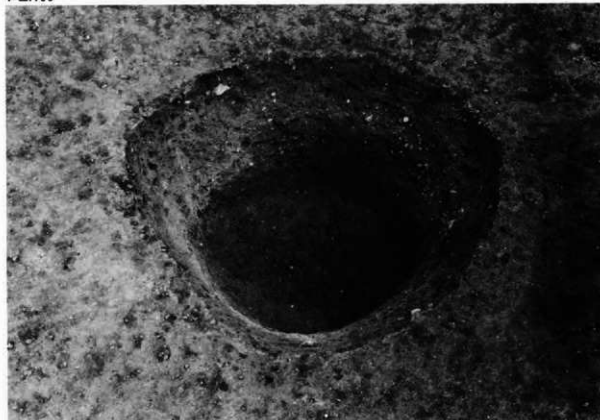


5

1. 11号清出土遺物

2~5. 12号清出土遺物

PL.106



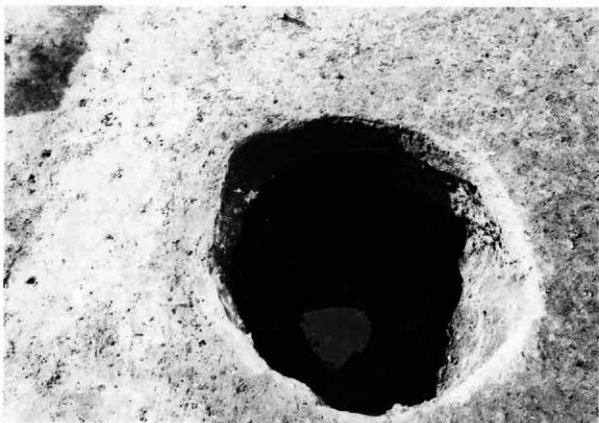
1. 1号土坑全景



2. 2号土坑全景



1. 3号土坑全景

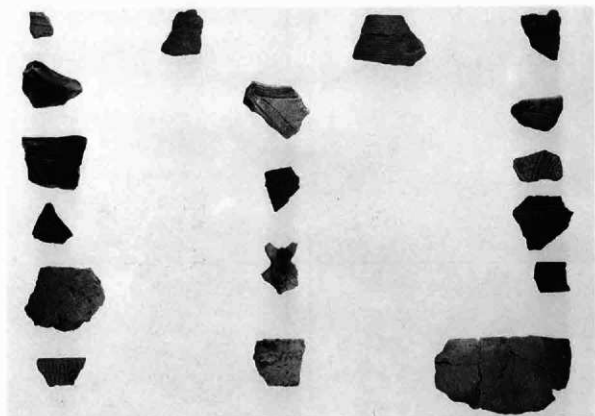


2. 1号井严全景

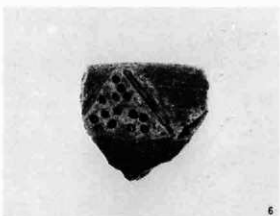
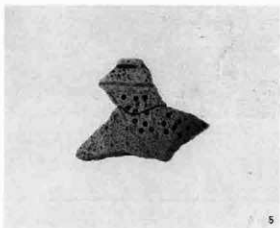
PL.108



1. 1号掘立建物址と1号井戸（南西から）

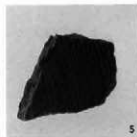


2. グリット出土縄文土器 ●



グリット出土遺物

1. 5L-19区出土遺物 4. 6H-I-5、6区出土遺物
 2. 5M-24区出土遺物 5. 6H-I-5、6区出土遺物
 3. 5M-24区出土遺物 6. 5M-25区出土遺物



グリット出土遺物

1. 5N-18区出土遺物
2. 6G-11区出土遺物
3. 6N-18区出土遺物
4. 5N-17区出土遺物
5. 6H-5・6区出土遺物

昭和54年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

清里・庚申塚遺跡

印刷 昭和57年3月30日

発行 昭和57年3月31日

編 纂 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電 話 (0279) 52-2511 (代表)

発 行 群 馬 県 考 古 資 料 普 及 会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電 話 (0279) 52-2511 (代表)

印 刷 朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社
